現代文章概論

丸山林平著

現代文章概論

東京 第一書房 刊行

序

現代は、ある意味に於て、たしかに文章道の復興期もしくは革新期に當つてゐると思ひます。復興といつても、それは、過去の時代のいはゆる名文や美文などの復興でないことはいふまでもなく、また、革新といつても、それは、これまでの文章以上に新奇な突飛な表現へ奔らうと企てるものでもありません。

現代の多くの人々は、文章を書くに當つて、今までの餘りにも自由な、どちらかといへば、殆ど無關心とも見られる態度に、冷靜な反省を加へて、どこまでもあるがままに、そして綿密に、あくまでも平明に、そして淸新に、こころとすがたとの完全な合一をめざして表現しようと精進するやうになつてまゐりました。そして、それは、たしかに正しい文章道に相違ないと思ひます。その意味での復興であり革新であります。

さうした文章復興期に際して、本書が何等かの寄與をなすことが出來れば、この上ないのでありますが、もとより本書は、專門的な新しい表現學などの立場に立つて述べようとしたものではなく、廣

くあらゆる方面の人々に讀んで頂くために、力めて平易に簡明に述べたものでありまして、概論と名づけたのも、いはば、概略的にざつと論じたといふ意味からであります。そこで、なるべく抽象論を避けて、出來るだけ多くの文例を掲げ、具體的に、また實際的に、表現的態度および手法を述べて行くといふ方針をとりました。隨つて、文例の選擇および排列には、最も意を用ひたつもりであります。

私は、これまで、かなり長い間、文の解釋または表現の方法について、指導のやうなことを續けてまゐりました。いや、若い學生達とともに絶えず學んでまゐりました。さうした經驗を通して考へても、現代文を書くには、一般的には具體的の現代文章について學ぶのが最も効果的であり、よほどの專門的立場に立つ人でない限り、昔の文章は參考になりにくいと信じてゐます。それゆゑ、本書に於ても、過去の時代の文例は殆ど避けて、現代の文章のみを文例として掲げました。本書を「現代文章概論」と名づけたのは、全くそれがためであります。

その、多くの尊い文例を引用させて頂いた諸家に對して、ここに衷心から厚く感謝の意を表します。

昭和十年六月

著　者　識

現代文章概論目次

第三章　論說的文章

第四章　小說的文章……一二九

第七章　日記的文章……………………二九八

第八章　紀行的文章……………………三二三

第九章　書翰的文章…………………………三五五

第一〇章　式辭的文章

（附　錄）

現代文章概論

第一章　總　論

一　現代の文章

昔の文章が、例の美辭麗句を並べた漢詩文や、みやびやかなことばをつらねた平安朝文學などの型に囚はれて、著しく技巧的であり典據的であつたことは何人も知つてゐるところである。そこには、ちやんと文章道の一定の法則といふものがあつて、その法則に從はざる限り、正しい文章でもなければよい文章でもなかつたのである。だから人々は、自分の思想の形に文章を生み出すのではなくて、一定の型の中に思想を歪めて嵌込まなければ承知しなかつた。かうした文章道に於て、生々した思想の表現が不可能であつたことは言ふまでもない。この傾向は、明治の世に入つて、更に新しみを加へた美文といつたやうなものにかはつて來た。尾崎紅葉の文や高山樗牛の文などですら、多くはそれであつた。

ところが、明治の晩年頃から、かうした傾向を脱して、現實的に自然にあるがままに思想を表現し

ようとする傾向を生じ、この傾向がますます發展して現代に及んでゐる。自然主義の小說家田山花袋などが、この自然的な表現に最も早くめざめた人であり、その著「インキ壺」の中に於て左の如く述べてゐる。

私は思ふ、調子の惡い文章は書いても、無駄の多い文章は書きたくない、と。調子といふものを庇ふと、兎角無意味な文字を使ひたくなる。無意味な文字を使ふと、どうも感じが空疎になつて困る。ゴンクールはつとめて文法を排し、アカデミイ派の文章の整一を蛇蝎のごとく憎んださうだが、私もどうか名文は書きたくない。充實した文章を書きたいと心掛けてゐる。それといふのも、自分の文章が、よく調子にとらへられたり、型にはまつたりするのを豫て知つてゐるからであらう。

「名文は書きたくない、充實した文章を書きたい。」これが、現代文章道の曉を告ぐる鐘であつた。花袋自身が反省してゐるやうに、ひとたび妙な型にとらはれると、なかなかそれから脫けきることの出來ないもので、今日でも或種の人々の文章などには、まだどことなく、明治時代の美文を思はせるやうなところのあるものがある。

五十嵐力博士の「文章講話」は、明治四十二年に出版されたものであるが、その緒論に於て、次のやうに述べてゐる。

此の頃、我が國の文章、廣くいへば文藝全體の上に一大革新が起つて來てゐる。外ではない。在來の文章に

附き物であつた、否、殆どこれが無ければ文章でないとまで信ぜられた、しつッこい、持つて廻つた、ひねくれた、拵へたやうな、くッ附けたやうな、わざとらしい修辭を斥けて、素直に、自然に、あつさりと、巧まずに、平たく、事そのまま、物そのものを寫すといふ傾向である。他の言葉でいへば、語句の上の技巧を去つて素通しに赤裸々に內容を見せよう、言葉といふ方便に重きを置かずに、思想といふ目的を宗と寫さうといふ傾きである。文章本來の趣旨からいへば、在來の文には主客顚倒の嫌ひがあつた。媒介者たる語句が邪魔になつて本尊の思想が拜まれず、仰山な、込入つた文句のあやを、やうやう排いて見れば、內容は單純無價値な子供だましといふ趣があつた。

かくして、淸新にして潑剌たる昭和現代の文章界は生じた。しかし、人によつては、餘りにも自由な無法則な現代文章界を、「文章道の無政府時代」とさへ呼んでゐる者もある。なるほど、中には、簡單な文法上の知識すらなく、まして修辭などには全然無頓着で、さかんに誤字をならべたてたり、わけの分らない生硬な言葉を濫用したりする文章も少くないのである。けれども、少しでも文章に對して注意を拂つてゐる人にとつては、この「無政府時代」といふ言葉は、むしろ光榮の言葉であり、過去の文章界に君臨した、あの一箸にも棒にもかからない非合理な壓制政府」なる文章法則などといふものの存在しない現在の無政府狀態の方が、どれほどありがたいか知れないのである。だいいちに、その無政府といふ言葉が、千葉龜雄氏もいはれてゐる通り、もう一度細かい檢討の下に置かれねばならぬ言葉である。千葉氏は、「日本現代文章講座」の中で、「現代文章の無政府狀態は、有りやうは、

極めて順自然な、また文章の文章たるべき本質を決定するところの、冷嚴な一つの必然性によつて統一されて居るのである。必然性とは何かとなれば、現代文章を書く人々が、各自の發想にとつて一番的確な、動きのない表現法を採らうとする意識で文章を書く、その事である。と述べてゐる。まことにその通りで、外から形の上で迫つて來る過去の文章政府がおしのけられて、內から發想の必然性によつて意識的に統一される新しい文章政府が樹立されたのである。この意味に於て、現代人は、むしろ文章道の正道を發見したものとも見ることが出來る。

しかしながら、それゆゑに我々は、各自の好むがまゝの文體(スタイル)を、語彙を、用語を、修辭を、自由に勝手に採り用ひればそれでよい、何等他から學ぶ必要もなければ、また表現技術の練習の如きも無用である、などと考へるならば、それこそ、惡い意味にいふ文章道のアナアキイ時代に墮してしまふであらう。いふまでもなく、無意味な文字を用ひたり調子にとらへられたりしてはならない。しかし、文章に於て格調は決して無視されてよいものではない。拵へたやうな、わざとらしい修辭は、勿論避けねばならぬ。しかし、平素の談話のままが必ずしも立派な文章になるとは限らない。現代の誰もが、筆を執つて、直に、冷嚴な一つの必然性によつて統一された文を生み出し得るとは斷定されない。上田敏氏は、その「文藝論集」に於て左の如く述べてゐる。

詩文に於て、單に內容思想を偏重して格調を末なりと排斥する者は、未だ眞正の洞察を得たる人といふべ

からず。修學の法粗鹵(そろ)にして、素養・訓練を煩はしとする人々は、動もすれば思想を偏重する弊に陷り易き者なれども、眞正なる妙趣を味はんと欲する士は、かまへて此の邪徑に踏入らず、內容・外形の一致融合に始より留意せんことを要す。最も効果ある詩文の防腐劑は實に其の格調なり。古よりひとふしある識見を吐露し、稱讃すべき議論を唱道せし人は其の數量り知るべからずと雖も、須臾にして世の記憶より消滅するは、ひとへに格調に於て未だしき所あればなり。

勿論、上田博士の唱道する格調は、唯艶麗なる詞章を列ね、流暢なる語勢を加へるといふのではなく、「寧ろ思想發展の經路に絕倫の氣風ありて雄偉勁健なる」ことを意味するのであるが、かうなつて來ると、「調子の惡い文は書いても」などとばかりは言つてゐられない。本當に內容・形式一如の境地をめざして精進する人にとつては、てにをは一つの使ひ方でも氣になつて仕方がないであらう。モウパッサンは「我々のいはうとすることが何であらうと、それを現すためには、たつた一つの言葉しかない。」といつてゐる。その、たつた一つの言葉を、その場所にぴたりとあてはめるといふことは決して容易な業ではないのである。

すべての文化現象は刻一刻と進歩し創造されて行く。が、眞の創造は、必ずこれまでの文化の頂點に立つて、更に一歩を踏出すところにのみ生ずる。これまでの文化に眼をふさいで、自ら一個の創造だと盲信してゐても、それは、とうに過去に存在した平凡な或は無價値なものに過ぎない場合が多い。文章道に於てもその通りである。現代の文章が如何にあるかを具體的に認識することからのみ、眞の

創造的表現は生まれて來るであらう。

本書はこの意味から、先づ一通り、文章の基礎的條件となるべきことがらを述べ、ついで、現代に於ける多くの具體的文例を揭げ、かくして現代文章の表現方法を學ぶことから出發したいと考へる。

二　文の意義

古來、文または文章といふものについて、いろいろの立場からさまざまの說明が下されてゐる。たとへば、「文章は經國の大業、不朽の盛事。」と言つた人もあり、「文は人なり。」と唱へた人もあり、また、「文章は現靈術だ。」などと叫んだ人もある。何れも眞理であらうと思ふが、先づ順序として、極く分りやすいところから、文章といふものの意義について考へて行くこととする。

普通の文法書などは、文といふものについて、大抵左のやうな定義を下してゐる。

二つ以上の語句をつらねて、一つのまとまつた思想をあらはしたものが文である。

たとへば、「花」とか「は」とか「美しい」とか言つただけでは、「花」がどうしたのか、「は」が何だか、何が「美しい」のか、さつぱり分らないが、この三つの單語をつらねて、「花は美しい。」と

言へば、意味がよく分る。すなはち、一つのまとまつた思想をあらはしてゐるから、それは文であるといふのである。隨つて、たとひ二つ以上の語句をつらねても、一つのまとまつた思想をあらはしてゐなければ文とはいへない。たとへば、「文章は、これを讀む人の心理狀態に適應しなければ効果に……」などと言ひかけただけでは、二つ以上の語句をつらねてはゐるが、まだ意味がはつきりしない。すなはち、一つのまとまつた思想をあらはしてゐないから、それは文ではないといふのである。

これは、極めて常識的ではあるが、たしかに一つの眞理であつて、文章といふものは、とにかく、あるまとまつた思想をあらはしてゐなくてはならないのである。どんなことを言はうとしてゐるのか、どんな思想を表現しようとしてゐるのか、さつぱり分らないやうなのは、いはば、まとまつてゐないのであるから、先づ、文章とはいへないのである。

尤も、言語學者や心理學者の多くは、從來の文法家の定義に滿足することが出來ないで、文といふものについて、もつと立入つて考察し、そしてむづかしい定義を下してゐる。たとへば、ドイツの言語學者ヘルマン・パウルは、次のやうに述べてゐる。

話し手の心の中で二つ以上の觀念または觀念群が結合し、そして、聞き手の心の中に同じ觀念または觀念群の同じ結合を作らせようとして、この結合を言葉であらはし、または符號であらはしたものが文である。(Prinzipien. S. 121)

たとへば、いま、自分の心の中で、「花」といふ觀念と「美しい」といふ觀念とが結合して、「花は美しい。」と思つたとする。そして、相手に對してもその通りに思はせようとして、「花は美しい。」と言葉を用ひまたは文字といふ符號を用ひて表現する、それが文であるといふのである。この文の定義の中には、文といふものの目的まで說明されてゐる。すなはち、文といふものは、自分の心の中で思つたり感じたり想像したりしたことと同じことを相手の心の中に起させようとして、言葉や文字を用ひて表現するものであるといふのである。

この外、ヴントやデットリヒやデルブリュクなどの學者によつて、心理學上からいろいろむづかしい定義が下されてゐるが、とにかく、我々が文章を書くのは、パウルの考へたやうに、自分の思想・感情と同一の思想・感情を他人の心の中に起させようとすることである。若しさうでなく、自分の言つてゐることを先方に分らせまいとしたり、わざと自分の心とちがつたことを考へさせたり感じさせたりしようと思ふならば、もともと、文章などを書く必要はないのである。

ところが、嚴密に考へると、人間の思想と言語とは、もとより同一のものではないのである。アメリカの哲學者ジョーン・デューエイは、思想と言語との關係について、次のやうに述べてゐる。

これまで、思想と言語との關係についての考へ方には、大體三つの型があつた。第一は、思想と言語とは全く同一のものであるとするもの、第二は、言語は思想の容器であり、思想を傳達するものではあるが、思

考するに必要なものではないとするもの、第三は、言語は思想そのものではないが、思想を傳達するに必要であると同時に思考するに必要なものであるといふ考へ方である。さうして、我々は、この第三の觀點に立つものである。(How We Think. P. 170)

すなはち、我々は、言語を用ひて思考したり、言語を用ひて思想を傳達したりはするが、言語そのものと思想そのものとは決して同一のものでないのである。それゆゑに、いくら、自分の思想と同一の思想を他人の心の中に起させようと思つても、それを言葉で言ひあらはし、または文字で書きあらはしてみると、もう、いつの間にか、自分の思つてゐるままでないものが出來上つてゐるのに氣がつくことがある。ことに、我々の感情などといふものは、到底言葉で言ひあらはし得ないものである。よく「言語に絕す。」とか、「筆舌の及ぶところにあらず。」などといふのは、この事實を物語つてゐるのである。たとへば、「私は、やけどをして痛くてたまりません。」などと言いたからとて、決して他人をして自分と同じやうに感ぜしめることの出來るものではない。つまり、言葉といふものは、感情そのものを表現することの出來ないもので、せいぜい感情の觀念しかあらはせないものだからである。しかし、「私は、やけどをして痛くてたまりません。」では、他人にさほどのショックを與へないとしても、若し、その樣子を如實にうつし出したならば、他人をして眉をひそめ、身ぶるひさせて、「さぞ痛いだらうな。」と感じさせることが出來るかも知れない。

理窟をいへば、我々の思想・感情をそのまま文にあらはすことは不可能だともいへるであらうが、それにもかかはらず、我々の文章を書く目的は、どこまでも、自分の思想・感情と同一の思想・感情を他人の心の中に起させようとするところにある。決して、ちがつたことを思はせたり感じさせたりするために文を書くのではない。

ここが、古來、「文を行る難いかな。」と歎ぜられて來た所以である。ややもすると、自分の心のままにならなかつたり、時には反抗さへしかねないところの言語や文字をつかつて、自分の心を出來る限りそのままあらはさうといふのであるから、そこには、非常な苦心がいるわけである。「文章は現靈術だ。」などといふのも、つまりこのことで、自分のたましひをあらはさうとする術なのであるから、決してなまやさしいものではない筈である。だからこそ、文章には苦心が必要なのである、いいかげんな態度を許さないのである。しかし、苦心をすればするだけ、必ず一歩一歩、そのたましひを、より如實に表現する域に近づくことが出來るであらう。かの、「筆を下せば忽ち名文をなす。」などといはれる大文豪も、決して生まれながらにして、筆を下せば忽ち名文をなしたわけではなく、隨分長い間の、血のにじむやうな苦心の經驗がもたらした結果であらうと思ふ。「經國の大業、不朽の盛事。」とまでいはれる文章といふものが、さうやすやすと簡單に苦勞なしに生まれる筈はない。

三　思想と表現

文章は思想を表現するものである。そこで、當然考へらるべきことは、先づ思想の持主であるといふことが、文章を書くことの先決條件でなければならぬといふことである。諺に、「無い袖は振られない。」といひ、また「男馬は子を生まぬ。」といふ。如何に文章を書かうと思つても、その書くべき内容がからつぽうでは、どうすることも出來るものではない。

人間が文章を書くのは、ちやうど蠶が繭をつくるやうなものである。十分に桑を食つた蠶が、いよいよまぶしに移されると、すらすらと口から絲を吐出して、一心不亂に繭をつくるのである。ところが、桑を食ひたりなかつた病的の蠶になると、一向口から絲を吐出さずに、きよとんと頭を持上げて、天の一方をにらんでゐるだけである。人間もその通りで、學校の生徒が教室で文章を書いてゐる場面などを眺めてゐると、大部分の生徒はすらすらと思想の絲を繰出して、せつせと鉛筆を走らせてゐるが、中には、きよとんと頭を持上げ、徒に鉛筆のしんをなめたりして、一時間中、天井の節穴を見つめてゐるのがある。しかし、思想は決して天井から降つて來るものでもなければ、また節穴から落ちて來るものでもない。

そこで、どうしたら思想の持主となれるかといふことが、文を書く前に來る重要な問題となつて來る。しかし、文章のことを論ずるのは、先づ思想があるものとして、その思想を如何に表現すべきかといふ問題を取扱ふのであるから、ここでは、如何にして思想を培養すべきかの問題には餘り深入りしたくない。

唯一言するならば、我々が思想を培養するためには、讀書も必要であらうし、人の說を聞くことも大切であらうし、絕えず事物について觀察することも必要であらう。が、それらの經驗を通じて、絕えず靜かに思索するのでなければ、決して自らの思想が培養され成長されることはない。そして、出來る限り、その經驗や思索の經過なり結果なりを、常に記錄して置くことである。かなり價値のある創造的な思想が、瞬間的に頭に浮かび、また瞬間的に消えてしまふことがある。それは、一度取逃せば二度と捕へることの出來ない場合が多いものだからである。更に、何かしら一つの思想がまとまりかけたら、絕えずそれを文章として書きあらはしてみることが必要である。思想は、ちやうど泉のやうなもので、それを堰きとめて置くと、いつしか源泉が涸渇してしまふが、これにはけ口を與へて流出せしめると、いつまでも滾々として流れて盡きないものである、といはれてゐる。いかに、思想をうちに貯藏して置いても、これをそのままにして置いては何等の發展もない。否、つひには涸渇してしまふであらう。しかるに、絕えず文章といふはけ口から流出せしめることにより、思想の泉は常に滾々として流れて盡きず、更に清新な更に深遠な思想が源泉から湧上つて來るであらう。いや、文を

書きつつあるといふことそのことが、既に自分の思想を成長せしめ發展せしめてゐるのである。プラトーンは、「談話は高聲に思索することであり、思索は低聲に談話することである。」といつた。すなはち、我々が文章を書く時は、文字を走らせつつ思索生活を營んでゐるのである。恐らく、文章を書きつつある時ほど、我々の精神生活の緊張することはないであらう。そこに、我々の思想の成長・發展の存することは當然である。

思想と表現との關係について、極めて適切なる比喩を以て、五十嵐力博士は左の如く述べてゐる。

「文を作る」といふのは、適切にいへば、「文を產む」といふ事であります。文を產むのは、譬へば子を產むやうなものであります。

子供がお腹に宿れば、お母さんは、起居動作を愼んで特別の養生を致します。それから產の紐を解くまでの十月四十週の間には、或は折角の胎兒の流れてしまふこともありませう、月足らずの脾弱な子を產むこともありませう。無事に月が滿ちても、お產の時には謂はゆる「產みの苦しみ」をせねばなりません。十月の間の並々ならぬ注意と養生とが、產みの苦しみを經て、やうやく玉のやうな兒が見られるのであります。

文章家が書かうと思ふ事柄文章の種子となる思想を考へ浮かべるのは、ちやうどお母さんのお腹に赤ん坊の宿るやうなものでありませう。その種子を放つて置けば直に流れて消えてしまひます。一所懸命に培養しても、培養の仕方がわるいと、ひねくりたり、いぢけたりします。培養の仕方がよいにしても、いろいろの事情に餘儀なくされ、熟さないうちに書きあらはして世間の冷たい風にあてねばならぬこともあります。こ

れは流産か、墮胎か、乃至月足らずの脾弱な子を産み落したのにも喩ふべきでありませう。よし十分に考慮し研究して立派に成熟さした上で書きあらはすにしても、それを頭から紙に移す際には、産みの苦しみにも劣らぬほどの慘憺たる苦心をせねばなりません。紙の上に移されて一通り纒つたものを仕上げするのは、これまた非常な骨折であります。（作文三十三講）

私はさきに、「無い袖は振られない。」「男馬は子を生まぬ。」といつた。たとひ、お腹にあるものでも、いざとなると、所謂生みの苦しみに惱むのである。況んや無い袖を振らうとしたり、男馬に子を生ませようとしたりするのは、奇蹟以外の何物でもないであらう。奇術師にしても、全然無いものを出しはしない。唯、人の眼をくらまして、無いものを出したやうに見せかけるだけで、どこかに、ちやんと種子を隱してゐるのである。

思想の培養、それは文章に先行する重大なる條件である。

四　內容的價値

文法上からいへば、どんな思想だつて文となる。たとへば、「水が湯になる。」でも、「雪は白し。」

でも、ちやんと完全な要素を備へた文となる。しかし、これらの文に價値があるかどうかとなると、大きな疑問であらう。我々がこれから文章といふものを學んで行かうといふのは、よい文、立派な文、價値のある文を書くにはどうするかといふことを知りたいためである。

そこで、いつたい文の價値とは何かといふことが問題となる。常識的にいへば、文章には、書かれてゐる內容、すなはち思想または感情と、書きあらはされてゐる形式、すなはち文字や語句との二方面がある。そこで、文の價値とは、この內容的方面と形式的方面との兩者に互るものと考へられる。すなはち、價値ある文といへば、內容的に見ても形式的に見ても、我々の精神生活に何等か寄與するところのあるもののことである。しかし、哲學的または藝術論的にいふと、內容と形式との二つに分けて考へるなどといふのは、頗る幼稚な考へ方で、內容卽表現であり表現卽內容である、といふ風に論ずるのである。が、今は、かうしたむづかしい議論に入ることをさしひかへよう。內容卽表現、表現卽內容といふやうなことをいつてみたところで、文章を書く上に、大して敎へられるところがないと思はれるからである。世の中には、相當立派な思想內容をもつてゐながら、それを文章に書きあらすと、どうもうまく表現出來ない人がある。また、文章はなかなか馴れたものだと思はせられるが、どうも書いてある內容が實にくだらないと感じさせられる場合がある。我々は、この二つの場合のどちらでも滿足されないのである。出來ることなら、價値のある立派な思想內容を、立派に表現するやうにしたいものである。だから、常識的であらうと何であらうと、文章を學ぶ上からは、かうした二

元的の立場で考へるのが便利であり實際上の役に立つのである。菊池寛氏は次のやうに述べてゐる。

私の理想の作品といへば、內容的價値と藝術的價値とを共有した作品である。語を換へていへば、われわれの藝術的評價に及第するとともに、われわれの內容的評價に及第する作品である。

イブセンの近代劇、トルストイの作品が、一代の人心を動かした理由の一は、あの中に在る思想の力である。その藝術だけの力ではない。藝術のみにかくれて、人生に呼びかけない作家は、象牙の塔にかくれて、銀の笛を吹いてゐるやうなものだ。それは、十九世紀頃の藝術家風俗だが、まだそんな風なポーズを欣んでゐる人が多い。

文藝は經國の大事、私はそんな風に考へたい。生活第一、藝術第二。（新潮、第二百十五號）

菊池氏のいふ藝術的價値は、私の前に述べた表現形式的の價値のことであると見てよからう。

さて、表現形式または表現方法のことは、後廻しとして、ここでは文章の內容的價値とは何であるかといふことを、もう少し立入つて考へてみよう。從來、價値については、眞・善・美・聖の四つがたてられてゐた。眞といふのは、科學的價値のことで、眞理の追及、眞理の發見によつて、吾人の精神生活を成長せしめ發展せしめるところの價値のことである。善とは道德的價値のことで、道德的意志または行爲によつて人生・社會を向上せしめるところの價値のことである。同樣にして、美とは藝術的價値のことであり、聖とは宗敎的價値のことである。ところが、近頃では、右の四つの價値の外

に實用的價値または經濟的價値その他を加へようとするやうになつて來た。早い話が、人間が食へなくなつたら、眞も善も美も聖もあつたものではない。先づ何よりも生きることが先決問題であり根本問題である。だから、實用的價値または經濟的價値といふことが必要な價値として立てられねばならぬ、といふのである。しかし、眞・善・美・聖の四つは、それのみで價値を生ずるものであり、いはば無條件的價値であるが、實用的・經濟的價値は、それが利用されることによつてのみ價値を生ずるものであつて、いはば利用的價値である。が、とにかく、我々は價値として、科學的・道德的・藝術的・宗教的・實用的の五つをかぞへることが出來る。さうして、それは、ひきくるめて生活的價値とも人生的價値ともいへると思ふ。それらの價値が我々の生活をよりよくし、我々の人生をよりよくする價値だからである。

文章の內容をなすべきものは、右に述べた五つの價値、ひきくるめて生活的・人生的の價値を有するものでなければならぬのである。

昔から、文章を書くに當つて、着想といふことがいはれてゐる。着想といふのは、自分の抱いてゐる思想內容または生活內容の或部分に眼を着けて、あのことを一つ書いてみようと心に決することである。このことは、いはば表現のスタートであつて、かなり重大な意義をもつものである。着想といふことは、つまり內容的價値の發見であり選擇である。それゆゑに、文章または作品の價値は、この着想に於て、なかば以上決せられてしまふのである。この點について、菊池氏の意見をもう少し引用

してみたい。

「例へば、ロマンローランの小説の中にある一つの挿話、『佛蘭西の兵士が戰線で、獨逸の若い、十六七の兵士を刺殺さうとすると、その少年が手を差上げて、母（ムツテル）！　母（ムツテル）！　と叫んだ。』といふ話、かうした話は、小説にかかれるとかかれないとに拘はらず、人を動かす力を持つてゐる。」

「又、私の『恩讐の彼方』といふ小説、あの筋書は、ちやんと耶馬溪案內記に載つてゐるのであるが、案內記を讀んでも、既にある感動に打たれるだらうと思ふ。

文藝作品の題材の中には、作家がその藝術的表現の魔杖を觸れないうちから、燦として輝く人生の寶石が澤山あると思ふ。」（新潮、第二百十五號）

これは、菊池氏が文藝作品に於ける內容的價値の實例としてあげたものの一部分であるが、以て、氏が如何に內容的價値を重視してゐるかが分るであらう。と同時に、文藝作品に於ける着想の仕方についての一つの暗示を與へてゐるものとも見られる。

菊池氏は、文藝作品だけについて論じたのであるが、文章に於て內容的價値の重視さるべきことは、ひとり文藝的作品だけに限つたことではない。如何なる種類の文章に於ても、すべて同じことである。ことに、科學的敍述などに至つては、その內容をなす學的研究の深さ正しさ及びそれが學界に如何なる寄與をなすかといふことが、むしろ表現的方法または技術以上に重要な問題となつて來るのである。

いや、一本の手紙、一枚の葉書にしたところで、同じことである。如何に、美しい文句を並べたてゝゐても、くだらない用件や、まごころのこもつてゐない手紙などは、破つて捨てられてしまふたけであらう。

價値ある內容に着眼すること、これが文章に入る前に來るべき重要問題である。

ところが、ここに一言附記して置かねばならぬことは、いはゆる課題についてである。これは、自ら書くべき內容について着眼するのでなくて、他から指示されるのであるが、學校の生徒でも、社會の一員でも、他から「かくかくの文を書け。」と命ぜられることが頗る多いのである。しかし、いくら他から命ぜられたからとて、自分の思想內容に全然存在しないことは、何としても書けるものではない。さういふ場合は、全く問題外であるが、課題されて書ける場合は、自ら題材を決定する場合と、實質的に大して變るものではない。たとへば、「現代の世相について論ぜよ」といふ課題が出されたとする。命ぜられた人は、自分がかねてより、現代の世相について抱いてゐた思想內容を整理し、その中から價値ある部分を選び出して筆を執るのであつて、その手續きに於て、自ら選材するのと大して變るものではない。時には、自ら有する思想內容に着眼し得ずして、他の指示や暗示によつて、はじめて、「そのことなら十分書ける。」と、勇み立つ場合すらある。

現代は、文章まで一つの經濟的機構の中にとりいれられて、いはゆる職業的文筆者などは、殆ど課題でないことはないくらゐである。書店や雜誌社などから、「先生、かういふ題で、こんな內容で、

こんな程度で、一つお書き願ひたいのですが……。」と來るのである。また、官廳の役人などは、始終、上官から、「何々の場合に大臣の讀む祝辭を書け。」とか、「かくかくの通牒文案を作れ。」とかいふ風に命令されてゐる。會社や商店などに勤めてゐる人も、絶えず上の方から課題されて、いろいろの文を書いてゐるのである。課題は、決して入學試驗に提出されるだけのものではないのである。今や、文章は立派に一つの資本となりつつある。「ろくな文章一つ書けやしない。」といふことは、直にその人のくびに關する問題、生命に關する問題となつて來るのである。

五　文の組立

價値ある內容に着眼するといふことは、最も重大なことであるが、勿論それだけでは文にならない。ついで起る問題は、その價値ある思想內容を如何なる順序で如何に組立てて表現すべきかと考へて、はじめて文が生ずる段取となる。この、如何なる順序で、如何に組立てて表現すべきかと想を構へ案を練ることを、昔から構想と呼んでゐる。構想は、着想の次に來る重要問題である。

たとへていへば、ここに一軒の家を建てようと考へることは着想である。次に、どういふ風な家を建てようか、日本風か、西洋式か、和洋折衷的か、間取はいくつにしようか、建坪はいくらにするか、

といふ風に考へ、さていよいよその中のどれかに決すると、ここに設計圖を引く段取となる。この設計圖を引くのが、いはば文章に於ける構想である。

では、文章を書かうとする時に、どんな順序で、どんな風に組立つべきであるかといふことが問題となるが、それはちやうど家を建てるにはどんな風に設計すればよいかといふのと同じで、決して一概にいへることではない。二階建か平家か、日本風か洋館かにより、またその間取の數や建坪等によつて設計が定まる如く、文章に於ても、表現すべき内容の性質により、如何なる形式の表現法をとるか等により、まさに千差萬別でなければならぬ。ひとしく人生に關する問題にしても、論文の形式であらはすか、小說にするか、戲曲に仕組むか等によつて、表現の順序や組立を異にするのは當然である。いや、ひとしく小說の形式によらうとしても、如何にすれば最もよくその問題が取扱はれ、表現効果を十分に發揮し得るかといふこと以外に、かくかくの順序によるべしなどといふことは絕對にいへるものではない。そこに、作家の個性の發現があり、千差萬別の文體(スタイル)も生じて來るのである。「文は人なり。」(Le style est de l'homme même.—Buffon.)とは、まさにこのことである。昔の文章家のやうに、三段とか五段とか七段とかにすべきだとか、かく書出してかく結ぶべきであるとかいふ風な一定の形式を持出すやうなことは、今日、誰も主張する人もなければ耳を傾ける人もないであらう。

唯、一般的に、總べてに通じていへることは、どんな表現形式をとるにしても、全編の統一を保つやうに、あらかじめ文の組立を十分考へてから筆を執るといふことである。「先づ考へてから筆を執

れ。」(First think, then write.) といはれてゐるのはこのことである。ゆきあたりばつたり主義で筆を運んでゐるやうな態度では、決して眞の文章の生ずる筈はない。佐々政一先生は、次のやうに述べてゐる。

如何なる家を建てるかといふ設計を立てずに、先づ基礎を置き、柱を立てる大工はなからう。どんな畫を描くかといふ企畫なしに、先づ手近の繪の具を出たらめに塗抹する畫工はなからう。唯、文章や演說に於てのみは、動もすると、全體の趣向構造の未だ成らぬ間に、先づ思ひついた語句を筆にし、口にする者がある。一句を下して而して後にその次を考へる。宛も二三間歩いては立止つて、その次の足の方向を考へてゐるやうに、散策逍遙に似た態度の文がある。かかる文は必ず不統一ならざるを得ぬ。文を作るものに最も誡むべきはこの點である。(修辭法講話)

先づ、これから書かうとする事柄について、その大體の順序や組立を項目式に別紙に記して置き、それから用意してある材料をこの順序に從つてあてはめて行くといふ風にしなければならぬ。五十嵐力博士は、自らの經驗について、次のやうに述べてゐる。

筆を執る前に、まづ極く大體始めにこんな事を書いて、それからこんな事を書きつづけて、大概こんな所で結尾にしようといふ位の見當を定めて、それから、かねて集めておいたごたごたの材料を、始めに入用な分、中程に入用な分、終の方に入用な分と位に、三つか四つに分ける。それから、いよいよ筆を執る時には、

頭の調子をよくし、思想の流出工合を滑らかにするために、或は氣に合つた古今の名作を讀むこともある。或は自分の今迄書いたものの中で比較的心に合つたものを口馴らしに讀むこともある。頭の工合によつては、茶を飲み、菓子をたべ、或は酒類を少しばかり飲むこともある。それから前の材料や參考書類を机のまはりにおいて、筆の軸を嚙みつつ放心の氣味で、天井を見たり、障子の裂け穴を見たり、疊の汚點を見たりして、段々と書出すのである。(新文章講話)

これは、五十嵐博士の經驗であるから、必ずしも、すべての人が此の通りであるといふわけではなからう。しかし、大體のプランを立てないで書出すといふやうな人は、苟も文章に關心をもつ人には先づゐるまいと思ふ。ところが、文章のプランといふやうな思想的・精神的のものは、家屋の設計などのやうな物質的・機械的のものとちがひ、たとひプランを立てて書出しても、記述中に於て、思想がぐんぐん流れて行き發展して行くのが常である。思想は、まさに流動體である。さういふ場合には、はじめに立てたプラン通りに筆を進めることが、却つて表現上まづいと氣のつくことがある。いや、さういふ場合が極めて多いものである。さうした場合には、決してはじめに立てたプランにのみ引きずられてゐてはならない。どしどしと、プランの變更を斷行して進むべきである。文の改造、文の推敲といふことは、その手續きをさしていふ言葉である。物質的・固形的・機械的の家屋の建築ですら、竣工までに一度も設計替をしないなどといふことは殆どないものである。

六　言葉のつかひ方

さて、着想されたことが構想によつて順序立てられると、ここに我々は、はじめて筆を執つて實際の記述にかかるのである。この時は前にも言及したやうに、文字を走らせながら思索するのであつて、人間の精神生活中、最も緊張した生活は、恐らく我々の文章を記述する時だといへるであらう。學校に於ける作文記述の時間などは、教室が大海の底の如き靜けさを呈するのが常である。ガタリといふ雜音すら思想をかきみだすからである。また、新聞記者などは、囂々たる雜音の中にあつても、それが耳に入らぬくらゐに記述に熱中する。或文豪の如きは、記述中、自分の書齋が火事にならうとしたのも知らずに、夢中でペンを走らせてゐたといふ。

記述に當つては、頭の中に、無數の觀念と情緒とがつぎつぎに現れて來る。我々は先づその無數の觀念および情緒に、一々適切なる言葉を與へなくてはならぬ。そして、その言葉をまた一々適當なる文字に書きあらはさなくてはならぬ。記述中には、絕えずこのことが繰返されてゐる。而して、これらの豐富な觀念および情緒と、それを一々ぴたりと言ひあらはす豐富な語彙と、またその各語を一々正しき文字に書きあらはす力とは、決して泥縄式に記述中に求めることの出來るものではなく、その

人の平素の思想および國語の力が決定する問題である。

文章を書く上で、第一要件ともいはるべきことは、いはゆる「適語を適所に置く。」（Proper word in proper place.）といふことであるが、そのためには、我々は平素から貯へて置いた語彙の中から、いろいろの言葉を選び出して、この場所にはこの語がよいか、あの語がよいかと比較し商量して、その場所にぴたりと据わる言葉を置かねばならぬ。たとへば、「かれ」といつた方がよいか、「あの人」といつた方がしつくりするか、それとも「彼氏」か「あいつ」か「あれ」か「あの奴」か「あの男」か、時には「あの野郎」とか「あんぢくしやう」などといふ卑語でなければ、ぴたりとあてはまらないことすらある。出來るだけ卑語をつかふな、と一般的にはいはれてゐるが、場合によつては、

「あの人、ひどい人だ。」

などと書いたのでは、どうもしつくりしないことがある。

「あいつ、ひどい奴だ。」

「あんぢくしやう、おぼえてゐやがれ。」

でなくては、蟲がをさまらぬ場合がある。「ところが」と續けるか、「しかしながら」と承けるか、「が」だけで濟ませるか、「しかし」といふか、「だが」といつた方がよいか、といふやうなことですら、文の續き工合から大いに注意されねばならぬことである。

そこで、文を書く場合に、どんな標準に基づいて、言葉を選んだらよいかといふことについて、極

くざつと述べようと思ふ。
第一に、古語や死語を排して、現代の生きた言葉を用ふべきである。
このことについては、何人も異論のあらう筈もなく、隨つて、その理由について何等の說明も不要であらう。ところが、私はつい最近、或相當知名な人の葬儀に列したことがある。その時讀まれた弔辭の數は數十に達したのであるが、その中で、口語體の弔辭はたつた一つしかなかつた。しかも、最も人々を感動せしめたのは、その口語體の弔辭であつたのである。あとは、大抵きまり文句で、「哀悼の至りに堪へず、謹んで弔意を表す。」といふやうなものばかりであつた。まだまだ、かうして世界もあるのかと、つくづく情なくなつた。
文部省などでは、すでに、大正十年に、「口語文用例集」を出して、諸官廳に於ける書類の標準を示してゐる。

本日病氣ノ爲缺勤シマスカラ、御屆致シマス。

左記ノ事項ガ調査上必要デアリマスカラ、至急御取調ノ上來ル何月何日迄ニ御回報相成ル樣照會致シマス。

の如きは、その一例である。ところが、まだやつと昨今、裁判所の判決文が口語文に改められるとか改められないとか騷がれてゐるやうな有樣で、まだ、我が國の社會の或一部には、文語文の用ひられてゐるところも相當に多いやうである。しかし、もうそんな時代ではない。

しかし、ここに一つ考へなければならぬ點は、いかに口語文といつても、それは文字通りに我々が日常話し合つてゐる通りの言葉で書かれるものではないといふことである。現に、私がここで述べてゐるやうな言葉は、我々の日常の談話につかはれてゐる通りの言葉ではないのである。イギリスの言語學者ブランドレイは、

すべて、如何なる國語に於ても、その話される言葉と書かれる言葉との間には、若干のスタイルの差を生ずるものである。(Spoken and Written English.)

と述べてゐる。その理由は、話す場合と書く場合とに於ける表現者の心理の相違に基因する。我々の平素の談話に於てさへ、くつろいだ、ぞんざいな言葉もあり、あらたまつた、ていねいな言葉もある。それは、話す相手により場所により、自然に起つて來る現象である。そこで、一般に我々が文を書く場合は、話す場合に比し遙かに精神的に緊張するのが普通である。隨つて、言葉もそれにつれて緊張するのが當然である。いつたい、「當然である」といふやうな言葉は、普通の談話には、めつたにつかはないのである。さうかといつて、かうした記述に於て、「當然でございます」「當然であります」「あたりまへです」「あたりまへなんです」といふ風に書いてゐたのでは、內容にそぐはなくなる。それゆゑに、口語文の中に、いくらか文語脈の語が入つて來るのは、表現的手法上むしろ當然なことである。たとへば、「かうして」といふところを「かくして」と書き、「それから」を「而して」、「こ

れとはちがつて」を「之に反して」と書くが如きは、文の種類によつては、却つて望ましいことすらある。勿論、文の種類により、または讀者の程度により、つとめて談話のままの言葉で書きあらはすべき場合もあらう。が、何れにせよ、今日の文體は、如何なる種類の文に於ても、現代の言葉を用ひることを本體とすべきで、文語體の如きは、もはや、とうに過去の文體となつてしまつたのである。

第二には、出來る限り外國の言葉を排して、平易な國語を用ふべきである。

「シェークハンド」などといはずに、「握手」とか「手をにぎる」とかいつた方がよい。「デスクライブする」よりは「敍述する」、「アグプトする」よりは「順應する」の方がよい。かういふことは、誰にも異論はなからうが、或種の人の文章などを讀んでゐると、いくらも適當な日本語があるにもかかはらず、ひんぱんに片假名の外國語が出て來るので、ウンザリさせられることがある。中にはまた、「人間の本性が道德的（モラル）存在物（ビイング）である以上」などとやつてゐるのもある。こんなのも、餘り感心した趣味ではあるまい。また、これは、直接外國語をつかつてゐるわけではないが、「何々であるところのそれが」といつたやうな、外國語の文法をそのまま眞似てゐるのもある。かういふのは、語の排列が國語の習慣に反してゐるばかりでなく、どうも意味がはつきりしない。英文和譯などの方でも、今日では、「行くべく餘りに遠かつた」とか「ことほど左様に」などの類を、極端に忌むやうになつてゐる。

但し、外國語といつても、殆どすべての國民が日常使用してゐるやうな言葉は、先づ國語と見なさ

るべきものであらう。たとへば、カルタだのマントだの、ペンだのインクだの、ラヂオだのアンテナだのといふやうなのがそれで、かういふ言葉まで、文章から排斥せよといふのではない。そんなことを言ひたてたら、漢語だつて排斥しなくてはならなくなる。ところが、我が國の國號たる「日本」とか「大日本帝國」などですら漢語なのである。大多數の國民のつかつてゐる漢語は外國語ではない。しかし、同じ漢語の中でも、めつたにつかはれないやうなものは、やつぱり外國語と見なしてよからう。たとへば、「學校」は國語であつても「庠序」は國語ではあるまい。同時に、「輸贏を決する」の「輸贏」や、「石」を意味する「雲根」や、「人民」の意味の「黎元」なども、先づ國語といふ概念からは遠いものであらう。

とかく、ハイカラな新し過ぎる人は、好んで外國語をつかひたがり、頑固な古過ぎる人は、無闇とむづかしい漢語をならべたがるものであるが、一般の國民の書く文章は、一般の國語によつて書かれなくてはならぬ。

第三には、一般的の文には、つとめて術語を避くべきである。

術語といふのは、或少數の特殊な團體の間にだけ用ひられる言葉のことである。たとへば、哲學者の間にだけ用ひられる「先驗的」だとか「純粹理性」だとかいふやうな言葉、數學者にだけ用ひられる「負數」だとか「虚數」だとか、株式界の人達の間にしか通用しない「寄」だの「引」だのといふやうな言葉が、いはゆる術語である。そのほか、スリの仲間だけの通り言葉、女學生の間だけにしか

分らない言葉、軍人でなければ理解されないやうな言葉なども、いはば、この、術語の範疇に屬すべきものであらう。

隨つて、特殊の學術的論文などに於て、術語を用ひることは一向さしつかへないことではあるが、一般の讀者を對象とするやうな文に於ては、つとめて術語を避けなければならぬ。若し、やむを得ず、術語をつかはなければならぬやうな場合には、必ずその註釋をほどこすことが必要である。元來、「術語」などといふ言葉が、すでに一つの術語なのである。私は、ここではやむを得ず、この言葉を用ひたので、その註釋をほどこしたわけである。

第四には、出來る限り方言を排して、標準語を使用すべきである。

標準語とは、「東京地方に於ける中流社會の人のつかふ注意談話態の言葉」の意味である。「ああ遊ばせ」「かう遊ばせ」などといふのは上流社會の言葉であり、「ちやん」「おつかあ」などといふのは下流社會の言葉であつて、いづれも標準語ではない。注意談話態といふのは、careful conversational style の譯語で、ゆつくりと注意して話す時に自然に生ずる言葉のスタイルをいふ。これに對して、ぞんざいに早口にしやべる時に自然に生ずる言葉のスタイルを早口談話態と呼んでゐる。これは、rapid conversational style の譯語である。たとへば、「オッコッチャッタ」「ボカシランョ」などといふのは、早口談話態であるが、「落ちてしまつた」「僕は知らないよ」などといふのは注意談話態である。標準語は、この注意談話態でなければならぬ。

方言といふのは、言語學上からは、いろいろむづかしい意味もあるが、普通には、各地方で話される言葉のことである。鹿兒島の「オイドン」、長崎の「バッテン」、大阪の「サカイ」、名古屋の「ナモ」、關東の「ベイ」、仙臺の「スス」などがそれである。

なぜ、東京の言葉を標準語として立てるかといへば、東京は江戸と呼ばれた德川幕府の時代から、實際上に政治や文化の中心地であり、ここには全國各地のいろいろの人が入込み、またここから全國各地へいろいろの人が出て行く。隨つてこの江戸（後の東京）の地で、いろいろの人が話し合つてゐるうちに、いつしか一つの型の言葉が出來上つたのであつて、決して武藏野の一角に生じた方言ではないのである。だから、東京の言葉は、日本全國の方言の各要素が少しづつ混合して、いはば、言語のカクテルとして出來上つたものであるから、その言葉は、全國的に理解され易いのである。これが、東京の言葉を以て標準語として立てられた理由である。世界のどの國でもその通りで、その國の首府でつかはれてゐる言葉が、その國の標準語とされてゐるのである。我々の文章は、廣く一般的に理解されることが必要であるから、力めて、この標準語によるべきであり、一々註釋を要するやうな方言を用ふべきでないことは言ふまでもない。

ただ、時に、表現的手法として、方言を使用することがあつてもさしつかへない。たとへば、京都の旅館に泊つた時の情景を髣髴させるためには、女中をして京都辯で語らせねばならぬであらう。或一地方のローカル・カラーを出すためには、その土地の方言を文中に挿入する必要も起つて來よう。

つとめて、標準語で書かうとした小學校の國語讀本などですら、「一太郎やあい」の課に、

「うちのことは心配するな。よく天子様に御奉公するだよ。」

といふやうなところがあつたと記憶してゐる。

さて、文章を記述するに當り、どんな態度で言葉を使用すべきか、どんな標準に基づいて言葉を選ぶべきかといふことについては、極く大體ではあるが以上で切上げる。まだ、文の記述中には、文字のつかひ方、文法の問題、句讀法のことなどが、實際問題となつて來るのであるが、それらのことは、項を改めて述べることとし、記述について、最後に一言して置きたいことは、記述中、ときどき、文のはじめから讀みかへしてみることが必要だといふことである。さうすると、思想のつづき工合の惡いところに氣がついたり、または、停滯してゐた思想を展開せしめることが出來たり、或は妥當でない語句や文字を見出したりするに役立つものである。

七　推敲について

さて、いよいよ一篇の文の記述が終ると、ここに推敲の問題が起つて來る。尤も、推敲といふこと

は、必ずしも一篇の文の記述が終つてからとばかりは限らない。記述中にもしばしば行はれるのが常であるが、とにかく、推敲は記述の後に來る問題である。推敲の語は、何人も知る如く、「湘素雜記」にある賈島推敲の故事に基づくものである。

唐の詩人賈島がまだその詩才を認められなかつた頃のことである。はじめて洛陽の都に上り、これから大いに詩文で賣出さうとした頃のこと、一日驢馬に跨つて郊外を散策しながら、しきりに作詩に耽つてゐた。たまたま、彼の頭に浮かんだのは、

鳥宿池邊樹、僧推月下門。

といふ五言律のはじめの二句であつた。しかし、彼は直に「推す」よりも「敲く」の方がよくはないかと思つた。彼は驢馬の上で幾度か口吟しつつ、「推さうか」「敲かうか」とまどつた。時々、手で門を推す樣子をしてみたり、敲く恰好をしてみたりした。そこへ向かふから、時の高官であり且一代の文豪たる韓愈が行列いかめしく練つて來た。が、賈島は、「推さうか」「敲かうか」で夢中なのだから、つい、おぼえず、その行列の中へ驢馬を乘入れてしまつた。衞士がびつくりして、その狼藉者を韓愈の前に突出した。韓愈は事情を聞くと、しばらく考へて、「それは敲くとした方がよからう」といつた。かくして、二人は忽ち隔意なき詩友となり、ともに轡を並べて詩を談じつつ、洛陽をさして歸つて行つた。

これが推敲の語原だと傳へられてゐる。そのやうに、推敲といふことは、詩文の字句を改造する意

味の語である。しかし、推敲は、單に字句の改造に限ることではなく、時には文の一部分または大部分に亙つて改造されることすら少くない。

昔の支那の詩人の中には、一篇の七言絶句をつくるに、七日もかかつたといふ人がある。毎日壁に貼りつけては眺め、一行消し二行消しして眞黑にしてしまひ、また書きなほし書きなほしして、僅か二十八字の詩が、七日目になつてやつと完成したといふ話さへある。

今の世に、こんな眞似をすることも出來ないし、またする人もないであらうが、とにかく、文章に於て推敲の必要であるといふことは、殆どいふ必要もないことである。さらさらと書流して、一回も通讀せずに平氣でゐるやうでは、決して立派な文は出來ないであらう。

推敲、すなはち文の改造は、時には文の組立からひつくりかへす場合もあり、妥當でない文字や語句を訂正する場合もあり、下の句を上へ持つて行つたり、不足の語句を追加したり、餘計な文句を削つたり、句讀點を施したり消したりといふ風に、文のあらゆる要素に亙つて行はれる。さうして、餘り多くの推敲箇所が生じた場合とか、組立から變更するとかいふやうな場合には、支那の詩人ではないが、どうしても別紙に新しく書きなほすのが一番いいやうである。

八　文字のつかひ方

世界中で、日本の國ほど、文字といふものに困りぬいてゐる國も稀であらう。何しろ、漢字と平假名と片假名との三種の文字がある上に、漢字は畫が多くてむづかしいのに、かてて加へて音だの訓だのといふ厄介なものがあり、假名には假名遣だの送假名だのといふ複雜きはまるものがある。現今、本當に正しい文字のつかひ方の出來る人などといふものは、いくら鉦と太鼓でさがし歩いたとて、一人だつてありつこないであらう。

今年の二月の末頃、友人と二人で日本橋の邊をぶらついた時、ある大きなデパートの前まで來ると、「桃の節句」と筆太に書いた大看板が立てられてゐた。

「モモノセツジュンか。」

「ふゝ。」

二人で笑つたことがあつた。これが、三月三日の「節供」の賣出し廣告なのである。きつと、誰かが「桃の節句」などと書いて示したのを、看板書きがちよつて棒を一本加へてしまつたのであらう。

こんなのは無學な人達のことだから無理もないが、さて、相當の教育を受けた人達、ことに文筆に從

事してゐる人々までが、隨分ひどい漢字を書いて平氣でゐる。「支度(したく)」と書くべきところを「仕度(つかまつりたく)」と書いたり、「緣側(えんがは)」と書くべきところを「椽側(たるきがは)」と書いたりするのなどは、もう殆ど一般的になつてしまつたやうである。ことに、假名が混つて來ると更にこんがらがつて、「見よう」と書くべきところを「見やう」と書き、「思うて」と書くべきところを「思ふて」と書くのなども、却つて誤つた方のつかひ方が正しいとさへ思つてゐる人が多いほどである。

そこで、文章を書く上に於て、我々は文字について、どんな風に心得たらよいかといふことが問題となる。

先づ漢字であるが、江戸時代の如く、漢學萬能の時代には、むづかしい漢字をつかふ人ほどが偉い學者のやうに思はれてゐたのである。しかし、もう今日では、そんなことを考へてゐる人は一人もゐないであらう。今、支那には約五萬の漢字があるが、五萬の漢字を悉く覺えるには、一年に一千字づつ覺えても、人生五十年はかかるのである。こんな馬鹿げた話があるものではない。幸ひ、日本人は假名といふやや便利な文字を發明し、假名と漢字を混用して、先づ大抵の思想をあらはすに事を缺かぬやうになつてゐる。で、出來る限り、我々はむづかしい漢字などをつかはないやうにし、なるべく多く假名を用ひるやうに心掛けたいものである。先年、臨時國語調査會で選定した國民の常用漢字は、約一千八百字ほどであるが、先づこのくらゐで結構であらう。しかし、その常用漢字の範圍内だけの漢字をつかひ、それ以外の漢字はつかふまいなどと考へると、これはまた窮屈千萬な話で、絶えず常

用漢字表と頸引しながら文章を書いてゐなくてはならない。そんなことは、何人にも堪へられない煩瑣である。で、我々は、その精神だけをくんで、つとめて簡單な、いはば自分で知つてゐるだけの漢字をつかひ、餘程特殊な場合ででもなければ辭書などで漢字をさがし出すやうなことをしないで、分らないところは假名で書いて置く、といふ風にしたいものである。いや、たとひ、漢字を知つてゐても、出來る限りやさしい漢字または假名で書くやうにしたい。「充分」よりは「十分」の方がよく、「卽ち」や「則ち」よりは「すなはち」の方がよく、「併し」や「然し」よりは「しかし」の方がよく、「其の」や「此の」よりは「その」「この」の方が遙かにましである。

ただし、ここに注意すべきは、「それだから、漢字などはどう書いたつていいではないか、節供だらうと節句だらうと、支度だらうと仕度だらうと、緣側だらうと椽側だらうと、それをセックとよみシタクとよみエンガワとよめばよいではないか。」などといふ亂暴な考を起してはならないといふことである。昔、秀吉の祐筆が、おそれおほくも、醍醐天皇のダイゴといふ漢字を忘れて、秀吉にたづねると、秀吉も分らなかつたものと見えて、「大といふ字と五といふ字を書いて置け。」といつたさうである。これは、秀吉のやうな大英雄にして、はじめていへることで、普通の人間の眞似るべきことではない。今日では、中等學校の教科書などに、天皇の御尊號の誤植があつたりすれば、忽ち文部省または檢定官の重大な責任問題となるのである。むづかしい漢字をつかふ必要がないといふことは、ウソ字を書いてよいといふことではない。つかふ限りの漢字は正しく書きたいものである。さうでな

ければ、文字といふものの、此の世に存在する意義を失ふからである。
次に假名であるが、平假名と片假名については、一般的の文章には先づ平假名をつかひ、唯、外國の地名・人名とか、ボールやラヂオの如き外國語とか、または電報の文を挿入するやうな時だけは片假名で書くといふくらゐのことで、これは、大體さういふ習慣になつてゐるから、それに從ふがよいのである。
假名についての實際問題は、例の假名遣と送假名との二つである。これは、文章を書く上に、かなり重要な問題である。
假名遣には、國語假名遣と字音假名遣とがあり、その兩者に亙つて、それぞれ歴史的假名遣と表音的假名遣と改定假名遣との三種がある。まことに複雜の限りであり、煩瑣のきはみである。その何れの標準に從つたらよいかといふことは、その人の信念により主義によつて、一概にいへることではないが、私は今のところでは、どうも歴史的假名遣によるより仕方がないと考へてゐる。といふのは、世間の九十九パーセントまで、すべて歴史的假名遣によらうとしてゐるからである。新聞でも雜誌でも著書でも、殆ど全部が歴史的假名遣によらうとしてゐる。ちよつと、停車場へ行つてみても、「うへの」とか「とうきやう」とか「しながは」とかいふ風に、歴史的假名遣によつてゐる。ことに、學校では、歴史的假名遣で國語教育を施してゐるのであるから、先づ教へたやうに書かせるといふのが、最も自然であるやうに思はれる。英語などでも、school だの thought だの psychology だのといふ、

昔ながらの綴字、いはば歴史的假名遣で押通してゐるのである。これも國際的とでもいふか、どこでも困つてゐながら、にはかにどうすることも出來ない問題のやうである。ところが、我が國の知識階級の人々には妙なくせがあつて、英語や獨逸語の綴字に少しの誤でもあると、すぐに輕蔑の眼を以て見たがるくせに、さて、案外自分の國の假名遣には無關心で、自ら平氣で誤を犯してゐるやうである。これは、いはゆる主客顚倒といふものではなからうか。

　次に送假名であるが、これはどうも、かく送るのが正しいといふやうな一定の標準といふものが、どこにも見當らないやうである。國語辭典などをしらべてみても、「大日本國語辭典」と「言泉」と「大言海」とでは、もう送假名法を異にしてゐる。文部省發行の國語讀本などですら、前には「向ふ」「生る」といふ風に送つてゐたかと思ふと、今度の新讀本からは、「向かふ」「生まる」といふ風に送つてゐる。どちらも文法上から理窟に合ふ話で、一方が正しくて一方が誤つてゐるなどとはいへないのである。そんなわけで、どこにも一定の標準といふものがない。そこで、いつたい、我々はどう考へたらよいかといふに、要は、少しでも勞力を省くといふ意味で、誤解の生ぜざる限り、出來るだけ假名を送らないといふ方針をとるのが一番いいと思ふ。

　名詞や代名詞には、原則として假名を送らないがよい。たとひ、動詞から來た名詞でも、「光」「霞」「思出」といふ風に書くのがよい。ただし「讀み書きそろばん」の「讀み」「書き」の如きは右のやうに送らないと「讀書(どくしょ)そろばん」などと讀まれる虞があるからやむを得ない。しかし、「星し」だの

「菫れ」だの「私くし」「彼れ」などといふのは、小學校の生徒ですら吹出すであらう。

動詞の場合は、だいたい、原則として語尾の變化するところから送るがよい。また、二つの動詞が重なつて一つの熟語動詞をつくる時には、原則として、上の動詞が三音節以上の時には中に假名を入れ、二音節の時には入れないがよい。たとへば、「歩き出す」「思ひ出す」「駈出す」「泣出す」といふ風に書く。「駈け出す」「泣き出す」は餘分な勞力であらう。ただし、「鳴出す」では、「鳴き出す」とも「鳴り出す」とも讀まれるから、中に假名を入れた方がよいし、「出來る」と書いて「イデキタル」と讀ませるのは無理であるから、「出で來る」と書かねばならぬ。

形容詞の場合は、原則として、久活用は、「く・い・けれ」から、志久活用は、「しく・しい・しけれ」から送るのがよい。隨つて、「長がい」「短かい」「新らしい」「珍らしい」などと書かずに、「長い」「短い」「新しい」「珍しい」といふ風に書く方がよい。ただし、久活用の場合でも、「コマカイ」を「細い」と書いては「ホソイ」と讀まれる虞があるから「細かい」と書くとか、志久活用の場合でも副詞から來た「ハナハダシイ」を「甚だしい」と書き、動詞から來た「イサマシイ」を「勇ましい」と書くやうな例外は勿論ある。ところが、谷崎潤一郎氏は、その著「文章讀本」の中で、送假名法のことを論じて、

「クルシイ」といふ文字は、「苦い」と書くべきでありませうが、「ニガイ」と讀まれるのを防ぐためには

「苦しい」と書かなければならぬ。

と述べてゐるが、これは少しどうかと思はれる。はじめから原則として、「ニガイ」は「苦い」、「クルシイ」は「苦しい」と書くべきであらう。

その他、副詞や接續詞の場合にはどうするかといふ風に、一々具體的の例などを述べてゐては切りがないから、文字のつかひ方に關することは、すべて巻末の表を參照して頂きたい。

九 文法について

文章を書く上に於て、文法上の知識が必要であるかないか、また、文法の法則に從ふのがよいかわるいか、といふことについては、世に多くの議論がある。フランス自然派の文人ゴンクールは、極端に文法を排斥した一人であつた。我が國の文人でも、谷崎氏などは、「文章讀本」の中で、文法に囚はれるなと述べてゐる。

實際、我々は日常の談話などに於て、一々語法のことを考へたり、語法に從はうなどと、意識して話しはしないが、それでゐて、ちやんと用が足りるのである。「早く持つておいで。」などと、目的語

を略しても、ちやんと、目的のものが運ばれる。「あれだ。」などといつただけでも、相手にその意味がよく通ずるのである。よく例に引かれる話であるが、電車の車掌の「切符の切らない方はありませんか。」とか、「どなたも終點でございます。」なども、文法上から考へたら隨分妙なものであるが、それでゐて、ちやんと意味が分るのである。いや、却つて、これらの語を文法的に正しく言はうとすれば、隨分長くなつたり廻りくどくなつたりして、實用に適さないであらう。

文章を書く場合も、だいたい同じことで我々は一々、これは主語で、これは述語で、などと考へて書きはしない。いはば、國語の習慣に從つて、思つた通りにぐんぐんと筆を運ぶのである。いつたい、語法・文法があつての言語・文章ではなく、言語・文章があつての語法・文法である。すなはち、語法・文法といふものは、我々が自然に習慣的につかつてゐる言語や文章に、どんな法則があるか、どんな除外例があるか、といふやうなことを研究するものである。

それでは、文法といふものは、さういふ一つの科學であつて、實際の文章を書く上に、その知識は全く不用のものであるか、すなはち、全然應用する必要のない科學であるかといふと、決してさうではないのである。

談話の場合には、話す人の眼つきや手つき、または前後の事情、周圍の狀態などが、表現を助けてくれるから、どんなに語を省略しようと、たとひ國語の習慣に少しぐらゐ反してゐようと、意味が分るのである。外國人などは、日本語の習慣に馴れてゐないから、隨分妙な言葉をつかふことが多い。

或一西洋婦人は、日本人の訪問客に向かつて、自分の良人の留守であることを、「オタクノダンナサマ、イナイ。」と言つたさうであるが、それでもよく分るのである。ところが、文章となるとさうは行かない。文章に於ては、繪畫や圖表などを用ひざる限り、文字それ自身だけの表現であつて、他にこれを助けるものが全然ない。それゆゑに、國語の習慣・法則を正しく守らなくては、思想を正しく表現し、または理解させることが困難である。たとへば、文章に於て、「どなたも終點でございます。」と書いた場合には、「誰もかれも終點である。」「すべての人は終點である。」といふ風に解されるかも知れない。また、「お宅の旦那樣、ゐない。」と書いた場合には、「お宅の旦那樣、ゐない？」と尋ねてゐるのだとも思はれる。實際、文章に於ては、助詞の一つでも、おろそかにはされない。たとへば、

三角形の内角の和を二直角にひとしい。

といふやうなのは、たつた助詞一つの文法的誤謬が、文の意味を不明ならしめてゐるのである。尤も、このことは、談話の場合でも同じことで、特に注意して、正確に有効に思想を傳達する上に於て、語法・文法の知識は缺くべからざるものである。「何々であるところのそれが」とか「言語でもつてあらはされ得る」とかいふやうな、國語の習慣に反してゐる語の多く挿入されてゐるやうな文が、理解に困難であるのは、表現者に文法の知識が缺けてゐるからである。

なるほど、名詞とは何ぞや、動詞とは何ぞや、節とは何ぞや、といふやうな理論的知識が、そのまま、文章を書く時に役立つとはいへぬが、少くとも、それぞれの品詞の意義や職能や、用言の活用ぐらゐ知つてゐなければ、決して正確な有効な文は書けるものではない。我が國操觚界に於て、相當名譽ある地位にある人でありながら、動詞の活用や音便に關する知識のないために、「思ふて」「さうで有りて」などと書くので、讀者の笑を買つてゐる人さへある。すでに、讀者の笑を買ふやうでは、その表現効果は決して十分ではない筈である。

文法をいやがつたり排斥したりする人は、大抵の場合、文法を覺えることの出來ない人の捨臺詞か、さうでなければ、文法のことばかりやかましくいふ人への反感から來る皮肉かの何れかである。まれに、もう文法のことなどは、とうに卒業して、無關心で書いても文法の誤などを犯さないやうな人が、「文章を書くには充實した思想を表現しようと心がくべきで、文法などにこだはつてゐては駄目だ。」などといふ場合もある。それは、それで聞えるのであるが、文章を書く上に、文法を無視していいなどといふことは絶對にいへないと思ふ。

今左に、文法上、多くの人の誤り易い點につき、一二の例をあげて置く。

第一は、動詞および形容詞の「う音便」の「う」を「ふ」と書誤ることである。却つて、發音に遠い念の入つた誤である。

動詞の「う音便」といふのは、ハ行四段活用の連用形の「ひ」が「う」に轉ずることで、口語に於

ては、下に「て・た・たり」の語が來る場合である。「思ひて」が「思うて」となるのがそれで、「かう思うた」「ああ思うたりかう思うたり」などがそれである。「逢うて・逢うた・逢うたり」「買うて・買うた・買うたり」などとなる。これを、わざとむづかしく「思ふて」「逢ふた」「買ふたり賣つたり」などと書誤る人が多い。ゆゑに、「て・た・たりの上に、ふはつかぬ。」と覺えて置けばよい。隨つて、「思うに」「思う人」なども、すぐに誤であることが分るであらう。

形容詞の「う音便」といふのは、連用形の「く」が「う」に轉ずることである。「山高うして」「心を正しうして」「任重うして」「御來臨を辱うして」「ようこそ」「よろしうございます」などがそれである。これを、御丁寧に「山高ふして」「辱ふして」「よふこそ」「よろしふございます」などと書誤る人が多い。

第二は、動詞の活用を、かれこれ混同して、語尾の假名遣を誤ることである。たとへば、「絶える」「越える」「聞える」と書くべき場合を、「絶へる」「越へる」「聞へる」と書誤るが如き場合である。これは、ヤ行下一段活用を、ハ行下一段活用と思ひ誤つたがためである。かかる場合には、文語の活用を思ひ出し、「絶ゆ」「越ゆ」「聞ゆ」などと活用させてみると、それがヤ行の動詞だといふことが分り、隨つてハ行とこんがらがることはない。これは、極く一例であるが、他の場合も推して知るべしである。くはしくは、巻末の表を參照して頂きたい。

とにかく、我々は、價値ある內容を文法正しく書きあらはしたいものである。立派な內容でも、文

法的誤謬が眼につく、といふやうな文は、いはゞ、盛裝した美人の顏に墨がついてゐるやうなものである。また、分らない文章の九十パーセントまでは、たいてい文法的誤謬に基づくものと思つても、さしつかへなからう。

一〇 句讀點について

文章を書く上に、句讀點はかなり重大な役割をつとめるものである。テンの打ち方一つで、まるで反對の意味になつたりすることは、決して珍しくない。電報の文には、句讀點を施さないから、往々ひどい誤解を生ずることがある。東京に遊學してゐる一學生が、鄉里の父に宛てて、「カネオクレタノム」と打電したところ、父は「金を呉れた、飲む。」と解釋し、誰かが息子に金を呉れたのであると思ひ、「ノムナタメテオケ」（飲むな、ためて置け。）と返電したといふ笑話がある。これなどは、わざと曲解したのかも知れないが、左の文の如きは如何なる意味であるか。

今日本人に會つて來た。

「今、日本人に會つて來た。」のか、「今日、本人に會つて來た。」のか、ちよつと分らない。かういふ點が、談話と文章との著しく異なる點で、談話ならばかうした誤解は、めつたに生じない。たとひ

ちよつと意味の分らない時があつても、「えゝ？」と、ききかへすことも出來るが、文章ではそれが出來ないのである。昔の文章には、この句讀點の打ち方が隨分ルーズであつたため、意味の不明な文が往々ある。德川時代の天氣豫報の文に、「明日は雨降り候天氣には御座無く候」といふのがある。句讀點のないために、「明日は、雨の降るやうな天氣ではありません。」とも、また、「明日は、雨が降ります。天氣ではありません。」ともとれるのである。しかし、この點に關する限り、今日の文章は進んで來た。近頃は、新聞や雜誌などの文章でも、「これは、うまいものだ。」と思はせられる句讀點の打ち方をしてゐる文章によく出會ふ。アメリカ人に、正義人道的な文明的要素と、その正反對な殘虐的非人道的な野蠻的要素との兩極端があることを論じた文の書出しに、「アメリカは世界の大文明國だ、」といはれてゐる。なるほどアメリカ人は……。」この文のテンの打ち方などは、何でもないやうでゐて、實に千鈞の重みがある。これを、「アメリカは世界の大文明國だといはれてゐる。なるほどアメリカ人は……。」と書出したのでは、論旨の妙味が餘程減殺されるであらう。たつた、テン一つの打ち方である。今も、書齋に「朝日」の夕刊が投込まれたので、ちよつと筆を休めて、先づ「今日の問題」欄を見ると、實に、うまい打ち方をしてゐる。

ベルリンからモスコーへと、イギリスの協和巡禮に。して、とゝさんの名はときけば、ぬれ手で阿波の平和兵衞と申します。

若し、この文にテンが一つか二つ略されでもしたら、表現効果は、忽ち數割方減殺されてしまふであらう。こころみに、

太郎二郎三郎をして犬をうたしむ

といふ、全然句讀點の無い文について考へてみる。

太郎、二郎・三郎をして犬をうたしむ。
太郎・二郎、三郎をして犬をうたしむ。
太郎二郎、三郎をして犬をうたしむ。
太郎、二郎三郎をして犬をうたしむ。

少くとも、右の四通りに解釋が出來るであらう。世の中には、一人で、太郎二郎とか二郎三郎などといふ名前の人もないとは限らない。私の知つてゐる人にも、「五郎三郎」などといふ名前の人がある。なほ右の文は、

太郎・二郎・三郎をして犬をうたしむ。

であつて、三人をして犬をうたしめた人が、他に隱されてゐるのかも知れない。さうすると、少くと

も五通りの解釋が成りたつのである。それゆゑに、

　頼朝範頼義經をして平氏を討たしむ。

などと書くのは、實はよくないのである。これは、誰でも歴史上の事實として知つてゐるから、間違はないだけのことであつて、若し國史を知らない人が讀むと假定すれば、先づ少くとも五通りの解釋が生ずるであらう。

　苟も、文章を書かうとするほどの人は、句讀點の末に至るまで注意を拂ふことが必要である。但し、それは、どこまでも、誤解を生ぜしめないといふ點に目標を置くべきで、さう窮屈に考へなくともよからう。往年、文部省で制定した「句讀法」の總則にも、

　文勢・語勢其の外の便宜によりては、誤解を生ぜざる限りに於て、本法の規定に拘らず、符號を省き又は之を加へ施し又は彼是符號を換用することを得。

とある。現在、我が國で普通に用ひられてゐる句讀點は、左の五種である。

　。　シロマル

　、　テン

・　クロマル
「」　カガ
『』　フタヘカギ

そのほか、西洋の符號として、

？　疑問符
！　感動符
——　ダッシュ
……　テンテン
（）　括弧

なども、近頃かなり用ひられるやうになつて來た。しかし、？・！などは、あまり濫用したくないものである。而して、以上の如き諸符號の一々の使用法または注意等については、巻末の表を參照して頂きたい。

第二章　科學的文章

ここに、科學的文章といふのは、精神的現象にせよ、自然的現象にせよ、それらの中のある一定の問題を對象として、科學的に考察し、研究し、敍述する文章の謂である。いはゆる學術的の研究論文などは、すべてここに入る。學問とか研究とか科學とかは、すべて眞理の探究をめざすものであり、主として人間の理性の働によつて成しとげられるものである。隨つて、その敍述は、主として人間の理性に訴へるものであるがゆゑに、その重要點は、およそ左の二點に歸するであらう。

第一に、敍述の順序や組立が、人間の思考作用の自然性に適合するやうなものでなければならぬ。一口にいへば、論理的であり、冷靜であるべきである。

第二に、用語はあくまで正確妥當にして且平明であることを要する。隨つて、美辭麗句の如きは、力めて避けねばならぬことは勿論、少しでも意義の曖昧な語句は極力排斥しなければならぬ。

しかし、それだからとて、科學的敍述は、何等のうるほひもない無味乾燥な文章でよいといふのではない。著しい修辭的の美は、勿論避けねばならぬが、そこには、相當の趣もあり勢力もあり、そし

て氣持よく讀まれるのが、此の種の文の上乘なるものであらう。
以下、文例について、具體的に述べて行くこととする。

一 言語學

言語學は、言語或はことばといふものを取扱ふ一つの科學である。我々の經驗する色々な事物の中、言語といふ一局部の事實をとり、それに關する知識を完全に組立てようといふのが目的である。その研究の方法も他の科學と同樣、取扱ふべき事實を觀察し、分析し、總合し、分類し、記述し、說明する。

言語を研究するといふことは、新しく起つたことでない。今日歷史上知り得る限り古く遡つても人類は皆何かの言語を持つて居たが、日常知らず知らず使つて居る言語にふと氣がついて、これは妙なものであると注意し、これに或考を加へてみるといふのが言語研究の手始であつて、若しこんな程度をも研究と名づけられるならば、この意味の研究は世界の各國でずゐぶん古くからあり、今日でも素人の間に屢ゝ行はれることである。併し、いはゆる科學的方法をもつて言語の研究にかかり、その結果の一部が科學的にまとめられたのは漸く第十九世紀の始頃で、ヨーロッパの學者がその開山である。(神保格氏著「言語學概論」)

言語學といふやうな、餘り多くの人のやらない特殊な科學についても、この文のやうに平明に敍述

されてゐると、先づ普通教育を受けた人なら、誰でも一通り理解することが出來るであらう。平明にして淡々、水の流れるが如き趣のある文である。少しも學者ぶつたやうな氣取つたところがなく、それでゐて、思考はどこまでも精密であり論理的である。美辭や麗句や形容詞などは殆どつかつてゐないが、それでゐて文に相當の勢力と趣とがある。たとへば、「その研究の方法も他の科學と同樣、取扱ふべき事實を觀察し、分析し、總合し、分類し、記述し、說明する。」の如きは、何でもないやうでゐて、一つの勢力をもつてゐる。また、「日常知らず知らずに使つて居る言語にふと氣がついて、これは妙なものであると注意し、」とか、「ヨーロッパの學者がその開山である。」といふが如きは、いはゆる氣持よく讀ましめる趣を有してゐる。

文の平明といふことを、はつきりさせる一つの手段として、ここに一つ、平明ならざる文例をあげてみよう。

二　科學

科學は、すべての認識の根柢に存する理由の原理に從つて、人間本性の諸成素に基づけるしかも個體を越えて働くかかる目的聯關に於て、個體を構成せる個々の心的若しくは精神物理的諸要素間に生ずる依屬性並

びにそれらの要素の諸性質間に見出される依屬性を確定することを企てる。科學はこの目的聯關の中にあつて如何に一要素が他要素を制約するか一要素の中の一つの性質の現出に如何やうに他の性質のそれが依屬してゐるかを規定する。これらの要素は意識されるが故に、或限度内に於ては言葉でもつて言ひ表はされ得る。

これは、歐文の直譯であるのかも知れない。隨つて、いはゆる歐文脈の文章といふものであるのかも知れない。しかし、この文章の意味を明瞭に理會し得る讀者が、果して幾人あるであらうか。科學が何を企て何を規定するといふのか。果してこの文に於ける思考作用は、人間の思考作用の自然性に適合してゐるものであらうか。よし、その內容が論理的であるにもせよ、精密であるにもせよ、我等は遺憾ながら、かかる敍述または表現には反對せざるを得ない。第一に、餘りにセンテンスが長過ぎる。「科學は……企てる。」なるセンテンスの如何に長つたらしいかを見よ。そして、「性質のそれが」とか「言ひ表はされ得る」とか「何的何々」とかいふやうな、一種の氣取つた惡趣味の生硬語が如何に多いかを見よ。

三　科學概論

是より余が說かんとする所の科學概論といふは、philosophy of science, Philosophie der Wissenschaft

の譯語である。科學概論といへば個々の特殊科學に限らず、一般に諸科學に共通なる眞理を説くことを意味するものと思はれるが、斯かる諸科學一般に通ずる眞理なるものは個々の科學ならぬ哲學の立場からのみ考究することが出來る。余は科學の概論なるものが哲學の一部としてのみ可能なりと信ずるに由り、「科學の哲學」の意味に科學概論といふ語を用ひた。「科學の哲學」、精しくは科學の哲學的考察といふのが余の謂ふ所の科學概論である。(田邊元氏著「科學概論」)

科學概論なる語の意義を述べたものであるが、すべて科學的敍述に於ては、先づ取扱はうとする問題の範圍または主題となるべき重要なる語句の意義を明らかに決定してかからねばならぬ。本文の如きは、その意味に於て、極めて明確なる敍述といふべきである。

四　利子の構成

私は今、利子の構成といふ主題の下に、二つの事柄を取扱ひたいと思ふ。其の一は利子の構成せられる條件である。即ち如何なる條件の存立する所に利子が可能なるかを先づ明らかにしたいと思ふ。其の二は、此の條件の下に於て、利子が如何にして成立するかの道行である。いはば利子の構成の機制である。私は利子の現象に關して、消費貸借の利子、即ち消費的貸附利子を從屬的のものと見る。この點は少くもリカルド以

來數多の有力なる學者の見解に從ふ。今日の學界の有様はこれに就いて詳細の論證を必要としないと思ふ。かゝる立場に立つ時、利子問題の考察に重要なる方面が二つある。其の一は利潤、或は更に廣義の用語を用ふる時、超費餘剩が如何にして成立し得るかといふ方面、即ち利子の泉源の問題であり、其の二は此の泉源たる超費餘剩が如何にして利子に變形し來るかといふ方面、即ち利子の構成又は原因の問題である（私は利子の構成の問題と原因の問題とを同意義のものと見る。）而して、超費餘剩の如何にして成立するかの問題は既に之を取扱ひたるが故に、今は轉じて、此の超費餘剩が如何にして利子に變形するかの問題を考察したいと思ふ。而して、これを二つの部分的問題に分つ。其の一は此の變形を可能ならしめる條件が何であるかといふ事があり、其の二はかゝる條件の下にかの變形が如何なる道行によつて行はれるかといふ事である。今取扱はんとする問題は卽ち此の二者に外ならぬ。（高田保馬氏著「經濟學研究」）

考察の範圍、取扱はうとする問題の意義と範圍とを明確に指示した論文である。その態度の嚴肅にして用意の周到なる、まさに化學の實驗に於ける場合にも比すべきであらう。田邊元氏の「科學概論」なる文例は、主題の意義を明らかにしたものであつたが、この文例は、題材の範圍を明示したものである。科學的敍述に於ては、これらの手續きを經て後、漸く本論に入るべきである。

五　文學的內容の形式

凡そ文學的內容の形式は（F＋f）なることを要す、Fは焦點的印象又は觀念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。されば、上述の公式は印象又は觀念の二方面即ち認識的要素（F）と情緒的要素（f）との結合を示したるものといひ得べし。吾人が日常經驗する印象及び觀念は、これを大別して三種となすべし。

（一）Fありてfなき場合、即ち知的要素を存し情的要素を缺くもの、例へば吾人が有する三角形の觀念の如く、それに伴なふ情緒のさらにあることなきもの。

（二）Fに伴なうてfの生ずる場合、例へば花・星等の觀念に於けるが如きもの。

（三）fのみ存在して、それに相應すべきFを認めざる場合、所謂 "fear of everything and fear of nothing" の如きもの。即ち何等の理由なくして感ずる恐怖など、みなこれに屬すべきものなり。Ribot は其の著「情緒の心理」に此の種の經驗を四大別して更に附記して曰く、「かくの如く人體諸機能の合成的結果即ち普通感覺の變化に基づき毫も知的活動の支配を受けざる一種純正、しかも自治的方面を感情に於て見出だすことを得。」

以上三種のうち、文學的內容たり得べきは（二）にして、即ち（F＋f）の形式を具ふるものとす。（夏目漱

石著「文學論」)

「吾輩は猫である」「坊つちやん」などの作者にして、一面には、かくの如き純科學的の敍述を有するのである。否、かくの如き透徹した頭腦の持主にして、はじめて偉大なる作家となり得るのであらう。ややもすれば、作家の試みる科學的敍述は、隨筆的になりたがる傾向のあるものであるが、右の漱石の文の如きは、あくまでも純科學的に嚴肅を極めてゐる。科學的敍述は、まさにかくあるべきものである。

六　藝術の定義

藝術とは、人の心の奥深く在るものを引出して、それに、目に見えたり耳に聞えたりするやうな形を與へる術だ。まづこんな風に、私は「定義」しよう。で、「人の心の奥にあるもの」とは何かといへば、靈魂だ、誕生の瞬間から既に存在するところの、さうしてその同じ瞬間から、既に多くの「他」をうけ、攝取して、ぢり〱と肥え太つて行くところの「己」だ。もう一つ平易にいひ換へれば、まごころだ。

凡そ人の仕事として、科學的學究だらうと、政治的だらうと、實業・工業・農業などの方面への活動だらうと、一つとしてまごころなしでいける、といふものはないのだ。どれもこれも大抵似たりよつたりの人間

の間に、甲と乙とを一番はつきり區別立てて示すものは、いはずとも「心の奥深くあるもの」で、即ち「靈魂」で、即ち「己」で、即ち「まごころ」なのだ。ことさらに功利的なひあらはしを以てすれば、誰でもが、一番みづから恃んでいいもの、優越（アドヷンテエヂ）と感じていいもの、お得意の手として十分利用していいものは、この「己」よりほかにはないのだ。まごころよりほかにはないのだ。手先の器用で一身を立てようとする者、圖々しい押しで前途を拓かうとする者、腕力でのさばり出ようとする者、小才を弄して出世のぬけ道を求める者、金でひとの面を張らうとする者、貧乏を賣りものにする者、――すべてさういふ人たちは、自分から一番お得意の手を封じてしまつて、ことさらはたにも似たりよつたりの力量をもつた人の澤山ゐる、何等獨特な優越（アドヷンテエヂ）のない方面、――つまり競爭者の多い周圍へと態々はいつて行つて、汗水たらして己を顯出（ディスチングイッシュ）しようとあせつてゐる大馬鹿者だ。現代好みに、功利的にいつてもさういふことになる。まして、「まごころ」といふものは、「一番お得意の手」など呼ぶさへも恐れて、さういふ氣持で「利用」しようとする瞬間には、もうそこには影も形も止めず消失せてしまふところのものであることは、知れ切つた話だが、ただ私は、これほどに偉大な力を、今の世では弊履の如くに捨てて顧みないのを不思議に思つて、少し皮肉にいつてみたまでだ。人生のどの方面へ持つて行つても一番大切なもの、それがどうして藝術の眞髓にならないでよいものか。――で、前述の「定義」に、「人の心の奥深く在るもの」と、それを第一に持出して來たのだ。

（里見弴氏著「文藝管見」）

この文は、藝術といふものについて、一つの定義を下さうとしてゐるのであつて、いはば科學的思

考の範疇に屬すべきものと思はれるが、これまでにあげた文例などとは、ひどく行き方を異にしてゐる。もとより、この文の筆者は、わざと嚴肅な科學的なスタイルを避けて、隨筆風なまたは中間讀物風なスタイルを選んだものと思はれるから、科學的文章の文例としてあげるのは妥當でなく、むしろ隨筆的文章としてあぐべきものであらう。ただ、前に「ややもすれば、作家の試みる科學的敍述は、隨筆的になりたがる傾向のあるものである。」といつた、その參考にもと揭げたに過ぎぬ。隨つて、かうしたスタイルが科學的敍述に於て許される、といふ風に考へてはならないであらう。

七　藝術美

簡單に藝術と言つても、其の中にはさま〴〵な種類が含まれてゐる。詩歌・文章・音樂・繪畫・建築・彫刻・園藝術等其の種類も複雜であり範圍もまた廣大である。藝術の中に含まれてゐる種類は何々であるか。又各種の藝術は概括して整然たる體系の中に收めらるべきであるか。それとも藝術に體系などは無いのであらうか。此等の問題さへも今日尙不明であつて必ずしも一定してゐない。詩歌・音樂・繪畫・彫刻といふやうな羅列さへも、たゞコンベンショナルなならはしであつて、そこに何等の分類的原理も無い。畢竟、藝術の範圍や種類やは、根本的には其の本質によつて定めらるべき問題であるから、本質が明らかにされない限

り、其の種類もまたいつまでも不明なのである。元來、藝術といふ言葉が我々に取つてはまだ新しい造語で內容の不定であるに從つて、其の種類や範圍までが不定であるのは更にあやしむに足りない。

ここでは暫く藝術の範圍をコンベンショナルに考へて、さて藝術の本質問題に進まうとすれば、そはおのづから藝術美の問題たらざるを得ない。藝術が若し獨自の本領を備へてゐるとすれば、そは美そのものであつて、他の何ものかであつてはならない。藝術は美のための藝術で、美のためならざる藝術は無い。美を外にしては藝術は無意味であつて、藝術といへば直に藝術美の意味に外ならない。美あつての藝術で、藝術あつての美ではない。美はどこまでの藝術の生命であり、藝術を藝術たらしめる精神である。故に我々は先づ藝術美の本質如何と問はなければならぬ。（金子馬治氏著「藝術の本質」）

ひとしく、藝術の問題を取扱つた文章であるが、この文の如きは、所謂科學的敍述の正道を行くものので、讀者は、この文によつて、とにかく、藝術に關し、これだけの立言については、明瞭に理解し得るのである。

八　文學と時代

文學とその時代との關係は、實際最も密接な不可離の關係にある。前にもその名を擧げた「比較文學」の

著者ボスネット氏は、「文學はその當時代の生活及び思想に準據す。」といつてゐるが、實際その通りで、その時代といふものを離れては、その文學は決して現れることがないのである。デイベエーといふ人は、その著「近代の英國詩人」の中で、「シエクスピヤが、もし十四世紀に生まれたのなら、彼の才能はあれほどまでに發展したであらうか、疑はしい。」といつてゐるが、事實、シエクスピヤは、十九世紀のエルザベス期といふすべての方面に創造力の旺盛な所謂イギリス文藝復興期に生まれたればこそ、あれだけの文學的天禀を發揮することが出來たのである。とにかく、文學は、その時代を離れては全然成立しないのである。このことを學理的に說明した人に美學者テーヌがある。この人は又科學的批評といふ一種の批評法を創出した人で、近代批評の上では見逃すべからざる人であるから、その學說の委しいことは後の批評論を述べる折にゆづることゝするが、彼は文學の構成されるには三つの要素があると考へた。一つは人種、いま一つは環境、更に他の一つは時代である。そしてこの三つの要素の一つを缺いても文學は構成されないといふことを、さまぐ\な例を擧げて證明したのちに、この三つの要素が相扶け合つた場合には、そこに立派な卓越した文學が生まれ、この三要素が互に相殺し合つた場合には、貧弱な文學が生まれるといふことを論じてゐる。即ち前にも一言したシエクスピヤのやうな創造的天分の豐な人は、エリザベス期といふ、やはり時代そのものの創造性に富んだ時に生まれたために、一層その天分を發揮し得たわけである。また、例へばバイロンやシエリーやキーツなどの詩人たちは、十八世紀の末から十九世紀初頭にかけて澎湃として起つたロマンチシズムの時代を背景として始めて、その作品の意義を十分に理解し鑑賞することが出來るのである。（本間久雄氏著「文學概論」）

文學と時代との關係について、實に平易に明瞭に敍述してゐる。この論文で、特に注意したいのは、他の意見の引用の仕方である。ボスネットやディベエーやテーヌといふやうな人々の意見を、適切な場所に引用しつつ、自分の說明を證據立たせたり引立たせたりしてゐることである。しかも、外國人の說を引用するに當つても、極く平易な言葉になほし、いはば自分の腹の中から出た言葉のやうに、こなしてゐる點である。なほ、極く小さなことのやうであるが、本間氏は、「この」「その」といふやうな代名詞を、いつも假名で書き、その他の場合でも、つとめて平易な漢字をつかひ、假名を多く使用してゐることである。かうした心構も、平明な文を書く上には、極めて必要なことである。

九　二つの力

鐵石相打つところに火花が散るごとく、奔流岩に壞かるゝところに飛沫が紅霓をなすと同じく、二つの力の衝突するところに、美しく派手やかなる人生の萬華鏡、生活の種々相が展開せられる。"No struggle, no drama." とは、ブルュヌテイエエルが戲曲を解釋していつた言葉であるが、なにもそれは劇(ドラマ)とのみは限らない。方向を異にした二つの力が相觸れ相打つ葛藤(ストラッグル)が無ければ、我等の生活、我等の存在は根本に於て意義を失ふのである。生の苦悶あるが故に、また戰の苦痛あるが故に、人生には生き甲斐があるのだ。かの權威

に服從し因襲に束縛せられて羊のごとく從順なる醉生夢死の徒や、利害の打算に眼くらみ物慾に頤使せられて自己が「人」としての全的存立を忘れ果てた俗漢などが未だ嘗て感得し味到し得ざる心境——人生の深き興趣は、要するに强大なる二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱の所產に外ならぬ。わたくしは、文藝の基礎をこの點に置いて解釋してみたいと思ふ。さらば二つの力の衝突とは——

電光の如く奔流のごとく、驀地に、殆ど盲目的に突進してやまざる生命の力を人間生活の根本なりと見ることは近代の思想家の多くが一致するところである。かの變化流動を現實そのものなりと觀じて創造的進化を說いたベルグソンの哲學は勿論、またショペンハウエルの意志說にも、ニイチエの本能論超人說にも、バアナアド・ショオの戯曲「人と超人」に現された「生の力」にもエドワアド・カアペンタアが人間生命の永遠不滅の創造性を認めた宇宙的自我の說にも、或はまた近くはバアトランド・ラッセルが改造の「根本義」に唱へた衝動の說にも、ひとしく皆かかる「生命の力」の意味が窺はれるではないか。（廚川白村著「苦悶の象徵」）

これは、文藝的創作について考察し記述しようとしたもので、いはば科學的考察とも稱さるべきものであるが、その表現形式は全然科學的ではない。然らば、科學的敍述でなくとも、他のスタイルとして、かかる文章の價値は如何、と考へて來ると、たとひ如何なる種類の文といへども、かかる文體は、もはや今日の文體ではない。餘りに調子をととのへようとして、殆ど無意味な文字を多く用ひ過ぎたために、讀者をして內容に注意を向けしめることが出來なくなつた文である。あたかも、全國靑

年雄辯大會—を聯想せしめるやうな文である。學術的な文には勿論、他の場合に於ても、決してかかるスタイルを眞似てはならぬ。

一〇　明治以後の文藝

明治以後の文藝の發達は、極東の海上に國を鎖した狹隘な島國的根性をすて、世界的思潮のうちに生きんとする努力によつてなされた。明治以後の文學の展開は、德川時代よりも、寧ろ奈良朝から鎌倉時代に至る迄のそれと類似してゐる。文學の展開には一定の秩序があつて、その順序は各國の文學史を通じて變るものではないが、社會の狀態や推移の遲速によつて特色づけられる。明治の文學は敍事文學に屬する政論及び政治小說を以て始まり、二十年頃から主情主義の文學が起り、感情に深まることによつて人間性の觀念を呼びさまし、新しい詩歌がここに創始せられた。そして主情主義のロマンスから、人生を反省する自然主義の小說となり、精神的展開を主題とする現今の文學となつた。最近半世紀間の文學は、浮薄な摸倣や、新奇を競ふ流行や、島國的に狹隘な見解より生ずる流派や、急激に變遷する時代に對する反動等のため錯雜し不統一を極めてゐるやうであるが、靜かにその推移の跡を眺めると、全體を統率してゐる、根柢にひそむ力があることを感ずる。この統率力は人間性の觀念である。かの國粹主義も耽美主義も本能主義も宗教的文學も、こ

の人間性の觀念に基礎づけられ、その一面の表現である時、現代の文藝として力を有する。今日の文藝の發達は、人間性への深まり、人間性のよりひろき展望であると言ふことができ、この傾向に逆行するものは非現代的と考へられてゐる。私はこの點から國民的文學が世界的文學に近づきつつあると信ずる。(土居光知氏著「文學序説」)

この科學的敍述に於て、注意すべき點は、明治以後今日に至るまでの、無數の作品とめまぐるしいイズムの渦巻の中に展開した我が國文學の相について、かくまで短くしかも平明に敍し去つた手法についてである。明治文學史を一通り述べるだけでも、かなり大部の書物となるであらう。それを僅々五六百字に壓縮し、しかもその主流を印象强く浮かび出させた手法は我等の學ぶべき點である。

二 萬葉集の歌と古今集の歌

萬葉集と古今集との歌風の相違については、既に十分に說かれてゐることと思ふ。ここにはその相違を通じて現れた心の相違を問題にする。それを追及して行けば、何故に萬葉の時代が純粹に抒情詩の時代であり、何故に古今の時代が物語文學への過渡の時代に過ぎないかといふ問題も解き得られるであらう。

まづ初に歌に現された感情の相違について觀察する。

範圍を狹く「春」に限つて考へてみると、相違は極めて明白である。古今の卷頭に置かれたあの有名な、

年の內に春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

の歌は、集中の最も愚劣な歌の一つであるが、しかし古今集の歌の一つの特性を擴大して見せてゐるといへる。それは、ここに歌はれてゐる「春」が、直觀的な自然の姿ではなくして暦の上の春であり、歌の動機が暦の知識の上の遊戲に過ぎぬといふ點に看取される。もとより抒情詩に歌はれる春は必ずしも直觀的な自然の姿でなくともよい。暦の上の春でもそれが詠歎さるべき感情を伴なつてゐさへすればよい。例へば少年の心が、一夜明けて新しい年になるといふあの急激な變化に對して抱く強い驚異の念、或は暦の上の春が單なる人爲的の區分ではなくして何らか實體を持つたもののやうに感ぜられ、恰も自然が暦の魔力に支配されてゐるかのやうなあの不思議な季節循環の感じ、それらは確に強い詠歎に價する。總じて暦なるものが、季節の循環と天體の運行との不思議な關係から生まれたものである以上、暦の知識の內に宇宙の深い理法への測るべからざる驚異の感情が隱されてゐることは否定し難い。しかし右の歌はこの驚異の情と何の關するところもない。季節循環の不思議さに對してはもはや何らの感情をも抱くことの出來なくなつた心が、ただ立春の日と新年とのくひ違を捕へて洒落をいつたに過ぎぬ。それは詠歎ではない。「人の心を種として」言の葉になつたものではない。隨つて歌ではない。

これは特に甚だしい例である。しかし古今集の春の歌にはすべて多少ともにこの傾向が見られると思ふ。ここに萬葉集の春の歌との第一の著しい相違がある。萬葉集の歌は常に直觀的な自然の姿を詠歎し、さうしてその詠歎に終始するが、しかし古今集の歌はその詠歎を何らか知識的な遊戲の框に嵌込まなければ承知し

ない。（和辻哲郎氏述「思想・第十一號」）

先づ考察の主題を明確に指示し、鋭い觀察の下に、きびきびした筆致で論を進めて行くところ、まさに科學的敍述に於ける藝術的境地ともいふべきであらう。かうした名篇については批評や說明は無益である。科學的敍述のテキストとして、熟讀玩味することにより、自らその手法を會得すべきである。

一二　短歌の形式

私は、我が古文學を讀んで居る中に、一見何の不思議もないやうで、しかも其の根本義の容易に明らめ難い問題に逢着したことが數々ある。短歌の問題は其の中の最もおもなる一つであつた。問題の要點は、三十一文字の短歌が、どうしてあのやうに廣く行はれたか、長く續いたか、多く詠まれたか、深く尊ばれたかといふにある。

我が國の文學は、その種類に於て可なり豐富であるが、三十一文字の短歌ほど、廣く行はれたもの、長く續いたもの、多く作られたもの、特別に尊重されたものはない。軍記・謠曲・狂言・淨瑠璃等、堂々たる長篇の文學が、概ね一時の榮えを見たばかり、一二の階級に弄ばれたばかり、比較的わづかな一定の數量を有

するばかりであるのに、あのちッぽけな短歌の何處に人を惹く力があつて、あの無限の廣布・永續と、無數の分量と、驚くべき尊重とを贏ち得たのであらうか。また同じ歌謠の中でも、長歌・旋頭歌・片歌・混本歌・神樂歌・催馬樂・今樣・小歌、その他の諸體が、いづれも一時の盛運を見たばかりで、おほむね廢れ忘れられて居るのに、三十一文字の短歌のみが、どうして連綿不斷の存在をつづけて、廣く行はれ、多く詠まれ、のみならず特別に高い地位を授けられたのであらうか。また此の三十一文字のみが、何故に世々の帝王や、公卿や、僧侶や、其の他の修養ある歌人達に詠まれたばかりでなく、方角違の人達や、無學文盲の人々にまでも、廣く愛で弄ばれたのであらうか。

おもふに其の主要なる原因は、短歌の內容にあらずして、形式——卽ち調子、しらべ——にあるのであらう。それは短歌と同じ內容を歌つた他の國歌が悉く廢つて居るのを見ても分ることであり、また短歌のみが內容は變つても依然として榮えて居るのを見ても分ることである。然らば三十一文字の短歌には如何なる形式の美、調子の妙趣が含まれて居るのであるか、又其の形式の美、調子の妙味が如何にして出來たのであるか。それを明らかにする傍ら、國歌胎生の因緣を明らかにして、いろいろな形式の國歌の出來た消息及びそれらの推移・變遷・盛衰・興亡した因緣を說明してみたいといふのが本論の目的である。（五十嵐力氏著「國歌の胎生及び發達」）

これは、一篇の大論文の目的を明示したものである。さすがに、本邦唯一の修辭學者の筆だけあつて、どつしりとした重みを見せてゐる文である。文中、多くあらはれて來る反復の語、たとへば、

「どうしてあのやうに廣く行はれたか、長く續いたか、多く詠まれた、深く尊ばれたか」「一時の榮えを見たばかり、一二の階級に弄ばれたばかり、比較的わづかな一定の數量を有するばかり」の類は、同博士の文章の一特徴をなすものではあるが、しかもそれは決して單なる整調の美にあらずして、どこまでも內容に卽した表現であり、どうしてもこれだけ並べなくてはならない場所に、ぴたりと据ゑられてゐるのである。一字一句、あくまで修辭學の原則から生み出されたやうな文である。

一三　記紀の研究

古事記と日本書紀とは、種々の方向に向かつて種々の研究の材料を我々に供給する。我が國の上代の政治史は勿論、社會制度や、風俗習慣や、宗教及び道德に關する思想や、一口にいふと、內外兩面に於ける我が上代の民族生活と其の發達の有樣とを考へるには、是非とも此の二書を綿密にしらべなければならぬ。しかし、さういふ研究に入らない前に、先づ吟味して置くべきことは、記紀の記載（書紀に於ては、主として古事記と相照應する時代の部分）は一體どういふ性質のものか、それは歷史であるかどうか、もし歷史だとすれば、それはどこまで事實として信用すべきものか、もしまた歷史で無いとすれば、それは何であるか、或はまたそれに現れてゐる風俗や思想は何の時代のこととして見るべきものか、といふ問題である。此の點を

明らかにしてかからなければ、記紀の記載を基礎にしての考察は甚だ空疏なものになつてしまふ。

何故にこんな問題が起るかといふに、記紀、特に其の神代の部は、其の記載が普通の意味でいふ歴史としては取扱ひ難いもの、實在の人間行爲または事蹟を記錄したものとしては信用し難いものだからである。我我の日常經驗から見れば、人間の行爲や事蹟として不合理な物語が多いからである。なほ神代ならぬ上代の部分にも、同じ性質の記事や物語が含まれてゐるのみならず、一見したところでは別に不思議とも感じられないことながら、細かく考へると甚だ不合理な、事實らしからぬ記載が少くない。これは一々例證などを擧げるまでも無く、周知のことである。ところが、さういふものが何時の間にか歴史的事實と認むべき記事に移つてゆき、或はまた事實らしいことと絡みあつてゐる。だから記紀の記載については、どこまでが事實で、どこまでが事實で無いか、其の限界を明らかにし、また事實と認むべき部分と然らざる部分とを、ふるひわけて見なければならぬ。一口にいへば、記紀の記載は批判を要する。さういふ批判を嚴密に加へた上でなければ、記紀といふものは歴史的研究の材料とすることが出來ない。ところが我が學界では、まだそれが十分に行はれてゐないやうである。（津田左右吉氏著「古事記及び日本書紀の研究」）

緻密な考へ方と、正確な論理と、筆の運び方の如何にも落着いた點、科學的といふ語を冠するに最もふさはしい文章であらう。それでゐて、用語の如きは至極平易で、ことに「絡みあつてゐる」「ふるひわける」といふやうな通俗に用ひられる言葉が、ぴたりと學術の座に据ゑられてゐながら、何等の不自然さをも感じさせない點などは、最も後人の學ぶべき點であらう。

一四　神話發生の心理

神話は要するに超自然的靈格卽ち神を中心とする未開民族の物語である。隨つて、未開民族の神はいかにして生まれたかといふことを明らかにすれば、神話發生の心理は自ら解釋がつくわけである。

思ふに原始人は殆ど「個」といふ意識を有せず、常に集團的心理に支配せられてゐる。彼等の間にあつては、個人の存在は無價値である。原始社會の心理活動に於て、その重要なる部分を占むるものは、集團的情緒と集團的表象とである。而して、この情緒・表象の一般的特徵は神秘的といふことである。

原始人はかくの如き神秘的性質を有する集團的情緒又は表象を通して外界を見るが故に、およそ宇宙に存するすべての事物は、悉く知覺を絕した神秘的な或靈能作用を內存させてゐると考へる。かくてこの時代には、宇宙はただ一個の神秘の世界から成立してゐるのであつて、經驗世界と超經驗世界との二元的對立は未だ發生してゐないのである。換言すれば人も動物も又天然物もすべて等質同價の靈能を持つてゐると觀ぜられる。かうした觀想からは特に神といふものが生まれる筈がなく、隨つて神話も未だ發生し得ないのである。

然るに文化がやや進展して、民族の知力が深化し、經驗が增大するにつれて、自己と周圍の事物との間に存する差別相に眼ざめ、兩者の間に存してゐた神秘的共享の感情が薄弱となり、その結果は、宇宙に遍滿してゐると考へられた靈能が次第に個性化して來る。かくて自然法則を以て律し得られる經驗世界と、該法則

を超越した超經驗世界との對立が發生し、靈能は前者に無くして、ただ後者にのみ存すると觀ぜられるやうになる。

それと同時に一方に於ては、未開民族は死・夢・影等の諸現象から推論して、人類は靈魂と名づくべき another self を有するといふ思想・信仰を得、而してこの思想・信仰を超經驗世界に移入して、該世界に存する靈能の所有者を偉大なる靈魂の顯現であると考へるやうになる。これが卽ち神である。一旦神が發生すると、未開民族は自己の心に豐滿してゐる想像性・探究性・受感性を盛に活躍させて、頻りに神を中心としての物語を生み出す。これが卽ち神話である。（松村武雄氏著「童話及び兒童の研究」）

本文は、その取扱ふ内容が極めてむづかしい問題であり、隨つて、特殊の術語等を必要とするので、一般の讀者にとつては、多少難解の點があるかも知れないが、しかし、この極めてむづかしい問題を、論理整然と、一語の無駄もなく、明確に敍述された點について學ぶべきである。

一五　發展と助成

教育は被教育者の發展を助成する作用である。

私は、一應、教育をかく定義し、發展と助成の意義を吟味することから、敍述を進める。

發展を最高義に解する時は、一切の生成變化を其の中に含める。此の場合、「發展」は固定・不變に對する概念であり、自然界の生成・變化――例へば、四季の循環の如きも、一つの發展である。第二に、發展は稍狹義に一切の生成變化中、一定の目的に向かへるもの、卽ち自然的・機械的變化に對立する合目的な變化として考へられ、例へば生物の生長・發展といふ場合の「發展」の如きはそれに當る。第三、更に狹く、目的に向かへる時間的生起に於て、其の後段が前段に比し、より高き價値を實現する場合にのみ、「發展」なる語を適用することがある。此の場合、發展は全然價値的な概念である。最後に、又上の價値の時間的發展を一種の形而上學的本體の自己實現として觀ずることがある。ヘーゲルは精神（ガイスト）の自己實現として歷史を見た。發展なる語は、斯く極めて多義で、粗雜に概觀しただけでも、上にあげた（一）生成變化、（二）合目的發展、（三）價値的發展、（四）形而上學的目的發展の四つの意義が區分せられる。此の中、第一の最廣義の解釋は、教育と殆ど無關係である。よし又、關係があるにしても、自然界の事象は人力を俟たず、人力に關せず、必然の法則に從つて生成變化するから、之を助成することは、不可能であり、且無意義である。隨つて、從來教育に於て考へられ來つた發展は、主として合目的發展と價値的發展で、最後の形而上學的發展は、教育的考察の深まつた極、或は斯く觀ぜねばならぬ場合が生ずるに止まる。で、私は先づ、合目的な生物的發展と教育的發展とを合一する見地、も少し砕いて言へば、教育を順應と解し、其の結果、教育と馴養、又は培養とを合一する見地を檢討し、反面から自分の立場を明らかにしたい。（篠原助市氏著「理論的教育學」）

極めて論理的であり且明確なる文章である。一分の隙もない文章とは、かくの如き文章をいふのであらう。まづ、初の一行に於て、極めて簡明に教育を定義し、それより順次、その定義に用ひた言葉の意義を整然たる論理に於て説明し、且論述の態度と立場とを明らかに指示してゐる。ことに、かかる嚴肅なる態度に於て、「私は、一應、教育をかく定義し」「よし又、關係があるにしても」「も少し碎いて言へば」といふやうな語を挿入することにより、讀者の緊張感に一脈の餘裕を與へてゐる手法の如きは、いはゆる無技巧の技巧に屬し、最も後人の學ぶべき點であらう。

一六　理解と解釋

理解は人間の生活の極めて廣汎な範圍に亙つてゐる。それは幼兒の片言の理解からハムレットや理性批判の理解にまで及んでゐる。我々は身振、音樂の音、彫刻された大理石、書かれた文字、その他、行爲や經濟的秩序や社會制度などに於て、すべて人間精神を理解するのである。これらの場合つねに理解の過程は共通なる條件によつて定められてをり、共通なる手段を用ひてをり、隨つて共通なる特徴を具へてゐると考へられる。理解は、それが特に學問的なる自覺にまで持ち來されて、方法的なる統制のもとに於て行はれるとき、「解釋」(Auslegung oder Interpretation) である。理解が解釋にまで高まり得るためには、理解の對象とな

るものは既に一定の性質が要求される。このとき對象はいつも固定されたものであり、そしてかくして我々が絶えずそれに還つてゆき得るものでなければならぬ。もしさうでなくして、それがつねに動搖し變化するか、或は須臾にして消去つてゆくかであるならば、我々は我々の理解を統制し若しくはそれを吟味して、その客觀性を確立するに到るべき手がかりと支持點とをもち得ないからである。ところで解釋なる語はもともと特に言語と關係してをり、解釋の方法學たる「解釋學」（Hermeneutik）は歴史に於て從來主として言語學と關係して發達させられ、發展して來た。いま我々が解釋及び解釋學なる語を言語と文字の世界から、政治・經濟・社會の諸組織・諸制度の領域へまで擴張して使用するには、理由がなければならない。その最も一般的な理由は斯うである。先づ書かれ現された文字と言語に於て人間の生活の一切は最もよく固定され、保存されることが出來る。そればかりではない、人間の內面はひとり言語に於てのみ、それの完全な、包括的な、客觀的な表現を見出す。ここに最も廣き意味に於ける文學が精神生活及び歴史の理解に對して有する甚だ重要なる意味が橫たはつてゐる。文字をもつて傳へられたものと關係して初めて、歴史上の記念物、事件の動機などの解釋は滿足な結果に導かれることが出來るのである。古代の器具・繪畫・彫刻などを研究するところの、フリードリッヒ・アウグスト・ウオルによつて考古學的解釋學の名を與へられた科學も、これを遂行するに力めたブレッラーが既に注意してゐるやうに、言語・文學からの解釋を前提し、かつこれに指示を求めてゐるのである。そこで文書に於て保存された人間的存在の遺物の解釋があらゆる解釋の技術と方法の中心を占めて來た。然るに解釋學は言語學にあつても歴史のうちに漸次に發展したのであつて、この發展が一定の階段に到達したとき、これが他の種類の存在にまで自己の領域を擴げて、一般に「現實的存在の

解釋」（Interpretation der Wirklichkeit）の方法論となる可能性と共に根據を與へられた。（三木淸氏著「史的觀念論の諸問題」）

理解から解釋へ解釋から解釋學への推移を、明確に敍述した文章である。とかく、哲學的圏內にある問題は、內容が內容だけに、敍述がむづかしくなるのは當然であるが、それにしても、我々は、その深遠なる哲學的思考を出來る限り平明に敍述することに力を注がねばならぬ。本文の如きはさうでないが、ややもすると、哲學的思考の敍述に於ては、表現に無關心であるかと疑はれるほど、その言ひまはし方や用語に生硬な感を抱かしめる場合が多い。

一七　求むるものと求めらるるもの

求むるものと求めらるるものとの間に調和的關係が成立つ時、我々は樂天主義者である。勿論比較的容易に求むるものが與へられ、祈願する所が叶へらるることも强ち少しとせぬ。けれども能求と所求との調和的關係は兎角脅かされがちで、我々は其の都度厭世主義者にならねばならぬ。求むる心のあるのに與へられざること多く、與へられざるに猶求むる心の萌しを抑へることが出來ず、或は又求めつつしかも眞にその求めをる所の何なるかを知らぬといつたやうな、目的結果不相合の經驗を重ねつつあるのが、恐らく我々の日常

生活の常態であらう。要するに人生の悲喜劇の一切は能求と所求との關係から生まれ出でたものに外ならぬ。然らば兩者の關係を如何に見るべきであらうか。兩者不一致の場合は多少複雜であるから、ここには問題を兩者の一致する場合に局限して考へることにする。そしてこの簡單なる場合の解決方法が、やがては兩者不一致の場合の解決方法の示唆ともなるであらう。

今ここに一人の幾何學者が、一定數の定義・公理等から出發して見事一個の定理を證明し得たとする。考へられた定義・公理・定理と、これを考へる意識との間の關係はむづかしい論爭の種にもなるから、假りに其の幾何學者の心がその定義なり公理なり定理なりになりきつてゐるものと想定しよう。かくてもなほ其の證明過程の分析は心理學上並びに論理學上の諸問題を包藏してゐるのであるが、今それらの定義・公理等が或一定の結合を遂げてその定理に發展したと至極簡單に考へることにする。然る時は其の論證過程の出發點たる定義・公理等は正に求むるものであり、その定理は求められたものである。そして一般に前者を假定・條件・論據・前提などと呼び、後者を歸結・結論などと呼ぶのである。かかる場合求むるものとしての前提と求めらるるものとしての結論との關係は如何なるものであらうか。數學者や論理學者などの普通の見解によれば、結論は前提に依存するが、之に反し、前提は結論に依存せずして全く獨立である。若し然らずして結論が前提に依存すると共に前提亦結論に依存するやうなことであれば、これは所謂循環論證であつて、論證として全く無價値なものである。幾何學者や形式論理學者の立場から、かかる循環論證のゆるすべからざるは無論のことであるけれども、一個の論證を生きた意識の具體的發展として見るならば、前提は單なる前提ではなくして結論に對する前提であり、定義や公理は單なる定義や公理でなくして定理に對する定義や公

理であり、求めらるる定理によつて始めて定義や公理を選擇する原理がえられ、暗示せられたる結論によつて始めて前提がおかれる。否寧ろ前提はその結論によつて立つと見ることが出來るのである。私はかかる意味の循環論はただ可能であるのみならず、實にあらゆる論證の根柢となるもので、普通の論證と稱するものはかかる論證の具體的體驗の一面を抽象して見た第二義的のものと考へたいのである。（高橋里美氏著「全體の立場」）

綿密な哲學的考察を、平易な言葉で表現した點について學ぶべきである。ただ、ここに一つ考へさせられることは、哲學的素養のない多くの讀者は、本論文の引例について多少不思議な感を抱かせられるであらうといふことである。「求むるものと求めらるるもの」についての書出しは、それの調和的關係に於て樂天主義者となり、反對の場合に於て厭世主義者となることを述べ、「要するに人生の悲喜劇の一切は能求と所求との關係から生まれ出でたものに外ならぬ。」と述べてゐるのであつて、何人にも分りやすい一般的な問題であるが、さて、その兩者の關係の説明に當つて、幾何學者の定理證明といふ特殊の例を持つて來たので、哲學的素養の乏しい讀者は、定めて、ここでは ・ ・たと行詰まることと思ふ。しかし、それは哲學的思考に必要な循環論證のことを説明せんがためのものであつて最も妥當な引例に相違なからうと思ふのである。ただ注意したいことは、一般的な文章に於ては、かかる引例法は力めて避けねばならぬといふことである。

一八　生存競爭

地球上には動植物各種をして自由に增加せしむべき餘地は少しもない。其所へ動植物の各種が遠慮なしに多數の子を生むのであるから、互の間に劇しい競爭の起るのは見易い道理ではあるが、其の有樣を詳しく論ずるには、先づ諸生物の生活する有樣から考へてかからなければならぬ。

動物の中には獅子・虎・狐・狸の樣に肉を食ふものもあれば、牛・馬・羊・鹿の如くに草を食ふものもあるが、獅子・虎等の餌となるものは矢張り草を食ふ動物故、動物の食物は直接にか間接にか必ず植物より取るの外はない。又海產の動物を取つて見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふ樣な工合で、どれもこれも皆肉食動物ばかりの樣であるが、最も小さな蟲は大洋の表面全體に浮いて生活する無限の微細藻類を餌とするから、此の場合にも動物の食物の根元は矢張り植物界にある。然らば植物は何を食ふかといふに、陸上の植物ならば水中より總べての養分を取り、孰れも日光の力を借りて之を自分の體質に造り換へ、生長し繁殖するのである。それ故、綠色を呈する植物は全世界の生物總體に對し、食物供給の役をつとめるものといつて宜しい。

斯くの如き有樣故、植物なしには草食動物は生きて居られず、草物動物なしには肉食動物は生きて居られぬ。草を食はなければ生命が保てぬのが草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は初より毎日若干の

草を犠牲に供する積りでなければならず、又他の動物を食はなければ生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は初より日々若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。草と草食動物と肉食動物とが相並んで互に犯さず、共に生存して行くといふことは到底出來ぬことである。昔、印度の釋迦が山中で難行苦行をして居られる處へ悪魔が試しに來た話がある。先づ鳩に化けて飛んで來て、「お釋迦樣、今鷹が私を捕つて食はうと追ひかけて來ます。何卒憐と思うて御助け下さい。」といつたので、釋迦は直に鳩を懷に入れて隱してやつた。所へ、又悪魔が直に鷹に化けて飛んで來て、「お釋迦樣、私は久しく物を食はず、非常に腹が減つて居ります。今追ひかけて來た鳩を食はなければ必ず直に餓死します。何卒憐と思うて今の鳩を出して下さい。」といつた故、釋迦は如何したら宜しからうと思案した後、自分の腿の肉を少し殺ぎとつて之を鷹に與へ、遂に鳩をも鷹をも助けられたといふことである。素より是は苟も慈悲忍辱を旨とするものは此の心掛でなければならぬといふ譬で、敎訓としては最も妙であるが、實際此の方法で鳩も鷹も助けられるかといふに中々左樣には行かぬ。若し世の中に鳩も一疋、鷹も一疋より無く、之を僅かに一日だけ助けるのならば、此の方法で差支ないが、總べての鳩と總べての鷹とを兩方ともに何時までも助けることは決して出來ぬ。幸ひ悪魔が一回だけより鳩と鷹とに化けて來なかつたから宜しい樣なものの、若し根氣よく此の試しを何回も繰返し、又鳩に化けて來て隱して貰ひ、又鷹に化けて來て腿の肉を殺いで貰つたならば、一度に半斤づつとしても、十回には五斤となつて、こんどは釋迦が死んでしまふ。（丘淺次郎氏著「進化論講話」）

これは、「求むるもの」と「求めらるるもの」との關係について、生物學的に說明したものであり、

丘博士が明治四十年代に書かれた文章であるが、科學的文章中の一大名文として最も人口に膾炙してゐるものである。如何にも平易にして明瞭、興味の盡くるところを知らず、何べん讀んでも厭きることのない名篇である。かうなると、科學的敍述もまさに小說以上である。ことに、引例のために用ひられた釋迦の傳說の如きは、これによつて主題たる「生存競爭」の免かれないことを最も明瞭に讀者に印象せしめてゐる。引例によつて、主題の意味を却つて不明ならしめるが如きは、何人も企てないところであるが、この文の如きは、最も引例法に意を用ひた文といふことが出來よう。丘博士の文は、一面すらすらと何等の苦心の跡も見えないやうであるが、仔細に觀察すれば、一言一句悉く苦心の結晶ならざるはない。たとへば、「動物の中には獅子・虎・狐・狸の樣に肉を食ふものもあれば、牛・馬・羊・鹿の如くに草を食ふものもある」の如く、前に四種の動物をあげれば、後にも四種をあげて對應せしめ、前に「樣に」と言へば後に「如くに」と述べるといふが如き注意、また「三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふ」といふ風に、總べて三分の一に減じて行く修辭の如き、或は「草食動物を飼ふ人は初より毎日若干の草を犧牲に供する積りで……肉食動物を飼ふ人は初より日々若干の動物を殺す覺悟で……」の對句の如き、極めて細心の注意を用ひてゐるのである。恐らく、自然科學者にして、かくまで文章に苦心する例は稀であらう。さればこそ、後の世まで殘る名篇が生まれるのである。

一九 人體

有體物で法律上の物であるかどうかが問題となるのは人の身體である。從來の法律學が論理的解釋の方面では微に入り細を穿つて、脫けた髮の毛一筋の行方まで突止めなくては承知出來なかつたといふ標本までに、人體に關する論點を摘記してゐる。

(一) 生きた人の身體は法律上の物でない。即ち法律上の物といふのは人類以外の自然界に於ける有體物である。法律がすべての人を權利の主體と認める以上、其の構成部分たる身體の全部又は一部を權利の目的たり得べき物と見ることは、人格承認の根本觀念に反するからである。併しそれは今日の開明的觀念で、舊時代には權利主體たることを認められず、隨つて法律上の物である人の存在を考へ得る。

(二) 人の身體の一部分が自然に又は人爲的に人體から分離した場合に、其の部分は既に人體ではなくて外界の有體物だから、法律上の物として權利の目的たり得ることは明白である。而して其の部分の最初の所有權はそれが分離以前に屬した人に歸屬し、其の後或は明示又は暗默に讓り渡され或は拋棄されることがあるべきものと解される。ただ問題となるのは最初所有權取得の法律上の原因である。無主物先占論は當らぬ。身體に對する所有權が分離するといふ論は根本觀念に反する。密接關係あるが故との說明は法律論でない。私は、人が其の身體について有する人格權が分離した身體の部分については有所權に變形すること、恰も人

格發露の結果として無體財產權を生じ、人格侵害の結果として損害賠償請求權を生じると同樣である、との說明を試みたい。

（三）まだ分離しない身體の一部を讓り渡す契約は、其の部分の分離があつた場合に之を讓り渡すべき旨の契約として有効と解すべく、其の部分の分離を請求强制し得べき契約としては善良の風俗に反するの故を以て無効といはねばならぬ。

（四）身體を人工的に補充した部分は身體の一部であるか。それが身體に附著する程度によつて身體の一部であると物であるとを區別する外ないであらう。（穗積重遠氏著「民法總論」）

民法上から「物」の意義について說明した後、「生きた人間の身體」が如何に見らるべきかを論述した文である。その、あらゆる場合に亙つて考察した綿密な思考作用については驚くの外はない。釋迦が鷹に與へられた腿の肉は民法上の「物」であるか否か、義齒や義眼や義足や義手は如何、とりはづしの出來る義齒や指輪は如何——さうした疑問にまで、右の文は明瞭に答へてゐると思ふ。そして、行文は如何にも平易にして明瞭である。科學的文章は、まさにかくあらねばならぬ。

第三章　論說的文章

ここに、論說的文章といふのは、宗教・教育・科學・文藝・政治・經濟等、すべて人生・社會・文化の一切の範圍に亙つて、とりあげられたる一定の問題に對し、意見を陳述し、主張し、宣傳し、また時に勸誘するところの文章の謂である。具體的にいへば、新聞の社說がそれであり、文明批評がそれであり、人物評論がそれであり、雜誌の主張欄の記事、名士講演の類、時には廣告の文面の如きもそれに當る。

論說的文章は科學的文章の客觀的・理智的・說明的に終始すると異なり、何等かの立場に於て、自己の意見を主張し、讀者をして意志的にまた感情的に動かさうと企てるものである。隨つて、論說的文章は、主觀的・意志的または感情的の要素を多分に含むものではあるが、しかし、讀者の理性に反するものは、決して讀者の心を動かすことは不可能であるから、そこには、客觀的・理智的・說明的な要素が必要にして缺くべからざるものとなつて來る。否、場合によつては、最もすぐれた說明は、そのまま筆者の主張を言ひあらはし盡くしてゐることとすらある。たとへば、政黨の腐敗・墮落を述べ、

その改造の必要を主張せんとする場合、現在の政黨が如何に腐敗し墮落しつつあるかを、幾多の實例によつて說明しただけでも、立派に、政黨改造の必要を主張してゐることになる場合もある。また、保險の加入を勸誘せんとする者が、直に勸誘にとりかからず、保險加入者の利益について、數理的・統計的・實例的に巧妙に說明するが如きもそれである。

かくの如く、巧妙なる說明は、それのみで、主張・宣傳・勸誘の目的を達する場合もあるが、本格的の論說文は、說明とともに、或は說明の後に、堂々たる主張となり、または微妙なる勸誘となるのが通例である。

それゆゑに、論說的文章の要點は、およそ左の三點に歸着するであらう。

第一、主張事項の說明または解說。

第二、本格的の主張または宣傳。

第三、實行的意志の喚起、すなはち勸誘。

隨つて、その敍述的態度は、科學的文章の如くに徹頭徹尾冷靜に終始することは不可能であり且不利益である。勿論、徒に空理空論に流れ、あるひは感情的に奔るが如きは、最も誡むべきであるが、用語には相當の熱意を必要とし、讀者をして實踐的意志に燃立たしむるものでなければならぬ。つまり、理智的にも感情的にも、一々尤もであるとうなづかせつつ、その所論に引入れられ、つひに實行的熱意をもつに至らしめるやうな文が、この種の文の上乘なるものといへるであらう。

以下具體的文例について、その表現的手法を學ぶこととする。

一　表現練習の必要

公衆の前に廣長舌を弄するなどは悪德だと心得たのが日本人の習慣であつた。何しろ幾百年來「口は禍の門」だと心得て生活して來た日本人である。その結果として第一に日本語そのものからして、公開演說の言葉としては十分に發達してゐない。この點では世界で最も多く民權自由を重んじたアングロサクソン人種の國語が一番發達してゐる。ゼントルマンを養成しようといふ昔風のケンブリッヂ・オクスフオルドなどの大學が、最も大切な訓練として行つたものは討論であつた。日本では思想發表の爲の演說や文章を主要な課目として取扱ふ學校が、過去にも現在にも果して有るであらうか。物は必要のない所に發達はしない。日本語が演說に適せず、日本に雄辯家が少いのは、その必要が無かつたからだ。英語などに較べると、この點は實に恥づかしいと思ふ。日本語そのものが旣にこの點で改造を要するのである。その日本語を使つてゐる日本人に、巴里の眞中などへ行つて外國語で宣傳運動をやれと言つたつて、それはやれと言ふ者の方が無理かも知れない。

思想は財布と反對で、外へ出すほど中味は豐富になる。發表しないでゐると源泉が涸渇してしまふ。この點から見ても日本人の思想生活は貧弱ならざるを得ないではないか。(厨川白村著「象牙の塔を出て」)

論說的文章は、「AはBなり。」と斷定し、讀者をしてその斷定を信ぜしめ共鳴せしめることを目的とする。この文に於ては、「思想表現の練習は表現方法を助長せしむるとともに思想生活を豐富ならしむ。」と斷定し主張し、讀者をして、それに共鳴せしめようとしてゐるのである。旣に讀者に共鳴を求める以上、先づ自己の斷定・主張を理解せしめることが必要である。それゆゑに、用語・說明・引例は、平易にして明瞭でなければならぬ。また、讀者をして心からその主張を信ぜしめ共鳴せしめるためには、論理が整然としてゐなくてはならぬ。更に、讀者をして實踐的熱意を持たしめる爲には、用語に相當の熱と力とがなければならぬ。本文は、それらの點から見て、先づ、初步的・入門的ではあるが、相當に成功した文といふことが出來るであらう。

二　自分の文章

自分は文章を氣にしないか？

そんなことはない。誰でも少し筆の仕事をつづけてゆけば文章を氣にしないではゐられなくなる。ただ氣に仕方がちがふ。最も文章を氣にする作者の作品を見ても自分は其の文章をいい文章だと思へないことがよくある。神經のあり場所がちがふ。或人が氣にする處を他の人は氣にしない。しかし或人が氣にしない處を

他の人は氣にする。さういふことはよくある。さうして或人が拘泥する處を他の人が拘泥しないばかりではなく、拘泥してゐるやうな處に不快を感ずることがある。

自分は、文章に拘泥しない方の一人であらう。しかし自分は調子にのつた文章や、下品な文章や、空虛な處のある文章は嫌ひだ。內容と一番ぴつたりあつた言葉をのみ自分はつかひたいと思つてゐる。しかし枝葉の內容に拘泥しすぎて、文章のリズムがバラバラになることは元より恐れる。それから意味のありさうな顏をしたがる言葉をつかふことを嫌ふ。自分のかくものに技巧があるとすれば、それは技巧をなるべくつかはない處にある。事實つかへないのであるが、つかふことが又氣がひけるのでもある。

自分の文章もある勢で平常はつかひたくない言葉をわざと平氣につかふことがある。しかしそれは調子である。上つ調子は如何なる場合も嫌ひであるが、ある勢で變化を要求する時、自分は普段つかひたくない言葉が使ひたくなることがある。それは其の場にあたらないとわからない氣持である。それから自分はなるべく自分の言葉でものを言はうとする。詩のやうなものをかく時でも自分の自信のある處は、廻りくどいやうな言ひまはしをした個處にある。それも勿論故意にさうするのではなく、さう言はないでは自分の言ひたいことが出來ない時に限る。

自分はすらすらものをかくのを恐れる。自分にはさういふ傾向が少しあるからなほ恐れるかも知れない。自分は平明な言葉切り知らないから、又使へないから、だから自分は絶えず頭を働かしてかく、頭を働かせずには一句もかきたくないと思つてゐる。さうすることによつて上すべりをさける。尤もニイチエが言つてゐるさうだが、頭が白熱し切つた時には自覺する餘裕もない言葉がほとばしり出ることがある。自分はその

> 時、勿論さういふ言葉を尊重し、その言葉の火を少しでもよわめることを恐れはする。しかしさもない、頭の空虚になることによつての筆のすべることを恐れる。殊にお茶をにごすことを恐れる。自分は技巧家の作品の內には文章で內容が其處まで行つてゐないのをごまかす個處のあることによく氣がつく。その時自分はその人の技巧家としての良心をうたがふ。
>
> 自分は文章のかゞやくことを嫌ひはしない。愛することも出來る。又それにチャームされる資格ももつてゐるつもりだ。しかし內容を裏切つて、かゞやかせようとする文章は作者の腹が見えすかれて片腹痛くなる。自分は自分の文章の單調無味を恐れると共にそれを內容の美で光らさなければならないことを知つてゐる。自分の文章にして、もし眠つてゐても書けるやうになつたり、良心がゆきわたらなかつたりしたら、それは藝術品にはとてもなり得ないことを知つてゐる。
>
> 自分の文章は內容の光でのみ生き、又美になるのである。自分の藝術家としての苦心は其處にある。だから自分は格式のある文體でものをかくことは出來ない。自分のリズムで自分の得た眞實を表現するより仕方がない。（武者小路實篤氏著「文學に志す人に」）

これほど平明な、そして隅から隅までゆきわたつてゐる文章などは、さうめつたにあるものではないと思ふ。私は、この文をなんべん繰返して讀んだか知れない。これは、武者小路氏が、自ら文章を書く時の用意と、それから氏自身の文章觀とを說明したものであるから、「文章はかくあるべきものである。」と主張してゐるのではない。しかし、「私はかく信じて文章を書く。」と斷定してゐる反面

には、「私はかくの如き文章がよいと信ずる。」と主張してゐることになる。それを左に列擧してみると、およそ左の如くなるであらう。

一　調子にのつた文、下品な文、空虚な處のある文は、よくない。
二　內容に拘泥しすぎて、文のリズムがバラバラになつてはならぬ。
三　こけおどし的な、意味のありさうな言葉を、つかつてはならぬ。
四　無技巧の技巧を尊ぶ。
五　上つ調子になつてはならないが、時に、語勢の變化を求める場合、平素つかはない言葉をつかふことは許される。
六　すらすらと書いてはならぬ。一語一句考へて書かねばならぬ。
七　かがやきのある文、格調のある文は、勿論よいが、それは內容の美から來るものでなければならぬ。
八　文章は他からの借物では駄目だ。自分のリズムで自分の得た眞實を表現すべきである。

こまかい點は、まだほかにもあらうが、大體以上の諸點である。さうして、それらの主張に對しては、恐らく何人も共鳴するところであらうと思ふ。すくなくとも、私自分は、文章といふものは、武者小路氏のいはれる通りのものでなければならぬと確信してゐる。そしてまた、右の文が、氏の信念通り、若しくは主張通りの立派な藝術品であると思ふ。

三　日本の議會

議席は到る處、空席であつた。彼等議員は、この議場へ這入るために、高等學校の入學試驗どころではない大騷ぎをやつて漸く這入つて來た癖に、私立大學生よりも甚だしく、より多くエスケープをしてゐる。私立大學の學生は月謝を拂つてエスケープをするのだけれども、此處の老爺(おぢい)さん達は三千金の歲費を受取つてエスケープをしてゐるのだ。

いやいや、男の中の男と選ばれた代議士達が、エスケープなどを、こんなに多くやる筈がない。空席を多く作ることは、大方日本の議會の規則なのであらう。

が、それにしても、彼等の行儀の惡いことは！　原さんも議席に着く頃は、常に頰杖で有名であつた。議會の老爺さん達よ、私は君等が老いて步むに杖を突くことを咎めはしない。けれども、頰杖までを突かないでは、纔(わづか)の時間を堪へ得られないか？　前にこごんだり、橫へ曲つたり、議員の多くが老人なるが上に、この不行儀！　心の中までは知らず、傍聽席から見おろしただけでも、かなり醜い。

醜い！　そして滑稽だ。彼等の頭は大抵禿げ、若しくは禿げかかつてゐる。そして、その中には何が詰つてゐるだらう？　頭の禿げた幼稚園！　と思ふと私は滑稽に感じるのだ。このお行儀のよくない、そして時時惡口をすら大聲で言ひあふ（後から屢々取消すけれども）代議士諸君をば、誰も取締らない樣であるが、

この大人しく行儀よくしてゐる傍聽人の方は、銀筋銀釦の守衞君が、注意深く監視して吳れる。時に囁き合ひでもすると、叱つて下さる。それ故、私は可笑しい時も、聲を發して笑はない。私は聽いてゐて腹の立つ時も、口を開いて罵らない。ただ、眼で彼等を笑ひ、心で彼等を輕蔑する。

ロイド・ジョージ、アスキス、バルフォーア、グレー、チヤーチル、レッドモンド、スノーデン、ジョン・バーンス、それから物故したケーア・ハーデー、かういふ人達のズラリと並んだ議會も議會だし、臧內青炭、松本五時半、武藤金君事英國のゼノア、犬養憲政の神などと、名前を書いてゐる中にもペンが腐りはせぬかと氣つかはれる樣な人々を、ゴタゴタ詰込んだ議會も矢張り議會なんだ。團十郎や菊五郎のやつたのも芝居なれば、木戶二錢の猿芝居も芝居なんだ。

しみじみ國家の行末が思はれる。（生方敏郎氏著「虐げられた笑」）

これは、本格的の論說文といふよりも、むしろエッセイ風なものではあるが、說明または描寫が巧みであるために、それだけで、筆者の主張――日本の議員の品位は著しく低下してゐる、これでは困るといふことが、明瞭に讀者に受取られ、隨つて共鳴される例としてあげたのである。この文には、多分に皮肉やアイロニーや諷刺的な言葉がつかはれてゐる。しかし、それは、往年の我が國の議會（勿論現在はさうでなからうが）のありさまを寫すには、まだまだ辛辣味が足りないかも知れぬ。とはいふものの、皮肉・諷刺・揶揄・諧謔・アイロニー等は、ややもすると文の品位を低下せしめるばかりでなく、讀者の反感を招くおそれがあるから、餘程自信のある人でない限り、出來るだけ避けた

方がよいと思ふ。

四　政黨浮沈の秋

政黨が政權を取らんとすることが必ずしも惡いとはいへない。國民が要求する政治、國民が自發的に後援する政治を行はしめんが爲には、政黨をして政權を取らしめる事が直截簡明な手段であるからだ。併しここに皆んな頭腦を明らかにして、よく考へてみなければならぬ要點がある。國民が政黨を後援するのは政黨幹部に政權を握らしめるといふ事が目的ではなくして、それは國民の心からの要求する政治を行はしめる爲の手段である。政黨の方からいつても、政權を取る事は手段であつて、國民の希望を政治に實現することが目的でなければならぬ。この手段と目的を顚倒して考へる事は、政黨心理に於て常例になつては居るが、それが却つて政黨をして政權から遠ざからしめる結果を生じて來るのである。極めて僅かの相違であるやうに見えるが、政黨政治家の心が國民の休戚を考へてゐるか、自分達の榮達を考へてゐるかといふ心術の相違が世人の目につく。其所が政黨に對する一般民衆の信賴の念に影響するのである。ここに暫く政權を取るといふことを忘れて、一意專心に國民の希望は何であるかを考へてみる。さうすると、政友會は勿論、民政黨と雖も、いふべきこと、なすべきことは山積してゐることを發見するであらう。かれらは我が黨內閣を組織してはゐない。併しかれらは衆議院の殆ど全部を占領してゐる。政友會のみの力でも衆議院の絕對多數を占めて

ゐる。それでもなほ、かれらが國民の希望する政策を實現し得ないとすれば、かれら自身が政黨の威嚴を毀損してゐるのみならず、議會そのものの威嚴をも毀損してゐるのである。政黨自ら自分を輕蔑するから、世間も亦政黨を輕蔑するやうになる。自由黨・改進黨の先輩は血みどろの戰を鬪つて政黨を育て上げて來た。日本の民衆も藩閥・軍閥の專横に憤慨して、今まで議會政治を後援して來た。今の政黨政治家の時代になつて、政黨や議會の權威が失墜するやうでは、かれらの面目は先輩や國民に對して丸潰れである。

目下の急務は、政黨が自問自答してみることだ。何を國民が要求してゐるか、何が國家の休戚に關するかと。（馬場恒吾氏著「議會政治論」）

本格的の論說文である。諄々として說きさり說ききたるところ、あたかも父親が放蕩息子に言ひきかせてゐるが如き趣がある。生方氏の文と相俟つて、大正の晩年から昭和にかけての我が國政黨者流の面目が躍如として寫し出されてゐる。生方氏も馬場氏も、何れも政黨者の反省を求めてゐるのであるが、その行き方を異にしてゐる。何れの行き方が効果があるかは、受取る人の誠意と良心の問題にある。恐らく、現在の政黨人にとつては、どちらの文に對しても何とも感じないであらう。唯、生方氏の文、馬場氏の文に共鳴するのは、政黨人ならざる一般の善良なる國民だけであらう。

五　國際聯盟脱退の演説

議長閣下並びに紳士諸君！　本國政府に代つて、余はここに宣言する。報告書草案が今や總會によつて採擇せられた事は、日本代表並びに日本政府にとつて、深い失望と悔惜をもたらすものである。

日本は國際聯盟創立の當初よりこれに加盟して來た。一九一九年ヴェルサイユ會議に於ては我が代表は盟約書の起草に參與した。我々は、人類が協力し得る最も偉大なる目的のために、世界の列强と共々に相並んで、これが加盟國たり得た事を少からぬ誇として來た。世界人類によつて久しく要望せられた共通の目的を達成せんが爲に、聯盟の同僚——他の加盟國と協力する事は、常に我々が心からなる希望であり喜であつた。

ゆるぎなき平和の存續を要望すること、この同じ一つの目的は、常に我等が思索と行動の原動力を爲すものであることを、余は寸毫も疑はぬものであるが故に、今や我々が遭遇せる事態に對しては、余は深くこれを遺憾とするものである。

日本の政策がその根本に於て、極東平和の確立と全世界の平和の招來に貢獻せんとの純正なる希望によつて設定されたるものなる事は、先に周知の所である。併しながら日本は總會によつて採擇せられたる報告書を受諾することは不可能であることを發見した。よつて特に、報告書に含まれたる勸告條項は、該地方に平和を確保すべき性質のものとは看なされざるべき事を詳細に指摘した。ここに日本政府は、日本と他の加盟

國とは極東平和達成の樣式については、その意見を異にするものであるとの結論に到達せざるを得ない。かつ、日本政府は、日支問題に關して國際聯盟と提携せんとの努力は、今やこれ以上なし得ざるに到つたと思惟せざるを得ないのである。

併しながら、日本政府は極東平和の確立の爲には、かつ又諸外國との友誼親善保持の爲には、最大限度の努力を惜しまないであらう。日本政府が人類の福祉に貢献し、世界平和に關與する事業の爲に、誠意を以てこれら諸國と提携し――不幸なる報告書採擇の結果による諸事情の許す範圍内に於て、可能なる限り、諸國との提携を採る政策を今後ともに固執するであらうことは、余がこれを附言するまでもない所である。

此の部室を去るに當り、日支問題解決の爲に、理事會諸卿並びに議長及び總會の全諸卿等が、この一年有半の長きに亙つて、快く提供せられた努力に對して、我等が心からなる感謝を捧げるものであることを、代表部に代つて一言御挨拶をなすものである。（松岡全權大演說集）

これは、一九三三年二月二十四日、國際聯盟總會に於て、いはゆる四十二對一で、日本の主張が容れられなかつた時、全權松岡洋右氏が、その訣別に際してなしたる悲壯極まる大演說である。勿論、その時は英語で述べたのであつて、右の文はその日本語譯である。隨つて、英語から來る語勢や調子、それから、その時の身振や態度から受ける感銘等は、到底右の文では味ふことが出來ず、いはば、隔靴搔痒の感があるのは致し方もない。しかしながら、右の文だけを讀んでも、あの世界的環境のうちに立ちて、いはば喧嘩別れの、極めて重大な立場にあつて、あくまで冷靜に、あくまで理路整然と、

あくまで大國民的に、禮讓的に、紳士的に、しかも我が大日本帝國の儼然たる決意を明確に力强く示した大演說のおもかげを、我々は十分に偲ぶことが出來ると思ふ。

我等は、ここに於て、言論または文章の如何に重大なるかを、今更の如くに感ずる。魏の文帝が言つた「文章は經國の大業、不朽の盛事。」の語を、又しても思ひ出さざるを得ない。

六　非常時宣言

世界的非常時の混亂渦中にありて、日本を繞る東亞の狀勢も亦最も切迫せる大非常的緊張を呈しつつある。

說明　日本は滿洲事變以來、政治的には世界的孤立の危險なる國際的位置を甘受しつつあり、經濟的には爲替インフレの支持の下に海外市場を精力的に蠶食し、以て競爭國の深甚なる恐怖と敵愾心とを惹起せしめつつある。かくて、今や英國を始め海外列國の對日暴壓政策は急展開し、日本の輸出進路は到るところ遮斷の憂目に遭遇してゐる。

ただ目さきには、軍事工業の擴張と、若干の匡救工事とによつて、所謂財政インフレの活況を享樂してゐるが、旣に輸出工業には深甚なる不安の樣相が現れてゐる。又財政インフレの好影響も、全く局部的且一時的たるに止まり、これを以て非常時危機の根本的打開を期待するが如きは、實に思はざるの甚だしきもので

ある。

況んや對外關係に於ては、國際聯盟脫退の善後處置未だ完了されず、かの南洋委任問題の如きも遠からず再燃すべく、對支・對露・對米外交上の不氣味なる不安も、これが緩和を期することは容易の事でない。加ふるに、宿年の懸案たる海軍協定の更新も目睫の間に迫りて、既に米・英兩國の精鋭なる大擴張計畫の發表を傳へられてゐる。勢の激するところ、日本を繞る國際危機はいかなる急展開をなすやも測り難い。

しかもかかる切迫せる非常時局にありて、傳統的經濟原理は凡百の彌縫的匡救方策を提供し盡くしたあげく、悲慘にもただ完全にその時代錯誤振りを暴露するに止まつた。

資本主義の無力は、同時に一切の既成政黨の無力である。

かくして、全國民は深甚切實なる不滿と不安とに陷り、恐るべき社會的大動搖の兆候は歷然として眼前にあらはれて來た。かの五・一五事件の公判が開かるるや、都市と農村とを問はず、全國民の熱烈なる同情は被告の志士的心事に注がれてゐるが如き、以て人心の激變を語るものではないか。（中野正剛氏著「國家改造計畫綱領」）

松岡氏の演說の文例が、歐文脈の文章とすれば、この文例は、まさしく漢文脈の文章である。かうした、政治的宣言の如きは、漢文口調の方が緊張味と力强さとを示すに適するので、政黨または政治家の文章は多く漢文脈のそれである。如何にも力强く國民に呼びかけてゐる。そして、更にその表現法には、實用的な工夫がこらされてゐる。すなはち、はじめの一行に於て大綱を提示し、次に「說

明」といふゴチック文字を置いて、その大綱を敷衍し說明し主張し宣言してゐるのである。これなら、主張が誰にも手つ取り早く明瞭に分るからである。かうした形式は、どんな場合にも適用されていいとはいへないが、少くとも、「國家改造計畫綱要」といふやうな書物としては、最も內容に卽した表現方法であるといへるであらう。

七　評論家と時代

我々は評論に於てその効果を考へなければならない。自己の深く信ずるところが殘るところなしにその中に表現せられたかどうかなどは、私的の要求であつて、深く問題とするにあたらない。評論は一つの社會的戰爭である。そして戰爭においては必ず勝たなければならない。いかに自己が表現せられたからといつて、戰爭に勝たなければ、評論の意義は皆無である。社會愛の情熱に燃え、現實をただ一步でもよりよく改造しようと思へば、評論の執筆者などはどう犧牲になつてもよいことだ。「彼はこんな程度のところにとどまつてゐたのか。」とか「こんな愚劣のことをいふのか。」とか罵言せられ、誤解せられるやうな場合があるとしても、社會戰を有利に展開するにはこの方が至當な道だと考へたとすれば、評論家は果敢に自己の私的體面を捨て、この誤解多い道をも進むべきである。今のやうな時代には、評論家は殊に自己を捨てなければなら

ぬ場合が多い。然らば斯樣にして行けば、結局は評論家の立場も消えて行き、信賴せられなくなるであらう、とも考へられるが、私はさうしたことはないと信じてゐる。深く信じ、眞理への情熱に燃えるものの言葉は、いかに歪んで表現せられたにせよ、また何處かで正しく理解せられ、同じ情熱を以て受取られるに相違ない。私は右の如くに信じてゐるから、思想公表の自由がそれだけ深刻に拘束せられる時代が來たとしても、社會評論の陣營を捨てようとは思はない。徒に皮肉に時代を罵倒してみたところで、社會はどうにも動かない。我々はやはり時代を統一的に建設的に動かして行かなければならぬのである。一步前進二步退却も、また或時にはやむを得ない。最終の勝利を信ずるものは、退却すべき時に退却することを卑怯に感ずる必要はない。今我々はまさしくその退却する陣營を守つてゐる。戰略の最も必要な時代がそこにあるのだ。(土田杏村氏著「明日に呼びかける」)

これは、昭和七八年頃、最も言論の壓迫された頃になつた筆である。「評論は、一つの社會的戰爭である。そして戰爭には勝たなければならない。」といひ、「社會愛の情熱に燃え、現實をただ一步でもよりよく改造しようと思へば、評論の執筆者などはどう犧牲になつてもよいことだ。」といふ土田氏の眞劍な態度には、何人も動かされずにはゐられないであらう。そして、評論家として、最後の勝利を得るための戰略について、率直に勇敢に明瞭に論じてゐるところ、さすがに透徹した文明批評家の面目が躍動してゐる。

現代の日本に、最も缺乏してゐるのは、文明批評家である。立派な論說文に乏しいのもそれがため

である。確乎たる指導原理に立つて、政治に經濟に宗教に教育に文藝に、一世をリードして行く大思想家、さういふものは、さうたやすく出現するものではなからうが、現代は餘りにも淋しい。その中でも土田氏の如きは、殆ど唯一の文明批評家として囑望されてゐたが、その人も今や既にない。青年諸子の一大奮起を望みたいものである。

八　永遠への思慕

ピラミツトの北に面した斜面に一つの窓がある。その窓は永久に變らぬ北斗星に向いて開いてゐる。つまり屍になつたミイラが、永久に變らぬ北極光を見て居りたいといふ意味から、ミイラの爲に特にその窓を開いたのである。人間は永遠を離れて安住の地を發見出來ない。それを現代人は、ただ物質と性慾のごく變り易いものに變へてしまはうとしてゐる。殊に、永遠あるひは無限の神につき考へることは、馬鹿らしい愚な事であるとして、それを侮辱する人がある。けれどもその人でも、最後の瞬間が來ると急に目ざめる。

昭和四年の暮、私が神戸で宗教講演をして出て來ると、一人の紳士が追駈けて來て、

「賀川さん、君に聞いて貰ひたいことがある。外でもないが、高畠素之君のことを知つてゐるか。あの高畠が死ぬ時、一週間ぐらゐ續けて涙を流して聖書を讀み、大聲で讃美歌を歌つた。彼は死ぬ時になつて、急に神が戀しくなつたのだ。」

と話してくれた。我々は、高畠氏が、日本に於けるマルクス學者の第一人者であつたことを知つてゐる。彼はマルクスの資本論が今日のやうに讀まれない時から、資本論や唯物史觀を飜譯した。その人が永遠に就き考へる前にマルクスの唯物史觀を讀めとはいはず、彼は自ら永年棄ててあつた聖書を開き、忘れて歌はなかつた讃美歌を涙を流して歌つたといふ。これは一體何を意味してゐるだらうか。

福田德三博士は、大正九年一月の雜誌「解放」に、宗敎は無用だといふ論文を書いたことがあつた。たしか、題は「神よりの解放」だつたと記憶してゐる。その博士が物故せられる時、マタイ傳第五章を讀んでくれといつて、弟子が讀んでゐる中に、安らかにこの世を去られたといふことである。人も知るやうに、福田博士は日本ばかりでなく、フランス・ドイツに於ける經濟學會の名譽會員で、世界的の學者だつた。その人が、宗敎に對して否定的の氣持のときもあつたが、永遠に就いて考へなければならぬといふ瞬間が來ると、矢張りマタイ傳第五章に歸つて來たのである。

ロシヤは昭和四年五月から十二月までに、キリスト敎會の五百四十を破壞した。宗敎は阿片だ、そんな馬鹿なものを信ずるのは迷信だ、といふ態度をとつてゐる。しかし果してそれが永遠を考へるものにとつて、いくらか効目があつたらうか。敎會組織がなくても、永遠への思慕は、鹿が谷川の水を喘ぎ慕ふ如くに、我々の本性であるから、それを破壞出來るものではない。いくら我々が麥の芽を踏みにじつても、眞直に下から上に出て來る。踏みつける程、一本の莖であるものが、五つになり十になり、二十になつて上に伸びる。

永遠への思慕、それは恰も、植物の莖が太陽に向かつて伸びあがる如く、人間の本能である。我々は物質だけで滿足することは絕對に有り得ない。(賀川豐彥氏著「神と永遠への思慕」)

いかにも平明な、そして引例の巧みな文である。ミイラのために北極光を望む窓を開いたといふことが、既に讀者の胸に一種の神秘感を起させるに十分である。ついで、二人のマルキストまたは無神論者が死の瞬間に神の懷に入らうとしたといふこと、ソヴィエト・ロシヤが教會を破壞したといふこと、麥の芽が如何に踏みにじられても、却つて數倍の力で伸びようとするといふこと、かうした具體的の、的確な動きのとれない例によつて、いかなる無神論者をも感動せしめずには措かない筆法で論を進めてゐる。それでゐて、少しもわざとらしい巧みの跡はない。いはゆる「無技巧の技巧」(artless art)であり自然であるがために、その表現効果を十分に發揮してゐるのである。これを明治時代の名文と稱せられた次の如き文と比較してみると、さすがに現代の文章が如何に進んでゐるかが分ると思ふ。

九　死と永生

死は生きとし生けるものの免るべからざる運命なり。夫唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど生を惜しむ人はあれども死を惜しむ人は少く、生について慮る人はあれども死について考ふる人は稀なり。訝しからずや。

如何にして生くべきか。是、人生の大いなる疑問なり。然れども如何にして死すべきかは更に大いなる疑問にはあらざるか。我等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり。されど宗教とは生きんがための教にあらずして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて解脫の途を說きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて永生の道を開きぬ。解脫や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の說ける哲學の旨趣も亦これに外ならざるなり。天地人生の理法を明らかにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは所詮は死を安からしむるの謂にはあらずや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず、名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言はば、これ即ち死後の世界を言ふなり。あはれ其の生を見て其の死を見ざる者は人生の根本を遺れたるなり。死はすべての物の終にして又すべての物の始なればなり。されば人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。夫の死生の優劣を爭ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。我等は生を知る、未だ死を知らず、如何ぞ其の優劣を知らんや。人生の價値は絕對なり、他に比すべきものなし。厭世と謂ひ、樂天と謂ふ、我等其の何の意なるを知らず、我等は唯人生の實在せるを知るのみ。

　されば我等は生きざるべからず、永遠に生きざるべからず、死は萬物の運命なり。されば我等は死を超越して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題茲に集る。（高山樗牛著「樗牛全集」）

たしかに名文には相違なからう。しかし、いはゆる名文であつて、内容よりも調子にとらはれ、無

駄な文字の羅列が多いために、どうも、じりじりと讀者の胸に迫つて來るところがない。文章に於て格調は重大である。しかし、格調よりも、生活體驗からにじみ出る思想信念は、更に重大である。否、さうした尊い思想・信念は、自然に一種の格調を生み出さずには措かないであらう。まだ生活體驗の淺い、そして文章眼の低い人達は、とかく、右の文例の如きを名文と思つて摸倣したがるものであるが、よくよく考へてみなければならない點である。一代の思想家であり文豪であつた高山樗牛にしても、結局は時代の子である。若し、樗牛をして今日までながらへしめたならば、「あんな文章を書くのではなかつた。」といふに相違ないと思ふ。

一〇　カント以前とカント以後

カント以前には、ドイツの哲學者は、ドイツ語を使はないでラテン語やフランス語を使つた。ライブニッツが二三の論文をドイツ語で書いたくらゐのものであつた。ドイツ語でも哲學が書けることを明らかにしたのはカントであつた。けれどもカントのドイツ語は、普通のドイツ人のドイツ語ではなく、素人にはとてもわかりかねる陳芬漢語（ちんぷんかんご）であつた。

カント以來、そのお蔭で、哲學といへば廻りくどい七六づかしい文章で書かねばならぬといふ不仕合はせ

の傳統が成り立つて、讀者はそのわけのわからないのは、自分の學識の不足がその深遠な學說に追ひつけないのだと心得ることになつた。カントこのかた、簡單明瞭に書いては哲學にならないといふ出鱈目が一般に信じられた。

カント以前、哲學がドイツ語で書かれなかつた時分には、却つてさうではなかつた。ラテン語のは簡單明瞭であり、フランス語のは風韻があり氣力があつた。イギリス語のは恐しく明快であつた。カント以前には哲學は教養ある素人の共同財產であり、すべての學問の刺戟であつたが、カント以來、哲學は、ある組合の獨占となつて、一般には意味のないものとなつた。

これは、カントからヘーゲルに至る哲學の論理的方法と必然の關係において生じた缺陷であつた。彼等は經驗を排除した純粹理性だけに哲學を求め、哲學を全くの要素的な演繹にとぢこめて、その經驗的性質を理性の產物に作りかへてしまつた。この、人工的の作りかへには、是非とも人工的の言語が必要であつた。この言語のからくりの傳承が、今のドイツ哲學に喰込んでゐるのだが、一體今の哲學には、思想そのものの貧弱さを隱す必要がある場合の外、そんな瞞着手段は要らない筈である。

カント以前の哲學は、多方面の生活の豐富な鑛床であつたのだ。つきせぬ經驗の泉からその源を汲んだのだつた。哲學は世間的知識だつたのだ。隨つてその頃の哲學者は、當代の運動に於ける有力な人物だつたので、彼等の時代の出來事に責任をもち、身を以て生活に密接した人々であつたのだ。ところがカント以後は、哲學は特殊の專門となり、ちつとも人間を知らないものが倫理學を書き、ちつとも法律を知らないものが法律哲學を書く。云々。」

こんなことを、このごろ日本の學會などでうつかりしやべつたら、なぐられるかも知れないが、それをドイツの學者ベロルツアイマーが言つてゐるから珍だ。

一體カントは、一番仲のよかつたイギリス人の友達のグリーンと朝の八時に、一所に馬車で散歩する約束をした時に、グリーンが八時十五分前に立上り、十分前に外套を着、五分前にステッキを持ち、八時がチンとなると馬車で出かけて、一分ばかり遲れたカントとすれ違ひながら、見向きもせずに行過ぎてしまつたので、大いにその几帳面に感服して、自分の貯金を六分の利子でグリーンに預けたといふ男だ。素寒貧から起つて、死ぬまでには兄妹の子供等に四萬圓も金を遺したといふくらゐ、哲學を初めて商賣化した男だ。

前掲のドイツ學者の口吻をかりると、カント以前には哲學は金を使ふ學問であつたが、カント以後は哲學は金を貯める學問となつたのだ。（長谷川如是閑氏著「歴史を捻ぢる」）

隨筆風な文であるが、この文の主張には、極めて多くの共鳴者と、極く少數の反對者があるであらう。その極く少數の反對者とは、全國民の幾千萬分の一にも當らない、そして國民生活とは殆ど何等の交渉も無いところの哲學者である。その哲學者を除いた全部の國民は、この文の中に含まるるところの主張に、雙手をあげて贊成するであらう。元來、哲學といふものは、などといつて、私には、哲學の文章がむづかしいのと、それに、たぶん自分に思索の力がないからであらうが、全然分らないのである。しかし、とにかく哲學といふものは、人生――少し氣取つていへば生命――を指導するものでなければならぬもののやうに思はれる。若し、哲學が人生を指導することを目指すものであるな

らば、その表現形式は、もう少し分りやすくして貰ひたいものである。「わかる教育學」とかいふ本を書いた人があるさうだが、そして、その本は非常に分りにくい文章で書かれてゐるといふ話であるが、誰か日本の哲學者の中に、「わかる哲學」を書いて、しかも、それをよく分るやうな文章で書いてくれる人はゐないであらうか。これは決して皮肉をいふのではない、前々から眞面目に望んでゐるところである。若し、哲學といふものが、哲學者以外の人に分るやうには表現出來ない性質のものであるならば、一般俗人の眼にふれる雜誌や著書として發表することは、それ自身、一つの矛盾ではなからうか。

二 研究の道德的基礎

科學は完成したものではなく、我々人間の一種の組織的活動である。人間の他の仕事と同樣、それは道德的根柢の上に初めて可能となる。

人間の仕事は多種多方面であり、そして仕事の方面及び種類が異なると共にその遂行に必要な道德の方面にも種々の輕重を生ずる。

科學的研究、隨つて心理學の研究に特に必要な德性を擧げると、

第一に我々は眞實（truthful）でなければならぬ。ミカエル・フオスター卿の言葉を借りていへば眞理

(truth) を求める研究者は是非自分自身眞實 (truthful) でなければならぬのである。眞理とは何ぞやといふ問に對する答がどうであらうとも、研究者は寸毫の虚僞があつてはならぬ。知名の學者でありながら、嘗てその實驗結果を曲げて發表した爲に、以後殆ど學界から顧みられない樣になつた人を知つて居る。研究者は眞實といふ事に飽く迄過敏であるべきである。それだけでなく、積極的に眞實を求める熱烈にして飽くことを知らない欲求がなければならぬ。

第二に敍述に用心深くなければならぬ。普通人は一寸した事から無造作に斷案を下す。學者の內でも所謂通俗學者は斷乎たる結論を以て世人の心を奪ふ傾がある。併し眞の學者は容易に斷定するものではない。ダーウヰンがあれだけ立派な論據から歸納しながら、常に斷乎たる斷定を避けたのは有名な話である。フアラデーも自己の研究からいふ、「科學研究者の心に抱かれた思想や學說が、自己自身の嚴酷な批判と反證との爲にどんなに多く人知れず闇から闇に葬られて了つたかといふ事、そして最も都合よく行つた場合ですらも、その心に抱かれた思ひつき、豫想・希望・豫備的結論の十分の一も實現せられなかつたといふ樣な事は、世人の餘り知らない事であらう。」と。

ハックスレーが「證據以上に出た斷案は誤謬といふことだけでは濟まない。それは寧ろ犯罪 (crime) である。」といつて居るのも畢竟科學者の用心深さを語つたものである。隨つて眞の科學者は懷疑的傾向を有する。併し唯疑つて居るだけでは駄目である。或學者のいつた樣に其の懷疑は必ず能動的懷疑 (tätige Skepsis) でなければならぬ。

第三に科學者は曖昧を忌み明確を望む心がなければならぬ。近世科學の父フランシス・ベーコンの有名な

金言にいふ、「眞理は混雜中よりも、寧ろ誤謬の裡から生ずる。」と。我々は人間である。いかに眞實を愛求し、いかに用心深くしても、屢ゝ誤に陷ることを免かれない。餘りに誤を恐れて居ては何事も出來ない。誤つてそしてその誤なる所以を明確にすることにより我々も亦學問も進歩するものである。又神ならぬ我々には知らぬ事の多いのも亦致し方がない。我々は知らないと答へることを恥としない。唯知つて居るか知らないのか、どこ迄知つて居り、どこ迄知らないのかが自分自身にもはつきりしない事を忌む。これを要するに、研究者に忌むべき事は失敗と知らないといふことではなく、寧ろ不得要領、曖昧、一時を塗抹する妥協的態度である。

第四に研究者は協力（cooperation）を要する。但し眞理を求める爲の協力でなければならぬ。專攻者の教育もそれであり、又この純な動機に基づく限り學界の論戰も亦それ自身協力である。協力といふ事を主張しても、それは天才的學者の孤立した獨創的仕事を排するのではない。寧ろ援けて之を大いに伸びさせようとするのでなければならぬ。協力は附和雷同とは違ふ。新しい學說であるが爲、或はその主張者が知名の學者であるが爲、又は自分の師であるが爲といふやうな、別の理由又は動機から贊同すべきでない。それは眞であり、或は一層眞に近いと信ずる時に、贊同協力すべきであり、又それが眞でないと信ずる時、嚴正な批判を與へて眞理追求の共通の目的に協力すべきである。（增田惟茂氏著「心理學研究法」）

學的研究の道德的基礎はこれだけではなく、勇氣・忍耐その他の德性を必要とするが、その主なるものは右の四項であると、この論文に續けてゐるのであるが、如何にも學究らしい緻密なそして透徹

した論説文である。これは、增田氏の學位論文であるといふことであるが、それでゐて、如何にも平明で、少しのクセもなく、すらりとした文章である。本格的論説文の最高位に置かるべき文章の一つであらう。

一二　愛と教育

私は教育は愛であると考へる。第一に教育の目的は眞理に對する愛、道德に對する愛、美に對する愛にある。眞理よりも眞理の愛、道德の實行よりも道德の愛、藝術的創作よりも藝術の愛、この無關心な愛に、私は教育の目標を定めたい。道德を愛しないで、ほんたうの道德があり得るか、眞理を愛し得ない人に眞理の探求が望み得られようか。すべての愛の中に、探求の、實行の、創作の力が求められ、眞の生命は常に愛から流れ出る。教育の目的はと考へたとき、何時でも私は、「眞理の爲に眞理を愛すること、美を愛すること、普遍の善を愛すること、こは人の人たる所以のものを保存し增大せしむるが爲に、教育の第一目的に掲げ得べきである。」と宣したフイエーの言葉に歸つてくるのである。第二に愛は又教育の唯一の方法である。愛とは全くなるといふことである。半分に切れた環が、再びもとの環にならうとする心である。肉體といふ境で仕切られた一の人格と他の人格とが統一して、全く一人格とならうとする情である。昨日の我と今日の我

が、時間の制限を超えて統一を求むるのは自愛であり、我と他との統一を願ふが他愛である。愛は統一であり、絶對的普遍的統一としての人道である。教師と生徒との人格が、教師といひ生徒といふ如き名前や、名前にくつつく色々の聯想を一洗して、全一的に合體し、合體する所に流れる力が教育である。教育とは高い所から、威嚴の眼で生徒を見おろす働ではない。又感化しようとの自尊心から起る働でもない。感化とは愛から自然に出る、自然の結果である。はじめから感化といふことを考へたら、それだけ不純の分子が混る。純眞とはただ無關心の愛のみが要求し得る特權である。人格の感化といふ使ひふるしの言葉は、故に、教育を說くには、まだ大いに足りない所がある樣に思はれてならない。第三に愛は又教育の原動力である。教育の目的は愛であるが、此の愛は、教師自身が眞理に對し、道德に對し、美に對して熱愛を抱く所に始めて成立する。愛が果して、私の考へたやうに全きを求める心であるとすれば、教師の眞善美に向かへる愛に合一するものは、自ら、眞善美に對する生徒の愛でなければならぬ。火を燃やすものは火である。愛は愛によりてのみ起される。眞理を愛し得ない教師は、生徒に眞理を迫る何の權利も何の口實も持たないであらう。述べ來つた所を一言に約めると、教育の條件は眞善美に向かへる教師の純眞な愛である、教育の方法は愛による人格的合一である。子供の教師は自ら子供の心になり、青年の教師は自ら青年の心になり、ここに彼我の全一を求むる働、この働を私は教育と名づけたい。子供の心になり青年の心になることを卑下とかんがへるやうな人は、正しく「愛」に面して立つことを恐るる人である。それだけ教育に對し、熱の足りない人である。（篠原助市氏著「批判的教育學の問題」）

明瞭であると同時に熱意を有し且品位の高い論説文である。かうした文の前には、我々は自然に頭の下るのを覺える。透徹した論理と教育に對する熱愛とが、そのまま嚴肅なる論說文の形式に生み出されたところの文章である。その主張なり斷定なりが、讀者を動かして實踐的熱意に燃立たしむることが論說文の目的であるとするならば、この文例の如きは、まさに本格的論說文の最高位に置かるべきものの一つであらう。

一三　菊池寛氏

菊池氏のは、今までのところ初のうちが面白い。私は「無名作家の日記」や「葬式に行かぬ譯」や「忠直卿行狀記」などを讀んで、この作家が初から手一杯に筆を揮つてゐるのを感じた。私自身が處女作以來長い間、筆が萎けてもどかしくてならなかつたことを思ひ出し、また他の作家の初期の作品が多くはさうであるのを考へて、菊池氏が初から、持つてゐるだけのものを、臆面なく自在に出してゐることに興味を寄せた。名人左團次が、少年時代の松助の藝を見て、「この小僧おれの前ででも、氣おくれしないで、手一杯に藝をやり居る。」後世おそるべしと言つたさうである。菊池氏も初から當時の文壇で怯けないで技を演じた。

私はダルマの描かれた安つぽい扇子を先輩の家に置忘れたり、大切な紹介狀の上に湯屋歸りの濕れ手拭を

置いて汚したりして心を苦しめてゐる初期の作者のそそつかしい愛嬌に興味を感じ、意氣盛にして四面に敵をうけて闘つてゐる近來の作者にも興味を感じてゐる。文壇對社會の問題について、氏はこれまでも力を入れこれからも力を注ぐであらう。その點では他に類がない。しかし、此處では、私は實際家としての氏を觀察しようとするのではなくつて、我々の心に何等かの藝術的刺戟を與へて呉れる作家としての菊池寛を見てゐるのである。上演された新作家の戯曲をあまり見たことのない私も、氏の作品は、「父歸る」「義民甚兵衞」「玄宗の心持」の三つを見た。どれも新味をも有つてゐるので面白かつた。簡單明瞭で分りやすいし、人間のある心理が手易く見物の胸に響くやうに現されてゐるから、今日の青年などには喜ばれる筈だ。地震前のある年、新富座の立見場で、ある舊劇を見てゐたら、そこの物賣婆さんが、知人に向かつて、「父歸る」を、も一度見たいと言つて、その芝居に非常に感動したらしい口吻で話をしてゐた。後でこの芝居を見た私は、「成程、これなら婆さんにも分る筈だ。」と思つた。岡本綺堂氏から菊池寛氏。舊劇跋扈の劇場へ、新しい空氣を注いだ氏の功績は、誰でも認めなければならない。（正宗白鳥氏著「文藝評論」）

これは、文藝批評でもあり、同時に人物評論でもある。何れにしても批評である。元來、批評といふことは、かなりむづかしいことであるが、この文の如きは、極めて平易であり明瞭であり、そして何人をもうなづかせる文である。

論説的文章は、別の言葉でいへば、批評的文章であり、人生・社會・文化等に對する一つの批評である。隨つて、論説的文章を書くに當つては、正しき批評的態度に立つことが最も重要であるがゆゑ

に、この項を終るに至り、極く簡單に批評の意義を述べて置かうと思ふ。

普通に我々が日常、批評なる語を使用する際に於ては、多くは否定的の意味が加はつてゐる。たとへば、「あの男は、人の批評ばかりしてゐる。」とか、「かげで、かれこれ批評するのは男らしくない。」とかいふ場合の如きは、非難とか非議とかあらさがしとか揚足取とかの否定的な意味が多分に含まれてゐる。文藝批評の歴史に徴しても、世の批評家なるものは、多くはその對象について、その缺點を見出し、そのあらをさがし出して、攻撃的の言葉を多く用ひて來てゐる。その目的は、いふまでもなく、正しき文藝への希求にあらうけれども、さうした批評的態度は決して正しいとは言へない。我が國の文壇などでも、往々ゴシップめいた低級な批評が試みられてゐるが、それは、文壇のためにも決して慶賀すべき現象ではなからう。眞の批評（criticism）は、マッシュウ・アアノルドの言つてゐるやうに、「この世に知られまたは考へられたる最良のものを、最も公平に知り且普及せしむる」にある。すなはち、正しき批評とは、對象をそのあるがままに正しく觀察し、そして、その價値ある部分または美點を、一般に普及することでなければならぬ。それによつて、人生・社會・文化の向上を目指すのが批評家の任務である。價値あるものを價値あるものとして明示するためには、時に、對比的に、價値のないものを價値のないものとして引合に出す場合もあらうが、批評の性質は、どこまでも、對象をあるがままに見るといふことであり、むしろその長所を見出すことにある。論説的文章は、この正しき批評的精神に立たざる限り、眞の論説的文章とはなり得ないであらう。

第四章　小說的文章

ここに、小說的文章といふのは、あらゆる種類の小說または物語文學の文章の謂である。

小說はいふまでもなく文學があり創作である。隨つて、ここに、文學とは何ぞやといふ大きな問題に逢着するのであるが、本書の性質上さうした問題についての詳論は許されない。さしあたり、文學の定義を下すならば、「文學とは、作者の想像・感情・趣味等を通して構成され若しくは取扱はれたる內容が、文字によつて平易に且興味的に表現されたものである。」といへる。すなはち、文學の內容は、實際あつたままの事實ではなくして、作者の主觀によつて構成されるか、または實際にあつた事實が作者の主觀を通して取扱はれたものである。さうして、かかる內容もただ胸中に藏せられるだけではまだ文學とはなり得ない。それが文字によつて表現されることによつてのみ、はじめて文學となり得る。しかも、その表現は、一般の人々に分りやすく、そして興味的でなければならぬ。分りやすいといふことと、興味的といふことは、文學的表現には缺くべからざる要素である。

而して、その文學的內容の構成または表現の樣式によつて、文學にはさまざまの種類が生ずる。詩

歌・小說・戲曲などがそれであるが、小說とは、一口にいへば、「作者の想像によつて構成され若しくは取扱はれたる人生的事件の表現である。」といへる。いつ、だれか、どこで、どうしたか――これが人生的事件である。歷史の書物や新聞の三面記事の如きは、人生的事件をあらはした文章であるが、しかし、それは想像によつて構成され若しくは取扱はれたものではない。まれに筆者の想像的分子が加はつたにしても、それは本質的のものではない。しかし、小說はさうではない。故坪內逍遙博士が、「およそ小說と實錄とはその外貌につきて見ればすこしも相違なきものたり。ただ、小說の主人公は實錄の主と同じからず、全く作者の意匠に成りたる假空假虛の人物たるのみ。」（小說神髓）といつてゐるのはそれである。ただに、主人公のみにあらず、そこに描かれてゐる人生的事件もまた作者によつて作り出されたものである。たとひ、客觀的事實に題材をとつたにしても、事實そのままでは小說ではない。よし、殆ど事實そのままだとしても、その事實だけをとりあげたところに、旣に歷史や三面記事と異なるものがある。小說は、いはば人生の繪畫である。畫家は全く想像によつて描き出すこともあり、或一定の場面を寫生することもある。しかし、その寫生せんとする場面は、畫家の美術眼または趣味に合した一定の場面である。それとひとしく、小說家の描き出した事實も、たとひそれが客觀的に存在した事實であつても、その事實は作者の藝術眼または人生觀によつて取上げられたる一つの事實である。

小說の目的は、東西の多くの學者がいつてゐるやうに、「人生の眞相を具體的に表現する」にある。

そこで小說家は、自己の人生觀を具體的に表現するために、想像的に事實を構成し、或は實際的事實をとつてそのうちに自己の人生觀を盛らうとする。たとへば「源氏物語」の如きは前者に屬し、作者の人生觀たる「もののあはれ」を具現するために、假虛の人物たる源氏の君を主人公とし、それに幾多の假虛的人物を配して描き出したものであり、「平家物語」の如きは後者に屬し、源平二氏の盛衰興亡の史的事實を題材として、作者の人生觀たる佛教的無常觀を具體的に表現せんとしたものである。

小說の目的たる「人生の眞相」を具現するに當り、作者の個性や性格や人生觀を異にするにつれ、甲の作者の題材と乙の作者の題材とが著しく傾向を異にし、また、たとひ同一の題材を取扱つても、その仕組や描寫が著しく異なるのは當然である。そこに、おのづから、奇傳的小說と寫實的小說との區別をも生じ、ロマンチシズムとリアリズムとの相違をも生じて來る。それゆゑに、抽象的に、また理論的に、小說の題材はかくかくのところに求むべきであるとか、小說はかかる仕組によるべきであるとかいふことは絕對にいへるものではない。そのことは、すでに總論でも述べて置いた。

しかし、總論でも述べてあるやうに、その題材は人間の精神生活にとつて何等かの價値を有するものでなければならぬ。價値といつても、それは決して道德的價値だけを意味するものではなく、ひろく人生的價値を意味する。古來、小說は、主として人間の感情生活を描き、讀者の感情に訴へようとするものであると稱せられて來た。本居宣長は、「玉の小櫛」で左の如く述べてゐる。

扨物語は物のあはれをしるすを旨としたるに、そのすぢにいたりては儒佛の教にそむけることも多きぞかし。そはまづ人の情の物に感ずる事には善惡邪正さまざまある中に、道理にたがへる事には感ずまじきわざなれども、情は我ながら我が心にも任せぬことありて、おのづから思ひがたきふし有りて感ずることあるものなり。

すなはち、小說の本旨は「もののあはれ」を寫すにあり、「もののあはれ」は儒佛などの宗教的または道德的教訓にそむく場合すらあるところの人間の感情であるといふのである。坪内博士も、「小說神髓」の中で、殆ど右と同一の趣旨を述べてゐる。

人情の奧を穿ち所謂賢人はさらなり、老若男女善惡正邪の心のうちの內幕をば洩らす所なく描きいだし周密精到人情をば灼然として見えしむるを我が小說家の務とするなり。

やはり小說は、人間の感情を寫し出すものであるとの見方である。しかし、小說は人生の眞相を表現しようとするものであるから、單に人間の感情だけではなく、そこには人間の理性も描かれるであらうし、社會批評も入つて來ようし、經濟上の理論すらも入つて來るであらう。今日の小說の如きは、ただ「もののあはれ」を寫すとか、「男女の心の內幕」を描き出すとかいつただけでは不可能で、中には殆ど哲學や社會學の本を讀むやうな感じのする、いはば、理智的な、頭の痛くなるやうな小說すらある。そして、それがかへつて立派な小說だといはれる場合すらある。けれども、小說の本質はや

つぱり主として讀者の感情に訴へるところに在ることは、古今東西を通じてかはらないであらう。さうして、それによつて、人と人とを感情的に結合せしめようとするところに小說の目的がある。それは、ちやうど、科學が人々の間に眞理の共通の世界をつくりださうと志すのと同じことである。

小說の仕組も、他の種類の文章とひとしく、力めて統一を保つといふ點にある。とりわけ、小說は他の文章と異なり、物語文學の性質として著しく長篇になるのが通例であるから、特に統一といふことが重要な問題となつて來る。ややもすれば、前後が錯綜して筋が通らず、人物の性格描寫が前と後でかはつて來たりして、途中で讀者をして投出させてしまふやうな場合が生ずるのは、主として仕組に於ける失敗による。坪内博士は、

小說を綴るに當りて最もゆるがせにすべからざることは、脈絡通徹といふ事なり。脈絡通徹とは、篇中の事物巨細となく互に脈絡を相通じて、相隔離せざることをいふなり。（小說神髓）

といつてゐる。隨つて、出來事があまりに繁に過ぎたり、人物を餘りに多く出し過ぎたりしては、脈絡がみだれ、をさまりがつかなくなる。この點が、小說構成の主要點であらう。

小說は、前にも述べたごとく、いつ、だれが、どこで、どうしたかといふことを描くものであるから、その文章の要點は、およそ左の四點に歸着するであらう。

第一、過去の時代のことか、現代のことか、それがはつきり描かれてゐなければならぬ。時代錯誤

に陷らぬやうに、描寫上のこまかい注意が必要になつて來る。また、春か夏か秋か冬かがはつきりしてゐなければならぬ。季節錯誤に陷らぬやうにいろいろの注意が必要になる。また、夜か晝か朝方か夕方かなども、場合によつては示されねばならぬ。つまり、「時」が明瞭に描き出さなければならぬ。

第二、篇中の各人物の個性や性格や人生觀が、讀者に明瞭に理解されるやうに表現されねばならぬ。とりわけ、主人公または副主人公たるべき人物に至つては、それが最も重要である。つまり、小說中の各人物は一人一人個性的に生きてゐなければならぬ。馬琴の八犬傳に於ける八犬士の如く、どれもこれも同じやうな性格では意味をなさぬ。

第三、都會であるか田舍であるか、關東か關西か、汽車の中か船の上か、室內か屋外か、山か野か、川の岸か海のほとりか、つまり「場所」がはつきり描かれてゐなければならぬ。その爲には、地理的觀察や、敍景的手法が必要になつて來る。

第四、事件が如何に複雜してゐようと、こみ入つてゐようと、前にも述べたやうに、そこには一貫した脈絡がなくてはならぬ。事件は、人物と人物との思想・感情・意志・行爲の交涉であり、同時に作者の人生觀・世界觀の表現であるがゆゑに、それは小說的文章に於ける中核をなすものである。隨つて、前の第一・第二・第三の各要素も結局はこの一項に含まれるといつてよい。事件は多く會話または說明によつて描寫されるが、とりわけ、會話で表現される場合が多い。隨つて、會話は小說的文章に於て最も技術を要する點である。素人か玄人かは、會話をちよつと見ただけでも大抵分るもので

ある。眞に、その人物の個性や性格や人生觀にぴたりとあてはまる會話、すなはち、いかにもその人らしいものの言ひ方でなくては小說にならない。

如何なる種類の文章でもさうであるが、小說も、特に、讀者の程度や性質を考慮して表現されることがある。特に一般大衆を對象とするもの、または婦人を對象とするもの、少年・少女を相手とするものといふ風に、いろいろに分れる場合がある。それによつて、それぞれ大衆小說とか婦人小說とか、少年小說・少女小說などの名稱も生じて來る。勿論、特殊の讀者といふものを考慮せず、純藝術的立場に於て表現する小說もある。そして、それが本當の小說だともいはれてゐる。しかし、小說といふものは、だいたい一般大衆によつて讀まれるものであつて、純藝術的立場といふものが、若し特殊の純藝術家とか純文學者とか、または或特定の知識階級とかだけを對象とするものであるならば、さういふ小說は、如何に藝術的であらうとも結局は高踏的であり一般人にはわけの分らない存在に終るであらう。だから、小說の文章は、他の文章でもさうであるが、より以上の要求に於て、どこまでも平易であり且興味的でなければならぬ。

小說的文章の具體的說明に入る前に、これから小說をかかうとする人にとつて、いくらか參考にならうと思はれるから、小說家と年齢との關係について少しく述べて置かう。德田秋聲氏は、「創作講話」の中で次のやうに述べてゐる。

觀る、描く、——といふ氣分になつて初めて小說を書くことが出來る。年をとつて經驗を積むに從つて、薄れゆく感情と反比例に、理智の光が輝き出す。今迄は、唯感情のゆくに任せて、現實といふ事は顧みなかつた。そして空想にのみ走るといふ風であつたが、ここに至つて、初めて天上に馳せた瞳を足下に落して、自分の周圍を顧み、また自分といふものを省みるやうになる。熱した心が覺め、動き搖れた心がしづまると、其の時始めてあるがままの現實をはつきりと眼に寫す事が出來るやうになるのだ。そこで觀る、描く、といふ氣分になる。ここ迄來れば小說が書けるのだ。

たしかに、かうもいはれるのであつて、紫式部が源氏物語を書いたのは、藤原宣孝に嫁し一女を擧げ、夫に死別してから後のことである。西鶴が俳諧を捨てて小說に轉向したのは、四十を過ぎてからであり、夏目漱石や有島武郎などの人々も、大學教授をやめてから、四十を越してから、小說家となつた人々である。ところが、明治・大正年代の作者を見ると、ぐつと年齡が低下して、二葉亭四迷にせよ、尾崎紅葉にせよ、樋口一葉にせよ、大抵は二十代で大家になつてゐる。武者小路・谷崎・菊池・久米等の諸氏にしても、また、なくなつた芥川龍之介にしても、その傑作は多く初期の二十代の作品にあるやうである。だから、小說家と年齡との關係といつても、時代により、またその人の天分により、決して一樣にはいへないのである。永井荷風氏は、「小說作法」の中で左のごとく述べてゐる。

小說をかかんと志すものにおのづから二種の別あるが如し。其の一は十七八歲まだ中學に通ふ頃世に流布

する小說を讀み行く中自分もいつか小說かいてみたくなり筆を執り初め、次第に興を得、やがて學業の進むにつれ遂に確乎として此の道に志すに至るもの、其の二は既に高等專門の學業を卒へ、志定りて後感ずる事ありて小說を作るものなり。櫻痴福地先生は世の變遷に經綸の志を捨て、遂に操觚の人となりぬ。柳浪廣津先生は三十を越えて後初めて小說を書きし由聞きたる事あり。夏目漱石先生は帝國大學の教授を辭して小說家となりし事人の知る所なり。

また、次のやうにも言つてゐる。

學歷なんぞはどうでもよきものなれど今日の大學は明治中頃の尋常中學位の程度のものになり下りたれば、まづ何事をなすにも學士若しくはそれに相應する教育を受けてより後の事なり。

もちろん、情熱の火が消え、憧憬の念の薄らいだ者に小說の書ける筈もないが、さりとて、情熱と憧憬だけでも小說は書けない。天才は別として、本當に後世に殘る名作といふやうなものは、相當の學問と人生の深い經驗と絕えざる藝術的精進とによつてのみ生ずるものであらう。年少にして、ちよつと才氣のある小說の一つ二つも書いて、「われ世に勝てり」などと、安價に思ひ上つてしまつたのでは、行く先は腦病院と、大抵相場がきまつてゐる。何事もさうであるが、小說をかかうと思ふ人も、決してあせつたり、虛名を博さうなどと考へてはなるまい。

以下、具體的の文例について、小說的文章の手法を學ぶこととするが、だいたい年代順に、明治・

大正・昭和三代に於ける代表的作品の一節を掲げ、文章を學ぶと同時に、一面に於ては、文體の變遷や小説界の展開をうかがふ資料とする。

一 お勢

此の物語の首に、ちよいと噂をした事のあるお政の知己、須賀町のお濱といふ婦人が、近頃に娘をさる商家へ緣づけるとて、それを吹聽かたがた、その娘をつれて、或日お政をたづねて來た。娘といふのは、お勢に一つ年下で、容色は少し劣る代り、遊藝は一通り出來て、それでゐて、おとなしく、愛想がよくて、お政にいはせれば、如才の無い娘で、お勢にいはせれば、舊弊な娘。お勢は大嫌ひ、母親が贔屓にするだけに、なほ一層此の娘を嫌ふ。但しこれは、普通の勝心のさせる業ばかりではなく、此の娘のお蔭で、をりをり高い鼻を挫られる事もあるからで。緣づけると聞いて、お政は羨ましいと思ふ心を、少しも匿さず、顏はおろか、口へまで出して、事々しく慶びを陳べる。娘の親も親で、慶びを陳べられて、一層得意になり、さも誇貌に婿の財產を數へ、または支度に費つた金額の總計から內譯まで、こまごまと計算をして聞かせれば、聞く事毎にお政は且驚き且羨んで、果は、どうしてか、婚姻の原因を娘の行狀に見出して、これといふのも、平生の心掛がいいからだ、と口を極めて賞める。嫁る事が何故其樣に手柄であらうか。お勢は猫が鼠を捕つ

た程にも思つてゐないのに！　それを其の娘は、恥づかしさうに、俯向きは俯向きながら、己も仕合はせと思ひ顏で、高慢は自ら小鼻に現れてゐる。見てゐられぬ程の醜態を極める！　お勢は固より羨ましくも妬ましくもあるまいが、ただ己一人で、さう思つてゐる許りでは、滿足が出來んと見えて、をりをりさも苦々しさうに、冷笑つてみせるが、生憎誰も心づかん。そのうちに、母親が人の身の上を羨むにつけて、我が身の薄命を歎ち、何處かの人が、親を蔑にして、更にいふことを用ひず、何時身を極めるといふ考も無い、とて苦情をならべ出すと、娘の親は、失敬な、なに此の娘の姿色なら、ゆくゆくは「立派な官員さん」でも夫に持つて、親に安樂をさせることであらう、といつて、嘲るやうに高く笑ふ。見やう見眞似に、娘までが、お勢の方を顧みて、これもまた嘲るやうに、ほほと笑ふ。お勢はおそろしく赤面して、さも面目なげに俯向いたが、十分も經たぬうちに、座敷を出てしまつた。我が部屋へ戻つてから、はじめて、後ればせに憤然となつて、「一生、お嫁になんぞ行くもんか。」と奮激した。（二葉亭四迷「浮雲」明治二十一年）

母娘二組、四人の人物の性格が、あざやかに描寫されてゐる。主人公は明治の新文明を呼吸した、いはば當時の新しい女たるお勢、それに配するにお勢の母親お政と、舊弊なお濱母娘。作者は、お勢の性格描寫に重きを置いてゐることは勿論であるが、お勢をあざやかならしめるために、他の三人の性格を、こまかく殆ど科學的に觀察し描寫してゐる。内田魯庵氏は、「文學に對して二葉亭ほど眞劍なのは無い。二葉亭の人生に對するや、實驗室に於ける科學者とひとしく、一々精密なる實驗をして數學的に證明しなければ納得しなかつた。『浮雲』第二篇は即ち其の實驗報告書で、當時或人は恰も

地層の斷面を見るやうだと評した。」と述べてゐる。この文例は、その「浮雲」の第二篇で、二葉亭の二十五歳の時、すなはち明治二十一年に出版されたものである。これが、明治時代の新しい小說の、いはば、そもそも濫觴ともいふべきものであつた。ことに注意すべきは、二葉亭が確乎たる自覺と信念のもとに、口語體で書いてゐることである。「浮雲」第一編の「はしがき」に曰く、

薔薇の花は頭に咲いて活人は蠹となる世の中獨り文章而已は黴の生えた陳奮翰の四角張りたるに頬返しをつけかね又は舌足らずの物言を學びて口に涎を流すは拙し是はどうでも言文一途の事だと思ひ立つては矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ來るどさくさ紛れお先眞闇三寶荒神さまと春のや先生を頼み奉り欽硯に朧の月の雫を受けて墨摺流す空のきほひ夕立の雨の一しきりさらさらさつと書流せばアラ無情始末にゆかぬ浮雲めが艶しき月の面影を思ひがけなく閉ぢこめて黒白も分かぬ烏夜玉のやみらみつちやな小說が出來しぞやと我ながら肝を潰して此の書の卷端に序するものは　明治丁亥初夏　二葉亭四迷

春廼屋先生すなはち坪內逍遙の「小說神髓」が出たのは明治十八年、二葉亭は逍遙について學び、小說神髓の主張をそのまま「浮雲」に具現せしめた。かくして、明治小說界はここにスタートを切つたのであるが、文體の方からいふと、二葉亭以外の作家は、まだ容易に文語體を捨て得なかつた。さすがに、二葉亭の偉さがしのばれる。

二　如是相

名物に甘き物ありて、空腹に須原のとろろ汁、殊の外妙なるに、飯幾杯か滑り込ませたる身體をこのまま寢さするも毒とは思へど爲る事なく、道中日記註け終ひて、のつそつしながら煤びたる行燈の横手の樂書を讀めば、山梨縣士族山本勘介大江山退治の際一泊と禿筆の跡、さては英雄殿もひとり旅の退屈に閉口しての御わざくれ、をかしき許りかあはれに覺えて、初對面から膝をくづして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微かなる埋火に脚を烘り、つくねんとして櫓の上に首投げかけ、うつらうつらとなる所へ此方をさして來る足音しとやかなる踵に皹裂きらせしさき程の下女ならず、御免なされと襖越しのやさしき聲に胸ときめき、爲かけた欠伸を半分噛みて何とも知れぬ返辭をすれば、唐紙するすると開き、丁寧に辭儀して、冬の日の木曾路、嘸や御疲に御座りませうが、御覽下され、これは當所の名譽花漬、今年の夏のあつさをも越して今降る雪の眞最中、色もあせずに居りまする梅・桃・櫻のあだくらべ、御意に入りましたら陰膳を信濃へ向けて人知らぬ寒さを知られし都の御方へ御土産に、と心憎き愛嬌言葉、商賣の艶とてなまめかしく、賣物に香を添ふる口のききぶりに利發あらはれ、世馴れて澁らず、さりとて輕佻にもなきとりなし、持ち來りし包、靜かにひらきて、二箱三箱差出す手つきのしをらしさに、花は餘所になりてうつつなく覗き込む此方の眼を避けて背向くる顏、折から隙洩る風に燈火動きて明らかには見えざるにさへ隱れ難き美しさ。我折れ深山に是は

何物。（幸田露伴氏「風流佛」明治二十二年）

これが、幸田露伴の出世作「風流佛」の一節である。主人公は今年二十四、佛像彫刻の修業を思ひ立ち、汽車のある世に、わざと木曾路から奈良へと旅を志すのである。この文例は、木曾路の須原の宿に泊つた夜の情景である。若い藝術修業者の一人旅、つれづれの宿の一室に、名もゆかしさ名物「花漬」を賣りに來たなまめかしき一麗人、「我折れ深山に是は何物」と、讀者を釣つて置き、さてその佳人の來歷は明晩のおたのしみとしたところ、さすがに――と思はせられる。但し、かうしたスタイルは、最早、文學史の一頁をかざるだけのものとなつてしまつた。これが、露伴の二十三歳の時の筆である。

三　お力

さる雨の日のつれづれに表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉へずば此の降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂にすがり、何うでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌よき身の一德、例になき仔細らしきお客を呼入れて二階の六疊に三味線なしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれて其の次は親もとの調べ、士族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民かと問へば何うでござんせうかと答ふ、そんなら

華族と笑ひながら聞くに、まあ左様おもうて居て下され、お華族の姫様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無作法な置きつぎといふが有るものか、それは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の作法、疊に酒のまする流儀もあれば、大平の蓋であふらする流儀もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰の極りでござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよいよ面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄じい物語があるに相違なし、ただの娘あがりとは思はれぬ何うだとあるに、御覧なさりませ、未だ鬢の間に角も生えませず、其のやうに甲羅を經ませぬとてころころと笑ふを、左様とぼけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が言へずば目的でもいへとて責める。むづかしうござんすね、いうたら貴君びつくりなさりましよ、天下を望む大伴の黑主とは私が事とていよいよ笑ふに、これは何うもならぬ其のやうに茶利ばかり言はで少し眞實の處を聞かしてくれ、いかに朝夕を噓の中に送るからとてちつとは誠も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと眞に成つて聞かれるにお力かなしくなりて、私だとて人間でござんすほどに少しは心にしみる事もありまする。親は早くになくなつて今はほんの手と足ばかり、此様な者なれど女房に持たうというて下さるも無いではなけれど未だ良人をば持ちませぬ、何うで下品に育ちました身なれば此様な事して終るのでござんしよ、と投出したやうな詞に無量の感溢れてあだなる姿の浮氣らしきに似ず一節さむらふ樣子の見ゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな別品さんではあり、一足とびに玉の輿にも乘れさうなもの、それとも其のやうな奥様あつかひ蟲が好かで矢張り傳法肌の三尺帶が氣に入るかなと問へば、どうで其處らが落でござりましよ、此方で思ふやうなは先様が嫌なり、來いといつて下さるお人の氣に入る筈もなし、浮氣のやうに思召しませ

うが其の日送りでござんすといふ。（樋口一葉「にごりえ」明治二十七年）

前身にいはくありさうな菊の井のお力、無理に引張込んだ山高帽のお客に問はれるままに、一言二言、はてはかなり本氣になつて、しんみりと身の上話。作者自身が女性だけに、女性の心理を、そして言葉を、描き出して眞に迫つてゐる。勿論、今日のスタイルから見ると、隔世の感があるが、これが一葉の二十三歳の時の作である。文體でも分る通り、露伴に倣つた西鶴張りのものである。

四　波多野十郎

我もはじめよりして斯かりしにはあらず、はじめ我は最も正直なりき。世の人はこれに對して何とか言ひたる。人は我を目して欺きよしとせり。はじめ我は最も善良なりき。人は我を目して愚なりとせり。はじめ我は最も溫厚なりき。人は我を目して意氣地なしとせり。我は人に交るに德を以てしぬ。人は其の德を利用してただ自己の利を計れり。我は人に交るに義を以てしぬ。人は其の義を奪ひ取つて遠く逃去れり。我は人に輕んぜられたり、卑しめられたり、嘲られたり、踏付けられたり。それは何等の故にもあらず、唯我が善人たるが故なりき。

初め我は大いに富みたりき。能あり才あり智ある人々は蟻の如くに我が家に集り來れり。日として時とし

て我が家は多くの賓客と食客との影を絶ちし事なかりき。彼等が交を求むる事の切なる、其の時の我が一言の招きには猛火の中をも辭せざりしならん。彼等が言葉はいと巧みなり、彼等が禮はいと恭し。彼等は皆我を喜べり、我を慕へり、我を好めり。されど彼等の多くは皆齎なきものなりき。我が餘れる財を散ずるに吝ならざる、彼等が請ふがままに與へもし貸しもする事を決して惜しまざりき。かくて稍久しかりける後、彼等は一人去り、二人去り、三々五々、果は殘りなく一時に跡を絶ちぬ。其の時我には既に明日の食もなかりき。我が恩と信とに對して、彼等が酬いたるものはそもそも何ぞ。空になりたる我が財布と更に夥しき負債なり。其の他のものを求めたれど何もあらざりき。

我が窮迫と困苦との、其の後を言はんとすれども言ふに堪へず。さしも我が惠みに與れる幾多の人々の中に、一人として我を顧みんとするものなく、一人として我を厭はざるものもなし。曩の巧笑は變じて嘲罵となり、曩の面從は全く惡意となりぬ。彼等は在りし世より我を逐うて未だ飽きたりとせず、尙も進んで我を葬らんとせり。

然り、何故に我はかくまでの憂目を見ねばならぬかを、我は殆ど解釋するに苦しみぬ。此の時なりき、眼を放つて仔細に我と人とを比べたるは此の時なりき。我の以て善とするところのものと、人の以て善とするところのものと、甚だしき相違あることを我は遂に見出しぬ。

驚くべし、つくづく見來れば如何なる世ぞ。滔々たる無數の人類中、我はただ私利の肉塊を見るより外に何をも見る事能はざりき。彼等が所謂善といひ仁といひ德といひ義といひ忠といひ信といひ孝といふもの、何者かこれ彼等が敵に備ふる精鋭なる武器ならざる。彼等が所謂宗教とは如何なるものぞ。彼等が所謂道德

とは如何なるものぞ。此等は悉く彼等が自家保護の機關ならずや。世を擧げて皆僞れり、凄じく衒へり。或者は自ら僞れる事を知らず、或者は更に僞り、僞れる上を僞る。彼等は自己の心靈を汚せり。彼等は他の心靈を無視せり。我はただ彼等の强者が盛に暴威を振るふを見き。彼等の優者が飽くまで我意を逞しうするを見き。

我は彼等に敎へられたり。我は素より進んでかかる世を救はんとする大德にあらず、又退いて道を守らんとする隱賢にもあらず。我は人間なり。我は寧ろ我等の優者が爲すところを學ぶべし。ここに於て、我は彼等が以て本尊とするところの其の利を尊みたり。彼等が以て手段とするところの其の智を敬したり。斯くして我は新なる世界に入れり。斯くして我は遂に盜賊となれり。（川上眉山「うらおもて」明治二十八年）

これは、德行家として知られた波多野十郎が、我が娘靜子の嫁げる勝彌の家に深夜ひそかに忍び込んで、貴重品の入つた手文庫を盜み出したが、勝彌と娘とに發見された時、二人を前にして述べた言葉である。かくて、十郎は、「我は志を翻せり。庶幾くは今よりして、其の善惡を超越したる一歩高き人となる事を得べきか。」と、謎の一言を殘し、爆然たるピストルの音と共に自ら生命を絕つた。しかし、ピストルの煙の下には、一通の書があつた。それは、勝彌にあてて、我が娘靜子を愛してくれといふことが認めてあつた。

西洋文明の影響か、人口の增加か、あるひは人々の意慾の增進か、はたまた、資本主義の擡頭か、とにかく、この頃から、甚だしい個人主義的の世相があらはれだした。作者は、かうした世相を一つ

の觀念の下に取扱はうとしたもので、當時、「觀念小說」の名で呼ばれたものである。娘と婿とを前にしての、主人公の述懷は、今日から見ると極めて不自然なものではあるが、當時の文體と、作者の人生觀とを知る意味に於て掲げたのである。當時、觀念小說と呼ばれたものに、右の他に、眉山の「書記官」鏡花の「夜行巡査」「外科室」「高野聖」などがあつた。

五　貴船伯爵夫人

夫人の面は蒼然として、

「どうしても肯きませんか。それぢや全快つても死んでしまひます。可いから此の儘で手術をなさいと申すのに。」

と眞白く細い手を動かし、辛うじて衣紋を少し寛げつつ、玉の如き胸部を顯し、

「さ、殺されても痛かあない。ちつとも動きやしないから、大丈夫よ。切つても可い。」決然として言放てる、辭色ともに動かすべからず。さすが高位の御身とて、威嚴あたりを拂ふにぞ、滿堂齊しく聲を呑み、高き咳をも漏らさずして、寂然たりし其の瞬間、先刻より些とも身動きだもせで、死灰の如く見えたる高峯、輕く身を起して椅子を離れ、

「看護婦、刀を。」
「ええ。」と看護婦の一人は、目を瞠りて猶豫へり。一同ひとしく愕然として、醫學士の面を瞻る時、他の一人の看護婦は少しく震へながら、消毒したる刀を取りてこれを高峰に渡したり。
醫學士は取ると其のまま、靴音輕く歩を移して、つと手術臺に近接せり。
看護婦はおどおどしながら、
「先生、このままでいいんですか。」
「ああ、可いだらう。」
「ぢやあ、お押さへ申しませう。」
醫學士は一寸手を擧げて、輕く押留め、
「なに、それにも及ぶまい。」
謂ふ時疾く其の手は既に病者の胸を掻開けたり。夫人は兩手を肩に組みて身動きだもせず。かかりし時、醫學士は誓ふが如く、深重嚴肅なる音調もて、
「夫人、責任を負うて手術します。」
時に高峰の風采は一種神聖にして犯すべからざる異樣のものにてありしなり。
「どうぞ。」と一言答へたる夫人が蒼白なる兩の頰に刷けるが如き紅を潮しつ、じつと高峰を見詰めたるまま、胸に臨める鋭刀にも眼を塞がむとはなさざりき。
と見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、さと白衣を染むるとともに、夫人の顏は舊の如く、いと

蒼白くなりけるが、果せるかな自若として、足の指をも動かさざりき。
ことのここに及べるまで、醫學士の擧動脫兎の如く神速にして聊か間なく、伯爵夫人の胸を割くや、一同は素より彼の醫博士に到るまで、言を挾むべき寸隙とてもなかりしなるが、ここに於てか、わななくあり、面を蔽ふあり、背向になるあり、或は首を低るるあり、余の如き、我を忘れて、殆ど心臟まで寒くなりぬ。
三秒にして渠が手術は、ハヤ其の佳境に進みつつ、刀骨に達すと覺しき時、
「あ。」と深刻なる聲を絞りて、二十日以來寢返りさへも得せずと聞きたる夫人は、俄然機械の如く、其の半身を跳起きつつ、刀取れる高峯の右手の腕に兩手を確と取縋りぬ。
「痛みますか。」
「否、貴下だから、貴下だから。」
かく言ひかけて伯爵夫人は、がつくりと仰向きつつ、凄冷極りなき最後の眼に、國手をじつと瞻りて、
「でも、貴下は、貴下は私を知りますまい！」謂ふ時おそし、高峯が手にせる刀に片手を添へて、乳を下深く搔切りぬ。醫學士は眞蒼になりて戰きつつ、
「忘れません。」
其の聲、其の呼吸、其の姿、其の聲、其の呼吸、其の姿。
伯爵夫人は嬉しげに、いとあどけなき微笑を含みて高峯の手より手をはなし、ばつたり、枕に伏すとぞ見えし、脣の色變りたり。其の時の二人が狀、恰も二人の身邊には、天なく、地なく、社會なく、全く人なきが如くなりし。（泉鏡花「外科室」明治二十八年）

いはゆる觀念小說と呼ばれたものである。この物語の主人公たる貴船伯爵夫人は、夫たる伯爵に嫁して一子をあげたが、今や病になやみ、高峯醫學士の勤務する某病院で手術を受ける身となつた。彼女は、伯爵に嫁ぐ前に、醫學生であつた高峯とひそかに相知つた。それが今、その人の手で手術を受けるといふのである。病院では手術の爲に魔醉劑をすすめる。夫の伯爵も兄の侯爵も共にそれをすすめるが、夫人は「私はね、心に一つの秘密がある。魔醉劑は譫言をいふと申すから、それが恐くつてなりません、どうぞもう、眠らずにお療治が出來ないやうなら、もうもう快らんでも可い、よして下さい。」といつて、どうしてもきかない。それで、魔醉劑を用ひないで手術を行ひ、高峯醫學士の手から刀をとつて自ら乳の下を搔切つて絕命した。高峯もつづいて自殺した。作者は、かうしたことが人生にとつて許されるか許されないか――といふ一つの觀念の下にこの作を世に問うたのである。「語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。」と結んでゐる。眞劍な態度である。が、二人の間のことについては、何等の說明も描寫もない。唯、高峯が學生の頃、小石川の植物園でちらりと令孃姿の彼女を見たことだけしか言つてゐない。二人の間のことは、讀者の想像にまかせるといふのであらうが、「でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい！」といふ夫人、「忘れません。」といふ高峯、この會話から見ても、二人の間はさう大したものではないらしい。それが、殆ど心中にひとしい死に方をする。かうしたところに、まだ何となく明治時代初期の小說の或「あまさ」といふやうなものが感ぜられる。

六 吉里

吉里は今しも最後の返辭をして、わつと泣出した。西宮はさびたの煙管を拭ひながら、戰へる吉里の島田髷を見詰めて術なさうだ。燭臺の蠟燭は心が長く燃出し、油煙が黑く上つて、燈は暗し數行虞氏の淚といふ風情だ。

吉里の淚に咽ぶ聲が稍途切れた處で、西宮はさびたを拭つて居た手を止めて口を開いた。

「私や氣の毒で耐らない。實に察しる。これで、平田も心殘りなく故鄕へ歸れる。私も心配した甲斐があるといふものだ。實に有難かつた。」

吉里はなかば顏を上げたが返辭をしないで、懷紙で淚を拭いてゐる。

「他の事なら何とでもなるんだが。一家の浮沈に關する事なんだから、どうも平田が歸鄕らない譯に行かないんでね、私も實に困つて居るんだ。」

「家君さんが何故御損なんか爲すつたんでせうねえ。」

と、吉里は矢張り淚を拭いて居る。

「何故つて、手違だから詮方がないのさ。家君さんが氣拔の樣になつたといふのに、幼稚い弟はあるし、妹はあるし、お前まんも知つてる通り、母君が死去のだから、どうしても平田が歸鄕つて、一家の仕法をつ

けなければならないんだ。平田も可哀相な譯さ。」
「平田さんがお歸郷なさると、皆さんが樂にお成りなさるんですか。」
「さうは行くまい。大概の事ぢや、中々樂に爲るといふ譯には行かなからう。それで、急に又出京るといふ目的もないから、お前さんにも無理な相談をしたやうな譯なんだ。先日來の樣にお前さんが泣いてばかり居ちや、談話は出來ないし、實に困りきつてゐたんだ。これで私もやつと安心した。實に有難い。」
吉里は口にこそ最後の返辭をしたが、心には未だ諦めかねた風で、深く考へてゐる。
西宮は注ぎ置きの猪口を口へつけて、
「おお冷たい。」
「おや、濟みません、氣がつかないで。ほゝほゝほ。」
と、吉里は淋しく笑つて銚子を取上げた。眼千兩といはれた眼蓋が腫れて赤くなり、紅粉はあはれ涙に洗ひ去られて、一時間前の吉里とは見えぬ。（廣津柳浪「今戸心中」明治二十九年）

「深刻小說」と呼ばれた作品の一つである。吉原の娼妓吉里のところへ通ひつめてゐた平田といふ當時のインテリ階級の男があつた。たぶん、もう切上げようと思つたのであらう、友人の西宮に頼んで「やむを得ないことで郷里岡山へ歸るから、思ひ切つてくれ。」といはせる。それが右の文例である。吉里はどうしても平田を思ひ切ることが出來なかつた。が、平田はもう手紙一本よこさなかつた。吉里のところへは、平田の通ひはじめた頃から、善吉といふ職人風な男が通ひつめてゐたが、吉里は

ふりむきもしなかつた。しかし、平田に去られた彼女は、つひにその善吉と一所に、今戸の橋場寄りのあたりから隅田川に投じて心中したのであつた。どうにもならぬ人間の運命の一面を深刻に描いたものである。「翌年の一月末、永代橋の上流に女の死骸が流れ着いたとある新聞紙の記事に、お熊が念の爲に見定めに行くと、顏は腐爛つて其ぞとは決められないが、着物は正しく吉里が着て出た物に相違なかつた。」實に深刻な暗い場面である。柳浪の作には、右の他に、「變目傳」「黑蜥蜴」などの深刻小説がある。人生の苦勞をしぬいた、すいもあまいもかみわけた人の筆だけあつて、じりじりと讀者の胸に迫つて來るものがある。また、右の文例でも分るやうに、ここで漸く口語體があらはれた。二葉亭の「浮雲」以來である。そして、その會話や描寫の自然さは、殆ど今日の作品と異ならない清新味をもつてゐる。

七　熱海の海岸

「嗚呼、私は如何したら可からう！　若し私が彼方へ嫁つたら、貫一さんは如何するの、それを聞かして下さいな。」

木を裂く如く貫一は宮を突放して、

「それぢや斷然お前は嫁く氣だね！　是迄に僕が言つても聽いてくれんのだね。ちえ腸の腐つた女！姦婦!!」

其の聲と與に貫一は脚を擧げて宮の弱腰を礑と踢たり。地響して横樣に轉びしが、なかなか聲をも立てず苦痛を忍びて、彼はそのまま砂の上に泣伏したり。貫一は猛獸などを擊ちたるやうに、彼の身動きも得爲ず弱弱と僵れたるを、なほ憎さげに見遣りつつ、

「宮、おのれ、おのれ姦婦、やい！　貴樣のな、心變をしたばかりに間貫一の男一匹はな、失望の極發狂して、大事の一生を誤つて了ふのだ。學問も何も最う廢だ。此の恨の爲に貫一は生きながら惡魔になつて、貴樣のやうな畜生の肉を啖つて遣る覺悟だ。富山の令……令夫……令夫人！　もう一生お目には掛からんから、其の顏を擧げて、眞人間で居る內の貫一の面を好く見て置かないかい。長々の御恩に預つた翁さん姨さんには一目會つて段々の御禮を申し上げなければ濟まんのでありますけれど、仔細あつて貫一は此の儘長の御暇を致しますから、隨分御達者で御機嫌よろしう……宮さん、お前から好く然う言つておくれ。よ、若し貫一は如何したとお訊ねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の晚に氣が違つて、熱海の濱邊から行方知れずになつて了つたと……。」

宮は矢庭に蹶起きて、立たんと爲れば脚の痛に脆くも倒れて効無きを、漸く這寄りて貫一の脚に縋りつき、聲と涙とを爭ひて、

「貫一さん、ま……ま……待つて下さい。貴方これから何……何處へ行くのよ。」

貫一は有繫に驚けり。宮が衣の披けて雪可羞しく露せる膝頭は、夥しく血に染みて顫ふなりき。

「や、怪我をしたか。」
寄らんとするを宮は支へて、
「ええ、此麼事は管はないから、貴方は何處へ行くのよ。話があるから今夜は一所に歸つて下さい。よう、貫一さん、後生だから。」
「話が有れば此で聞かう。」
「此ぢや私は可厭よ。」
「ええ、何の話が有るものか。さあ此を放さないか。」
「私は放さない。」
「剛情張ると蹴飛ばすぞ。」
「蹴られても可いわ。」
貫一は力を極めて振斷れば、宮は無慙に伏轉びぬ。
「貫一さん。」
貫一ははや幾間を急ぎ行きたり。宮は見るより必死と起上りて、脚の傷に幾度か仆れんとしつつも後を慕ひて、
「貫一さん、それぢやもう留めないから、もう一度、もう一度……私は言遺したい事がある。」
遂に倒れし宮は再び起つべき力も失せて、唯聲を頼みに彼の名を呼ぶのみ。漸く朧になれる貫一が影の一散に岡を登るが見えぬ。宮は身悶して猶呼續けつ。旋て其の黑き影の岡の頂に立てるは、此方を目戍れる

ならんと、宮は聲を限りに呼べば、男の聲も遙かに來りぬ。

「宮さん！」

「あ、あ、あ、貫一さん！」

首を延べて眴せども、目を瞪りて眺むれども、聲せし後は黑き影の搔消す如く失せて、其かと思ひし木立の寂しげに動かず、波は悲しき音を寄せて、一月十七日の月は白く愁へぬ。

宮は再び戀しき貫一の名を呼びたりき。（尾崎紅葉「金色夜叉」明治三十一年）

紅葉山人は、決して「月が、月が……」などと新派劇に出て來る貫一のやうなセリフをつかつてはゐない。どうしたものか、金色夜叉は餘りに通俗化せられてしまつた。しかし、それだけに、多くの讀者があつたことを物語る。地の文だけを文語體で書いてゐるが、これはまだ、口語體が確立しなかつた時代だからである。

八　離別か非か

母は頻りに烟る葉卷を灰に葬りつつ、少し乘出して、

「喃、武どん、餘い突然ぢやから卿は仰天するな尤つごあすがの、此の母は最早此まで幾晚も幾晚も考

へた上の話ぢや。その積で聞いてたもらんといけませんぞ。其アもう浪にはわたしも別に此といふ不足はなし、卿も氣に入つとる事ぢやから、何も此方の好きで離縁のし申すぢやごあはんがの、何をいうても病氣が病氣——」

「病氣は快い方に向いてるです」武男は口早にいひて、屹と母の顏を仰ぎたり。

「まあわたしの言ふ所を聞きなさい。——其は目下の所ぢや惡くないかも知らんがの、わたしはよウく醫師から聞いたが、此の病氣ばかいは一時よかつてもまた惡くなる、暑さ寒さですぐまた起るもんぢや、肺結核で全快なつた人はまあ一人もない、醫師が其樣いひ申すぢやての。假令浪が今死なんにした所が、其の內また屹度惡くなッは保證ぢや。其の內には屹度卿に傳染すッな此保證ぢや。喃武どん、卿に傳染る、子供が出來る、子供に傳染る。浪ばかりぢやない、大事な主人の卿も、の、大事な家嫡の子供も、肺病持なつて、死んでしまうてみなさい、川島家はつぶれぢやなッかい。宜えかい、卿が阿爺の丹精で折角此程になつて、天子樣から御直々に取立てて下さつた此の川島家も卿の代で潰れッしまひますぞ。——其は、も、浪も可哀相、卿も中々痛か。わたしも親で居つて此ういふ事いひ出すな面白くない。辛いがの、何をいうても、病氣が病氣ぢや、浪が可哀相ぢやて主人の卿には代へられン、川島家にも代へられン。よウく分別のして、此は一つ思ひ切つてたもらんとないませんぞ」

默然と聞き居る武男が心には、今日見舞來し病妻の顏歷々と浮かみつ。

「阿母、私は其樣な事は出來ないです」

「何故？」母はやや高聲になりぬ。

「阿母、今其樣な事をしたら、浪は死にます！」
「其は死ぬかも知れん。ぢやが、武どん、わたしは卿の命が惜しい、川島家が惜しいのぢや！」
「阿母、其樣私を大事になさるなら、何卒私の心を汲んで下さい。此樣な事を言ふのは異な樣ですが實際私には其樣な事は如何しても出來ないです。まだ慣れないものですから其は色々屆かぬ所はあるですが、併し阿母を大事にして、私にもよくして吳れる、實に罪も何もない彼女を病氣したからつて離別するなんぞ、如何しても私は出來ないです。肺病だつて癒らん事はありますまい、現に癒りかけとるです。設令また癒らずに、如何しても死ぬなら、阿母、何卒私の妻で死なして下さい。病氣が危險なら往來も絕つです。でも離別丈は如何あつても私は出來ないです――」
「へゝゝゝ、武男、卿は浪の事ばつかい言ふがの、自分は死んでも構はンか、川島家は潰しても宜えかい？」
「阿母は私の身體ばつかり仰有るが 其樣な不人情な不義理な事して長生したツて如何しますか。人情に背いて、義理を缺いて、決して家の爲に宜い事はありません、決して川島家の名譽でも光榮でもないです。如何でも離別は出來ません、斷じて出來ないです」
　難關ある可しとは期しながら、思ひしよりも烈しき抵抗に出會ひし母は、例の癇癖のむらむらと胸先にこみあげて、額のあたり筋立ち、蟀谷動き、煙管持つ手のわなわなと震はるるを、やうやく押ししづめてわづかに笑を裝ひつ。（德富蘆花「不如歸」明治三十一年）

地の文を文語體で書いたり、ぎごちない、むづかしい漢字を當てたりしてゐるところなどは、時代

でやむを得ないが、さすがに描寫に會話に、讀者をひきつける力をもつてゐる。「不如歸」は通俗小說だといはれてゐる。しかし、小說といふものは、元來が通俗的に一般大衆を讀者とする性質のものである。恐らく、「不如歸」の如きは後世に殘る小說の一つであらう。

九　運命

高橋信造は此處まで話して來て忽ち頭をあげ、西に傾く日影を愁然と見送つて苦惱に堪へぬやうであつたが、手早く杯をあげて一杯飮みほし、

「この先を委しく話す勇氣は僕にはありません。事實を露骨に手短に話しますから、それ以上は貴方の推察を願ふだけです。

高橋梅、即ち僕の養母は僕の眞實の母、生みの母であつたのです。妻の里子は父を異にした僕の妹であつたのです。如何です、是が奇しい運命でなくて何としませう。斯くの如きをも原因結果の理法といへばそれまでです。けれども、かかる理法の下に知らず知らず此の身を置かれた僕から言へば、此の天地間にかかる殘酷なる理法すら行はるるを怨みます。

先づ如何して此等の事實が僕に知れたか、其の手續きを簡單に言へば、母が鎌倉に來てから一と月後、僕

は訴訟用で長崎にゆくこととなり、其の途中山口・廣島なとへ立寄る心組で居ましたから、見舞かたがた鎌倉へ來て母に此の事を話しますと、母は眼の色を變へて、山口などへ寄るなと言ひます。けれども僕の心には生みの父母の墓に參る積りでありますから、母には可い加減に言つて置いて、遂に山口に寄つたのです。

豫て大塚の父から聞いて居たから寺はすぐに分りました。けれども僕は馬場金之助の墓のみ見出だして、死んだと聞いた母の墓を見ないので、不審に思つて老僧に遇ひ、右の事を訊ねました。尤もただ所緣のものとのみ、僕の身の上は打明けないのです。すると老僧は馬場金之助の妻お信の墓のあるべき筈はない。彼の女は金之助の病中に、碁の弟子で、町の豪商某の弟と怪しい仲になり、金之助の病氣は其のため更に重くなつたのを氣の毒とも思はず、遂に乳飲兒を置去りにして驅落して了つたのだと話しました。

老僧は猶も父が病中母を罵つたこと、死際に大塚剛藏に其の一子を託したことまで語りました。

其のお信が高橋梅であるといふことは、誰も知らないのです。僕も證據は持つて居ませんけれども、老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が卽ちそれであることを確信したのです。

僕は山口ですぐ死んで了はうかと思ひました。彼の時、實に彼の時、僕が思ひ切つて自殺して了つたら、寧ろ僕は幸ひであつたのです。

けれども僕は歸つて來ました。一つは何とかして確な證據を得たいため、一つは里子に引寄せられたのです。里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹として里子を考へることは如何しても出來ないのです。（國木田獨歩「運命論者」明治三十五年）

自分の生みの母とは知らずに、その家に養子として入り、父を異にする妹と知らずに結婚したといふ、惡魔の運命に操られて苦しんでゐるのが、この小說の主人公高橋信造である。彼は、その苦悶をまぎらすために、鎌倉の海岸の砂山の中にブランデーの瓶を埋めて置いて、人知れずそこへ行つては、蒼い海面を眺めながら、强烈なブランデーをあふつてゐるのである。それを見た或一人に「絕對に秘密をまもつてくれ」と念を押して、自分の身の上を語るのがこの小說である。隨つて、この小說は、殆ど獨演に終始してゐる。が、題材が題材であり、文が平明であるために、讀者は吸込まれるやうに主人公の氣味の惡い述懷に引込まれてしまふのである。スタイルからいつても、殆ど今日のそれと變つてゐない。もうこの頃、明治三十五年頃には口語體は完全に確立された。

一〇　園子

部屋に這入ると、直樣大きな決心を得たものの如く、一封の書狀——それには、斷然教師の職を辭する旨を、甚だ簡單に記しつけて、早速水澤校長の許に使を馳らしたが、それから、三日たつた後、園子は富子に向かつて、少しも臆する色なく、あらゆる事實を打明けた。そして、斯ういふ事を宣言したのである。

自分は富子が言ふやうに、この世間がいひ囃す汚い地獄の中に、安心して自分の信ずる道に進む事が出來

るやうになつた。以前の如く、單に世間の毀譽のみを慮る結果、强ひて其の行を淸くしようとしたやうな笑ふべき事は全く改めて、何等の束縛もなき自由自治の、この樂園の中にあつて、心から滿足した美しい生涯を送つて行くであらう。ああ！　自分は全く過つて居たのである。自分が今迄一點の過失なく、能く道德の繩張中に這入つて居たのは、心から德を好んで居たのではなく、全く世の譏りを心配したからの事であつた。然るに、今は、もう全く富子と同じやうな自由の身體になつて、已に破られた肉體の操はもはや保つの要なく貞操と德行とを看板に世渡りする地位からは、其の身を逃れ得た。今は如何なる汚行も自身を欺く事はないのである。ああ！　實に、人は此の自由自在なる全く動物と同じき境涯にあつて、而して能く美しき德を修め得てこそ始めて不變不朽なる讚美の冠を、其の頭上に戴かしむる價値を生ずるのである！　否始めて人たる名稱を許さるるのである！（永井荷風氏「地獄の花」明治三十五年）

この小說は、我が國に於ける自然主義的小說の先驅をなしたものだといはれてゐる。某私立女學校の教師であつた園子は、その止宿してゐる某邸の娘富子（この人は某氏に嫁いだが自分から離別して家へ歸つてゐる）に、いろいろと新しい人生觀を吹込まれ、ことに教育者の虛僞的生活を攻擊せられて、それにやや共鳴し出し、さてはクリスチャンと稱する笹村といふ僞紳士に欺かれたり、自分の奉職してゐる學校の校長に後妻に望まれたりして、いよいよ新しい人生觀に目覺め、斷然辭表を提出して、これから「自由自在なる全く動物と同じき境涯にあつて」本當の人間として生きようと、猛然たる勇氣をもつて新しい生活へのスタートを切らうといふのである。これが明治三十五年のことである。

かくして日露戰爭を境として、自然主義の小說は、澎湃として我が國の文壇に漲るに至つた。

一一　パナマ帽

所へ主人が、いつになく餘り八釜敷いので、寢つき掛かつた眠りをさかに扱かれた樣な心持でふらふらと書齋から出て來る。「相變らず八釜敷い男だ。折角好い心持に寢ようとした所を」と欠伸交りに佛頂面をする。「いや御目覺めかね。鳳眠を驚かし奉つて甚だ相濟まん。併したまには好からう。さあ坐り給へ」と、どつちが客だか分らぬ挨拶をする。主人は無言の儘座に着いて、寄木細工の卷煙草入から「朝日」を一本出してすぱすぱ吸始めたが、不圖向かふの隅に轉がつて居る迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買つたね」といつた。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差出す。「まあ綺麗だ事。大變目が細かくつて柔かいんですね」細君は頻りに撫で廻す。「奥さん、此の帽子は重寶ですよ。どうでも言ふ事を聞きますからね」と拳骨をかためてパナマの横つ腹をぽかりと張りつけると、成程意の如く拳程な穴があいた。細君が「へえ」と驚く間もなく、今度は拳骨を裏側へ入れてうんと突張ると釜の頭がぽかりと尖がる。次に夫は帽子を取つて鍔と鍔とを兩側から壓潰して見せる。潰れた帽子は麵棒で延した蕎麥の樣に平たくなる。夫を片端から席でも卷く如くぐるぐる疊む。「どうです此の通り」と丸めた帽子を懷中へ入れて見せる。「不思

議です事ねえ」と細君は歸天齋正一の手品でも見物して居る樣に感歎すると、迷亭も其の氣になつたものと見えて、右から懷中に收めた帽子をわざと左の袖口から引張り出して「どこにも傷はありません」と元の如くに直して、人さし指の先へ釜の底を載せてくるくると廻す。もう休めるかと思つたら最後にぽんと後へ投げて其の上へ堂つさりと尻餅を突いた。「君、大丈夫かい」と主人さへ懸念らしい顏をする。細君は無論の事心配さうに「折角見事な帽子を若し壞しでもしちやあ大變ですから、もう好い加減になすつたら宜う御座んせう」と注意をする。得意なのは持主丈で「所が壞れないから妙でせう」と、くちやくちやになつたのを尻の下から取出して其の儘頭へ載せると、不思議な事には、頭の恰好に忽ち回復する。「實に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでせう」と細君が愈〻感心すると「なにどうもしたんぢやありません。元から斯ういふ帽子なんです」と迷亭は帽子を被つた儘細君に返事をして居る。

「あなたも、あんな帽子を御買ひになつたらいいでせう」と暫くして細君は主人に勸めかけた。「だつて苦沙彌君は立派な麥藁の奴を持つてるぢやありませんか」「所があなた、先達て子供があれを踏潰してしまひまして」「おやおや、そりや惜しい事をしましたね」「だから今度はあなたの樣な丈夫で綺麗なのを買つたら善からうと思ひますんで」と細君はパナマの直段を知らないものだから「是になさいよねえ、あなた」と頻りに主人に勸告してゐる。（夏目漱石「吾輩は猫である」明治三十八年）

苦沙彌夫妻と迷亭と三人揃つたところを引用してみたのである。「猫」の中へ出て來る人物で、迷亭は少しふざけすぎるといふ批評もあるが、しかし、迷亭が出て來なくては、やつぱり面白くない。

それはとにかく、何といつても「猫」は絶世の傑作であらう。こんなことをいふと、笑はれるのかも知れないが、私は、正直のところ、明治時代の小說で、いつの世にも多くの讀者をもつ作品は、何といつても「金色夜叉」と「不如歸」と「吾輩は猫である」の三篇であらうと思つてゐる。

一二　丑松

蓮華寺を出たのは五時であつた。學校の日課を終ると、すぐ其の足で出掛けたので丑松はまだ勤務の儘の服裝で居る。白墨と塵埃とで汚れた着古しの洋服、書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱へて、それに下駄穿、腰辨當、多くの勞働者が人中で感ずるやうな羞恥――そんな思を胸に浮かべながら、鷹匠町の下宿の方へ歸つて行つた。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群つて居た。中には立ちとゞまつて丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそひそ立話をして居るのもある。「彼處へ行くのは、ありやあ何だ――むゝ敎員か」と言つたやうな顏付をして、酷しい輕蔑の色を顯して居るのもあつた。是が自分等の預つて居る生徒の父兄であるかと考へると、淺猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になつてすたすた歩き始めた。本町の雜誌屋は近頃出來た店、其の前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くやうに張出してあつた。かねて新聞の廣告で見て、出版の日を樂しみにして居た「懺悔錄」――肩に猪子

蓮太郎氏著、定價までも書添へた廣告が目につく。立ちどまつて、其の人の名を思ひ出してさへ、丑松はもう胸の踴るやうな心地がしたのである。見れば二三の靑年が店頭に立つて、何か新しい雜誌でも獵つてゐるらしい。丑松は色の褪せたズボンの衣嚢の内へ手を突込んで、人知れず銀貨を鳴らしてみながら、幾度か其の雜誌屋の前を往つたり來たりした。兎に角、四十錢あれば本が手に入る。しかし其を今茲で買つて了へば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。轉宿の用意もしなければならぬ。斯ういふ思想に制せられて、一旦は往きかけてみたやうなものの、やがてまた引返した。ぬつと暖簾を潜つて入つて、手に取つて見ると――それはすこし臭氣のするやうな、粗惡な洋紙に印刷した、黃色い表紙に「懺悔錄」としてある本、貧しい人の手にも觸れさせたいといふ趣意から、わざと質素な體裁を擇んだのは、この書の性質をよく表して居る。ああ、多くの靑年が讀んで知るといふ今の世の中に、飽くことを知らない丑松のやうな年頃で、どうして讀まず知らずに居ることが出來よう。知識は一種の饑渇である。到頭四十錢を取出して、欲しいと思ふ其の本を買求めた。なけなしの金とはいひながら、精神の慾には替へられなかつたのである。（島崎藤村氏「破戒」明治三十九年）

自然主義的傾向の作品の一だといはれてゐる。しかし、ここに引用したのは、藤村の代表作たる「破戒」の文章を見るのが主目的である。信州の飯山――越後に近い、或小さな淋しい城下町――に、特殊な階級に生まれた丑松が敎員として赴任してゐる。下宿を轉々としてかへるのも、自分の身許が知れさうになるからであつた。彼の父からは、「絕對に秘密を守れ」と嚴命されてゐるし、彼も秘密

にしてゐるのだが、どうかすると、嗅出されさうになる。そこに、丑松の苦悶があつた。彼は、宗教に讀書に眞劍な精神生活を續けてゐる。ここに引用したところだけでも、丑松のその態度の一面がはつきりとうかがはれる。技巧らしいところの微塵もない、實に自然のままの手法である。自然主義そのものはどうであらうと、文章道からいへば、かうした自然のまま、ありのままの、すらりとした平明な文章を開拓してくれた點に對して、我々は、自然主義に十分の敬意を表してよいであらう。

一三　竹中古城

彼は名を竹中時雄といつた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出來て、新婚の快樂などはとうに覺め盡くした頃であつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作(ライフワーク)に力を盡くす勇氣もなく、日常の生活――朝起きて、出勤して、午後四時に歸つて來て、同じやうに細君の顏を見て、飯を食つて眠るといふ單調なる生活につくづく倦果(あきは)てて了つた。家を引越歩(ひつこしある)いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外國小說を讀み渉獵(あさ)つても滿足が出來ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の點滴、花の開落などいふ自然の狀態さへ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるやうな氣がして、身を置くに處は無いほど淋しかつた。道を歩いて常に見る若い美しい女、出來るな

らば新しい戀をしたいと痛切に思つた。

三十四五、實際此の頃には誰にでもある煩悶で、此の年頃に賤しい女に戯るるものの多いのも、畢竟その淋しさを醫するためである。世間に妻を離緣するものも此の年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅ふ美しい女教師があつた。彼は其の頃此の女に逢ふのを其の日其の日の唯一の樂しみとして、其の女に就いていろいろな空想を逞しうした。戀が成立つて、神樂坂あたりの小待合に連れて行つて、人目を忍んで樂しんだら何う……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したら何う……。いや、それ處ではない、其の時、細君が懷姙して居つたから、不圖難產して死ぬ、其の後に其の女を入れるとして何うであらう。……平氣で後妻に入れることが出來るだらうか何うかなどと考へて歩いた。神戸の女學院の生徒で、生まれは備中の新見町で、彼の著作の崇拜者で、名を横山芳子といふ女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取つたのはその頃であつた。竹中古城といへば、美文的小説を書いて、多少世間に聞えて居つたので、地方から來る崇拜渇仰者の手紙はこれ迄に隨分多かつた。やれ文章を直して呉れの、弟子にして呉れのと一々取合つては居られなかつた。だから其の女の手紙を受取つても、別に返事を出さうとまで其の好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、流石の時雄も注意せずには居られなかつた。年は十九ださうだが、手紙の文句から推して、其の表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文學に從事したいとの切なる願望、文字は走り書きのすらすらした字で、餘程ハイカラの女らしい。（田山花袋「蒲團」明治四十年）

自然主義的作品の一として名高い「蒲團」、その主人公竹中古城は、とうとう横山芳子を門人として東京へ呼んだ。さうして、いつの間にか二人の間には先生と弟子以外の感情が芽生えてしまつた。いや、芽生えたどころではない、「語り合ふ胸の轟、相見る眼の光、其の底には確に凄じい暴風が潜んで居たのである。機會に遭遇しさへすれば、其の底の底の暴風は忽ち勢を得て、妻子も世間の道德も師弟の關係も一擧にして破れて了ふであらうと思はれた。」と主人公は述懷してゐる。しかし、その凄じい暴風は潜んでゐたままで、つひに二人は表面上美しく別れてしまふ。男は芳子の去つたあとで、芳子の常に用ひてゐた蒲團を敷き、芳子の用ひてゐた夜着をかけ、なつかしい女の匂のする天鵞絨の襟に顏を埋めて泣いた——これが「蒲團」と題された所以である。このへんが自然主義をあざやかに發揮してゐるわけであるが、文章は實に自然で平明で近代的である。我々は、その文章を學べばよいのである。

一四　ヰタ・セクスアリス

金井湛君(かなゐしづかくん)は哲學が職業である。

哲學者といふ概念には、何か書物を書いてゐるといふことが伴なふ。金井君は哲學が職業である癖に、なん

にも書物を書いてゐない。文科大學を卒業するときには、外道哲學と Sokrates 前の希臘哲學との比較的研究とかいふ題で、餘程へんなものを書いたさうだ。それからといふものは、なんにも書かない。

併し職業であるから講義はする。講座は哲學史を受持つてゐて、近世哲學史の講義をしてゐる。學生の評判では本を澤山書いてゐる先生方の講義よりは、金井先生の講義の方が面白いといふことである。講義は直觀的で、或物の上に強い光線を投げることがある。さういふときに、學生はいつでも消えない印象を得るのである。殊に縁の遠い物、何の關係も無いやうな物を藉りて來て或物を說明して、聽く人がはつと思つて會得するといふやうな事が多い。

Schopenhauer は新聞の雜報のやうな世間話を材料帳に留めて置いて自己の哲學の材料にしたさうだが、金井君は何をでも哲學史の材料にする。眞面目な講義の中で、その頃青年の讀んでゐる小說なんぞを引いて說明するので、學生がびつくりすることがある。小說は澤山讀む。新聞や雜誌を見るときは議論なんぞは見ないで、小說を讀む。併し若し何と思つて讀むかといふことを作者が知つたら、作者は憤慨するだらう。藝術品として見るのでは無い。金井君は藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小說は此の要求を充たすに足りない。金井君には、作者がどういふ心理狀態で書いてゐるかといふことが面白いのである。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壯なとかいふ積りで書いてゐるものが、極めて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽の積りで書いたものが、却つて悲しかつたりする。

金井君も何か書いてみたいといふ考はをりをり起る。哲學は職業ではあるが、自己の哲學を建設しようなどとは思はないから、哲學を書く氣は無い。それよりは小說か脚本かを書いてみたいと思ふ。併し例の藝術

品に對する要求が高いために、容易に取りつけないのである。

そのうちに、夏目金之助が小說を書出した。金井君は非常な興味を以て讀んだ。そして技癢を感じた。さうすると夏目君の「吾輩は猫である」に對して、「吾輩も猫である」といふやうなものが出る。「吾輩は犬である」といふやうなものが出る。金井君はそれを見て、ついつい嫌になつてなんにも書けずにしまつた。

そのうち自然主義といふことが始つた。金井君は此の流儀の作品を見たときは、格別技癢をば感じなかつた。その癖面白がることは非常に面白がつた。面白がると同時に、金井君は妙な事を考へた。

金井君は自然派の小說を讀む度に、その作中の人物が、行住坐臥造次顚沛、何につけても性慾的寫象を伴なふのを見て、そして批評が、それを人生を寫し得たものとして認めてゐるのを見て、人生は果してそんなものであらうかと思ふと同時に、或は自分が人間一般の心理的狀態を外れて性慾に冷澹であるのでは無いか、特に Frigiditas とでも名づくべき異常な性癖を持つて生まれたのではあるまいかと思つた。さういふ想像は、Zola の小說などを讀んだ時にも起らぬでは無かつた。併しそれは Germinal やなんぞで勞働者の部落の人間が困厄の極度に達した處を書いてあるとき、或男女の逢引をしてゐるのを覗きに行く段などを見て、さう思つたのであるが、その時の疑は、なんで作者がさういふ處を、わざとらしく書いてゐるだらうといふのであつて、それが有りさうで無い事と思つたのではない。そんな事もあるだらうが、それを何故作者が書いたのだらうと疑ふに過ぎない。即ち作者一人の性慾的寫象が異常では無いかと思ふに過ぎない。小說家とか詩人とかいふ人間には、性慾の上には異常があるかも知れない。此の問題は Lormbrose なんぞの說いてゐる天才問題とも關係を有してゐる。Mabius 一派の人が、名のある詩人や哲學者を片端から摑まへて、精

神病者として論じてゐるのも、そこに根柢を有してゐる。併し近頃日本で起つた自然派といふものはそれとは違ふ。大勢の作者が一時に起つて同じやうな事を書く。批評がそれを人生だと認めてゐる。その人生といふものが、精神病學者にいはせると、一一の寫象に性慾的色調を帶びてゐるとでもいひさうな風なのだから、金井君の疑惑は前より餘程深くなつて來たのである。（森鷗外「キタ・セクスアリス」明治四十二年）

これは、ラテン語の「キタ・セクスアリス」と題するかなり長い短篇小説の書出しの一節である。作者は、この小説の主人公たる哲學者金井湛（かなゐしづか）をして、これから彼自身の半生の性的發達を描かしめてゐる。六つの時から、二十三四歳までの間に、主人公の生活の中から、性に關係のありさうな場面だけを思ひ出させて描かせてゐるであるが、それを「スバル」に載せたので雜誌は忽ち發賣禁止を命ぜられた。しかし、これは、當時の自然主義を小説で批評したものとも見られる、實に堂々たる作品で、後人の大いに學ぶべき幾多の教訓が含まれてゐる。その透徹した、すつきりした敍述振りは、さすがに學者であると同時に藝術眼の高い鷗外先生の作品であることを思はせる。ことに、題目をラテン語で示し、文中往々人名その他をドイツ語・フランス語のままで示してゐるが如きは、この小説の內容が內容であるだけに、相當教養ある讀者を豫想しての心構であらうと思はれる。

だから、發賣禁止の厄に會つたのは、作そのものが惡いのではなくて、當時の讀者がまだこの作品の眞意義を酌取るまでになつてゐないと、當局が解したからであらう。但し、小説のスタイルとしては餘りに論文的であり、また多少ペダンテックなところがあるのは惜しい點であらう。馬琴の八犬傳

などを讀んで、その衒學的(ペダンチツク)の場所にぶつかると、フンと鼻の先で笑ひたくなることがある。小說には、出來るだけ學問を見せびらかすことを避けねばならぬ。

一五　笹村とお銀

笹村の姿が、また古い長火鉢の傍へ現れた。お銀は笹村が朝飯をすましてから、新聞や雜誌やなどを當てがつておいて、長いあひだの埃の溜つた書齋の方へ箒を入れた。そして亂次(だらし)なく取亂(とりち)らかされたものを整理したり、手紙を選分(えりわ)けたりした。赭(あか)ちやけた疊に泌込むやうな朝日が窓から射込んで鬢毛(びんのけ)にかかる埃が目に見えるほど、冬の空氣が澄んでゐた。

笹村は落着いて新聞すら見てゐられなかつた。投り出されてあつた仕事も氣にかかつて來たし、打釋(うちと)けると直に相談相手にされる生活の事も頭に纏(まつは)つてゐた。仕事にかかる前に、何處かで一日氣輕に遊びたいやうな氣もしてゐた。

「今日はどこかへ行かうかな。」

笹村は變つた柄の手拭を姉さん冠にして、床の間を片づけてゐるお銀の後姿を入口から眺めながら呟いた。お銀は亡くなつた叔父の道樂をしてゐた時分に、方々で貰つた手拭を幾十本となく簞笥に持つてゐた。

「行つていらつしやいよ。」

お銀は、ばたばたと本にハタキをかけながら言つた。
「私も行きたいけれど……貴方何處へ入らつしやるの。私何か美しいものを食べたい、天麩羅か何か。——ねえ、坊だけつれて行きませうか。」
お銀は嫣然とした顔をあげた。
「私ほんとに暫く出ない。子供が二人もあつちや、なかなか出らませんね。」
「何なら出ても可い。」
笹村は緣側の方へ出て、澄切つた空を眺めてゐた。
「中濤で三人で食べなら、何のくらゐかかるでせう。私もしばらく食べてみないけれど……。」と考へてゐたが、直に氣が差して來た。
「ああ惜しい惜しい。——それよりか、もうすぐ坊のお祝が來るんですからね、七五三の……。子供には爲ることだけはしてやらないと罪ですから。」お銀は屈託さうに言出した。
そんな見積りをしてゐたことは、大分前から笹村も知つてゐた。
笹村は仲たがひしてゐた間のことが、一時に被さつて來たやうであつたが、これを明白やめさすことも出來なかつた。
笹村と一所に下町へ買物に出かけたお銀は、途中で手輕な料理屋を見つけてそこで夕飯を食べた。
「偶には外へ出るのも可ござんすね。」といつて、お銀は吻としたやうな顔をして、猪口に口をつけた。
「私こんな處を歩くのは幾年振だか。偶に來てみると髮や何か、女の樣子が山の手と全然違つてゐますね。」

お銀は長いあひだ違つた水に馴らされて來た自分の姿を振顧(ふりかへ)られるやうであつた。何時(いつ)女らしく着飾つたこともなしに笑つたり泣いたりしてゐるうち、もう二人の子の母になつた。四年の月日は、夢のやうに流れた。笹村と一所に此處で酒を飲んでゐるのも、不思議なやうであつた。

「前に來た時分からみると、ここの家も隨分汚くなりましたね。」お銀はちらちらするやうな目容(めつき)をした。

「磯谷とだらう。」

笹村は笑ひかけると、お銀も、

「いいえ。」といつて笑つた。

そこを出てから、二人はぶらぶら須田町のあたりまで歩いた。産後から體が眞實(ほんと)でないお銀は、電車に乘ると直に胸がむかついた。電車は暗い方から出て來て、明るい方へ入つたり出たりした。靑い火花が空に散る度に、お銀は頭腦(あたま)がくらくらするほど眼暈(めまひ)がした。

「私どうして此樣(こんな)に意氣地がなくなつたんでせう。」

お銀は可笑しさうに笑ひながら、笹村の手に掴つて漸(やつ)とレールを渡つた。（徳田秋聲氏「黴」明治四十四年）

笹村とお銀が夫婦になつたのは、いはば、ずるずると何かに引きずられて、好きでもないが厭でもないうちにお銀が姙娠したりしたからであつた。お銀は、笹村の下宿してゐた家の娘で、笹村と夫婦になる前には同じく下宿人であつた磯谷と少しの間同棲したことのある女である。かうした二人の結婚生活の或一日を寫したのが右の文例である。「黴」は漱石の推薦で「朝日新聞」に連載され、非常

な好評を博した、いはゆる自然主義的の作品である。平凡な人生を、本能的な愛慾生活を、ありのままに寫す――それが自然主義の異名であつたとさへ思はれる。この作は秋聲の文壇的地位を確保したもので、大正二年に出た「爛」に至り、自然主義的愛慾描寫の技巧神に入るとさへ評された。

一六　重吉

「如何です」と、矢澤の細君は何時ものやうに訊いた。

「お時ちやんですか」と、重吉はわざと田舍の姉の口吻を眞似て、「この頃は老婢と仲がよくなつて、二人で茶の間で何かしら、よく話してゐますよ」

「へえ。それは結構ですわ……お馴れになつたんでせう？」

「どうですか。……しかし調子が多少變りましたね。甘つたれた風がなくなつたし、言葉つきにも厭味が取れたし……」

「だから、次第によくなるんですよ。甲府へいらつしやる前は、私達隨分氣を揉みましたよ。貴方が詰らなささうな顔をしていらつしやるんだもの」

「今だつて詰つた譯ちやありませんがね」重吉は甘味も厭味も取れた時子は、今の所自分に障りにもなら

ねば、快い刺戟にもならぬやうな氣がした。で、「僕の所は夫婦別ありなんです、支那人もいい事を教へて吳れた」と笑つた。

「別々の部屋にお休みになるんですか」と、細君は老婢からそつと聞いたことを思ひ出した。

「さうでもありませんさ。だけど、どうも他所の娘を預つてるやうな氣がしますね」

「今にお子さんが出來たら違ひますよ」

細君は最早以前のやうに、乘出して時子の事を聞きたがりもしなくなつた。矢澤も最早忠告めいたことをいはなくなつて、重吉に知らせなかつた結婚前の內情などを昔話として、心安く話した。「おとくさんが先約があつて、あんな風になつた時分に、その埋合はせに製麻會社の娘を見つけたんだがね。先方で君の身持を調べて、頭から斷つて來たんだ。さういふ譯だつたから、君も大抵な所で、我慢したらいいと思つて、あんなに勸めたんだよ」と、重吉のよく知らない製麻會社重役の娘のことをも話した。その娘は一寸綺麗だがいやに鼻が大きかつたさうだ。

「身持がいいの惡いのといつて、僕はこれ迄傍でいふやうな放蕩者ぢやなかつたんだ。なれなかつたんだ。女に現をぬかしたこともないし、第一眞に面白いと思つたことはないんだから。だけど結婚後のこの頃からやうやう放蕩の味が多少分つたやうな氣がする。そりや放蕩をするかしないか知らんが、心持が放蕩者になつちやつた」かういつた重吉の調子にも崩れた心があらはれてゐた。

「男といふものは隨分勝手ですねえ」と、細君はその量見を解しかねた。

「しかしお時ちやんももう僕を離れられんでせうね。をかしなものだ。煙草臭くつたつて男の息はいいん

でせうね」（正宗白鳥氏「泥人形」明治四十四年）

この主人公の重吉は、矢澤夫妻の媒酌で、甲府の女學校を出たといふ時子を妻に娶つた。その後、重吉が矢澤の家へ行つた時の會話が右の文例である。重吉は相當の年輩にも達してゐた。七八年前から幾度か候補者と見合をしたこともあり寫眞などを見たこともあつた。しかし、向かふから駄目にしたり、こつちで氣乘がしなかつたりして、とうとうかなりの年輩に達した。田舎の女學校を卒業した時子を貰つたのは、何といふこともなしにそんな氣になつて貰つたのだが、少しも興味がなかつた。中年の初婚者である重吉が、結婚生活といふものに何のはりあひも見出さず「どうだつていいや」といつた氣分になつてゐる心理が極めてヴィヴィッドに描かれてゐる。自然主義的傾向の作品であり、秋聲の「黴」と同年に出てゐるが、殆ど同じやうな感じが同じやうな手法で表現されてゐる。かうした傾向の、どの作品にも共通な點は、ただ自然のありのままの人生が描かれてゐるといふだけで、人生の理想といふやうなものが少しも見られず、ややもすれば讀者をして懷疑的な淋しみに誘ふやうに感ぜられる。それが人生だといへばそれまでであるが、それにしても餘りに淋し過ぎる人生である。

一七 葉子

事務長は、綺麗な飾り紙のついた金口煙草の小箱を手を延ばして棚から取上げながら、
「どうです一本」
と葉子の前へさし出した。葉子は自分が煙草をのむかのまぬかの問題を彈き飛ばすやうに、
「あれはどなた？」
と寫眞の一つに眼を定めた。
「どれ」
「あれ」
葉子はさういつたままで指さしはしない。
「どれ」
と事務長はもう一度いつて、葉子の大きな眼をまじまじと見入つてからその視線を辿つて、暫く寫眞を見分けてゐたが、
「はああれか。あれはね私の妻子ですんだ。荊妻と豚兒共ですよ」
といつて高々と笑ひかけたが、ふと笑ひやんで、險しい眼で葉子をちらつと見た。

「まあさう。ちやんと御寫眞をお飾りなすつて、おやさしう御座んすわね」

葉子はしんなりと立上つてその寫眞の前に行つた。物珍しいものを見るといふ樣子をしてはゐたけれども、心の中には自分の敵がどんな獸(けだもの)であるかを見極(みきは)めてやるぞといふ激しい敵愾心が急に燃えあがつてゐた。前には藝者でもあつたのか、それとも良人の心を迎へる爲にさう造つたのか、何處か玄人じみた綺麗な丸髷の女が着飾つて、三人の少女を膝に抱いたり側に立たせたりして寫つてゐた。葉子はそれを取上げて孔のあくほどじつと見やりながら卓の前に立つてゐた。ぎごちない沈默が暫くそこに續いた。

「お葉さん」

(事務長は始めて葉子をその姓で呼ばずにかう呼びかけた) 突然震へを帶びた、低い、重い聲が燒きつくやうに耳近く聞えたと思ふと、葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きも出來ないやうに抱きすくめられてゐた。固より葉子はその朝倉地が野獸のやうな assault に出る事を直覺的に覺悟して、寧ろそれを期待して、その assault を、心ばかりでなく、肉體的な好奇心を以て待受けてゐたのだつたが、かくまで突然、何(なん)の前觸もなく起つて來ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥から起る貞操の防衛に驅られて、熱し切つたやうな冷え切つたやうな血を一時に體内に感じながら、抱へられたまま、侮蔑を極めた表情を二つの眼に集めて、倉地の顏を斜に見返した。その冷やかな眼の光は假初(かりそめ)な男の心をたじろがす筈だつた。事務長の顏は振返つた葉子の顏に息氣(いき)のかかる程の近さで、葉子を見入つてゐたが、葉子が與へた冷酷な眸には眼もくれぬまで狂(くる)はしく熱してゐた。(葉子の感情を最も強く煽り立てるものは寢床を離れた朝の男の顏だつた。一夜の休息にすべての精氣を十分に回復した健康な男の容貌の中には、女の持つ總べてのものを投

入れても惜しくないと思ふ程の力が籠つてゐると葉子は始終感ずるのだつた）葉子は倉地に存分な輕侮の心持を見せつけながらも、その顏を鼻の先に見ると、男性といふものの强烈な牽引の力を打込まれるやうに感ぜずにはゐられなかつた。息氣せはしく吐く男の溜息は霰のやうに葉子の顏を打つた。火の燃上らんばかりに男の體からは desire の焰がぐんぐん葉子の血脈にまで擴がつて行つた。葉子は我にもなく異常な興奮にがたがた震へ始めた。（有島武郎「或女」明治四十四年）

非常に猛烈な、そして、きはどい場面の描寫の一例としてあげたのである。かうした場面の描寫も、小說の文中には必要になつて來ることがあるであらう。が餘程藝術的手法といふことを考へないと、とんでもない失敗に終ることが多い。右の文例の如きは、そのきはどさが印象的に描かれてゐながら、少しも醜惡を感じさせないのである。そこに藝術の藝術たるところがあるのだ。說明はむづかしい。右の文例を、くりかへして讀んで、その呼吸をのみこむことが第一であらう。

一八　鼻

禪智內供の鼻といへば、池の尾で知らないものはない。長さは五六寸あつて、上脣の上から顋の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。いはば細長い腸詰のやうな物がぶらりと顏のまん中からぶら下つ

てゐるのである。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは專念に當來の淨土を渇仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが惡いと思つたからばかりではない。それよりも寧ろ、自分で鼻を氣にしてゐるといふ事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻といふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鋺の中の飯へとどいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向かふへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふといふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚔をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重な理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かういふ鼻をしてゐる禪智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合はせだといつた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし内供は、自分が僧である爲に幾分でもこの鼻に煩はされる事が少くなつたとは思つてゐない。内供の自尊心は、妻帶といふやうな結果的な事實に左右される爲には、餘りにデリケイトに

出來てゐたからである。そこで內供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。第一に內供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のゐない時に、鏡に向かつて、いろいろな角度から顏を映しながら、熱心に工夫を凝らしてみた。どうかすると、顏の位置を換へるだけでは、安心が出來なくなつて、頰杖をついたり頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも滿足する程、鼻が短く見えた事は、是まで一度もない。時によると、苦心すればするほど、却つて長く見えるやうな氣さへした。內供は、かういふ時には、鏡を筥へしまひながら今更のやうに溜息をついて、不承不承に又元の經机へ觀音經をよみに歸るのである。（芥川龍之介「鼻」大正五年」

さるほどに、禪智內供は、鼻を短くするために、いろいろの苦心をした。つひに、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませる法を試み、それに成功してとうとう鼻が短くなつた。けれども、それを見て、今まで長い鼻を見なれてゐても笑はなかつた人々までが、堪へられないやうに笑ふので、また、そろそろとまどひ出したが、或朝突然鼻が元のやうに長くなつた。「——かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。內供は心の中でかう自分に囁いた、長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。」と結んでゐる。愛慾の描寫ばかりが小說ではない。いや、この鼻も、それに關係がないとはいへないかも知れないが、一種のをかしみの中に、人生について、いろいろのことを考へさせられる藝術品である。夏目漱石が、この作品を讀んで、作者に「君がかかる作を十も書いたら、日本は勿論、世界で

もユニイクな作家の一人となるであらう。」といふ意味の激勵を與へたといふことである。徒然草に左の如き二篇である。

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、敎相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、煩はしくなりて、目・眉・額なんども腫れまどひて、うち覆ひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、ただ恐しく鬼の顏になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻になりなんどして、後は坊のうちの人にも見えず籠り居て、年久しくありて、猶煩はしくなりて死にけり。かかる病もある事にこそありけれ。

高倉院の法華堂の三昧僧、何某の律師とかやいふもの、ある時鏡を取りて顏をつくづくと見て、我が貌の醜くあさましきことを、あまりに心憂く覺えて、鏡さへうとましき心地しければ、その後長く鏡をおそれて手にだに取らず、更に人に交る事なし。御堂の勤ばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、ありがたく覺えしか。

この二篇と、芥川氏の「鼻」との間に何か關係がある、などといふのではない。ただ、芥川氏の「鼻」を讀んで、何とはなしに徒然草のこの二篇が思ひ出されるのである。しかし、芥川氏の「鼻」は、たしかに國文學的のかをり高い藝術品である。新しい見方や表現法を學ぶために、外國文學に接することは勿論必要であるが、そこから眼を轉じて古い國文學の上に移し、更に新しい生命を吹込ん

だ國文學的表現に立歸ることは、最も必要なことである。

この頃、すなはち大正五六年頃から、我が國の文壇には多くの新人が擡頭し、自然主義はいつしか沒落し、純文藝的立場に立つて、深く人間性を見詰める態度の作品がどしどしあらはれるやうになつた。この頃は、いはば一つの小さな文藝復興期を出現せしめたともいへる。そして、芥川氏は自ら早く生命を絶つてしまつたが、當時の新進作家は、すべて今日の文壇の重鎭となつてゐる人々である。

一九 白鳥の夢

午睡をして居る章三郎は、自分が今、夢を見て居る事を明らかに知つて居た。白い鳥が繻子のやうに光る翼をひろげて、彼の顔の上でばたばたと羽ばたきをして居る。どうかすると、其の羽ばたきが息苦しい程鼻先へ近寄つて、溶けかかつた春の沫雪のやうに淨く軟かい羽毛が折々彼の睫毛のあたりを爽かに掠めて居る。――「己は夢を見て居るのだな。」と、彼は幾度か夢の中で考へて居た。彼の意識は見る見るうちに痺れかかつて、甘い芳しい熟睡の底へうつらうつらと誘はれて行きさうになるが、少し心を引緊めると直にまた蘇生つて、腦髓の中を朦朧と照らすやうであつた。いはば彼は、睡りと目覺めとの中間の世界にさまよひながら、暫くの間覺め切らうとも眠り込まうとも欲しないで、成るべく現在の半意識の狀態に揺られて居たかつ

た。「自分は今、夢から覺めようとすれば覺めることも出來るのだ。」さう思ひながら、美しい白鳥の幻をぼんやり眺めて居ることが、不思議な喜と快さとを彼の魂に味はせた。

窓からさし込む初夏の眞晝の明りが、仰向きに臥て居る自分の眼瞼の上に輝いて、それが此のやうな白鳥の夢となつてゐる。あのばたばたと鳴る羽ばたきの音は大方風が吹くのであらう――さうまではつきり感じて居ながら、猶且夢を見て居られるのが、彼には非常に珍しい、特殊な經驗のやうに考へられて、自分のやうな病的な神經を持つ人間でなければ、容易に到達することの出來ない貴い境地であるかの如く樂しまれた。ひよつとしたら、彼は自分の自由意志で、思ふがままに好きな錯覺を作り出す能力がありはしないかと疑はれて、現在眼の前に浮かんで居る鳥の姿を更に妖艶な女の幻と擦り換へるやうに、次第次第に想念を凝らし始めた。すると暗黒な背景の奧へ鳥の形がだんだん薄く吸込まれて、ちやうど子供がおもちやに弄ぶシャボン玉のやうな、五彩の虹を湛へて、麗しい泡が無數にちらちらと湧上つて來たが、その中で一番大きな泡の面に奇怪極まる裸形の美姫が、いつしかまざまざと映り出して、風に揉まるる煙の如く飄々と舞ひながらさまざまな痴態を演じて居るのを、彼はたしかに見ることが出來た。

「有難い、有難い、己の腦髓は明らかに神秘な作用を備へて居るのだ。自分で勝手な夢を織出す能力を持つて居るのだ。己は夢の中で自分の戀人に會ふ事が出來るかも知れない。成らうことなら、己はいつまでも斯うやつて眠つたままで生きて居たい。……」しかし章三郎は、さう思つた瞬間にぱつちり眼をあいてしまつた。恰も子供が息を吹過ぎてシャボン玉を壞してしまつたやうな、取留めのない悲しみを覺えながら、一旦虚空へ飛び散つた幻の姿を取りかへすべく、彼はあわててもう一遍眼を潰つてみたが、美女も白鳥も遂に

再び彼を訪れて來さうもなかつた。

彼はものうげに身を起して、窓際に頰杖をつきつつ、夢の中に現れた幻の正體かと想はるる五月の空の雲のきれぎれを仰ぎ視た。夏らしい晴れ渡つた蒼穹には勇ましい南風が充ち滿ちて、ところどころに浮游する雲の塊を忙しさうに北へ北へと押流して居る。

「夢だの空だのはあれ程美觀に富んで居るのに、どうして己の住んで居る世の中は、こんなに穢いのであらう。」

さう考へると章三郎は、いよいよ今見た幻の世界が戀しくなつて、遣る瀨なさが胸に溢れた。（谷崎潤一郎氏「異端者の悲しみ」大正五年）

これは谷崎氏の文名を一世に高からしめた「異端者の悲しみ」の冒頭の一節である。この小說の主人公章三郎は masochist であると同時に小說家である。しかも、當時世間に流行してゐた自然主義の小說家とは全く傾向を異にした小說家である。「異端者」といふのは、章三郎の性格が、全然常人と異なつてゐるからである。この小說の終に「それから二た月程過ぎて章三郎は或短篇の創作を文壇に發表した。彼の書く物は、當時世間に流行して居る自然主義の小說とは、全く傾向を異にして居た。それは彼の頭に醱酵する怪しい惡夢を材料にした、甘美にして芳烈な藝術であつた。」と書いてある。そして、それは、そのまま谷崎氏の藝術を說明してゐることになるのである。氏の藝術は人も知る如く、氏の異狀な想像性から生み出されたる甘美にして芳烈なものである。

しかし、この文例でも分るやうに、氏の想像性は決して單なるファンタジーではなくて、そこには凝り性の藝術家が、一々據りどころをつきとめて構成せる夢――といつた趣がある。この主人公が午睡のうちでうつらうつらとふける夢は、實は太古の原始人が生み出した美しいロマンチックな物語、白鳥處女說話（the swan-maidens）すなはち羽衣傳說に根柢を有するものと思はれる。作者は十分にこの傳說の美しさやロマンス性を知つて居り、またこの解釋に關する一つの臆說までをも知つてゐるのである。白鳥處女說話は、天から數羽の白鳥が水邊に降り、羽衣を脫いで美しい裸體の少女となつて水浴するのであるが、その中の一人だけは地上の男に羽衣を奪はれて天に歸れず、その男の妻となるのである。そして、その間に數人の子供が出來る。しかし、つひに隱してあつた羽衣を見つけるや、地上のすべてをふりきつて昇天するのである。この奇しき物語が、この夢の根柢をなしてゐることはたしかである。そして、この傳說の解釋に關する一つの臆說として、古代人は、碧空に浮かぶきれぎれの白い雲を、水上に浮かぶ白い鳥に對比してこの物語を生み出したものであらうといふ學說がある。今日では、この學說は否定されてゐるが、この文例に、「夢の中に現れた幻の正體かと想はるる五月の空の雲のきれぎれを仰ぎ視た。」とあるのは、まさしし當時まで信ぜられてゐた右の學說の影響であらうと思はれる。更に驚くべきことは、作者は既に早くフロイド一派の精神分析學に通じてゐたことである。それは、この小說を一貫してゐる夢の取扱方でも分る。さうすると、極く古い原始的傳說から、極めて新しい科學たる精神分析學に至るまで、悉くきはめてゐる作者によつて、この美しい魔

術的な夢は構成されてゐるのである。だから、氏の想像性には科學的な根據がある。いやすべてのマジックには科學的な根據がなければならぬ筈である。單なる夢幻に、どうして現代の讀者が醉はされることが出來ようか。氏は、かくして構成した怪しくもまた美しい夢幻を、それにふさはしいところの麗しい國文學的なスタイルで表現してゐるのである。藝術に精進すること、谷崎氏の如きは蓋し稀であらう。最近の「聞書抄」の如き、途中で一時休筆せざるを得なくなるまでに、氏は藝術のために心身を疲れさせてしまふのである。谷崎氏の如きは、眞の名工といふべきであらう。

二〇　忠直卿

人情の世界から一段高い所に、放り上げられ、大勢の臣下の中央に在りながら、索寞たる孤獨を感じて居るのが、わが忠直卿であつた。

かうした意識が嵩ずるに連れ、彼の奥殿に於ける生活は、砂を嚙むやうに落寞たるものになつて來た。

彼は、今迄自分の愛した女の愛が、不純であつた事が、もう見え透くやうに思はれた。自分が、心を掛ける何の女も、唯々諾々として自分の心のままに從つた。が、夫は自分を愛して居るのではない、ただ臣下として君主の前に義務を盡くして居るのに過ぎなかつた。彼は、戀愛の代りに、義務や服從を突するに、飽き

果ててしまつて居た。彼の生活が荒むに從つて、彼は單なる傀儡であるやうな異性の代りに、もつと彈力のある女性を愛したいと思つた。彼を、心から愛し返さなくてもいいから、せめては人間らしく反抗を示すやうな異性を愛したいと思つた。

其の爲に、彼は家中の高祿の士の娘を、後房へ連れて來させたが、彼等も忠直卿のいふ事を、殿の仰とばかり、唯不可抗力の命令のやうに、何の反抗をも示さずに忍從した。彼等は靈驗あらたかな神の前に捧げられた人身御供のやうに、純な犧牲的な感情を以て忠直卿に對して居た。忠直卿は、その女達と相對して居ても、少しも淫蕩な心持にはなれなかつた。

彼の物足りなさは、尙續いた。彼は夫の定まつて居る女なら、少しは反抗もするだらうと思つた。彼は、命じて許婚の夫のある娘を物色した。が、さうした女も、忠直卿の豫期とは反して、主君の意志を絕對のものにして、忠直卿を人間以上のものに祭り上げてしまつた。

もう此の頃から、忠直卿の放埒を非難する聲が、家中の士の間にさへ起つた。

が、忠直卿の亂行は、尙止まなかつた。許婚の夫ある娘を得て、少しも慰まなかつた彼は、更に非道な所業を犯した。夫は、家中の女房で艶名のあるものを、私に探らしめて、その中の三名を、不時に城中に召寄せたまま、歸さなかつた事である。

主君の御亂行玆に極まるとさへ、歎くものがあつた。

夫からの數度の歎願に拘らず、女房は返されなかつた。重臣は、人倫の道に悖る所業として忠直卿を强諫した。

が、忠直卿は重臣が諫むれば諫むる程、自分の所業に興味を覺ゆるに至つた。

女房を奪はれた三人の家臣の中、二人迄忠直卿の非道な企の眞相を知ると、君臣の義も之迄と思つたと見え、いひあはせた如く、相續いて割腹した。

横目附から、その屆出があると、忠直卿は手にして居た杯を、グッと飲みほされてから、微かな苦笑を洩らされたまま、何とも言葉はなかつた。家中一同の同情は、翕然として死んだ二人の武士の上に注がれた。

「さすがは武士ぢや、見事の最期ぢや」と、賞めそやす者さへあつた。が、人々は此の二人を死せしめた原因を、唯不可抗力な天災だと考へて居た。一種の避くべからざる運命のやうに思つて居た。

二人が前後して死んでみると、家中の人々の興味は、妻を奪はれながら、唯一人生き殘つて居る淺水與四郎の身に蒐つて居た。そして、妻を奪はれながら、腹を得切らぬその男を、臆病者として非難するものさへあつた。

が、四五日してから、その男は飄然として登城した。そして、忠直卿にお目通りを願ひたいと、目附まで申し出でた。が、目附は淺水與四郎を色々に宥め賺さうとした。

「何と申しても、相手は主君ぢや。お身が今、お目通りに出たら必定お手打ぢや。殿の御非道は、我人共によく分つてゐるが何と申しても相手は主君ぢや」

が、與四郎は斷然として言放つた。

「縱令如何ならうとも、お目通り願ふのぢや。縱令身は八劈きにされようとも、念ない事ぢや。是非お取次ぎ下されい」と、必死の色を示した。

目附は、仕方なく白書院に詰めて居る家老の一人へ其の數顛を傳へた。夫を聞いた老年の家老は、

「與四郎奴は、血迷うたと見えるな。主君の御無理は分つて居る事ぢやが、此の場合腹をかつ切つて死諫を進めるのが、臣下としての本分ぢや。他の二人は、よう心得て居るに與四郎奴は、女房を取られたので血迷うたと見える。か程の不覺人とは思はなかつたに」と、囁いた。

家老は、尚ブツブツと口小言をいひながら、小姓を呼んでその事を澁々ながら、忠直卿の耳に傳へしめた。すると、忠直卿は、思の外に機嫌斜ならずであつた。

「ハヽ、與四郎奴が、參つたか。よくぞ參り居つた。すぐ通せ！ 目通り許すぞ」と、叫ばれたが、此の頃絶えて見えなかつた晴れがましい微笑が、頬の邊に漂うた。

暫くすると、忠直卿の目の前に、病犬のやうに呆けた與四郎の姿が現れた。數日來の心勞に疲れたと見え、色が蒼ざめて、顔中に何處となく殺氣が漂つて居る。そして、その眸の中には、二筋も三筋も血を引いて居る。

忠直卿は生來初めて、自分の目の前に、自分の家臣が本當の感情を隱さず、顔に現して居るのを見た。

「與四郎か？ 近う進め！」と、忠直卿は溫顔を以てから言はれた。何だか、自分が、人間として他の人間に對して居るやうに思つて、與四郎に對して、一種の懷しさをさへ覺えた。主從の境を隔つる膜が除かれて、ただ人間同士として、向かひ合つて居るやうに思はれた。

與四郎は、疊の上を三反ばかり滑り寄ると、地獄の底からでも、洩れるやうな呻き聲を出した。

「殿！ 主從の道も人倫の大道よりは小事で御座るぞ。妻を奪はれましたお恨み、かくの如く申し上げま

するぞ」と、言ふかと思ふと、與四郎は飛燕の如く身を躍らせて、忠直卿に飛びかかつた。その右の手には、早くも匕首が光つて居た。が、與四郎は輕捷な忠直卿に譯もなく、利腕を取られて、其處に捻伏せられてしまつた。近習の一人は、氣を利かした積りで、小姓の持つて居た忠直卿の佩刀を、彼に手渡さうとした。が、忠直卿は却つて其の男を斥けた。

「與四郎！　さすがに其方は武士ぢやのう」と、言ひながら、忠直卿は取つて居た與四郎の手を放した。

與四郎は、匕首を持つたまま、面をも揚げず、其處に平伏した。

「其方の女房も、さすがに命を召さるるとも、余が言葉に從はぬと申し居つた。余の家來には珍しい者共ぢや」と、言つたまま、忠直卿は心からいと快げに哄笑した。（菊池寬氏「忠直卿行狀記」大正七年）

「恩讐の彼方」とともに、菊池氏の文壇的位置を確保せしめた名作である。「はじめから、力一杯の技をふるつてゐる」と評されてゐる通り、菊池氏の作品には、ことに初期の作品には、息づまるやうな眞劍さが現れてゐる。この文例の、しかも、この場面の如きは、それを最もよく示してゐる。この小說の如きはいはゆる存在せる事實に藝術的魔杖を觸れて藝術品たらしめた作品であるが、氏の敍述や描寫には、少しの廻りくどさも無駄も無い、簡潔にぐんぐんと筋を運んで行く。纖細でも巧緻でもなく、隨つて女性的でなくて、男性的の荒つけづりといつた風がある。今の俳優でいへば、市川左團次の藝風に似てゐるところがあるやうに思はれる。

二一　朝

謙作が眼を覺ましたのはもう午頃だつた。二晩家を空けたといふ事で何となく彼はお榮と顔を合はすのが工合悪かつた。

戸外では百舌のけたたましい啼聲がして居た。彼は暫く其の儘横になつて居たが、思ひ切つて飛起きた。そして雨戸を一枚繰ると隣の梧桐の天邊から百舌が啼きながら逃げて行つた。

實にいい日だ。風もなく、秋らしい軟かな日差しが濡れた地面に今百舌の飛立つた梧桐の影を斜に映してゐた。風呂の煙突からかすかな煙が立昇つてゐる。彼は其の朝未明に門を明けさせた女中に湯を沸かすやうにいひつけて置いた事を憶ひ出した。「やつと起きたね」下から大きな信行の聲がした。お榮が段々を登つて來た。

「もう一時間も待つていらしたのよ」

彼は急いで降りて行つた。信行は茶の間の長火鉢の側で煙草をすつてゐた。彼は二言三言立つたまま話して、そして、

「信さん、風呂は如何かな?」といつた。

「俺は澤山だ」

「それぢや、一寸失敬するよ」かういつて謙作は風呂場へ行つた。

彼は久しぶりで風呂へ入つたやうな氣がした。氣持のいい日光が硝子窓を透して箱風呂の底まで差込んでゐた。湯氣が日光の中で小さな無數の粒になつてモヤモヤと動いて居る。彼は兄が待つてゐるのでなければ長閑な氣持でゆつくりと浸かつて居たかつた。

「お前が家を空けるのでお榮さんが心配してられるよ」信行はそんな事をいつて笑つた。

謙作は曖昧な返事をした。

「昨日偶然山口に會つたら、お前の小說を〇〇に出したいといふんだが、何かないかい？」と信行がいつた。

「何月號に」

「來月號に欲しいやうにいつて居たが、それは何時でもいいんだらうけど」

「そんなら何時か送らう」

「今、出來てゐるのはないかい？」

「此の間中書いてゐたのは中止したんだ」

「うん」信行はそれを知つてゐるらしく唯首肯いた。

「新しく何か書けた時に送らう」

「前に書いたんで何かないかい？」

「あるけど、餘り出したくないから」

「さうか。ぢやあ、時は分らないネ。なんでも山口は頻りにお前の物を紹介したがつて居るんだ」から信行がいつた。

山口といふのは信行の中學の同級生で高等學校を中途でよして、今は純粹な雜誌記者になつて居る男である。

「どうしてだらう？」

「何でもはじめ龍岡に勸められたらしい。それから山口は阪口の所へ行つて訊いたらしいんだ。すると阪口も頻りにお前の物を讃めて居たといふんだがネ」

「うん」謙作は變な氣がした。「何時阪口に會つたのかしら？」

「昨日の話で昨晩とかいつてたよ」

「さう、約束は出來ないが若しかしたら出して貰ふかも知れない」

座敷に食事が用意されてあつた。そして今日は珍しくもお榮も一所に食卓に就いた。（志賀直哉氏「暗夜行路」大正十一年）

敍述と敍景と會話のつなぎ方、運び方の如何にも自然で淸新味に滿ちてゐる點を學ぶべきである。

「雨戶を一枚繰ると隣の梧桐の天邊から百舌が啼きながら逃げて行つた。」「湯氣が日光の中で小さな無數の粒になつてモヤモヤと動いて居る。」といふやうな敍景は、實に胸のすくやうな感じがする。

そして、敍景に手間取らないでさつさと敍述に、それから會話にと筆が運ばれてゐて、いかにも簡明

できびきびしてゐる。

二二　炬燵

夜は更けて來た。二人はそのまま炬燵にあたつたきり、別に二人だけで話をし合ふこともないので、聞くともなく一座の人々の談話に、それぞれ耳を傾けてゐた。やがて彼女は少し眠くなつたのか、炬燵に深く手をさし込んだまま、柔かい蒲團に頬を埋めて、顏を炬燵の上へ伏せた。と、思ふと、彼女の差伸べた手は、偶然のやうに、其處に入れてゐた小野の手へ、つと觸れた。小野はその輕い觸感に、思はず一時手を引いた。何だか觸つてならぬものに、自ら觸りでもした如く、氣が咎めたのだつた。が、冬子孃の方では、別にその手を引きもしないらしかつた。

で、小野は鳥渡胸を騷がしたが、別に冬子孃の方に、何の反應もなげなのを見てとると、幾らか安心して、今度は炬燵櫓の端の方へ、成るべく遠く離れたつもりで、恐る恐る手を差入れてゐた。

と、冬子孃は顏を伏せながら、炬燵の中へ入れてある手を、何かの拍子でもとるやうな工合に、指だけ動かしてゐたが、だんだんそれを端の方へずらして來て、又、ふと小野の手へ鳥渡觸つた。

今度は小野は引込めようと思つたが、ふと圖々しく思ひ直して、そのままにして置いた。ほんの鳥渡した惡戯にもせよ、どうなるかとの興味もないではなかつた。

すると一旦鳥渡觸れた冬子孃の手は、そのまま動かすのを休止した。と思ふ瞬間、小野の手の甲は、ふいに薄濕りのした柔かいもので、ぎゆつとおほふやうに握られた。小野の血は一度に、かつと胸へ集まるやうな氣がした。と冬子孃の方では、彼の手の甲を押さへた手を、靜かにそつと指の方へずらし始めた。そして息も吐かずにじつと置いてある小野の手の、指の所まで來たと思ふと、小指だけを殘した後の三本を玩ぶやうに握り締めた。快い握力と、纏はるやうな柔かい皮膚の感じと、汗ばむやうな暖かさと、それは小野の指頭を、殆ど一分時間天國に昇らしめた。

小野はもう、その手を少しも動かし得なかつた。そしてそつと眼を上げて、前に向かひ合つてゐる彼女を窺ひ見た。すると彼女は相變らず顏を蒲團に伏せたまま、少しの身動きもしなかつた。彼女の常凡な束髮が膨れて、前髮が押潰されたやうになつてゐるのと、その眞中に圈を描いた心が、複雜な組み口を見せて、大きく彼の眼に映つたきりだつた。顏は僅かに白いさう豐かでない頰が、耳朶の陰に輪郭をちらと仄見せてゐるきり、到底見ることは出來なかつた。どういふ心持で、彼女は自分の手を握り締めてゐるのか、小野は彼女の見る由もない表情で、何ら得る所はなかつた。が、彼の血は湧きたつてゐた。少くともどんな小さい意味にもせよ、彼女が自分の手に意識的に觸れたといふことは、彼の若い血潮を擾亂さずにはゐなかつた。

暫くすると、彼女はすつとその手を引いた。そしてなほも炬燵櫓の中央で、何かの拍子をとるやうに微かに動かしてゐる樣子だつた。それは又とりやうに依つては、彼女の手の在處をそつと小野に告げ知らして、觸れるのを誘ふかの如くに思はれた。

小野は、ふと今度は、自分の方から彼女の指を、押さへてみようと思ひ立つた。そして鳥渡暫くの間、色

色と逡巡した擧句、思ひ切つて靜かに手を辷らすと、二人の手は櫓の眞中の邊で、柔かい彈力と共に果して打突かり合うた。小野はまた鳥渡逡巡したが、彼女の手が、まだその儘に少しも取去られずにあるのを知ると、思ひ切つて急に手を動かし、彼女の甲と察するあたりを、輕く惡戲のやうに握つた。が彼女はそのまま何もせず握るに任せて、手も身動きもしなかつた。やがてすぐ、何とはなしに氣が咎められるので、小野はさりげなくその手を引いた。

彼はもう眼の縁まで熱くなるやうに感じた。そして彼女を正視し得ないやうな氣持で、同じやうに暫く顏を伏せてゐた。（久米正雄氏「破船」大正十一年）

平明で、いかにもゆきとどいた描寫である。かうした場面を、馴れない人が描寫すると、とても讀むに堪へない醜惡なものになるのが通例であるが、さすがに藝術家の筆である。少しのいやみもない。ついでにいふのだが、文學青年などには妙な癖があつて、この「冬子孃」は誰をモデルにしたのだとか、「小野」といふのは作者自身のことだとか、さうしたセンサクの方にばかり關心を持ちたがる癖がある。しかし、さうしたゴシップめいたことに頭を突込むよりは、「破船」なら「破船」を、その表現されたるままに於て藝術品として鑑賞する態度が、眞に藝術に精進する人のとるべき態度でなければならぬ。藝術は、そのあるがままに於て認識されねばならぬ。それ以外のことに眼を向けるのは外道である。

二三　よる

釣鐘マントと、鼻のさきまで肩掛を巻きつけた束髪と、二人の姿が一つに塊つて、五六軒しもた屋の並んだ薄暗がりから、錢湯の、高山の景色を描いた看板を照らす五十燭ばかりの灯の下に現れて來た。首をすくめ、前こごみになつて、小刻みに、薩摩下駄と薄齒の足音が揃つてゐた。束髪の頂が、丁度、深くかぶつた鳥打帽で、いくらか押しひしやげられた耳と、すれすれの高さだつた。

角を一つ曲ると、支那蕎麥の屋臺がズルリズルリ動いて來た。ほんの心持二人の肩が離れて、すれ違ふと、脂つこい肌からでも立騰つたやうな湯氣に、生溫かく二人の頬が舐められた。

「クフン」

息で鼻の穴を淸めてから、「臭いな」

「ええ、ほんとに……」

それきりで、二人はまた前の沈默に返つた。往來は、だんだん淋しい屋敷町になつて行つて薄齒の音が冴え、響きわたつた。

「だけど……」

五六歩も歩いて、まだ男はそのさきをいひ出さなかつた。

「だけど、なアに？」
「やつぱり僕、送つて行くだけにしようよ」
「あら、なアぜ？」
「悪いもの」
「あら、ちつとも悪くなんぞありやしないわ」
「だつて、今時分から行つて、寝床やなんか、……小母さんに悪いや」
「ちつともそんな心配いらないわよ。うちぢや、しよッちゆうお泊りのお客様があるからいつだつて二階の押入にちやアんと用意がしてあるんですもの」
「だけどね、なんだか……」
またそれきり黙つて了つたので、娘は顔を覗き込むやうにして、
「どうしたの？　そんなことといつたつて、第一今時分から歸れやしないわ」
「歸れるさ。まだひよつとすれア赤電車に間に合ふかも知れないし、なけれア俥を探すよ。俥もなけれア歩いたつて知れたもんだ」
「あら、歩いちア大變だわ。そんなことといはないで、泊つていらつしやいよ。歸つたらすぐに電話でうちへさういつとけばいいんぢアないの」
「だつて、隣の電話だからね」
「構やアしないわ。まだやつと一時かそこらでせう。あたしなんぞいつだつてほんとに眠るのは二時か三

時よ」
「それアね、電話なんぞ明日の朝だつて構やアしないんだけれどもね……」
「ぢやなにがいけないのよウ」
娘の聲音は、いかにもじれつたさうだつた。
「だつてさ……」
またいひ澁つてゐたが、思ひ切つたやうに、あとが早口になつて、「小母さん、へんに思やアしないかしら」
「へんとは……？」
「今頃二人つきりで歸つて來たりして……」
「だつて、それア、あなたが門のところからすぐに歸つて了つたとしても、あたし阿母さんに話すわよ。今時分一人で歸つて來たなんていへば、それこそ叱られちまふわ。へんに思はれるどころか、あなた親切だつて、きつとお禮をいはれるくらゐなもんよ。そんなこと、ちつともなんともありやアしないぢやないの」
「お禮をいひながらだつて、へんに思つてないとは限らないからね」
「ぢやいいわ、どうでも勝手になさい！　さつき泊つて行くつていつといて、男のくせに……」
「なんだい、送つて來たり慍られたりしちや合はないや」
「慍つてやしないけど……」
「ぢや、いいよ、泊つてくよ」

「きつとね！」

肩の丸味で念を押してよこした。

「その代り、へんに思はれたつて知らないよ」

「ええ、いいわ、構やしないわ」

「よし！」

といふと、青年は、マントの下から手を出して娘の手を求めた。待つてゐたやうに、すぐ堅く握り合はされ、「きつとだね」「えゝ」「うれしい」「あたしも嬉しい」——そんな風な言葉が掌と掌とで囁かれた。

（里見弴氏「多情佛心」大正十二年）

年頃の青年男女の間についての或場面の描寫、久米氏のは室内・靜的・描寫的、里見氏のは屋外・動的・會話的のちがひはあるが、だいたい似寄つた傾向の筆である。何れも、こまかく描かれてゐる點、いやみのない點等について、その手法を學ぶべきであらう。

二四　しがらみ

「いや、これは……」

豊島屋さんは暖簾を離すなり、
「ま、どうしたといふ……」
頓狂にわざとさういふと、そのまま、わたしのまへに來て腰を下しました。
「……」
だまつて、笑つてただ、わたしは頭を下げました。
「いけないよ、あなたは……」
豊島屋さんは外套のボタンを外しながら、
「み限るならみかぎる、――愛想をつかすなら盡かす、――はつきりさういつてくれれば此方だつて……」
「いゝえね、それが……」
「聞きません。――いゝえ、言譯は聞きません。」
切口上にかぶせて「そんなら、それで、此方にも覺悟があります。――そのつもりであきらめもします。――迷はせッぱなしに、ぬうッと、俺は知らないよ、――そんなことは知らないよ、と、ぽオんと突つ放されたんぢやあ、此奴……」
「……」
「うかばれませんよ。――誰だつて浮かばれませんよ、佐伯さん。」
「何とも申譯がございません。」
わたしは、わらつてまた、もう一度あたまを下げました。

「といつて素人(しろうと)をおだましよ、――といふことを御存じですか？」
「一向(いつかう)に。」
「御存じないでせう？――ないわけだ、――あたりまへだ、――あなたのやうな罪のふかい人の知つてゐるわけがない。」
「罪のふかいは……」
「いゝえ、ふかい、――罪がふかい、――あなたは罪つくりだ。」
「……」
「と、まア、うらみのたけを友禅(いうぜん)の……」
急に豐島屋さんはわらつて、
「いや、その後(ご)は……」
ガラリかはつて丁寧にあいさつしました。――酔つてゐるのかしらふなのか、――どこまでほんたうでどこまで嘘か分らないのが豐島屋さんの不思議なところです。
連(つ)れてわたしも、
「その後(ご)は……」
改めてさういひました。
「彼是(かれこれ)、これで、一年ぐらゐお目にかかりますまい？」
手を伸して、豐島屋さんは、品がきをまへに取りました。

「いゝえ、もつとになります。」
「もつとに？」
「あれは九月の末でしたか、十月のとつつきでしたか、鮫洲の川崎屋へおともしたことがありました――あなたと、天野さんと、武傳さんと、ここの親方と……」
「さうさう、――かへりに、降られて、品川へ引つかかつた……」
「えゝ、あのとき。」
「あれがお附合のねがひ納めで、あれからぢき、何といふこともなく、その……」
「それだもの、あなた……」
豐島屋さんは引取つて「天野さんでも、武傳さんでも、――藤屋さんでも、鶴菱の大將でも、――顏が揃ふと、いつも、誰がいひ出すともなく、佐伯さんはどうしたらう、どうして顏をみせないだらう？――口惜しいけれどあなたのうはさだ。――嘘だと思つたら親方に聞いて下さい。――あすこにぼんやり首を出してゐますから聞いてみて下さい。」
「いえもう、それは……」
料理場の中の帳場のはうから主人はいひました。「いまもう如才なく申し上げました。」
「散々、もう、いままでにも叱られました。」
わらつてわたしは顏を上げました。
仲見世の裏のしがらみといふ小料理屋。――ほんの腰かけの、門に油障子を立て、暖簾をかけた、そのあ

たりにざらにあるとりなしのうちですが、つかふ材料なら、主人の調理なら、外のさういふうちとは一つにならない。——一つにならないといふよりも、次第のまるつきりちがつた、本筋の、いへばまア、江戸まへのきびきびしたものを食べさせるうちでした。（久保田万太郎氏「寂しければ」大正十三年）

下町情調の一場面を、これほど巧みに描き出した文章などといふものは、どこにも見出し得ないであらう。純粋の下町つ子でなければ、かうした描寫は殆ど不可能であらうが、しかし、下町に生まれて下町に育つたからとて、必ずしもかうした描寫が可能だともいへない。常に客觀的に觀察してゐる人でなければ描けない。それから、久保田氏の文章——この文例——には、他に見られない幾つかの特徴を持つてゐる。會話を西洋流に二つに切つて中に地の文を入れる、これはまあ誰でもよくやることであるが、——や……がさかんにつかはれるのがその一つ、地の文を「ました」「でした」にしたのがその二つ、假名を多く使用したのがその三つ。とにかく、その何れも、この場面の描寫には、しつくりあてはまつてゐるのである。現代の小説家は、誰でもさうでなければならないが、みんな、自分のスタイルをつくることに努力してゐるのである。

二五　岩見重太郎

君臣の分定まり、足輕一躍士分にはなれず、二百石忽ち千石になる機會など中々無い折には、時々この廣告法を用ひてみる。

「重太郎は薄呆んやりでして。」

とまづ言つておいて、次に、

「三年天狗にさらはれまして。」

と泣いて、朋輩七人をやつつけたと聞くと同時に、

「重太郎、それ豫ての如く。」

と、

「實は、天狗樣から武術の奧秘を受けたさうでして、歸りましてから、天狗樣から口止めされてゐたので今まで誰にも話さなかつたと申してをりますが。」

「へえ、天狗樣からね。」

と忽ち評判。同じ齡頃で道場へ通つて、

「あの子は強い。」

と言はれるやうなのは廣告にならない。重太郎とやらを目通りさせい、と言葉がかかる。

「お父さん、うまく參りましたな。」

と、元服してやうやう目通り出來る位のが、御蔭で前髪のままで登城。岩谷松平が天狗を使つたより岩見重左衞門の方が遙かにうまい。殿の前上首尾、一人二人に打勝つて、ちよつと力を現しておくと、もう殿の頭に殘つてしまふ。閑な殿樣だからすぐ憶えてしまふ。殿樣に覺えておいて貰へば悪い事は無い。「河童に教へて貰つた金創膏」などにしても同じ手で、芥川龍之介の「河童」よりもいくらか金儲けになる。（直木三十五氏「岩見重太郎」昭和二年）

えらい才筆である。さらさらさつと書きながして、たちどころに文をなすといふのが此の筆法。いはば機械工業時代の多量生産、世も昭和になつたなあと感ぜられる。直木氏は、あるところで、「お讀みになつて行けば分りませうが、大してうまくも無い代り、落語でも、戲作でも、時代物でも、現代物でも、何でも書きます。」と述べてゐる。その通りで、この文例の如きは、まさに新講談である。これが、大衆文學と稱せられる所以であるが、いくら大衆だからとて、かういふものばかり好むわけのものでもなからうし、直木氏にしても、かういふものばかり書くわけでもなく、「何でも書きます」といつてゐるし、事實何でも書いたのである。

しかし、とにかく、昭和の文壇には、いはゆる大衆文學といふものが洪水のやうに氾濫した。また、しつつある。そのために、文章が極めて平明になり自由になつたことは事實であるが、一面には修辭

や文法や文字遣などがかなり亂雜になつたことも爭はれない事實であつた。そして、一方では、いはゆるプロレタリヤ文學といふ旗印のもとに、さかんに階級思想を盛込んだ文學があらはれた。しかし、この方は、全然表現方法といふことに意を用ひようとしなかつたために、殆ど藝術的價値が認められず、また、他の力のためか自懷作用かの何れかで、間もなく沒落の運命を辿りまたは辿りつつあるやうである。

二六 友藏親分

瓶崎の友藏は蒔田の出張先で、身內の中で指折りの男、溜堀の粂吉の苦り切つた顏を、秋の深い明け方に見せられてゐた。

そこは、ゆふべの賭場から少しはなれた寺の緣端で、手入れの屆かぬ貧乏寺の荒庭一杯に萬朶と咲いた夜露の珠に、日の出の色が映えてゐた。

「親分、それぢや男が立ちますまい。辛抱强いといふのか、義理を尙ぶといふのか、俺にや、まるでわかりません。姐御の不始末が眼に餘つてゐながら、知らねえ振りをしてゐるのを、世間では何といふか、知つてゐますか。」

「町内で知らぬは亭主ばかりなり、ぢやねえのか。」
「親分、太ッ腹も大抵にしてください。俺は口惜しくつて泣けてくらあ。」
「粂吉、男の癖に泣く奴があるか。」
「泣けてくるもの仕様がねえでせう。ねえ親分、いくら義理があるにしろ。」
「まあさういふな、時節を待て。俺だとて男一匹、女房の不仕鱈に氣がついて、默つてゐるのは面白えものでは決してねえ。大きく構へてはゐるものの、粂吉それでもこの胸の中は煮えくり返つてゐるんだ。」
柔和で、みるから寛容な瓶崎の友藏の顔が、昏くもなつたし、激しくもなつたが、それはただ一瞬の間だけで、すぐに元の慈父の相好になつた。
「それならそれで、杯を返してください。俺はすぐに草鞋を穿きます。」
「お德と丈太を始末してだらう。いけねえ。」
「何故いけねえんです？」
「手前は大事の體だ。俺に代つて跡をとる人間は、數ある身内の中で、たつた一人手前だけだ。」
「跡目なんか望みをかけてはゐません。」
「何をいやがる、手前の爲に跡目を嗣がせるのぢやねえ、身内一統の爲だ。」
「俺は厭だ、ほかの者にやらせてください。」
「いつもはもッと考の深え手前だが、この事だけにはさすがの粂吉も、ただの男と同じになつた。粂吉よく聞け、こんな渡世をしてゐても上に立つ者は下にゐる者より餘ッ程辛え。怒りてえ時に怒つて、笑ひてえ

時に笑へるのは乾分でゐるうちの事だ。何十何百と乾分をもち、そのたばねをして行くのには、怒る時にも笑はざならず、笑ふ時にも怒らざならねえ。それでなくては納まりがつかねえものだ。」
「そんな面倒なことは俺には出來ません。」
「出來る奴は手前だけだ。」
「旅人であいつが來て以來、仲よくしてゐるだけに、俺は、丈太の奴を引つ張り出して始末をつけますから。親分が止めても俺は肯かねえ。」
「そんな事をしてみたければとつくに俺が誰かにさせてゐる。」
「親分惡い病氣だよ、そんな太つ腹に、だれが感心するものか。」
「他人さまを感心させたくてしてゐる我慢ぢやねえ。亡くなつたお德の兩親に、俺は我慢を香華の代りに手向けてゐるのだ。」
「あいつ等が段々圖に乘るばかりだ。」
「さうでねえ。あと一と月で瓶崎の御先代の七年忌がくらあ。」
「えッ、七年忌に？」
「お德を丈太郎にくれてやり、仲人には手前が立つのだ。」
「えッ、冗談いつちやいけねえ、そんな。」

（長谷川伸氏「南北旅の鳥」昭和七年）

いはゆる股旅物である。長谷川氏の體驗なり人生觀なりを、かうしたヤクザな世界に代表せしめて表現したものであるといふ風に傳へられてゐる。しかし、それはどうあらうとも、氏の作品には血のにじむやうな人生の眞劍さがある。大抵內容はこの文例のやうな世界であるが、輕薄な人間の多い世の中に、男を重んじ義理を重んじ、時には愛する女を殺してまでも信義をたて通すといふ人物を描き出すことにかけて、氏は全く獨特の手腕をもつてゐる。そして、文章もまた敍景に會話に氏獨特の持味を見せてゐる。「手入れの屆かぬ貧乏寺の荒庭一杯に萬朶と咲いた夜露の珠に、日の出の色が映えてゐた。」といふ敍景や、大親分が、すべてを知つてゐながら悠然と、「町內で知らぬは亭主ばかりなり、ぢやねえのか。」とせまらざる口調の如き、また、「柔和で、みるから寛容な瓶崎の友藏の顏が、昏くもなつたし、激しくもなつたが、それはただ一瞬の間だけで、すぐに元の慈父の相好になつた。」といふ敍述の如き、何ともいへぬ新しい手法を發揮してゐる。

二七　岩倉右大臣一行の洋行

「板垣さん、とうとう出ていつきやつた」

隆盛の詞(ことば)には輕い皮肉が含まれてゐた。退助は其の詞の意味がすぐ分つた。退助も微笑を見せた。

「さうですね、いよいよ出かけましたね」
二人は微笑を送りあつた。直馬はその眼に注意した。隆盛の大きな象のやうな體が動いた。
「板垣さん」
板垣は何か言はうとしてゐる隆盛の詞に耳をたてた。
「なんですか」
「お歴歴が揃うてをいやいが、彼の船が太平洋の眞中で、ひつくりかへつと、せいせいすつぢやらう」
隆盛はさう言つて肩を搖つて腹の底から出るやうな笑ひ聲を出して笑つた。板垣も笑つた。
「さうですね、政府の中がせいせいするばかりでなく、公平無私な政治が行へるでせう」
それは一場の戯言にすぎなかつたけれども、二人の氣もちを言ひあらはすには十分であつた。隆盛はまた肩を搖つて笑つた。直馬はそんなことが黒田や大隈に聞えてはわるいと思つて退助のために氣を配つた。黒田と大隈は此方を見て眼を圓くしてゐた。二人は隆盛の大きな笑ひ聲に驚かされたものであつた。直馬は其の時黒田と大隈の後の方にゐる山縣有朋などの一行の中から、山縣がこれも驚いたやうな顔をして此方を見てゐるのを見いだした。
「烏帽子小直衣で、岩倉さんがアメリカの大統領にあふやつときや、見もんごあすな、板垣さん」
隆盛はまた笑つたが、肩を搖るほどではなかつた。退助は小栗上野が歐米を巡行したことを思ひ出した。
「小栗のやうに地べたには坐らないでせうよ、皆歐米の崇拜家で、パンを喫ふことを知つちよる通譯も連れてをるから」

小蒸氣船は其の時アメリカ號に横づけになつて、舷梯を攀ぢてあがつてゆく一行の姿が小さく見えた。

（田中貢太郎氏「旋風時代」昭和八年）

維新から維新後にかけてのいはゆる旋風時代を描いたものであるが、この場面の如きは、何人もよく知つてゐるところであるので、それを引用して、その表現的手法を學ぶ資料としたのである。平明にして淡々たる、この文例の如きは、さう多く見られない。

二八　足利兄弟

家人が炬火を支度して中門の内まで迎へに來てゐた。この人數に守られて出て來る兄弟の姿は夏の夜闇の中でも人目を惹く。白銀作の刀に大篝の光が映つてきらきらさせる。

「浪の音がするな。」

と高氏が目をあげた。

「荒れてゐるものと見える。」

海は離れてゐたが、すぐ目の前の黒々とした山に反響して風のやうに聞えるのである。鎌倉の夜はもう更けてゐた。

「土用波だらう。」
と、直義がいきいきと答へた。
「そろそろ季節ぢや。」
どこの屋敷の門も閉つてゐたが、下人たちが立つて、涼みがてら、高時の屋敷の客の歸るのを見送つてゐた。若い女たちもゐるのである。
師直は、兄弟の側へ寄つて來た。
「如何で御座りましたか？」
「白拍子か。」
と直義が笑つて
「高、氣に入つたのがあつたか？」
「何さま遠いので。」
「高は、女を抱へて見るより他は知らぬ男ぢや。」
と高氏が側からいつた。整つた感じの、おだやかな聲音が、一見優しく見えるこの靑年の風貌に釣合つたものだつた。
「御兄弟で、何かと手前をお虐めになる。手前が伺つてゐるのは、御兩名にお氣に召したかどうかといふことぢや。」
「俺は睡かつた。」

と直義が答へた。
「何の面白いこともない。」
「太郎どのは。」
高氏は返事を與へない。微かに笑つて見せただけである。
「入道さま（高時のこと）が大分お醉ひになつてゐられたやうにお見受け致したが。」
師直は、急にあたりに心を配つて、聲をひそめながら、かういひ出した。
「いよいよ以て御正體なくお成り遊ばした。田樂法師に和せて舞つてゐられる。その內御自分がお立ち遊ばすのではないかと、見てゐて手前どもがはらはら致すくらゐのもので。」
「法師はあれが倖なのだ。」
と直義が笑つた。
「いや、實に嬉しさうに見える。白拍子を見てゐるよりも、法師のあの顏を見てゐる方が面白かつたぞ。とろけ出しさうだつた……」
「やくもない。」
と師直は不平らしく呟いた。
「御惱もその後益々思はしくないと承るが…… 天下もいよいよこれきりといふ不穩の噂さへある折に、あの物狂ひはどうも。」
響かぬのだ。高氏は聞いてゐるのかどうかも疑はれるやうな冷然とした横顏を見せて、歩いてゐる。

「蝦夷地の亂はまだ片付かぬ、それに都の方角にはまた穩かならぬ樣子の有るやうに伺つてをるが……お手前樣がたも、よほどお心を締めてをられぬと、この行末は何と成るか相わかりませぬぞ。」

「蝦夷地のことは、執權が双方から賄賂を取つたので、何とも出來ぬといふのではないか。」

と、話に乘つて來たのは、依然として弟の直義だけである。

「しかし、都のことは初めて聞く。何か左樣な噂でもあるのか。」

「やがて承久の二の舞があらうと、專ら世上の評判。」

「高。」

遮つたのは高氏だつた。

「評判が先に立つくらゐならば、心配はないのだ。兩六波羅が何の爲に在る。」

（大佛次郎氏「大楠公」昭和十年）

相模入道高時は白拍子や田樂法師を相手に酒宴や舞踊に正體もなくなつてゐる、贈賄收賄が行はれて天下の政治は亂れてゐる、京都には英明の君主後醍醐天皇がお立ちになつて、ひそかに鎌倉を倒さうと策をめぐらしてお出でになる。まさに嵐の前である。土用波が高い。そこへ、足利兄弟と高師直の三人が、夏の夜闇の舞臺にあらはれて來た。三人の會話に、それぞれ個性を發揮せしめてゐるが、とりわけ思慮の深い高氏の個性はあざやかに描かれてゐる。「評判が先に立つくらゐならば、心配はないのだ。」は、如何にも智謀に富んだ大野心家の貫錄を示してゐる。時代と季節と時刻と人物とが

はつきり描き出されてゐる點、小說的文章として一分の隙もない。大衆小說的のものではあらうが、かうなれば立派な藝術品である。「太平記」などより、この方が文學的作品としては優れてゐるのかも知れない。

だが、昭和の小說界も、大衆物ばかりでは餘り後世に誇られもしまいと思ふ。もうそろそろ大正五六年頃の、あの眞劍な文藝復興期のやうな時代が來てもいい頃であらう。

第五章　戯曲的文章

ここに、戯曲的文章といふのは、あらゆる種類の戯曲に用ひられる文章の謂である。ここでは、戯曲とは何ぞやといふやうな議論には入らない。一口にいへば、戯曲とは、演劇の臺本となるべきものであり、その芝居で演ずる人物・事件・時・場所・行爲(しぐさ)・臺詞(せりふ)等を記した文章のことである。それゆゑに、戯曲的文章は、常に劇に演ぜられるといふことを念頭に置いてかからねばならぬ。尤も、全然演劇といふことを念頭に置かずに、唯讀むだけの戯曲的文章もある。これを closet drama といふのであるが、これは戯曲の形式をかりた小説といつてもよいもので、讀者は書齋に居たまま、想像を馳せながら、頭の中で芝居を見ることが出來る。この方は、どんなに人物が多く出て來ようが、どんなに場所が廣からうが、どんなに事件が大がかりであらうが構はない。たとへば、舞臺は廣い滿洲の大平野で、そこへ幾萬といふ軍隊が登場し、空中に地上に最新式の武器を用ひて戰爭をするところでもいい。また、これとは反對に、いかに人物が少からうとも、事件が靜的であらうとも、closet drama は成立つ。たとへば、武者小路實篤氏の作「野島先生の夢」といふやうな戯曲は、家庭内に於ける文

士の生活を描いたものであるが、それでも讀む戯曲としては成立つ。

しかし、演劇の臺本としての戯曲は、とにかく、第一に先づ題材が劇的（ドラマチック）でなければならぬ。「劇」は「激」で「はげしい」といふ內容が伴なふ。この點が、小說と少しちがふところである。小說ならば、主人公の心の裡だけを描いたものでもよからうが、戯曲、ことに演劇の臺本となるべき戯曲ではさうは行かない。たとへば、一人の人物が舞臺面にあらはれて、幕のはじめから終まで、默つて人生を考へ込んでゐるといふやうなのでは、誰も觀てゐる人はないであらう。また、心の裡が如何にはげしく活動してゐても、それが言葉か行爲かによつて外面に現されてゐなければ戯曲にはならない。たとへば、本書の小說的文章の文例としてあげた久米正雄氏の「破船」の「炬燵」の場面であるが、あの時の青年男女の心の裡は相當に激しいものである。しかし、あれを舞臺にのぼせるとしたらどうであらう。舞臺の眞中に炬燵が一つ出されてゐる、一人の青年と一人の令孃が向かひあつて炬燵の兩側へ入つてゐる、令孃は薄團の上に顏を伏せて眠つたやうな恰好をしてゐる、青年はくすぐつたいやうな顏をして、そつと令孃の束髮に見入つてゐる。炬燵の中では二人の手が、たぶん觸れ合つてゐるのであらうと、觀客は想像してもよいのであるが、どうも、それが三十分も一時間も、そのまま續けられてゐたのでは、觀客の方であてられてしまふ。

それゆゑに、戯曲の題材は、それが悲劇であらうと喜劇であらうと、とにかく、人生のあるはげしい場面、いはば人生のある危機（クライシス）でなければならぬ。「葛藤のないところに劇はない」(no struggle, no

drama.）といふのはそれである。そして、それは形として觀客の眼に映じ、聲として觀客の耳に聞えるものでなければならぬ。

だから、戯曲的文章には、眼に見える部分として敍景や敍述が必要であり、耳に聞える部分として會話や獨白が必要である。ただ、しかし、現代の戯曲の如く、餘りに會話が多過ぎるのは、少し考へものであらう。古いの何のといはれても、やつぱり多くの人は歌舞伎劇の方を好むのであるが、歌舞伎の方は會話よりも行爲（しぐさ）の方が多く、心の裡を俳優の身振動作であらはす場合が多い。シェクスピヤが、自分の作品の批評を聞くために、路上の一勞働者をつかまへて、「どうだね、シェクスピヤの芝居は？」と聞くと、その男が「どの役者も、しやべつてばかりゐやがる。」（They are all talking.）といつて、「あんなんよりや、スペイン人の奇術の方がいいや。」と答へたといふことであるが、現代の日本の演劇にしても、ややさういふ傾向がある。坪内博士の作などでも、どうも役者が坐り込んで、しやべつてばかりゐる場面が多い。それは、足の不自由な歌右衞門などには、最も適するものであらうが、觀てゐる方では眠くなつてしまふのである。

戯曲的文章の構成および敍述は、形式的にいふと、小説と大差はない。だから、劇的要素の多い小説は、大抵脚色されて上演されてゐるし、また、現代では、小説家と劇作者は大抵同一の人である。それゆゑに、戯曲的文章の要點は、小説とひとしく、だいたい左の四點に歸するであらう。

第一に、「時」がはつきりしてゐなければならぬ。過去の時代か現代か、過去の時代にしても、そ

れは鎌倉時代か室町時代か江戸時代か、また季節はいつか、時刻はいつか、それらが明瞭でなければならぬ。それによつて、背景も服裝も臺詞も自ら定まつて來る。新しい「忠臣藏」の大石良雄が、「僕」だの「諸君」だのといふのも、たまにも面白からうが、決してながつづきのするものではない。

第二に、「登場人物」は幾人か、男か女か、老人か子供か、つまり人數・性別・年齢等が明示されねばならぬ。そして、それらの人物の性格・行爲が戲曲に於て最も重大であるが、それは筋または事件によつてあらはされる。

第三に、「場所」が明示されてゐなければならぬ。室内としても、店先か茶の間か座敷かといふやうなこと、屋外としても、海岸か河の土手か松並木かといふやうなこと。ここに、敍景的要素が多分に必要になつて來る。

第四に、「事件」が統一されてゐなければならぬ。すなはち、筋が通つてゐて、人物の性格が一々その事件または行爲と、ぴたりと一致してゐなくてはならぬ。事件には必ず「原因」があり「展開」があり「頂點」があり結末たる「大團圓」がある。それが、作者のあらはさうとする目的によつて、有機的に統一されてゐなければならぬ。隨つて、餘り筋が込入つてゐたり、主要人物を餘り多く出し過ぎたりして、筋をごちやごちやにしてはならない。

戲曲的文章の形式は、先づはじめに、「人物」「場所」「時」の三項が提示され、それより「事件」に入るのが通例である。

戯曲の種類たる、時代物・世話物・悲劇・喜劇または closet drama 等については、具體的文例について述べて行くこととする。

一 長柄堤の訣別

長「してまた籠城となりたる曉、敵を防がん手配りは。」
市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業のためと詐り、紀州川の川上より浪華津に押流させ、御船入りに積み置いたり。まつた、港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」
長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」
市「甲冑・兵具も乏しからず。」
長「城は名に負ふ南山不落。」
市「眞田・後藤の智勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」
長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、五十餘州の兵を盡くし、四方八方より攻めよすとも、」
市「中々三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」
市「まつた、若年には候へども、愈々軍始りなば、我亦一方を承り、速水・御宿・和久等と共に忠義を金鐵

の堅きに比し、命は固より鴻毛の、吹靡さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、この事君に言上なし、直に軍の手配りせん。御心安かれ、市正殿。」
市「ほゝ頼もしし頼もしし。唯大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照らし、成行く末をかんがみれば、」
長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。」
市「上御發明に渡らせらるれど、」
長「讒侫之を蔽ふがゆゑ、」
市「地の利はあれど人の和なく、」
長「故太閤が御威武に、をののき震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」
市「天の時にや、大御所のおのづからなる德風に、いつしか靡く世の有様、」
長「如何なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の」
市「有明の影薄れつつ、」
長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、」
市「新日、東天に昇るといふ」
長「世の成行の」
二人「影なるか。」

是非もなき世の有樣と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぼのと明けにけり。（坪内逍遙「桐一葉」）

大阪城を取扱つた戲曲であり、いはゆる時代物に屬する。時代物とは、傳說や史實を脚色した戲曲のことである。これに對して、現代または近世の出來事、および平民的・民衆的の事實を脚色した戲曲を世話物といふ。「桐一葉」は、大阪落城前の史的事實に基づき、片桐市正且元の苦衷、淀君の猜疑と嫉妬、大野父子の偏執、木村長門守重成の誠忠等を經とし、蜻蛉と呼ぶ可憐なる少女の病死、銀之丞の呼ぶ痴少年の失戀等を緯として七幕十五場の戲曲としたもので、坪内博士がその主張せる性格劇の脚本として自ら世に問うたものである。この場面は、片桐且元が淀君を取卷く佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、大阪城を退身して空しく居城茨木に歸らうとし、まだ夜も明けやらぬ長柄堤に木村重成を待ち、大阪城の天主閣を望んで太閤の盛事を偲び、やがて追うて來た重成と相會して大阪籠城の計を議し、豐臣家の衰運を歎いて訣れる一條である。二人の忠臣の言々、主家を思ふの情切々として人に迫るものがある。どこまでも、上演といふことを念頭に置いてゐるから、その臺詞の如きも、非常に苦心されてゐる。が、唯舊來の歌舞伎劇に比し、會話の部面が多過ぎることはたしかである。舊來の歌舞伎にも會話の多いものもあるが、大抵それに所作が伴なふので、觀客は飽きないのである。しかし、この場合の且元と重成とは、唯、長柄堤の上で相對して語り合ふだけであるから、觀客はや

はり They are all talking の感を持つことはやむを得ない。それでも、新しい戯曲としては、最もすぐれたものの一つであり、演劇界にとつて畫期的の傑作と稱せられてゐる。ことに、地の文たる「是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぼのと明けにけり。」の如きは、技神に入るとも稱すべき名文であらう。但し、それはかうした戯曲に於てである。他の文に於て、かうしたスタイルがよいといふのでないこと勿論である。

二　日蓮聖人辻説法

人物

日蓮　三十四歳
徒弟日朗　十一歳
比企大學三郎能本　五十餘歳
同娘妙　十八歳
進士の太郎善春　二十餘歳
禪僧

放下
老若男女

場所　鎌倉小町の大路

時代　建長七年正月

（前略）

善春　さては噂の日蓮が、けふも說法に出でたるよな。去年の夏より、名越なる往還に高座を補理ひ、諸宗を罵詈すと聞きながら、唯餘所事に思ひ居りしに、比企殿の惑深きため、我が身の仇となつておぢやる。憎く法師の何事を說くやらん。

（群集又どよめき、「そりや來居つた」と叫ぶ。中には石瓦を拾ひ、橋に向かひて擲つものあり。）

日蓮　（檜笠にて面を掩ひ、橋を渡りて出で、舞臺に留まり、笠を右手に持ち、）あら、騷がしの人々や。國に敎の地を拂ひ、目のあたりなる逸樂に、永劫盡きせぬ苦艱を忘れ、あだに過ぎゆく月日を惜しまで、そのをりをりの節物を、祝ふ心ぞおぞましき。たまたま信者と呼ばるるものも、聾ばかりなる念佛して、殊勝顏なる笑止さよ。（群の中より「念佛がなんで笑止ぢや。」）おう、法然がさかしらの、選擇集の毒に醉うては、その笑止さがわかるまいの。敎の主なる釋迦佛を、もてあそびにするものさへあるを、帷子の里に行脚して、われまのあたりに見しことあり。念佛は無間地獄の業因。禪宗は天魔波旬の邪法。

禪僧　（上手より來かかり）やよ、御僧。御身の尊む釋尊が、大迦葉に直傳せし、我が宗門を邪法とは。

日蓮　御身等讀誦の經文たる、楞伽幷に金剛般若は、皆これ未顯眞實にて、いはゆる教外別傳は、佛說に乖背し因果を撥無す。これを邪法と申すのぢや。

禪僧　輕忽の事を聞くものかな。相州殿の歸依深き、建長寺の道隆禪師も、御身が目には邪法の人か。

日蓮　なかなか。御僧みづから言はれた。

禪僧　あな、無益。勇猛直前の志はおはさうが、一念の瞋恚は百萬の魔障、世間の豪傑は出世の丈夫にあらず。御身の面目はや見えた。白刃頭に臨まんとき、ゆめ周章めさるなよ。（顧みずして下手へ入る。）

日蓮　ははは、たとひいかなる檀越ありとも、究竟邪法は邪法ぢやまで。まつた眞言は亡國の、大惡法と申すべし。（群の中より「說法ぢやなうて雜言ぢや」、「打倒せ」などいふ。）律は國家の蠹毒。皆これ墮獄の惡道ぢや。

（群騒ぎ立つ。中より賤しき男一人進み出で、「わしが地獄に墮ちぬ先に、ここで舌を拔いてやろ。」と叫び、日蓮の笠に手を掛く。日蓮手を放つ。男よろめき善春に撞き當る。）

善春　（撞き放す。男油に滑り、僵れて又立つ。）やあ、忝なくも三品中務卿ノ親王のおはします、大倉御所に程近き、この小町ノ大路にて、よし何事のあらうとも、喧嘩三昧尾籠ぢやぞ。（賤しき男笠を持ちたるまま下手に逃入る。善春日蓮に。）いやなに、御僧。某は北條殿の家の者、進士ノ太郎と申すものでおりやる。先の程より見てあれば、鎌倉山の風靜かに、由比ケ濱邊の波騒がぬ、太平の世を敎なき濁世と罵り、剩へ、諸宗の立義を誹謗して、市びと等の怒を激し、忍辱の衣を石瓦に、何とて撲たしめらるるぞ。

日蓮　おう、その不審尤もなれど、昔不輕菩薩は、上慢の比丘等の杖にあたりて、一乘の行とし給ふ。法を説き教を布くに、杖木瓦石をいとはうや。

善春・さらば御身の法とするは。

日蓮　わが法こそは大覺世尊が、靈山八年に說かせ給ひし、正直捨權の實乘なれ。此の妙法蓮華經に比ぶれば、爾前四十餘年の權宗は、慈父の穉子に與へたる竹馬草雞に異ならず。

善春　その妙法とは。

日蓮　即ち眞如。

善春　眞如は。

日蓮　やがて衆生當體。我性の眞如はありながら、煩惱の闇に迷ひ、佛性の蓮を持ちながら、無明の酒に醉ひ癡れたる、衆生の身こそ悲しけれ。

善春　さて其の妙法蓮華の功德は。

日蓮　それ世間の蓮華は、夏開けども冬開かず。淤泥に生じて陸地に生ぜず。風にもまれ波に沈み、氷に閉ぢられ炎に萎む。わが妙法の蓮華は然らず。三世不變の花なれば、春夏秋冬ときはなり。遍一切處の蓮なれば、六趣三有に徧く咲けり。善惡一如の蓮なれば、惡業の厚薄を選まず。邪正不二の花なれば、煩惱の淤泥にも生じ、十惡の風にも壞られず、五逆の波にも沈まず、紅蓮の氷にも閉ぢられず、焦熱の炎にも萎むことなし。一たび妙法蓮華經と唱ふるときは、一切の佛、一切の法、一切の菩薩、一切の聲聞、一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天神地神、乃至地獄餓鬼畜生修羅、一切衆生の佛性を、唯一言に喚び

顯す。譬へば籠のうちの鳥啼けば、空飛ぶ鳥の來り集り、空飛ぶ鳥の集れば、籠の鳥の出でんと欲するが如し。我が身の佛性顯るれば、梵天帝釋の佛性、來りて加護し給はんこと、何の疑か候ふべき。（森鷗外「日蓮聖人辻說法」）

日蓮上人の鎌倉小町の大路に於ける辻說法の史實に基づいて脚色したる一幕物の戲曲である。隨つて時代物である。善春と上人との問答は、あたかも「勸進帳」に於ける富樫と辨慶の問答の如く、響の物に應ずる如く、息つく間もあらせず、滔々懸河の辯を以て說きさり說ききたる有樣、げに强き宗教革命者の面影が躍如としてゐる。

過去の時代の言葉を人物に語らせる場合、それは必ずしも、その時代の言葉そのままでなければならぬことはない。否、そのままでは却つて現代の觀客に理解させることが出來ない。しかし、さうかといつて、現代の言葉のままでは、觀客をして時代的のイリュージョンを起させることが出來ない。そこで、要は、昔の時代のことだといふイリュージョンを起させるに足るやうな、しかも現代の觀客に理解されるやうな言葉をつかふのがよいといふことになる。坪內博士の「桐一葉」にせよ此の文例にせよ、その點が愼重に考慮されてゐる。

三　修禪寺物語

桂は頼家の假面を持ちて顏には髮をふりわけ、直垂を着て長巻を持ち、手負の體にて走り出で、門口に來りて倒る。

春彦　や、誰やら表に……。

夫婦は走り寄りて扶け起し、庭さきに伴なひ入るれば、桂は又倒れる。

春彦　これ、傷は淺うござりまするぞ。心を確に持たせられい。

かつら（息もたゆげに。）おお、妹……。春彦どの……父様はどこにぢや。

夜叉王　や、なんと……。

（夜叉王は怪しみて立ちよる。桂は顏をあげる。みなみな驚く。）

春彦　や、侍衆とおもひの外……。

夜叉王　おお、娘か。

かへで　姉さまか。

かつら　上樣お風呂を召さるる折から、鎌倉勢が不意の夜討……。味方は小人數、必死にたたかふ。女でこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面をつけてお身がはりと、早速の分別……。月の暗

きを幸に、打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼ばはり呼ばはり馳せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩らさじと追つかくる。

夜叉王　さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、ここまで斬拔けてまゐつたか。

（血に染みたる假面をじと見る。）

春彦　我々すらも侍衆と見あやまつた程なれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かへで　とは言ふものの、淺ましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。（取縋りて泣く。）

かつら　いや、いや。死んでも憾みはない。賤が伏屋でいたづらに、百年千年生きたとて何とならう。たとひ半晌でも將軍家のおそばに召出だされ、若狹の局といふ名をも賜はるからは、これで出世の望もかなうた。死んでもたわしは本望ぢや。

（言ひかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は假面をみつめて物言はず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ來る。）

僧　大變ぢや、大變ぢや。かくまうて下され、隱まうてくだされ。（內に駈入りて桂を見て又おどろく。）やあ、ここにも手負が……。おお、桂殿……。こなたもか。

かつら　して、上様は……。

僧　お悼はしや、御最期ぢや。

かつら　ええ。（這ひ起きて屹と視る。）

僧　上様ばかりか、御家來衆も大方は斬死……。わし等も傍杖の怪我せぬうちと、命からがら逃げて來たの

ぢや。
春彦　では、お身がはりの効もなく……。
かへで　遂にやみ／＼御最期か。
（桂は失望してまた倒る。楓は取りつきて叫ぶ。）
かへで　これ、姉さま。心を確に……。のう、父様。姉さまが死にまするぞ。
（今まで一心に假面をみつめたる夜叉王、はじめて見かへる。）
夜叉王　おお、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もまた本望ぢや。
かへで　ええ。
夜叉王　幾たび打ち直してもこの面に、死相のありありと見えたるは、われ拙きにあらず、鈍きにあらず。源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき御運とは、今といふ今、はじめて覺つた。神ならでは知しめされぬ人の運命、先づわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ。伊豆の夜叉王、われながら天晴天下一ぢやのう。（快げに笑ふ。）
かつら　（おなじく笑ふ）わたしも天晴お局樣ぢや。死んでも思ひ置くことはない。些とも早う上樣のおあとを慕うて、冥土のおん供……。
夜叉王　やれ、娘。わかき女子が斷末魔の面、後の手本に寫しておきたい。苦痛を堪へてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。
春彦　はつ。

（春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち來る。夜叉王は筆を執る。）

夜叉王　娘、顏をみせい。

かつら　あい。

（桂は春彦夫婦に扶けられて這ひよる。夜叉王は筆を執りて、その顏を摸寫せんとす。僧は口のうちにて念佛す。）――幕――

（岡本綺堂氏「修禪寺物語」）

岡本綺堂氏の力作「修禪寺物語」の一節である。「桐一葉」「日蓮聖人辻說法」等からこの戲曲に來ると、ひとしく時代物であり且歌舞伎系統の作ではあるが、大分新し味が感ぜられる。作者は、この戲曲創作の動機について左の如く述べてゐる。

伊豆の修禪寺に賴家の面といふあり。作人も知れず、由來もしれず。木彫の假面にて、年を經たるまま面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追憶してこの稿成る。

三幕物で、時は元久元年七月十八日。修禪寺に面作師夜叉王といふ者があり、その姉娘は桂、妹娘は楓、姉は氣位が高くてまだ獨身、妹は職人の春彦を婿としてゐる。修禪寺に病を養うてゐた賴家は、自分の面體をかたみに殘さうと夜叉王を召してその製作を命じたが、いつまで經つても出來ないので、或日自身で夜叉王の家に赴き、ひどく叱りつける。夜叉王は、まだいつになつたら出來るといふあてもござりませぬといふ。賴家は怒つて夜叉王を手討にしようとする。そこへ姉娘のかつらが、「面は

只今獻上いたしまする。のう、父様。」と哀願する。面は出來てゐたのである。が、夜叉王は、その面に死相があらはれてゐるので、藝術的に心が許さず、それでまだ出來ませぬといつてゐるのである。賴家はかつらのさし出す面を見て、非常によく出來た、さすがは夜叉王あつぱれ者ぢやと滿足し、かつらの美貌を見て、この娘を余が手許に召しつかひたいから奉公させよといふ。夜叉王がかつらの意志をただすと、かつらは大喜びで「父様、どうぞわたしに御奉公を……。」と願ふ。かくて、直に御殿へ上る。その夜、北條の軍勢が二三百人、修禪寺へ攻寄せ、賴家は敢なき最期を遂げた。文例は、その最後の場面である。夜叉王の藝術的性格を表現するのが主眼であるが、それに配するに、かつら・かへでの美しき姉妹、哀史的人物たる賴家、史的事實たる夜討等、變化に富む三幕物。觀客は夜叉王の藝術的性格に對して限りなき敬虔の念を以て見入ると同時に、賴家の運命について抑へがたき悲哀の情を感じ、また、かつらの薄命に同情の涙をそそぐのである。

歌舞伎系統の戯曲の「せりふ」は、これまでに引用した三篇に見られる如く、だいたい七五調または七七調、若しくはその周圍をまはる調子を以てせられる。「桐一葉」の

長「如何(いか)なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の」
市「有明の影薄れつつ」
長「東天紅(とうてんこう)と八面に、かしましく鳴くくだかけは」

市「新日、東天に昇るといふ」

長「世の成行の」

二人「影なるか。」

の如き、また、「日蓮聖人辻説法」の

日蓮「あら、騒がしの人々や。國に敎の地を拂ひ、目のあたりなる逸樂に、永劫盡きせぬ苦艱を忘れ、あだに過ぎゆく月日を惜しまで、そのをりをりの節物を、祝ふ心ぞおぞましき。」

の如き、また、「修禪寺物語」の

かつら「……月の晴きを幸に、打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼ばはり呼ばはり馳せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上樣ぞと心得て、うち洩らさじと追つかくる。」

の如き、すべて七五または七七調である。國語の諧調には、七五音七七音等が、その根柢をなしてゐるやうである。韻文は勿論、舊來の名文句は大抵右の調子またはその附近をまはつてゐる。「與話情浮名橫櫛」などで、いよいよ與三郎が、例の名文句「しがねえ戀の情が仇、命の綱の切れたのを、どう取留めてか木更津から――」にかからうとすると、まだ、はじめない前から、「待つてました！」とか「タチバナヤー」とかなんとか、觀客がどなるのを見ても、七五調といふものは、すばらしいも

のだと思はせられる。よくよく、善光寺の前の乞食までが、「お旦那様や奥様や」「右や左の旦那様」と七五調で哀訴してゐるのを見ても、この調子といふものは、國語にとつてかなり重大な根本的なものに相違ない。

なほ、歌舞伎系統の外題(げだい)であるが、これは昔から、一字・三字・五字・七字といふ風に奇數が習慣になつてゐる。「暫」(一)「桐一葉」(三)「修禪寺物語」(五)「日蓮聖人辻説法」(七)など。但し、近頃は四字や六字のものも出て來るやうであるが、この方は一種の迷信のやうなもので、七五調とは何の關係もない。

四　父歸る

四人默つて、食事をして居る。不意に表の戸がガラッと明く、賢一郎の顔と、母の顔とが最も多く激動を受ける、然してその激動の内容は著しく違つてゐる。

男の聲　御免！

おたね　はい！（併し彼女も起ち上らうとはしない）

男の聲　おたかは居(を)らんかの？

母　へえ！（吸ひつけられるやうに玄關へ行く、以下聲ばかり聞える）

男の聲　おたかか！
母の聲　まあ！　お前さんか、えらう！　變つたのう。
　二人とも涙ぐみたる聲を出して居る。
男の聲　まあ！　丈夫で何よりぢや。子供達は大きくなつたやらうな。
母の聲　大けうなつたとも、もう皆立派な大人ぢや。上つてお見まあせ。
男の聲　上つてええかい。
母の聲　ええとも。
　二十年振りに歸れる父宗太郎、憔悴したる有樣にて老いたる妻に導かれて室に入り來る。新二郎とおたねとは目をしばたたきながら、父の姿をしみじみ見詰めて居たが、
新二郎　お父樣ですか、僕が新二郎です。
父　立派な男になつたな。お前に別れた時はまだ碌に立てりもしなかつたが……
おたね　お父さん、私がたねです。
父　女の子といふことは聞いて居たが、ええ器量ぢやなあ。
母　まあ、お前さん、何から話してええか、子供もこんなに大きうなつてな、何より結構やと思うとんや。
父　親はなくとも子は育つといふが、よういうてあるな、はゝゝゝ。
　併し誰もその笑に合しようとするものはない。賢一郎は卓に倚つたまま、下を向いて默して居る。
母　お前さん、賢も新もよう出來た子でな。賢はな、二十の年に普通文官いふものが受かるし、新は中學校

へ行つとつた時は三番と降つ事がないんや。今では一人で六十圓も取つて呉れるし、おたねはおたねで、こんな器量よしやけに、ええ處から口がかかるしな。

父　さう何より結構な事や。俺も、四五年前までは、人の二三十人も連れて、ずーと巡業して廻つとつたんやけどもな、呉で見世物小屋が丸燒になつた爲にエライ損害を受けてな。それからは何をしても思はしくないわ。そのうちに老先が短くなつて來る、女房子の居る處が戀しうなつてウカ〳〵歸つて來たんや。老先の長い事もない者やけに皆よう頼むぜ。（賢一郎を注視して）さあ賢一郎！　その杯を一つさして呉れんか、お父さんも近頃はええ酒も飮めんでのう。うん、お前だけは顏に見覺えがあるわ。

　賢一郎、應ぜず。

母　さあ、賢や、お父さんが、ああ仰しやるんやけに、さあ、久し振りに親子が逢ふんぢやけに祝うてな。

　賢一郎、應ぜず。

父　ぢやあ、新二郎、お前一つ、杯を呉れえ。

新二郎　はあ。（杯を取上げて父に差さんとす）

賢一郎　（決然として）止めとけ。さすわけはない。

母　何をいふんや、賢は。

　父親、烈しい目にて賢一郎を睨んで居る。新二郎もおたねも下に向いて默つて居る。

賢一郎　（昂然と）俺達に父親がある譯はない。そんなものがあるもんか。

父　（烈しき忿怒を抑へながら）何やと！

賢一郎　（やや冷やかに）俺達に父親があれば、八歳の年に築港からおたあさんに手を引かれて身投をせいでも濟んどる。あの時おたあさんが躓つて水の淺い處へ飛込んだればこそ、助かつて居るんや。俺達に父親があれば十の年から給仕をせいでも濟んどる。俺達は父親がない爲に、子供の時に何の樂しみもなしに暮して來たんや。新二郎、お前は小學校の時に墨や紙を買へいで、泣いて居たのを忘れたのか。敎科書さへ滿足に買へいで寫本を持つて行つて友達にからかはれて泣いたのを忘れたのか。俺達に父親があるもんか、あればあんな苦勞はしとりやせん。

おたか、おたね泣いて居る。新二郎涙ぐんで居る。老いたる父も怒から悲しみに移りかけて居る。

新二郎　併し、兄さん、おたあさんが、第一ああ折れ合つて居るんやけに、大抵の事は我慢して呉れたら何うです。

賢一郎　（なほ冷酷に）お母さんは女子やけん何う思うとるか知らんが、俺に父親があるとしたら、それは俺の敵ぢや。俺達が小さい時に、ひもじい事や辛い事があつておたあさんに不平をいふとお母さんは口癖のやうに、「皆お父さんの故ぢや、恨むならお父さんを恨め」というて居た。俺にお父さんがあるとしたら、それは俺の子供の時から苦しめ抜いた敵ぢや。俺は十の時から縣廳の給仕をするし、お母さんはマッチを張るし、何時かもお母さんのマッチの仕事が一月ばかり無かつた時に親子四人で養傷を披いたのを忘れたのか。俺が一生懸命に勉强したのは、皆その敵を取りたいからぢや、俺達を捨てて行つた男を見返してやりたいからだ。父親に捨てられても一人前の人間になれるといふ事を知らしてやりたいからぢや。俺は父親から少しだつて愛された覺えはない。俺の父親は俺が八歳になる迄家を外に飲み歩いて居たのだ。

その擧句に不義理な借金をこさへて、情婦を連れて出奔したのぢや。女房と子供三人の愛を合はしても、その女に叶はなかつたのぢや。いや、俺の父親が居なくなつた後には、お母さんが俺の爲に預けて置いて呉れた十六圓の貯金の通帳まで無くなつて居つたもんぢや。（菊池寛氏「父歸る」）

菊池氏の力作「父歸る」の一節でまる。「時」は明治四十年頃、「所」は南海道の海岸にある小都會。一幕物。かくて、父はつひに、「ええわ、出て行く。俺だつて二萬や三萬の金を取扱うて來た男ぢや。どなに落ちぶれたかというて喰ふくらゐの事は出來るわ。えらう邪魔したな。」と悄然と出て行かうとする。弟の新二郎が心配して「これから行く處があるのですか。」ときくと、父は全く銷沈して、玄關の緣に腰をかけたまま、「のたれ死するに家は入らんからのう。……（獨言の如く）俺やつて此の家に足踏が出來る義理ではないんやけど、年が寄つて、弱つて來ると故郷の方へ自然と足が向いてな。此の街へ歸つてから、今日で三日ぢやがな。夜になると毎晩家の前で立つて居たんぢやが、敷居が高うてはいれなかつたのぢや……併しやつぱり、這入らん方がよかつた。」などと愚痴をこぼし、漸く立上り、「まあええ、自分の身體ぐらゐ始末のつかんことはないわ。」と、蹌踉として立上り、顧みて老いたる妻を一目見たる後、戸を明けて、外の闇に消える。最後は、次の如く結ばれてゐる。

母　（哀訴するが如く）賢一郎！
おたね　兄さん！

しばらくの間緊張した時が過ぎる。

賢一郎　新！　行つてお父様を呼返して來い。

新二郎、飛ぶが如く戸外へ出る。三人強い緊張の裡に待つて居る。新二郎やゝ蒼白な顔をして歸つて來る。

新二郎　南の道を探したが見えん、北の方を探すから兄さんも來て下さい。

賢一郎　（驚駭して）なに見えん！　見えん事があるものか。

兄弟二人狂氣の如く出で去る。――幕――

「桐一葉」「日蓮聖人辻說法」「修禪寺物語」等から、この戲曲へ來ると、まるで別の世界である。それは單に時代物から世話物へ――などの差ではない。現代の生々した現實の人生がまざまざと舞臺面に實現されてゐるからである。眞の人生を舞臺に實現せしめる――それが新しいリアリステックの戲曲のめざすところで、少しでも不自然さや夢や幻の世界の混ずることを極端に排斥するのである。「あんなことがあるものか、ありや芝居だ、噓だ！」と、少しでも觀客に思はせるやうな節があれば、もうその戲曲は失敗だと見るのである。かうした見地からいへば、この戲曲の如きは、どこまでも寫實的であり、不自然さや非合理的の分子は微塵だにもない。恐らくリアリステックな戲曲として、これほどのすぐれた作は日本に於ては空前のものであらう。

ここで、文章の上から現代劇の「せりふ」について少しく述べて置く。現代劇の「せりふ」に於て、地方的方言（local dialect）を用ひる場合であるが、この戯曲で用ひてゐる言葉は、だいたい香川縣の方言である。しかし、隅から隅まで、そつくりそのまま讃岐の言葉ではない。それはさうあるべき筈で、若し讃岐の方言のままであつては、香川縣人以外の觀客には解しかねる部分が生じて來るからである。さうかといつて、これが若しいはゆる標準語であつては、この戯曲の氣分は著しく殺がれてしまふ。そこで、だいたい四國あたりの出來事だなと觀客にイリューージョンを起させる程度で四國の方言を加味したものである。

現代の戯曲に於て方言をつかふ場合、曾我廼家劇の如きは、大阪辯または關西辯が多いが、これは喜劇にふさはしい言葉であり、また、非常に勢力のある言葉であるから大部分の觀客には理解される。しかし、一般の戯曲に於ては、だいたい東京の郊外に行はれるやうな方言を以て、どこの地方の言葉をも代表せしめてゐるやうである。さうすれば、觀客に理解されると同時に、どこか田舎の出來事だといふイリューージョンを起させるに足るからである。劇にあらはれる西郷隆盛が鹿兒島辯をつかふといふやうな場合は特別であるが、さうでない場合には、忠實に鹿兒島の言葉とか、青森の言葉とかを、そのまま丸出しにしてはならぬ。後に引用する文例、谷崎氏の「白狐の湯」に出て來るお小夜やその母の言葉、「角ちやんたらよう、返辭いしてくんろうよう!」「なあに、もう居やしねえだよ、きつと狐にさらはれてしまつただあ。」といふやうなのが、どこの方言といふわけでもなく、いはば方言の

標準語のやうなものになつてゐる。だいたい一般的には、かういふ程度の方言をつかふやうになつてゐるが、それでよいのである。

五　三浦製絲工場主

三浦　失敬、（入つて來て見廻しながら）早速だが、此處へ僕の妻が來はしなかつたかね。

國分　ああ、誰方かと思つたら社長さんですか。まあどうぞお上りなすつて。

三浦　いえ、さうしちや居られません。――あの、ほんとに妻が此方へ來はしませんでしたかね。

國分　（言つたものかどうかと思ひ煩ひながら）奥さんがですか、さうですね。

三浦　（強く）來ませんでしたかね。

國分　いえ、ええと、もう少し先刻、ちよつとおいでになりました。

三浦　（急き込んで）そしてどうしました。

國分　（もうすつかり決心して）何だか私の子を孕んで、あなたに濟まぬとか何とか言つてゐましたが、私は諭してかへしました。おとなしく歸つて行きましたから、もう彼是お宅へ着いた時分と思ひます。

三浦　いえ併し、確に宅へは戻つて來ません。眞つすぐ歸つたならぶつつかる筈ですが、中途でも會ひませんでした。あれはきつと何處か外にゐるのです。

國分　ではひよつとすると、――（顏を見合はせる）

三浦　さうです。多分、さうだらうと思ひます。私もそれを恐れてゐるんです。――ではかうしちや居られません。私は一と通り探してみます。失禮します。（慌しく去らうとする）

國分　（ちよつと考へてゐたが）三浦さん、ちよつとお待ち下さい。

三浦　（振返つて）何ですか。

國分　私あなたに一言いひたい事があります。かういふ機會を利用するのは、少しく殘酷な態度のやうに見えますが、丁度好い折だから一應お聞き取り下さい。

三浦　何ですか、早く言つて吳れ給へ。

國分　三浦さん、よくお聞き下さい。若しここであの關口ひでが、悲慘な結果に陷るやうな事があつたら、それは全くあなたの責任ですよ。あなたのやくざな仁慈と、わざとらしい寛大との罪ですよ。あなたはなまなか彼女を救はうとして、却つて彼女を苦しめたのです。强ひて彼女を許さうとして、實は却つて彼女を責めてるのです。あなたはまだそれに氣がつかないのですか。ここでもあなたの仁慈主義は――溫情主義は破綻を起してるのです。

三浦　何ですつて、――

國分　まあお聞きなさい。ひとり此の關口ひでの場合ばかりではありません。あなたはもうとうに、我々に對するあなたの仁惠的態度から、溫情主義から目ざめてゐなければならなかつたのです。あなたは我々に取つて、ほんとにお情深い工場主でした。常に我々に對して、溫情を以て臨んで吳れました。併しあなた

のその態度には、丁度慈善を施す人のやうな、恩惠を與ふる人のやうな、喜と誇とが含まれてゐます。工場主の仁慈を只管有難がるのは、封建時代からの遺物です。今日では恥づべき奴隷根性です。我々覺醒した勞働者は、それを却つて侮辱に感じます。我々は工場主と自分らとの間を、常に正當な對等關係に置きたいのです。正當に要求するものを、正當に與へて吳れればそれでいいのです。餘計な「お情」や「御恩」は要らないのです。關口ひでの場合を一例に取つて見れば、彼女の治療代と扶助料とを正當に出して下されればそれでよかつたのです。小說的な結婚なんぞに依つて、「救つて」なんぞ頂かなくてもよかつたんです。どうです、お解りになりましたか。

三浦　（默つてゐる）……。

國分　から云ふ匆卒の場合ですから、よくお解りにならなかつたら、いづれお宅へお歸りになつてゆつくりお考へなすつて下さい。そしてあなたの非をお覺りになつたら、これは甚だ差出がましい忠告ですが、僅かに態度なんぞを改めて下さるよりは、一刻も早く社長をおやめになつて、もとの東京へお歸りなさる事をお勸め致します。あなたが此の儘仁慈を施せば施すだけ、職工らは益〻反感を持つだらうと思ひます。もうただでさへあなたは甘く見られて居ります。ですから此の上凌辱を受けない中に、その「理想」とやらの旗を捲いてお歸んなさい。それが何よりもあなたのお爲です。

三浦　（猶も默つてゐる）……。

（此の時突然家を搖る汽車の響がして、汽笛がけたたましく鳴り響く）

三浦　（ある豫感に戰へて）おや。……（と耳を欹てる）

國分　（同じく）何だらう、急に汽笛なんぞ鳴らしやがつて！

（不安なる沈默の中に、兩人眼と眼を見合はす。外を駈けてゆく人の足音がする）

行人の聲　轢死だ！　轢死だ！

近所の人　（戸口から）國分さん、又誰か鐵道往生をしたやうだぜ。（馳せ去る）

三浦　なに、轢死？　（急いで出て行く）

國分　（呟く）ぢややつぱり、……やつぱり、……やつて了つたのかな。（行かうか行くまいかと煩悶する體）（中村息せき切つて現れる）

中村　國分さん、大變だ。あすこで社長の奧さんが死んだぜ、あのおひでさんが轢死したぜ。今踏切の傍で鐵道の人が、大變騷いでゐるから行つて見たら、おめえ、轢かれてるのはおひでちやんぢやねえか。俺あびつくりしちまつて、いきなり此處まで駈けて來たが、――おい國分さん行つてみよう。おまへに急いで知らせに來たんだ。さ、早く行かう。――あ、酒は此處へ置くよ。おめえ行つてみねえのか。（國分が默つてゐるので）ぢや俺あ一人で行くぜ。（中村不思議な面持で、併し足早に退場）

國分　（酒を二三杯續けざまに呷つて）俺のせゐぢやないぞ、……ほんとに俺のせゐぢやないぞ。……みんなあいつ等が惡いんだ、……あいつ等が苛め殺したんだ。……（と切れ切れに呟く）

（三浦淳吉再び登場。彼の眼は黑くうるみを帶び、顏は嚴肅なるまでに蒼白である）

三浦　（靜かな聲音で）國分君、おひではとうとう死んだよ。君の言葉の通り悲慘なる最期を遂げた。そしてこれは成程、僕の「やくざな溫情主義」の結果かも知れない。併し、それと同時に君の「反抗のための反抗」

も、多分に責任を頒たなければならぬ事を、お互に考へようぢやないか。――兎に角僕は葬式の濟み次第、君の忠告に從つて東京へ歸る。だから最後のまけ惜しみかは知らぬが、一言君にも反省を促して置くよ。では左樣なら。僕はこれから、僕らの犧牲に供したあの可哀さうな女の、引きちぎられた死體を運ばなくちやならないから。（靜かに退場）

（國分答ふる所なし。三浦の足音とぼとぼと遠ざかり行く）（幕）

久米氏の力作である。この戯曲は、現代の民衆的事件を脚色したものであるから、いはゆる世話物であるが、かうした新しい戯曲を世話物といふが如き名稱で呼ぶのは何となくふさはしくない。先づ社會劇とでも呼ぶべきものであらう。また、この戯曲は、別の分類に從つていへば、いはゆる悲劇に屬する。悲劇の大團圓は多く死に終る。ここにあげた文例は、その死に終つた大團圓である。

この戯曲は四幕であつて、時は現代、場所は東北地方の一小都會である。極くざつと筋を述べると、三浦製絲工場（この頃の社長は淳吉の父淳藏五十七歳）に勤めてゐた女工の關口ひで（二十一歳）が過つて工場の機械に觸れ、片腕を傷つけたが、社長は三十圓の見舞金を出したきりである。不完全な治療と身體の衰弱のため、餘病が併發して苦しんでゐるのを、職工長の國分寅治が一時引取つて介抱してゐる。寅治は三十三歳であるがまだ獨身である。負傷した女工の見舞金問題をきつかけに全職工は賃銀三割增その他の要求で同盟罷業に入り、寅治がその首領となる。罷業のかたはら、寅治はひでの介抱をしてゐたが、或夜發作的に彼女を犯してしまふ。勿論、彼女にとつては不可抗力な不運である

つたので、恩誼は感じてゐるが、寅治に愛を感じてゐるのではない。社長の息子淳吉（三十歳）は、大學を出てからずつと東京にゐる。父の經營してゐる工場にストライキが起きたのを知り、急いで歸鄕し、直に父に代つて社長となり、罷業團の要求を全部容れ、その上關口ひでを太田病院に入院せしめる。

清敎徒風な若き社長は、毎日病院にひでを見舞に行く。その中に、「いつそ、この不幸な女と結婚することによつて救つてやらう。」と考へて結婚する。結婚後三ケ月くらゐで、ひで子の腹は目だつて大きい。淳吉の家にゐる二十歳になる從妹のとし子（恐らく、自分が淳吉の妻となるものと思つてゐたであらう）が、目ざとく、ひで子の腹は三ケ月位ぢやないとにらむ。太田醫師が來診する。とし子がそつと聞く。五ケ月と分る。ひで子も五ケ月と聞いて、始めて或夜の出來事を良人の三浦社長に打ちあけて泣く。三浦はそれをも許す。が、ひで子は許されてそのままでゐられるやうな女ではなかつた。かくて、大團圓の悲劇に到達する。

アリストートルもいつてゐるやうに、悲劇の觀客に與へる効果は、「憐れみと怖れ」とにある。すなはち、この場合でいへば、三浦社長とひで子とに對する同情と、我々もそれと同じやうな運命に陷りはしまいかといふ恐怖の念とが同時に心中に起る。悲劇によつて流される涙は我々の魂を底の底から洗ひ淨める。かくて、我々の思想・生活は價値的に高められる。この精神作用を淨化作用（カタルシス）といふのであるが、淨化作用は悲劇がもたらす効果である。唯しかし、悲劇は餘りに絶望的であつてはならぬ。

この場合では、ひで子は生命を絶つたが、社長や三浦工場の前途、または國分職工長のこれからの生活等には、何等かの光明が見え出されるやうな氣がする。

悲劇的作品として、また、近代思想の表現として、久米氏のこの戯曲の如きは、恐らく後世に殘る名篇の一つであらう。

六　白狐の湯

上手より提灯を持つた巡査・お小夜(さよ)・母親の三人が下りて來る。用心深くあたりを見廻しながら溫泉小屋の方へやつて來る。

お小夜　（橋の上から小屋の方を見て）角(かく)ちやん、角ちやんたらよう、返辭いしてくんろうよう！

母親　なあに、もう居(ゐ)やあしねえだあよ、きつと狐にさらはれてしまつただあ。

巡査　（小屋を覗き、周りを一とまはり廻つて見ながら）何處へ行つたか、もう此の近所には居られないやうだね。

お小夜　（川上を向いて）角ちやん角ちやんたらよう！　何處へ行つちまつたんだあよう！

巡査　（お小夜に）お前、確に此處で狐を見たと言ふんだね？

お小夜　ああ、己あ確に見ただあよ。それ、その小屋の窓のところで角ちやんと己が中を覗いて見るてえとな、眞つ白な大きな狐がお湯に漬かつてゐただあよ。

母親　だからおツかあの言はねえ事ぢやねえんだによう。こんなところに居てはなんねえつて、あれほどにおツかあが言つたあのによう。

巡査　ふむ（考へる）

お小夜　（再び川上に向かひ）角ちやん、――角ちやんてばよう、――

母親　そんなに呼んだつて、もうあの野郎は歸つちやあ來ねえだあ。さあ、お小夜ばう、もう歸らうよ。（巡査に）旦那、ほんたうにまあこんな夜ふけに、濟まねえことでござえました。

巡査　どうだね、もう少し川上の方を捜してみようかね。

母親　いいえ、もうそれには及ばねえだあ、あの野郎は私はとつくにあきらめて居ますだあ。

下手より白人の女、輕快な散歩姿で紳士と腕を組みながら山路を降つて來る。召使の老婆がそのあとについて來る。お小夜等のうろうろしてゐる樣子を見ながら行過ぎようとする。

巡査　（ちよつと躊躇した後、老婆に聲をかける）もし、もし、

白人等の一行、橋の上で立ち止まる。

巡査　あの失禮ですが、あなた方はこんなに晩くどちらへおいでになりましたね。

老婆　（面をふくらませながら）わたしはね、うちのお孃さんが此の旦那と（紳士をさす）夕方散歩に出てつたきり、大變かへりがおそいもんだから迎へに行つて來たんですよ。

二人の白人、うるさい事を尋ねる奴だといふ顏つきで聞いてゐる。
巡査　はあ、成る程、――そしてどの方面を散步して居られたのかね？
老婆　あんまり月がいいもんだから此の山の上の湖水の廻りを步いてゐたつて、さう言つてゐますがね。全體何だつてそんな事を聞くんですよ。
お小夜　（岩の上に落ちてゐた絹のハンケチに心附き、それを取上げて巡査の方へ持つて來ながら）ああ、ここに角ちやんのハンケチが落ちてゐただあよ。角ちやんはな、神戶にゐる時分に此のハンケチをローザさんに貰つたんだつてさう言つてな、肌身離さずに持つてゐただあよ。
白人の女　（ローザといふ名をきくと同時にふと氣が附いて、ツカツカと傍へ寄つて來て巡査の手にあるハンケチを見る）おお、これ、これ、これ私のものです。わたし神戶で此のハンカチーフ盜まれました。
（强き語調で）誰がこれを持つてましたか？
老婆　まあ、ローザさん、ほんたうに此のハンケチだよ。これ御覽なさい、此處にRとKといふ字がちやんと書いてあるぢやないか。ケリーさん、記念のハンケチが出て來ましたよ。
白人の紳士　おおさう、わたくし大へん喜びます。（同じく傍へ寄つて）おお、これに違ひありません。これ、どうして此處にありましたか？　わたくし不思議に思ひます。
老婆　（思ひあたつたといふ顏つき）ああ、きつとあの小僧が盜んだんだよ、彼奴の仕業だ。……まあ、ほんたうに薄ッ氣味の惡い、厭な小僧だつたらありやしない。（巡査に向かつて）あなた方は、あの此の頃此の近所をうろついてゐる薄馬鹿のやうな小僧がゐるのを知りませんかね？　もと神戶の洋服屋に奉公を

してゐた、──

巡査　ええ知つてゐます。あれは狐憑(きつねつき)でね、毎晩此の小屋の近所をうろついてゐたんです。

老婆　ああ、彼奴(あいつ)ですよ。毎晩毎晩、うちのお孃さんが此處のお湯へ這入りに來るのを知つて居てね。昨夜も此の近所をうろうろして、跡を追ひかけて來たとか言つて、もうお孃さんは氣味惡がつてゐたんですよ。

巡査　それで今夜も此のお湯へお這入りになつたんですか？

老婆　いいえ、昨夜で懲り懲りしちまつたつて、今夜は這入りませんでしたよ。それにもう、病氣の方も大分よくなつて來ましたので、明日は神戸へ歸るといふのでね、此の旦那が迎へかたがた遊びにいらしつたんですよ。

巡査　ああ、さうですか、それでよく分りました。では此のハンケチはそちらへお返し申します。

白人の女　（横柄に默つて受取り、紳士を見ながら）レット、アス、ゴウ、──（巡査に）左樣(さやう)なら。

巡査　左樣なら、失禮しました。

白人の女、再び紳士と腕を組みつつ、老婆を連れて上手(かみて)の山路へ去る。三人ぼんやりして後を見送つてゐる。短き間。やがて、遠くの川上の方に一點の灯かげが見え、微かに叫ぶ人聲が聞える。

人聲　おうい、みんな此方(こつち)へ來いよう！　角ちやんが死んでゐるだよう。

お小夜　え！　角ちやんが死んでゐる！

言ひながら夢中で川の中へ飛降り、川上の方へ走つて行く。巡査と母親續く。

人聲　（灯かげと共にやや近くなり、ハッキリ聞える）おうい！　早く來いよう！　角ちやんが死んでゐる

だよう！　稚兒が淵に死體が浮かんでゐるだよう！

三人の姿が川上の方へ次第に消えて行く。――幕――（谷崎潤一郎氏「白狐の湯」）

谷崎氏の頭の中に醱酵された、ゆたかな甘美な、怪しい夢が脚色された戯曲「白狐の湯」の一節である。ちよつとお伽劇のやうなところもあるが、美しく面白く、氣味が惡く、觀客はすべて狐に化かされたやうな氣持になりながらも、人生についていろいろ考へさせられる不思議な魔力を持つ戯曲である。一幕物で、「所」は或山奥の溪流のほとり、そこに昔から月の夜になると白狐が浴するといふ「白狐の湯」の小屋があり、その白狐の浴するところを見ると、誰でも狐憑になると信ぜられてゐた。この白狐の湯から半里ほどはなれた山村に、老母とお小夜とが住んでゐる。この老母の姉の子、すなはちお小夜の從兄に角太郎といふ十八九歳の青年がある。彼の母も兄も姉も皆狐憑になつて死に、一家が絶えて角太郎一人となつた。角太郎はやがて神戸の中村といふ洋服店に奉行に行つた。そして、近所にローザといふ若い西洋婦人が他の二三の若い西洋婦人と共に、立派な洋館に住んでゐて、よく洋服を注文した。角太郎はそのたびに注文品を持つて行き、ローザさんに可愛がられてチョコレートを貰つたり、或はハンケチに角太郎のKとローザのRとを書いたのを貰つたりしたことがあつた。ローザの家は不思議な家で、晝間はひつそりしてゐるが、夜になると男の西洋人だの水兵だのがよく出入した。ローザ達は、きれいに化粧してその男の人達を迎へてゐるのであつた。その中に、角太郎は

少しからだの工合が惡くて郷里に歸り、お小夜の家すなはち叔母のところへ厄介になつてゐたが、叔母が意地惡く當るので、いつもふらふらと山を歩いてゐた。そして、この五六日は夜も歸つて來なかつた。老母は、やつぱり狐憑になつたと信じてゐる。ちやうどその頃、この溪流の岸に、ローザの別莊があり、彼女は腕や脚や肩のあたりに、人に見せたくないルビー色のおできが出來て、湯治かたがたそこへ滯在してゐる。そして、眞夜中になると、こつそりと、例の白狐の湯に入浴に來る。それを角太郎が見つけて、なつかしがつて、あとをつけたが、つい話す機會もなかつた。ところが、今夜はうまく白狐の湯の側でローザさんに會つて、いろいろと話す機會を得て喜び、神戸で貰つたハンケチまで見せたりする。ローザさんは、今晩國へ歸るから一所に角太郎を連れて行かうといふ。國はフランスの巴里で巴里はこの川上をどこまでもどこまでも上つて行けばいいのだといつて連れて行く。しかし、ちやうど其の時刻には、ローザさんはケリー氏（これもRとK）と共に湖水のあたりを散歩して月を稱してゐたのである。だから、角太郎が會つたローザは白狐に相違ないのである。かくて、角太郎は、狐憑が必ず死ぬといはれてゐる稚兒が淵に死體となつて浮かんだのである。

リアリステックでないことはいふまでもない。第一、人間が狐に化かされるなどといふことが旣に現代人の理性に反する。それに、巴里のローザさんが、「レット、アス、ゴウ」などといふのはまだよいとしても、ローザさんが、ちやうど角太郎の郷里へ來てゐるといふのも餘りに偶然過ぎる。しかし、大部分の觀客はすつかり化かされて、すべて眞實だと思ひ込んでゐる。「そんな馬鹿なことがあ

るものか。」といふやうな劇評家的態度で見てゐるのは極く少數である。多くの人が歌舞伎を好むのも、やつぱりさうで、歌舞伎には、夢幻の世界、ありさうもない場面がかなり多いが、觀客は、それを嘘だとも不自然だとも思はないで醉はされてしまふ。シエクスピヤの劇にだつて、よく幽靈が出て來たりするが、餘程自然科學に凝りかたまつた人でもない限り、それを不自然だとも嘘だとも思はないのである。だから、戲曲はリアリステックでなければならぬとばかりはいへぬ。そこに、今後の新しい戲曲の工夫の餘地が存するのではあるまいか。

七　野島先生の夢

（野島先生の書齋。簡單な西洋間。先生何か書いてゐる。書き損ひ計りしてゐる。正面に入口があつて、その左手に黒板がある。右手に本棚がある。黒板には十一月二十日迄、脚本一つ、同三十日迄、小說一つ、十二月五日迄、日記十枚、同十日迄、脚本一つ。あとはお斷りとかいてある。一人の男登場）

男　先生！

先生　（筆をおき、ふりかへり）なんです。

男　一つ私の方の新年號に小說をかいて下さいませんか。

先生　駄目ですよ。あれを御覧なさい。今日はもう十五日なのに、まだ何にもかけないのですからね。やり切れませんよ。

男　そんなことをおつしやらないで、どうぞお願ひしたいのです。私の方の豫定が御座いまして、是非先生にかいて戴かないと困るのです。

先生　それは君の方もお困りかも知れませんがね、僕の方はなほ困りますよ。一たいどうもこの頃は雜誌が多すぎますね。君達のいふことを一々聞いてゐた日にはどんな天才だつてくたばつてしまひますね。天才を殺すものは雜誌記者ですね。實は今、私はそのことで腹を立ててゐたのですよ。

男　困りましたな、どうも。私を助けると思つて是非書いて下さい。

先生　駄目ですよ。

男　なんなら二三枚のものでも結構です。

先生　それも駄目ですよ。

男　折角ここまで來たのですから。

先生　それは君の勝手ぢやありませんか。

男　どうも困りましたな。

先生　僕の方だつて實は引受けすぎて困つてゐるのですよ。この上引受けた日には生命がありませんからね。毎月二つも三つも書かされたら、事實、作者が參つてしまひますよ。今の日本にいい奴の出ないのもその罪の半分は雜誌記者の罪ですね。勿論、引受ける方もよくありませんがね。つい日本人にはなんでもいいさ

ぎよく引受けたがる質(たち)があるやうですからね。引受けたあとではいつも、引受けなければよかつたと思はないことはありませんよ。このままぢや、お互に考へものですね。あなた達の方だつて、いいものをかいてもらはなければ損でせう。讀者だつて一夜づくりの作ばかり讀まされちや可哀さうですよ。それから同じ人間があつちこつちに顏を出すのも面白くありませんね。一つ雜誌仲間で相談して、一人の人には一月に一つ以上たのまないことにしたらどうです。さもなければ作者を一手で買ひしめるのですな。今の作者は少し金を餘計出せば雜誌記者のいふことはよく聞きますからね。さうしたら日本の文壇の爲にきつといいでせう。少し位餘計出したつて雜誌の爲にも却つていいでせう。今のやうぢや、お互に面白くありませんな。

男　御尤もです。それなら今の御意見を御感想として私の雜誌に出してもよろしう御座いますか。

先生　それは困りますね。今のは雜談です。別に面白い考でもありませんからね。しかし、私も作家の一人として、作家の未來を尊敬するやうに注意してもらひたいものですね。何か原稿が出來た時、それをある人の手にゆだねる。その人がいろいろの人の原稿を一手にあつめて、それをあなた方の集つてゐる處で朗讀する。そしてそれをその場でせり賣りする。そして手數料をその內から五分なり七分なりとる。さういふ商人があつたらお互に便利ですね。書く方も何も無理せずにかけますからね。そしてあなた方も自分の雜誌に丁度向くのを買ふことが出來ますからね。今のやうに、出來不出來にかかはらず、一枚いくらときまつてゐるよりその方が正當でせう。

男　それは結構な御考ですね。

先生　しかしそんな商賣人があつたら、私なんか眞先に不愉快を感じるかも知れませんがね。今のままでは作家が可哀さうですよ。あなた方の方ではいらなくなればすてればいいでせうがね。
男　それではどうしてもかいて戴けないのですか。
先生　ええ、とてもかけませんからね、折角ですが。
男　それなら失禮します、さよなら。
先生　さよなら。

（武者小路實篤氏「野島先生の夢」）

この次に青年の一が登場して金が五圓ほど欲しいといふ。野島先生は、細君がゐないでの金が無いから、本でも持つて行つて賣れといつて本を呉れてかへす。ついで青年の二が登場して、幾日も御飯を食はないといふので、御飯を食べさせてかへす。こんどは青年の三が登場して、病氣の話や少女の話や脚本の話などをして、近所で友達と劇の稽古をしてゐるが、是非先生に見て頂きたいから連れて來るといつて歸つて行く。少女が登場する。それは青年三の慕つてゐる少女で、野島先生の姪に當る娘。やがて青年三が、青年二人と女學生のやうな女二人を連れて來るが、さつきの少女がゐるので困つてゐる。それは、劇の稽古といふのは、青年三がつくつた戯曲で、その少女をモデルにして自分と會ふところなどがあるからである。野島先生は、どうしてもやれやれといふので、仕方なく劇の稽古をする——といつたやうな場面である。劇的要素が全然無いわけでもないが、とても舞臺にかけられるものではない。勿論作者も演劇を豫想してゐるのではない。いはゆる closet drama として、讀む

戯曲なのである。そして、讀む戯曲としては、野島先生の文士的生活が面白く描かれてゐるので、ちよつと漱石の「猫」でも讀んでゐるやうな氣のする作品である。「猫」といへば、この戯曲の中に、野島先生に來たハガキに「はげの、出來損(できそこな)ひの、くたばり損ひの、へぼ文士の、おたんちんぱらおろがす。創作なんかやめて、死んぢまへ」などといふのがあつて、先生苦笑してゐる。

この文例は、讀む戯曲の一例として引用したのであるが、ここで喜劇について一言して置きたい。この戯曲は、ある意味に於て喜劇である。喜劇は大團圓が幸福または笑に終る戯曲である。この戯曲では、青年三のつくつた戯曲中で少女と作者とが會ふのであるが、その稽古を見てゐた少女は、それが自分をモデルにしたのだと知るや怒つて、「もうよして頂戴、もうよして頂戴。妾はだまされませんわ。あなた達は皆(みんな)ぐるになつて妾(わたし)を馬鹿にしていらつしやるのです。」といふ。その次は左のやうになつて幕となる。

青年三　そんな、そんなことはありません。ぼ、ぼ、僕はお孃樣がここにいらつしやるとは思はなかつたのです。許して下さい、許して下さい。ぼ、僕がわるかつたのです。先生、許して下さい。許して下さい。僕は、もうなが生きはしません。許して下さい、許して下さい。すみません、すみません。僕は一生のお願を先生にだけお知らせしたいと思つたのです。せ、せ、先生お一人だけに、そして一生に一度でよろしいから心からの喜と感謝を味つて死にたいと思つたのです。一人で寢てゐるとあまり淋しいので、望んではならないことを望んだのです。許して下さい、許して下さい。

少女　望んではならないこととは思ひませんわ。ですが、こんな芝居してまで。
靑年三　ゆ、許して下さい、許して下さい。
先生　許しておあげ。そして一度だけ病氣見舞にゆくことを承知しておあげ。
少女　お叔母さまは一所に來て下さいますか。
妻　ええ、一所にゆきませう。
少女　それなら、一度か、二度あがります。
靑年三　それは本當ですか、本當ですか。先生、ぼ、僕は死んでもよろしい、死んでもよろしい。（跪いて泣出す）
靑年三の友達皆　萬歲、萬歲、女王萬歲。
（芳子、妻によりそふ。女中、水菓子を持つて來、入口に立ち止る）

――幕――

笑が人生にとつて必要であることはいふまでもない。隨つて、喜劇でも笑劇でも、それは決して低級なものではない筈である。曾我廼家五郎氏は自ら脚本を書き自ら演ずる。そして、それは相當立派な藝術として稱讚されてゐる。が、まだ日本には、本當に眞劍な立派な喜劇作者があらはれてゐない。隨つて眞の喜劇研究は今日以後のことに屬する。

第六章　隨筆的文章

ここに、隨筆的文章といふのは、自然、人事、古今、東西、あらゆる現象あらゆる問題に對して、折にふれ事に感じて筆を執り、輕い氣持で、四角張らずに、氣取らずに、いはばさらさらと書流したといつた趣のある文章のことである。

しかし、出來上つたところを見ると、如何にも無造作に何でもなくすらすらと面白く書いてゐるやうでゐて、その文字の裏には美しい詩もあり、鋭い皮肉もあり、輕いユウモアもあり、また、正面から人を罵つてゐるかと思へば、あちらを向いてにやにや笑つてゐる、といつたやうな趣のあるのが、いはゆる隨筆の眞の姿である。自照文學などと呼ばれてゐるのもその理由からで、時には本格的の論說文などよりは更に更に力強く人に迫つて來るところがある。論說文は、いはばモーニング姿で、講堂のやうなところで、訓話をしたり講義をしたりするやうなものであるが、隨筆は浴衣がけで、ちよつと一杯やりながら、ぽつりぽつりと世間話をするといつた風な趣がある。そこに却つて鹿爪らしい訓話や講義以上のものがあつたり、本當に人を動かす力があつたりする。

我が國の隨筆には、古くは淸少納言の「枕草子」から兼好の「徒然草」、さては、德川時代の歌人や俳人または國學者や漢學者などのものした無數の書物があり、明治以後には新しいスタイルの隨筆文學がかなり多くあらはれてゐる。さうして、それは決していはゆる文士だけの占有物だけではなくして、學者に政治家に官吏に軍人に實業家に、あらゆる範圍に亙つて多種多樣の人々が筆をふるつてゐる。

が、本當にすぐれた隨筆家といふやうなものは、淸少納言や兼好以來、ちよつと跡切れてゐるやうである。たとへば、現代の日本には、淸少や兼好、またはイギリスのチャールズ・ラムといつたやうな、すぐれたエッセストは遺憾ながら、ちよつと見當らないやうである。隨筆は、まづ英語のエッセイ（essay）に相當するものであらう。ラムの Essay of Elia の如きは、まさに天下の逸品で、たとへば、その中の一篇に次のやうなのがある。題は「讀書偶筆」とでもいふべきもの。

私には、これといつて別に嫌ひな書物があるわけではない。シヤフツベリの書いたものが上品過ぎて恐れ入るとも思はないし、ワイルドのものが下品過ぎて讀むに堪へないとも思つてゐない。だから、私は凡そ自分が書物だと信ずるものであれば、どんなものでも手當り次第に讀む。ところが、世の中には、書物の形をしてゐながら、どうしても書物だと思はれないものがある。その「書物でない書物」といふ奴を數へあげてみると、先づあの宮廷年鑑、住所姓名錄、手帖兼用の紙入、とぢて背文字のある雙六の盤、科學的の論文、曆、法令全書、それからヒュウムだのギボンだのロバアトスン、ビイテイ、ソオムジエニンズなどの書いた

もの、また、「やあ、これは便利だ」などと銘のうつてある一切の書物、それに、フレイビアンズやジョセフアス（あの博學な猶太人）の書いた歴史、ペイレェの書いた倫理學——まあ、ざつとかういつた種類のものである。私はそんなものを除けば、どんな本でも讀むことが出來る。私は、かくまで寛容に、かくまで廣い趣味をもつて生まれたことに對して、いつも自分の星廻りに感謝してゐるのである。

かうなつて來ると、科學者の書いた本や、ヒュウムやギボンなどといふ人の書いた書物までが、住所姓名録や手帖兼用の紙入などと一しよくたに、書物といふ概念から除外されてしまふ。しかも、それは、寛容にして趣味の廣い讀書家のラムがいふのだから、恐らくまちがひはなからう。これに對して、科學者やヒュウムやギボンがむきになつてもはじまらぬ話である。まづ、隨筆といふのは、かうした趣のある文章のことである。清少納言が、「すさまじきもの」として「晝ほゆる犬、春の網代、三四月の紅袴のきぬ、嬰兒のなくなりたる産屋、火おこさぬ火桶、すびつ、牛にくみたる牛飼、博士のうちつづき女子うませたる、方違にゆきたるにあるじせぬ所。」などをあげたのや、兼好が、「よろづにいみじくとも、色好まざらむをのこはいとさざうしく、玉のさかづき底なき心地ぞすべき。」などといつてゐるのも、まさに隨筆的文章の或斷面を見せてゐるといへるであらう。だから、隨筆は、いはば或角度から見た文明批評であり人生批評である。時には、或觀點から試みられた敍景であり抒情でもある。文明批評・人生批評といふ方面からは小論文ともいへるであらうし、敍景・抒情といふ

方面からは小品文ともいへると思ふ。

そこで、隨筆的文章の要點をあげてみると、およそ左の如くなるであらう。

第一、一篇の文章は、餘り長くならない方がよい。せいぜい、長くても十頁までくらゐ、極く手頃は二三頁から四五頁までといつたところ。

第二、自分だけで風流がつたり、知つたか振つたり、氣取つたりするのは、最も排斥すべきで、厭味やあくや毒氣がなく、すつきりしてゐて、中身が一ぱいにつまつてゐるのがいい。

第三、讀んで肩のこらない、輕妙なすらりとした、そしてほほゑましいユウモア入りのスタイルの中に、限りなく深い人間味の泉が湛へられてゐる、といふやうなのでなければならぬ。

以下、現代の隨筆中から具體的の文例をあげて、それによつて具體的に手法を學んで行くこととする。

一　利口であれ

實錄文學や報告小說など、すべて事實に基づいた作品は、如何にも現實的な、至極手堅い感じがあつて、讀んで面白いものに違ひないが、しかし結局は、十分に成長し得ない文學ではないのか。報告するに足る事

作といふものは、さうザラに起るものであるまいし、小說の材料にするのだからといつて、事實の詮索に憂身をやつしてゐたら、切りがあるまい。作家たるもの、年にせいぜい二つか三つしか書けない、といふ事になるにきまつてゐる。

その二つか三つの作品で、生活が保證されるといふなら、われまた何をかいはんやである。だが、世間では、事實を調べるために費した時間や勞力は算盤に入れないのが普通である。面白くさへあれば、それでいい。だから、嘘八百の小說、大衆小說の方が、矢張り高い貨幣價値を持つてゐる譯で、早い話が、大佛次郎の「大楠公」なども、單に頭の中で揑ね上げられたに過ぎない人物、想像上の山伏から始つてゐる。想像や空想には、資本がいらない。考へてみると、この方が、どうも結局利口なやうである。

（東京日日新聞「蝸牛の視角」より）

小さな論說文すなはち小論文であるが、氣取らずに、すらりとしたスタイル、「その二つか三つの作品で、生活が保證されるといふなら、われまた何をかいはんやである。」とか、「考へてみると、この方が、どうも結局利口なやうである。」などと、輕い皮肉をいつたりしてゐるところなどが、いはゆる隨筆の特徵である。そして、內容は、かなりぎつしりと詰つてゐる。これだけの內容を本格的に社會をつけて論ずるとなると、少くとも此の十倍や二十倍の紙面を要するであらうが、それでゐて、得るところ、考へさせられるところは、結局どうも此の隨筆以外に出さうもないとなると、隨筆の原稿料といふものはウンと高く支拂つて貰はないと、全くわりのわるいことになる。少くても結構だと

いふなら、「われまた何をかいはんや」である。死んだ芥川龍之介が、隨筆「大雅の畫」の中で「藝術品の價値も小切手や紙幣に換算出來ると考へるのは、度し難い俗物ばかりである。」などといつた言葉も思ひ出される。

二 歷史小說

歷史小說といふ以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少忠實でないものはない。しかし一時代の特色のみを、——殊に道德上の特色のみを主題としたものもあるべきである。たとへば日本の王朝時代は男女關係の考へ方でも、現代のそれとは大分違ふ。其處を宛然作者自身も、和泉式部の友だちだつたやうに、虛心平氣に書上げるのである。この種の歷史小說は、その現代との對照の間に、自然或暗示を與へ易い。メリイのイサベラもこれである。フランスのピラトもこれである。

しかし日本の歷史小說には、未だこの種の作品を見ない。日本のは大抵古人の心に今日の心と共通する、いはゞヒューマンな閃きを捉へた、手つ取り早い作品ばかりである。誰か年少の天才の中に、上記の新機軸を出すものはゐないか？（芥川龍之介「澄江堂雜記」）

いはば浴衣がけで、涼み臺にでも腰をかけて、文學青年を相手に、空の星を仰ぎながら、物語つて

ゐるやうな感じのする隨筆である。夕顏の花がほの白く闇の中に浮いてゐるかも知れない。別に皮肉もなければユウモアもない。眞正面から生眞面目に說いてゐるのであるが、そして隨筆としては少し固すぎるのかも知れないが、前にあげた「利口であれ」と續けて讀んで貰ふと、そこに何等かの暗示を得るであらうと思つて引用したのである。

三　三毛ちやん

Hへは初めて避暑に來たのである。此の村の人は總じて人狎つこい質である事は、その後知るやうになつたけれど、それが着いた日に分る筈はない。親戚から預つて一所に連れて來た和雄の方は此處の家へも二度目なので、宿のお内儀さんがチヤホヤして下座敷へ連れて行つた。だが私の方は海も山も社も杜も何を見ても親しみも馴染もない赤の他人だから、この炎天に遊びに出て行く勇氣も出ない。

コンクリートの土手に打突る土用波の音を聞きながら、グツタリして二階の窓に倚りかかつてゐると、其處へ這入つて第一に言葉をかけたのは三毛の仔であつた。

「お前は此所の娘かえ」

私は彼女を抱上げる機にちよつと腹の處を見てからから訊いた。すると彼女は、

「ニヤーン」

と口元に得も言はれぬ嬌態をして、早速咽をゴロ〳〵鳴らした。

私が此所へ來たのは、表面避暑などと貴族的な名辭を借用したものの、實は腺病質の子供の守役ともう一つの目的は或文豪を研究した論文を書上げる爲だつた。ところが、その文豪の著書の中にムシウ・ボンナールと呼ぶ矢張り私のやうな獨身者――貧富の隔絶はあるが――の學者が暖爐の前で猫と話す條がある。私は不圖そのことを思ひ出して、これも何かの緣であらうと思つて、わざわざ東京から持つて行つた明治屋の砂糖菓子をやつたが、彼女は羞みやと見えて、ちよつと見たばかりで食べようとしない。それでは餘り愛想がないと思つたから、ちやうど宿から茶受に貰つた饅頭の澤山殘つてゐたのを、こんなものではどうかと氣遣ひながら前に置くと、彼女はその無禮をたしなめるやうに呻りながらそれを啣へて何處かへ行つてしまつた。

併し田舍の饅頭をやつた私の心は決して彼女を侮蔑する考ではなかつたのだ。彼女もさう思ひ返したと見えて、間もなく又座敷へ這入つて來て、彼女の所有する總べての愛を私に濺ぐかと思ふやうに咽を鳴らし、時々愛らしく小さな聲で鳴いて、頭から背の部分を私の毛脛へ擦りつけた。

そこで私も今度は安心して前の饅頭を有るだけ馳走した。

一時間とたたぬ間に、二人は久しい間の戀人のやうに親密な間柄となつた。

三日たち五日たつ間に、同じ宿にゐる東京の人々と大分懇意になり、打連れて濱へ行くやら山へ行くやらしたが、三毛ちやんとの情交は毫も變らなかつた。彼女は朝夕私の膝へ乘つて私のやるものを喰べた。

新當町から來てゐたきーちやんとも私は非常に仲よくした。きーちやんの兄さんも忽ち仲よしの一人とな

つた。きーちやんは時々雨でも降ると長唄といふものを復習する無邪氣な娘だつた。彼女は毎日私の部屋へ來て安樂椅子に腰掛けて私の三毛ちやんを抱かぬ日はなかつた。そして時々「可愛い子」とか「好い子ちやん」とかいつて猫の冷たい鼻を自分の顔へ當てて頬ずりをした。どちらも同じくらゐ無邪氣で同じくらゐ可愛らしかつたが、二人は時々衝突した。三毛ちやんは矢張り髯もじやの私の方を好いてゐるやうだつた。異性といふものは妙なものだ、と私は鏡に映る自分の顔と新富町のきーちやんの顔とを比較して、考へたことが幾度もあつた。（生方敏郎氏「虐げられた笑」）

避暑地の徒然と宿の仔猫と長唄を復習するといふ東京の娘、すつきりしたスタイルの中に、ほほゑましいユウモアの泉が湛へられてゐる。小説の形式で行つて隨筆文である。生方氏の或頃の作品には、かうしたユウモアだの、また骨をさすやうな諷刺だのに滿ちてゐて、人はどうか知らぬが自分には最も好きな作家の一人であつたが、近頃、氏がその本領とするところから遠ざかつてゐるやうで、自分には淋しく感ぜられてならぬ。生方氏にいはせると、あんなのは自分の本領ぢやなかつたのだ、といはれるかも知れないが、よしどちらであらうとも、生方氏の或頃のやうな行き方の文學が、日本にも存在していい、そしてそれを成長させて欲しいと思ふ。

四　不戰條約劇

人物　博徒の大親分A、B、C、D、E、F、其の他「列び博徒」多勢。
時代　封建時代。
場所　上州國定村。

A　さて皆の衆！　おら達の仲間が寄ると觸ると斬合や喧嘩をするのは、誰がやられたにしろ、つまりはおら達の仲間の損だ。今は堅氣な百姓や職人共がおら達の仲間を目の敵にしてゐる時節だ。仲間喧嘩の時ぢやねえ。

B　大きにさうだ。どうだい、おら達大親分だけでも喧嘩や斬合をしねえ約定をしようぢやねえか？　さうすりや、刀や拔身に使ふ金を賭錢（かけせん）に廻す得（とく）もあらア。

C　さうだ！　おら達が同士打なんかする理窟はねえんだ。おら達は武士でも足輕でもねえ、賭博打（ばくちうち）だ。親分はテラ錢をとるのが商賣で、野郎共はいい賽の目を出すのが商賣だ。斬合なんかしねえでも賭博は打てら。

D　さうだよ、喧嘩ばかりしてゐる奴に限つてだらしがなくなつて、賽の目の出し方も下手糞だ。

E　賽の目で來ても叶はねえから、喧嘩で來てテラ錢を攫つて行かうなんて、太てえ料簡だ。

F　皆のいふのは尤もだが、斬合をするのは、抜身や槍をもつてゐるからだ。おら達は武士でも強盗でもねえんだから、そんなものは要らねえ譯だ。喧嘩しねえ約定もいいが、いつそ皆マル腰になれつてことにしちや何うだ?!

A　そいつは出來ねえ相談だ。度々言出す奴はあるがモノになつたためしはねえ。だめだよ!

F　なぜだめだ?　喧嘩しぬえなら抜身も棒ちぎれも何にするつもりだ?

A　何にしたつていいぢやねえか。出來ねえ相談だから出來ねえ相談だつていふんだ。

F　出來ねえ相談ぢやねえ、出來さねえ相談だんべ。おめえ方には喧嘩をやめようつて腹はねえんだ。

A　何だと!　つべこべ吐かしやがるない。一てえ手めえは口數が多過ぎら。

B　うつちやつときねえ。Fの奴は貧的で、刀も槍も持ちきれねえから、あんなことをいふんだ。

C　時に約定は、喧嘩を金輪際やらねえといふことにするのかい?

A　さうはいかねえ。おら達は男だ。蟲もあれば肝もあら!　男の面目玉ふみつぶされても默つて引込んでゐるといふ譯には行かねえ。喧嘩しねえ誓言は立てても、男の一分が立たねえ時は命がけだよ。解つたかい?

E　そりや當り前だ。それに、向かふから喧嘩を吹つかけて來たり斬込んで來た時にだつてさうだ。

D　さうだとも!　でなきあア強盗に入られても、嬶に間男されても、默つて引込んでゐなきやならねえ理窟だ。

A　だから、ちやんと但書をつける。……ぢや約定書を讀むぜ。「拙者共は如何様の儀候とも以來決して喧

嘩・斬込を不致事。但し左の場合は喧嘩・斬合勝手たるべき事。一つ、男の面目玉に關する場合。一つ、無法の喧嘩を吹きかけられたる場合。一つ、斬込を受けたる場合。」さあ、皆判を捺せ！（皆捺す）

F（獨り捺さない）皆、何とか手打の挨拶みてえな文句はねえのか？

A、B、C、D、E　ウム、ウム、ウムのウムのウムで、目出たし〳〵。シャン〳〵〳〵（手をうつ）

F　アッハッハッハ、こいつは珍だ。ウム、ウム、ウムのウムのウムで目出たし〳〵。

A　やかましいやい、こん畜生、何うするか覺えてやがれ！　月夜ばかりはねえぞ！（幕）

（長谷川如是閑氏「不戰條約劇」）

これは戯曲の形式をとつた隨筆文學である。かうした諷刺的文學は、眞正面から論じた論文などよりも却つて人を動かす度がつよいことがある。ＡＢＣＤＥＦ等の大親分どもが、ジュネーヴあたりへ集つて會議をしてゐる風景は、或意味に於て滑稽味がある。その滑稽味をとらへてかうした戯曲としたところに筆者のするどさがある。

五　物賣の聲

賣聲なども昔から見ると隨分少くなつたが、それでも時々色々の物賣の聲が聞かれる。私はあの賣聲でその土地の氣分や又四季によつてそれぞれの氣持を感ぜしめられるやうな氣がする。

東京では、昔から春先あたりになると苗賣が來る。勿論、賣聲に上手下手はあるけれども、あの聲をきくと、何となく夏の近い事を思ふやうな感じがする。

それから、時期は何時頃（いつごろ）かはつきりしないが、よく熊（くま）の膽（い）を賣りに來るが、あの節をきくと、何か睡（ねむ）いやうな、熊の子守歌といふやうな感じがする。若し熊が生きてゐたら、きつとあの聲で眠らされると思ふ。實際あれをきくと、熊が目を細くするやうな感じがして、何となく可愛さうなところがある。

それから、春先に矢張りかうもり傘（がさ）の張替屋が來ると、天氣のやうな氣がする。續いて下駄の齒入れ屋、張板、緣臺、さを竹屋なども來るが、さをだけ屋の「旗竿や旗竿、さを竹や、さを竹」などと賣步く聲をきくと、天氣の少し暑い加減の氣持がする。

たうがらし賣、あれなどは始めきいた時は、何のことをいつてゐるのかさつぱりわからず、あんな、わけのわからぬことをいつて、あれでよく商賣になると不思議に思つてゐたが、それでも、その音色（ねいろ）や、掛聲で、たうがらし屋が來たといふことがわかるのである。

鋏、庖丁、かみそりとぎ屋で、いつか薩摩琵琶のやうな節で歩いてゐたのがあつた。玄米パンなども面白い節で賣歩いてゐる。納豆賣の聲、又夕方になると豆腐屋の喇叭の音、それは何か私たちの生活の中に入つてゐるやうに思ふ。殊に夕方あの喇叭をきくと、何だか淋しいやうな氣がする。

草花や朝顔を賣つて歩くのをきくと、初夏の氣分がする。又ガラスの風鈴賣なども、色々の音がして、夏の來た氣分を知ることが出來る。夏、晝寢をしてゐる時など、金魚賣が上手な呼聲を出してゐるのをきいて、何だか、金魚が尻尾を動かしてゐるやうに思ふ。夢と金魚賣の聲の境目がごつちやになつて、うつらうつら晝寢をする時がある。あの細長い短いやうた聲で、よくその氣分が出てゐる。（宮城道雄氏著「雨の念佛」）

盲人で、現代に於ける琴の權威者である宮城氏の隨筆である。盲人であるといふことと、音樂の天才であるといふことから考へても分るやうに、氏の隨筆は「音」と「聲」に關するものが殆ど全部を占めてゐる。その中でも、ここに引用した一文の如きは、「音」と「聲」に對する筆者の感じや趣味、それからその「音」と「聲」を通して見えない目で想像する世界が、すつきりしたスタイルで氣持よくあらはれてゐる。ここに引用したのは、春先から夏にかけての物賣の聲であるが、氏は續いて秋・冬と、一年のシーズンを通じての物賣の聲、さてはチンドン屋のはやしまで書いてゐる。輕妙で平明で、少しも氣取つたところや、いや味の微塵もない、そして、いかにもゆつたりとした上品なスタイルである。それに、熊の膽賣の聲をきいては、「熊の子守歌といふやうな感じがする。」といひ、「實際あれをきくと、熊が目を細くするやうな感じがして、何となく可愛さうなやうなところがある。」

といふあたりや、金魚賣の上手な呼聲を出してゐるのをきいては、「何だか、金魚が尻尾を動かしてゐるやうに思ふ。」と述べてゐるあたり、その人が盲人であるだけに、すばらしい感覺だと驚歎せしめられる。

六　雀の鳴き聲

雀は非常に神經質です。全く、雀は茶の花の霜にさへ全身の神經を慄はせます。それで雀の聲は冷たい。しかし、雀の聲には力があります。ほんたうに感じて、ほんたうに腹の底から鳴きます。全く、雀の聲は腹の底から出ます。一生懸命です。さうしてその鳴かうとする前には、必ず尻尾を强く搏きます。それから圓い茶色の頭を上下左右に振ります。さうして全身が聲になつてしまひます。ちゆちゆつちゆつちゆつ。全く彼の聲は彼以上です、鳴く時は。

雀の聲にも時により强弱があります。殊に目を覺まして飛出した、その時の一番聲の强さは、よくもあの小さな身體（からだ）でと思はれます。それは驚くほどの太いちゆちゆちゆつです。彈けきつてゐます。

雀が紅い山茶花の陰などを、獨りで寒々と枝移りしてゐる時の鳴き聲はちつちつです。それは刻みの短いちつちつです。三聲と一時には續けません。さうして聲を收めた時には必ず悲しさうに左右を見廻してゐま

す。枝から枝へ移るとすぐ、雀は必ずちつちつと鳴きます。そのちつちつで冷たいピリオッドを點つてゆくのです。それで、たとひ姿は見えなくとも、一枝一枝と移つてゆく雀の動作が明瞭にわかります。
雀がまた、枯木の小枝などに留つて友を呼ぶときには、それは寂しさうです。刻みも極く極く短くそれも見廻し見廻し鳴くのです。そして首を傾けながら、また、ちつと鳴き、くるりと向きを變へてはちつです。そして、ちつ、ちつちつ、ちつです。
雀が友達を見つけた時の喜は、もうその聲でわかります。それは刻みの遠い、全く、ピリオッドの早口です。嬉しくてたまらぬといふ風に空を向いたきり、いつまでも續けてゐます。力いつぱいです。それが、いよいよ、外のが傍の小枝に來ると、ついと横を向いてちゆつちゆつです。もう安心だといふ風で、落ちついて穩和しい聲に返ります。（中略）
二羽か三羽か、嘴をそろへて鳴いてゐる時の雀は所謂ぺちやくちやぺちやくちやです。可なりの饒舌ですが、朴訥な、極めて率直なものです、冷たいものです。冬ならば枯木に霜がいつぱいです、屋根には雪が眞つ白です。（北原白秋氏「雀の生活」）

これは隨筆といつてはならないのかも知れない。といふのは、北原氏の「雀の生活」は大部の書物であつて、あらゆる觀點から雀の生活を描いた、いや歌つたところの散文詩なのだからである。しかし、ここにスタイルとして隨筆的文章の範文として引用してみた。いかにもこまかい觀察で、筆者の靈が雀の靈と交渉し、若しくは筆者が雀になり切つて描いてゐる。宮城氏の「聲」に聯關してここに

詩人の聲に關する敏感さを鑑賞するためにあげたのである。

七　きせる

あるイギリス人がパイプで日本の煙草を吸つて、こんな結構な煙草がありながら、何で日本人は西洋の高い刻煙草を吸ふのだらうと笑つてゐた。

さういはれてみると、なるほどさうだ。日本の煙草の最上品が、水府でも薩摩刻でも、四十目入僅かに二圓四五十錢で、これが小綺麗な紙函に入つて、開けば細い細い髮の毛のやうにきざまれた煙草が、それこそ一絲亂れずちやんとそろつて詰つてゐる。さながらの美術品である。煙草の葉の外に何一つまぜもののない純一無雜のところが殊にうれしい。一服すつてみると、とても西洋のミクスチュアなんどに求めて得られぬ香がする。

だが、どうもこれをパイプですつては、どういふ譯か途中で火が消えてすひきれない。のみならず第一あのやさしい細々した煙草にパイプでは調和がべらぼうに惡い。スウェーデンの皇太子がわざわざ日本の煙管で日本の煙草を召上つたのは、如何さま故あるかなと思つた。

そこで一つ煙管を買はうと考へたが、銀座から日本橋通へかけて、煙管屋がただの一軒もない。粗末な煙管を十本ばかり店頭にならべたところはあるが、ほんたうの煙管屋といふものは、外神田か池の端までゆか

なければないと、どの店でもいふ。

前年パイプの吸口のこはくをこはして、直しにやらうと思つたら、こはくの細工をする家は東京中に一軒もないと聞いて、不自由な東京だなと思つたが、今煙管を一本買はうとして、またつくづく東京といふところは不自由なところだと感じた。せん方なしにとうとう池の端の村田まで出かけた。

かやぶきの屋根の職人がだんだんなくなるといふ。刀鍛冶は僅かに保護されて命脈をつないでゐるが、保護のない刀の拵(こしらへ)の細工師は次第になくなるとの歎聲は前から聞いてゐる。時なるかな、煙管屋がはやり同じやうになくなりゆく。(杉村楚人冠氏「湖畔吟」)

すつきりした、上品なスタイルを學ぶべきである。かういふ文章が、いはゆる隨筆的文章の正道であらう。現在の日本で、隨筆的文章にかけては、先づ杉村氏の右に出づる者はないと思はれる。

八 私とステッキ

私は世間で杖道樂といつて居るものもあるが、自分のもつて居る杖は、原料共合すると、一千本位あるだらうと思ふ。寧ろ杖といふよりも、杖の原料の方が多い。何故杖を集め始めた乎といふと、人間は何乎道樂がなくちや不可ぬとから考へて居る。若い時から何を道樂にしよう乎と考へてみた。刀といふことをよくい

ふんだが、私は刀についてはかう考へた。第一刀といふものは、これを求めるのに金が餘程入るし、而も高い金を出して買つたものでも、それが本當の刀である乎どう乎といふことが、非常に面倒な問題である。次には折角買つても、それを手入れをしなければならないといふことがあるし、また餘り手入れや何かをして刀を振廻して見ると、ひよつとして人を傷つけるやうなことがありはしない乎。或は餘り刀を眺めて居ると、自分で自分を斬つて見たいといふやうなことがありはしない乎。また刀を自分の枕元に置いて寢た時、もしか泥棒を脅かすつもりのものが、泥棒から却つて斬られるやうなことがあつては困る。何れにしても刀劍の道樂といふことは、寔に結構なことであるけれども、我々のやうなものには不向であらうと思ふ。そこへ行くとステッキといふものは第一集めるのに金が入らず、第二、ステッキには眞とか僞とかいふものがない。第三、保存も左程面倒でない。ステッキをいぢつて居ても間違つて毆つた處で、人を殺すまでには至らないので、極く安全である。道樂としては最も輕便であり安全であるといふ處から集め出したので、旅行先から自分がそれをもつて歸るといふことは甚だ興味あることで、一時は餘程集めたが、中には相當良いものもあつたが、さういふものも、段々人が持去つてしまひ、實用にならないものだけが、殘つて居る有樣で、甚だこれは困つたものだが、どうも致し方がない。（德富蘇峯氏「成簣堂閑記」）

德富氏の隨筆「洋杖漫談」中の一節である。ステッキまたは杖について、その由來を遠く「古事記」や「舊約書」にまで求め、支那のステッキから、孔子とステッキ、ステッキと杜翁、江戸で流行した杖——といふ風に、ステッキについてあらゆる角度から物語つてゐるが、少しも肩の凝らない興味津

津たる筆致、さすがに蘇峯先生の筆だとうなづかせる。「刀といふことをよくいふんだが、」とか、「ステッキをいぢつて居ても、間違つて毆つた處で、」などといふあたりは、いはゆる隨筆的文章の特徴を最もよく發揮してゐる輕妙な筆といふべきである。

九　流行言葉

「心境の變化」といふ言葉が近頃一時流行つた。「氣が變つた」といふのと大した變りはないが新しい言葉には現代の氣分があると見える。「私の心境が變化した」といふのは客觀的な言ひ方であり、自分の心を一つの現象として記述するといふ點で、兎も角もいくらか科學的であるとT君がいふ。なる程、さう言へば「結婚をやめた」「中止した」といふよりも「結婚が解消した」といふ言ひ方が矢張り客觀的現象的であり科學的であるかも知れない。「憂鬱になつた私である」といつたやうな不思議な表現の仕方も、さう考へるといくらか了解出來るやうである。

流行言葉の中でも「ソートーナモンヂヤ」と「ドーカと思ふね」には、何處か科學的なスケプチズムの匂がある。圓タクで白山坂上にさしかかると、六十恰好の岩乘な仕事師上りらしい爺さんが、浴衣がけで車の前を蹣跚として歩いて行く。丁度安全地帶の脇の狹い處で、車をかはす餘地がない。警笛を鳴らしても、爺さんは知らぬ顔で一向よける意志はないやうである。安全地帶に立つて見て居た二三人連の大學生の一人が

運轉手の方を覗き込んで、大聲で「ソートーなもんちやー」と言つた。傍觀者の立場から批判を表明したのである。運轉手は苦笑しながら、なほも、ゆるやかに警笛を鳴らした。乘客の自分も失笑したが、更に角此の流行言葉には何處かに若干の「俳諧」がある。（吉村多彦氏「觸媒」）

理學者で隨筆文學の大立物たる吉村氏の文である。いかにも學者らしい物の見方・考へ方を、さらさらと輕妙な筆で表現してゐる。

一〇　先斗町（ぽんとちやう）

餘り話が砕けすぎるかも知れませんが、場所柄至つて近い所にある先斗町（ポント）の町名について申し上げます。先斗と書いてポントと讀むが、之は外國語でないかと人からよく尋ねられます。之については人に依り色々臆説を出しますが、近頃段々思ひ當りました所があります。之はポルトガル語から出たので、元はトランプの骨牌遊の時使つて居た言葉で、ポントいふ言葉をあてたものと思はれます。先斗町の開けましたのは德川時代の初期より稍後の寛文・元祿時代でありまして、その頃の地圖にも先斗町といふものが見えて居ります。眞井原西鶴の「本朝二十不孝」といふ書物にも、遊人が骨牌をして金を賭ける時の事を描いて居りますが、先に二十兩金を出しポントに置くといふ事があります。さういふ事から考へますと、其の時代はポントとい

ふ言葉が一般に使はれて居つた事が分ります。そして先斗と書いてあります。同じ元祿時代の近松門左衞門の作には、そこの遊廓の事が先斗町と書いてあります。又本居宣長が若い時京都に來て醫學や漢學を勉强して居りましたが、中々遊ぶ事も好きで南座や北座の芝居を觀に往つた事が日記の中に出て居りますが、其の中に先斗町の糸屋久右衞門といふ家に旅宿したなどと書いてあります。先斗町のポントの元を質せばポルトガル語であります。ポルトガル語でポントといふ言葉はポイント卽ち先或は點の意で、隨つて骨牌の點もポントといふ、又骰子の點もポントといひますが、これはポルトガル人が印度邊から此方(こちら)に來る港々で其の言葉も傳へたので、ダルカードといふポルトガルの學者の書いた「ポルトガル語がアジア諸國の言語に及ぼしたる影響」といふ書物の中にも出て居ります。それのみならず、今度私が長崎に參り或古い家に傳はりました字引を借りて參りましたが、それにはポンタといふ語が出てをります。先の字にあててあります。要するに洲崎といふ水中に突出した洲先地をポントと申したものと見えます。ポルトガル人が昔日本で耶蘇敎を擴めるため耶蘇敎の學校を建て、そこで字引や文法書を作つて居りますが、それらの本は日本では滅びてしまひました。幸ひ西洋には二三殘つてをります。イギリのオックスフオード大學に其の辭書がありましたのを一昨年全部寫眞に致して持つて歸りましたが、其の中に洲崎といふ日本語にポンタと書いてあります。それで先斗といふ字は實は先の一字でポントの意味になるのでトといふ音を明らかにするため斗といふ字を加へ二字としたので、かういふ例は萬葉假名に其の例が澤山あります。一字だけでは何だか足らない氣がするから下に斗の字を附け加へ、一種の送假名を添へて讀ませる所から來たのに違ひない。人に依ると隨分こじつけの說を出しますが、私はかういふ風に解釋します。(新村出氏「南蠻更紗」)

或席上で講演されたものの一節であるから、隨筆ともいへないのであるが、だいたい「南蠻更紗」は隨筆的なものである。ここに引用したのも、輕くそして碎けて講演されてゐるので、內容は非常に學術的なものではあるが、そのスタイルはやつぱり隨筆的なものである。若し、これが學界にでも發表される段になると、もつとくはしく證據物件を一々說明したり、出典の頁數までもあげるといつた風になるのであるが、ここでは實業家達に興味あるやうに話されてゐるのだから、さうした態度はとられなかつたのである。「現代の青年が南蠻更紗のやうな書物を愛讀するやうになれば、日本の文化も非常に進んだことを示すものだ。」と、この書の出版された當時、多くの識者は、そんな意味のことを言つた。

二 呉岸越勢

本書の表題の由來は、からである。

自分は、本名を署せずに、文を綴る場合、雅號に代へて、浪野呉岸と、ずつと以前から匿名を記すことにして來た。浪は、「浪花節」の「浪」で、岸は、魚河岸の「河岸」の上略であつて、つまり全體を、「なにのくれがし」と讀ませる駄洒落にほかならない。隨筆など公にする時に、よくこの俗な雅號を使ふ。十年以

前にも、その名で、「紅涅雜草」といふ、エッセイみたやうな物の集を、一小册子の形で、知人に頒つたことがある。その後同好の若い人々と、前後滿二箇年に亙つて刊行した同人雜誌「亡羊」に、エッセイその他の筆のすさびを寄せたをりも、その名を用ひたことが屢〻ある。

岡倉書房の岡村祜三君が、自分から奪つて、止めるのも聽かずに、茲に刊行を敢へてしたのは、以上二つの刷物からであつて、その主體を成す文章は、隨筆である、のみでなく、その他の形の發表樣式のものも、要するに、素人の試筆にほかならない。その意味に於て、全卷いづれもエッセイなのである。本書の名を、「吳岸越勢集」と呼ぶゆゑんは、蓋しそれが爲で、「くれがし」の「エッセイ」の集であるからのこと。「吳」とにらんで「越」とした戲書の心を、今一層おし進めて、吳越同集とまで駄洒つてみるのも、また一興かと思ふ。(岡倉由三郎先生「吳岸越勢集」はしがき)

岡倉先生の面目が躍如とした一節である。英文學者であると同時に國語學者である先生は、極めてウィットに富んだ、そして暖い人間味の持主であられる。「浪野吳岸(なにのくれがし)」などといふ名前からして、先生の人間としての面白味が感ぜられる。先生が郊外へ移轉された時、私は「御不便ではございませんか。」とお尋ねしたら、「いや、よく友人もさういつて尋ねてくれるがね、ちつとも不便ではない。米屋でも薪炭屋でも魚屋でも皆御用伺ひにやつて來て、ゐながらにして用が足りる。」といはれ、「だが、たつた一つ不自由なことがある。」といはれたので、「何ですか。」とお尋ねすると、「それは金だ。米屋に注文しても酒屋に注文しても、金だけは持つて來てくれないよ。」といはれた。また、北條の水

泳場で、生徒が二級とか一級とかに進級すると、「進級ベリマッチ」などと祝つて下さる先生である。だから、先生の隨筆は、かうしたウィットやユウモアや諷刺に滿ちてゐる。

一二　へんな批評

小生自ら任ずるわけではないが、何だか傍の者は、貧乏神の使徒のやうにでも考へてゐるらしい。うれしくもないけれど、また別に迷惑でもない。頃日、某先生小生の文章を讀んで、擦れ違ひざまに、にやにや笑つた。

「讀みましたよ、讀みましたよ」

「さうですか」

「それについて、僕の批評があるんだ」

「どう言ふのです」

「いや、今一寸人を待たしてあるから、この次の機會に申し上げよう」

何を言ふのだらうと思つてゐると、その次の機會に、某先生は小生を椅子に招じ、相面して坐つた上で、煙草に火をつけた。

「讀みましたよ」
「さうですか」
「それについて、僕の批評があるんだ」
「どう言ふのです」
「つまりだ、いいですか、君は貧乏話を文章に書いて、お金を儲けてゐる」
「へんな批評だな」
「全くだよ、怪しからんぢやないか」
「怪しからんは突然だ」
「突然でもさうだ。貧乏が原因で、その結果金を儲ける。どうも變だよ」
「それぢや、考へてみよう」
「どうです、適評でせう。そのうち又意見を述べる」
と言つて、煙草を吹かしながら、向かふへ行つてしまつた。
やり切れないのは、貧乏の半可通である。解りもしない事を、尤もらしく考へ込み、ひどいのになると、忠告を試みようとさへする。貧乏とは、一つの狀態に過ぎない事を知らないのである。貧乏だつて、人からお金を借りて來れば、そのお金のある狀態は卽ち金持である。但し、その金は、それよりもつと前に借りた別の相手に拂はなければならない。貧乏だつて、お金の儲かることもある。ただその儲けた金が、身につかない。どういふ風に分別しても、足りつこないのが、貧乏の本體である。卽ち借りても儲けても、どちらに

しても、結局おんなじ事で、忽ちのうちに無くなつてしまふ。その無くなるまでの、ほんの僅かな間、お金が假りにそこに在るといふ現象のために、益〻苦しむのが貧乏である。貧乏の絶對境は、お金のない時であつて、生中手に入ると、しみじみ貧乏が情なくなる。だから、文をひさいで、お金を儲ければ、却つて貧乏が身に沁みるばかりである。某先生漫然と思索して、結果と原因がねぢれてゐるやうに考へたのは、妄もまた甚だしい。(內田百閒氏「續百鬼園隨筆」)

輕妙にして洒脫な筆である。いはゆる隨筆的文章の生粹なるもの。私立大學の航空部長をされたり、宮城道雄氏について琴を學ばれたりするといふ內田氏の趣味は、極めてゆたかなものである。さうしたゆたかな趣味的生活が多くの隨筆集としてあらはれてゐる。この文例で考へさせられることは、どうも日本人は、ことに敎育者は、何か本でも書くと、いやに「へんな」ことをいふくせがある。借金をして家を建てても、「印稅で家を建てたのだらう。」などといふ。つぎには、「貸家を持つてゐるさうだ。」などとデマを飛ばす。ケチな根性である。

一三 「貧」「富」

博物館で、私は太古の貨幣である美しい貝殼を見た。原始人が此の貝殼を以て、物を買つたり賣つたりす

る子供のやうな、眞面目な取引を想像してみると、微笑せられる。其の貨幣は、太古の人の心持では、恐らくは、自分に物を與へてくれた人に對する美しい感謝の表識であつたので、決して彼等が欲望の對象ではなかつたのであらう（その貝殼は濱邊へでも行けば大なる勞をせずして得られるものである）。左樣に、その昔は美しい表識であつた貨幣といふものが、現代では往々罪惡の根源のやうに考へられてゐるのは不思議ではないか。原始時代には買手が賣手に對して「ありがたう」と言つたであらうのに、現代では買手から「ありがたう」といふ言葉を强要してゐるのはをかしいではないか。

旅で、私は茶店に腰をおろした。私は渴ききつてゐたので、老婆が持つて來た土瓶を幾度もかへさした。茶代として僅かの金を置いた時、私はこんな事を思つた。――此の金は此の場合に、物に對する代償としての意味ではなく、感謝の表識として用ひられるのだ（それは一定額を要求されるものではなくて、こちらの氣持だけがあらはれるのだ）、而してこれが本當の金錢の使ひ方ではないのか。

金錢が占取の象徵となる時、それは汚いものとなる。しかし、其の同じ金錢が感謝の表識となる時、それは美しいものだ、原始人の用ひた貝殼のやうに美しいものだ。勿論、今日の私達が、かうした原始的な心持ばかりで生きて行く事は出來ない。それは私も知つてゐる。しかし、今日に於ても、金錢といふものが感謝の表識であるといふ性質を失つてゐないものとしたならば、他に對して感謝し得る心を多く持つてゐる人こそ、眞に富んでゐる人といふべきではないか。是に反して、假令、萬億の金を所有してゐても更に多くを奪はうとのみ企ててゐる人こそ、實に貧しい人といふべきではないかと、思はれるのである。

（荻原井泉水氏「靑天の書」）

俳人井泉水氏の隨筆は、極めて眞面目である。氏は、「これまで何十册といふ書物を書いてゐるが、本當に自分のいはうとすることをいつてゐるのはこの書だけである。」といふ意味のことを「青天の書」の序文で述べてゐられる。どの文をとつて讀んでみても、すべて詩聖の敎訓である。「貧」と「富」とに關する考へ方の如き、如何に詩人らしくまたうるはしいものであらう。かうした詩人こそ、最も富める者の一人であらう。けだし、自然の深き觀照による詩的生活がもたらせた結果であらう。

一四　生活の單純化

必要は習慣を變へる。自分は前に、往復葉書の質問を受取つて返事をせぬのは、「見知らぬ人に一錢五厘の借金をしてゐるやうで心持が惡いから、その葉書を送り返す意味だけでも返事を出さずにはゐられなかつた。」（合本三太郎の日記、四二四頁）と書いたが、今はあの一節を取消して置かなければならない。近頃は、毎日來る手紙は一瞥しただけで狀差しの中にさして置いて、一月に一兩度一纏にして返事を書かなければならぬほどの忙しさなので、質問の葉書は大抵時期を失つてしまつてそのまま御流れになるのが十中の七八である。從來は大抵返事を出してゐた閑談の手紙も、近頃は向かふの消息を喜ぶだけで、自分では殆ど返事を出さない。又返事を出さなければそれで拒絕の意味が通ずるやうな場合、（例へば入會の勸誘のやうな場合）

には無返事を以て拒絶にかへることも非常に多くなつた。
生活がこんなにして段々悒しくなつて行くはの決して喜ぶべきことではない。併し主要な仕事に出來るだけ力を集中するために、怠ることを餘儀なくされる範圍が次第に擴張されるのは洵にやむを得ない。これが交友の間をも甚だしく侵略するやうになれば、我々は獨立した人間ではなくて最早仕事の奴隷である。この方面からも我々は生活の單純化を考へなければならない。（阿部次郎氏「北郊雜記」）

阿部氏の隨筆的文章については、世に定評がある。「三太郎の日記」の如きは、最も多くの讀者を有する隨筆集である。ここにあげた文例は、一面には隨筆的文章のスタイルを學ぶためと、一面には、近代人の生活の姿を知るためとにある。全く阿部氏のいはれる通りの生活をしてゐるのが今日の我々である。もつと、何とかお互に「生活の單純化」を考へないことには、到底やりきれないのである。

一五　アンチシンネリズム

いよいよ、謂ふところの三五年とはなつた。しかし、大國民といふものは、さう何時も何時も、苦蟲をかんで、しやつちよこばつてばかりゐるものではなからう。いはゆる非常時であればあるほど、職が無ければ

無いほど、食へなければ食へないほど、わざと落着いて、にやりにやり笑つてゐるほどの餘裕と度胸とがあつて欲しいものである。

そこで、新春の初頭に當つて、ここに一つ紹介したいのは、昨年あたりから、ニューヨークの社交界に流行し、もはや既に我が國の一部の人士の間にもぼつぼつ流行しかけてゐるところのモダンユウモアである。

このモダンユウモアは、我が國の俚言にあるやうな「笑ふ門には福來る」といふが如き古い功利的なものではなく、最新の心理學及び哲學に根據を有するところのアンチシンネリズム（anti synnelism）なる學說にもとづいて起つたものである。此の學說をはじめて提唱したのは、米のドクトル・ウイリアム・コッケー氏（Dr. William Cokkey）である。氏は、もとより醫者であるが、その學位論文は「現代の不景氣病と、アンチシンネリズム。」といふ、醫學的・經濟學的・社會學的・心理學的・哲學的のものであつた。氏は先づ醫者としての立場から、「わらひ」の生理學的研究をなし、ついで、「ユウモア」の心理學的研究に入り、更に、これを哲學的及び社會學的に考察し、極めて豐富な材料から結論を導いてゐるのである。氏の實驗に供せられた人は、延人員にして無慮一萬四千五百人に達してゐるといふことである。

それによれば、人間が絕えずシンネリ・ムッツリしてゐると、身體中の血液がどす黑くなつて、つひに一種の病氣を起すに至るといふ。氏は、その實驗をなす爲に、或健康な外出好きな一婦人を三日間一室に監禁してみた。すると、その婦人は全くヒステリーの症狀を呈したといふのである。また、氏は或酒好きな一男子に一ケ月間禁酒を命じてみた。すると、その男は、すつかりヒポコンデリーの症狀を呈するに至つたといふのである。かくて、氏はいふ、ヒステリーやヒポコンデリーの如きは、主として「わらひ」の缺乏に基

因するものであり、更に、それがひどくなると、つひに憂鬱狂となつて、狂人病院の厄介にならなければならぬやうになると。氏は、かうした「わらひ」を失つた人々に、一種の實驗（この方法は他日紹介したい）を施して、少しく朗かにさせ、かくて其の血液を調べたところが、著しく赤血球の數が多くなつてゐたといふ。そこで、今度は、更に大口をあけて笑はせるやうな實驗を施したところ、前よりも更に著しく赤血球の數が多くなつてゐたといふことである。よつて、これは大口をあけて笑つた際、空氣を多量に吸込み、その空氣中の酸素が患者の血液に作用したものに相違ないと氏は考へた。かくて、氏は、人工的な實驗的方法によらずして、自然に人々が笑ふやうな方法は無いかと苦心した結果、つひに、「アンチシンネリズム」なるセオリーを發見するに至つたのである。

勿論、コ博士の論文は極めて學術的なものであり、且頗る大部のものであつて、專門外の私などには分らない點が多々あるので、ここに詳細に紹介することの出來ないのは甚だ遺憾であるが、若し更に進んで氏の說を知りたいと思ふ人は丸善に注文して、氏の著書を取寄せられるがよいと思ふ。

私がコ博士の論文に、著しく興味を覺えた頃のことである。秋田縣の某小學校から、國語教育について、實際の授業を視たり、その批評と講演とを兼ねて、やつて來て貰ひたいといふ依賴を受けたのである。どうしてまた、ものずきに、私に國語教育のことなどを賴みに來たかといふと、私がかつて或雜誌に、「現代の文章と作文教授」と題して、アマチュア的小論文を書いたことがあつたので、それで何か國語教育のことを知つてゐるとでも勘違したものらしかつた。とにかく、私は年がら年中閑なのであるから、十和田湖見物かたがた、しらばくれて出かけて行つた。

その小學校で或訓導の授業を視たときのことである。その訓導は、先づチョークを取上げて、黒板に「煤」「鮨」「獅子」と立派に書上げ、さて生徒の方を向いて、「これからハチオン練習をします。これは、天井にあるスス、それから、これは食べるスス、これは動物のスス。」といふ。生徒もこれに從つて、「天井のスス、食べるスス、動物のスス」とコーラスをやつてゐたのである。

東京へ歸つてから、このことを友人に話したら、その友人は、

「そりや、カタスカシだらう。」

といふ。

「何だい、カタスカシといふのは、例のギリシヤ語かい？」

其の友人はギリシヤ語の大家なのである。

「まあ、ギリシヤ語の一種だね。」

と、友人は机の上に、指でむづかしいギリシヤ語のスペルを書いてみせた。それから友人は突然私に向かつてから問うた。

「君、麒麟の頸はどうしてあんなに長いか知つてゐるか？」

「さうだね、麒麟には頸椎骨の數が十六七もあるのぢやないかね。」

と言つたら、

「そんな不眞面目な答をしてはいけない。」

と叱りつけた。そこで私は、

「麒麟は常に高いところになつてゐる果實を食ふために、ついあの通り頸が長くなつたのだらう。自然淘汰の結果、頸の長いのほど生存に適するやうになり、つい今日の如く麒麟の頸が長くなつたものと思ふね。」
と答へた。
「まるで小學校の生徒の答案だ。そんなのは、最近のカタスカシなる學說では落第だ。」
と、友人は、一かどの動物學者らしい顏をしてゐるのである。
「ぢや、いつたい、どうなんだい？」
私は、とうとう兜を脫いだ。
「だつて君、麒麟の頭を見たまへ、頭を。あんなに高い所についてゐるぢやないか。」
私は、やつと分つた。
「なあるほど、あんなに高いところに頭がついてゐる以上、胴と頭とをつなぐ爲には、いきほひ頸が長くならざるを得ないといふわけだね。」
「さうさ、早く、さう答へれば、君も麒麟兒なんだがね。」
私は、いささか癪にさはつたから、今度は、その友人にきいてみた。
「支那料理には最後に大きな鯉を丸ごと燒いて出すだらう。君、あの鯉は、頭の方がうまいか、それとも尾の方がうまいかね。」
「コヒに上下があるもんか。」
友人は、卽座に答へてしまつた。それから、私は、カタスカシも、コ博士の所謂「アンチシンネリズム」

の一種だと思ふやうになつた。

どうも自分の愚作をお目にかけては甚だ恐縮な次第だが、これは私が今年の或雜誌の新年號に書いた隨筆といふか漫談といふかの前半である。どこかに隨筆的文章の參考になるところがあれば、それは全くコ博の効績であり、くだらないところは全部私の責任である。隨筆的文章の項を終るに當つて、ホンの餘興のつもりで臆面もなくここに引用したまでである。

第七章　日記的文章

ここに日記的文章といふのは、その日その日の出來事や感想や見聞、さては思索のあとや記憶に資すべき事項等を記入するところの文章の謂である。

日記は古くから存在してゐたもので、なかでも藤原道綱の母が二十幾年かに亙つて記した蜻蛉日記などは國文學上かなり貴重なものである。また、平安朝の宮廷に仕へた女流は、大抵うるはしい日記文學を遺してゐる。その中でも、紫式部日記・和泉式部日記・讃岐典侍日記などは、ことに名高いものである。清少納言の枕草子の如きも、實は宮廷生活に於ける見聞や感想を日記風に記したもので、もと清少納言日記と呼ばれてゐたものである。爾來、鎌倉・室町の時代から江戸時代にかけて、男も女も多くの日記を遺してゐる。本書では、旅日記のことは、別に紀行文として取扱ふのであるが、紀行文も實は日記の一種であつて、貫之の土佐日記、菅原孝標の女の更級日記、阿佛尼の十六夜日記の如き、すべて紀行的文章ではあるが日記の二字がついてゐる。

さて、毎日日記をつけるといふことは、いろいろな點で我々の修養になる。第一に、生活に對して

反省の機會が與へられる。第二に、生活の規律が正しくなる。第三に、忍耐強くなる。かうした方面は、いはば道徳的な修養に關する方面であるが、これを文章上から眺めると、日記をつけるといふことは、毎日文章の練習をすることになるのであるから、既に先人も言つてゐる如く、それは文章上達の最捷徑であるともいへるだらう。先づ第一に、事物に關する觀察力が養はれて、ちよつとした事でも緻密に考察し、そこに深い意義を見出すやうになる。このことは、文章を書く上に、最も重要な素地をつくるものである。次にい毎日缺かさず日記をつけるといふ習慣は、我々をしていはゆる筆まめたらしめ、文章を書くことをさほど臆劫でなくさせる効果がある。さうして、その間に自然、文章上の工夫や言葉や文字のつかひ方、文法上の疑問や句讀法のことなどにも、しばしば遭遇するので、知らず識らずの間に、文章に馴れ、表現方法を會得するやうになる。明治以來の文學者で、特に文章に苦心したやうな人は、大抵忠實に日記をつけた人達であるやうだ。たとへば、樋口一葉、國木田獨歩、尾崎紅葉、德富蘆花、正岡子規、夏目漱石、芥川龍之介等の人達は、いづれも忠實に日記をつけてゐた。

日記の文章は、他の文章と著しくちがつた特徴をもつ。それは、必ずしも他の讀者を豫想するものでなく、いはば自家の備忘錄または回顧や慰藉の資料となるものであるから、その文體は多く覺書式の簡潔なものとなるのが普通である。いま、左に、日記的文章の要點をあげて置く。

第一、實際生活および精神生活にとつて比較的重要な事項のみを記入すること。毎日同じやうに起る事象や瑣末な事柄は省く。隨つて、一日の記事は餘り長くならない方がよい。とりたてて記すべき

事の無い日には、晴雨ぐらゐの記入に止める。
第二、文體は、やはり口語體の方がよいが、出來る限り簡潔に書くこと、餘計な修飾語や美辭や麗句は絶對に禁物である。それから、句讀點は施した方がよい。
第三、特別の必要がなければ、「私は」「僕は」の如き自稱代名詞または主語を書かない方がよい。その人の日記は、その人が主人公にきまつてゐるからである。

八月一日　水曜　晴

けふから夏休だ。ラヂオ體操に行くので、朝は五時半に起きた。まだ早いつもりで學校へ行つたら、もう大ぜい來て居た。あしたからは、もつと早く來ようと思つた。朝御飯がすんでから、少し勉强をした。休中は、毎朝、涼しいうちに勉强するつもりだ。

これは、小學校の三年生に讀ませる國語讀本に出てゐる文の一例であるが、「僕は」とか「私は」とかいふ自稱代名詞が一つもつかつてない。
以下、具體的の日記的文章について、具體的に述べて行くこととする。

一　夏目漱石の日記

明治三十四年（英國留學中）

三月十六日　日本は三十年前に覺めたりといふ。然れども半鐘の聲で急に飛起きたるなり。その覺めたるは本當の覺めたるにあらず、狼狽しつつあるなり。唯西洋から吸收するに急にして消化するに暇なきなり。文學も政治も商業も皆然らん。日本は眞に目が覺めなければだめだ。

今日田中氏と Metropole Theatre に行く。滑稽劇なり。Ralph Lumley といふ人の作なり。滑稽を無理に引上げて膝栗毛的なり。

三月十七日　襟白シャツを易ふ。

晝より田中氏同道にて Kew Garden に至る。見事なる暖室夥多あり。且頗る廣くして立派なる Garden なり。Kew Palace に入る。

三月十八日　中根の父より消息あり。恆子出產の報を聞く。

吾人の眠れる間、吾人の働く間、吾人が行屎送尿の裡に、地球は回轉しつつあるなり。吾人の知らぬ間に回轉しつつあるなり。運命の車は、之と共に回轉しつつあるなり。知らざる者は危し、知る者は運命を形（かたち）づくるを得ん。

八月十四日　「それから」を書き終る。

八月十五日　菅虎雄の細君死す。産後經過不良。

大倉書房燒く。

八月十六日　陰。朝、菅の所へ行く。

中村是公より「不可不讀」を寄せ來る。

田中君子よりうにと菓子到來。

「二葉亭四迷」を送り來る。

八月十七日　晴。伊藤幸次郎來訪。滿洲日々新聞の事に就いて一時間半ばかり談話。ヴインヒユーター讀了。

（來信）中村是公

八月十八日　午後一時菅の細君の葬式に行く。大塚が二十年前のフロックコートを着て來た。車に乘るのは失禮だといつて、麟祥院迄あるくといふ。富坂迄一所につき合つてみたが、たまらなくなつて御免蒙つた。小さな子が燒香をやるのは實に氣の毒なものだ。會葬者は大體知つた顔であつた。

中村より愈ゝ滿洲へ行くや否やを問合はせ來る。行く旨を郵便で答へる。

滿洲行のため、洋服屋を呼んで背廣を作る。

八月十九日　朝、林久男來。鹿兒島から仙臺へ移るといふ。長野の山奥の熊捕の話。蛇を生で食ふ話。

山で霧に取卷かれた話。戸隱の裏山をめくらが熊捕の腰につけた鈴の音を便りに上る話などをする。信州の山奥で越後の糸魚川に通ずる所は大變淋しくつて、そこの教師が鄕里へ歸つて歸任するのが厭だといつて自殺した話をする。

八月二十日　劇烈な胃カタルを起す。

嘔吐、汗、膨滿、醱酵、酸敗、オクビ。面倒で死にたくなる。

氷を嚙む。味のあるものを食ふ人を卑しむ。

本棚の書物の陳ぶ樣を見て甚だ錯雜堪へがたき感を起す。

昏々

八月二十一日　昏々

八月二十三日　東洋城來

八月二十四日　虛子來

紅綠、春葉を伴なうて至る。臥蓐中につき斷る。春葉とは初對面なればなり。

前の文例、英國留學中の日記の文體は文語體であつたが、後の方のは、殆ど口語體になつてゐる。前の文例では、祖國を眞劍に思ふ文豪の眞面目な面影、または三月十八日の記事の如く、運命についてしんみり考へるあたり、いかにも大思想家の面目がよくあらはれてゐる。文は、どこまでも簡潔で、勿論、自稱代名詞の如きは一つもつかつてゐない。

後の文例を通じて、先づ「來信」に八月十七日の「中村是公」があるだけであるが、これは他の日に少しも來信が無いことを意味するのではなく、特に記憶して置きたい來信を記して置いたに過ぎぬ。來信は、毎日のものを一々記す必要はないのである。來客にしてもその通りである。また、病中、八月二十二日の記事は無い。それでよいのである。驚くべきは、苦しい日の日記に「昏々」の二字だけでも記すといふ根氣である。

二　正岡子規の日記

七月二十九日　火曜日　曇

昨夜半碧梧桐去りて後眠られず。百合十句忽ち成る。一時過ぎて眠る。

朝六時、睡覺む。蚊帳はづさせ、雨戸あけさせて新聞を見る。玉利博士の西洋梨の話待ち兼ねて讀む。印度仙人談完結す。

二時間程眠る。

九時以後便通後稍ゝ苦しく例に依りて痲痺劑を服す。藥いまだ利かざるに既に心愉快になる。

此の時老母に新聞讀みてもらうて聞く。振假名をたよりに、つまづきながら多愛もなき講談の筆記などを

讀まるるを、我は心を靜めて聞きみ聞かずみ、うとうととなる時は一日中の最も樂しき時なり。

牛乳一合、麵麭すこし。

胡桃と蠶豆の古きものありとて出しけるを四五個づつ並べて果物帖に寫生す。

晝食、卵の花鮓。豆腐滓に魚肉をすりまぜたるなりとぞ。

又晝寢す。覺めて、懷中汁粉を飲む。

午後四時過、左千夫、今日の番にて訪はる。

晩飯、飯三碗、燒物、芋、茄子、富貴豆、三杯酢漬、飯うまく食ふ。

庭前に咲ける射干を根ながら掘りて左千夫の家土產とす。

床の間の掛物、鶴に水草の畫、文鳳の署名しあれど僞筆らし。

座敷の掛額は不折筆の水彩畫、富士五合目の景なり。

銅瓶に射干一もとを挿む。

小鉢に富士の燒石を置き三寸許りの低き虎杖を二三本あしらひたるは四絕生の自ら造りて贈る所。

八月六日　晴。朝、例によりて苦悶す。七時半痲痺劑を服し、新聞を讀んでもらうて聞く。牛乳一合。

午餐。頭苦しく新聞も讀めず畫もかけず。されど鳳梨を求め置きしが氣にかかりてならぬ故、休み休み寫生す。これにて果物帖完結す。始めて鳴門蜜柑を食ふ。液多くして夏橙よりも甘し。今日の番にて左千夫來る。午後四時半又服劑。夕刻は昨日より稍〻心地よし。夕刻寒暖計八十三度。（病狀六尺）

九月七日　忽雨。忽晴。

今朝週報募集句の原稿を持たせ使を出し、序に宮本へ往きて腹のはりを散らす藥をもらひ來らしむ。
白い散藥をもらひ來る。
朝、繃帶かへ、便通あること例の如し。
秋一室拂子の髯の動きけり
秋の蠅殺せども猶盡きぬかな
雞頭や今年の秋もたのもしき
夜、碧梧桐來る。蕪村句集講義讀合はせのため。（下略）（仰臥漫錄）

病苦と闘ひながら、毎日克明に日記を書いたのが俳聖正岡子規であつた。病人とはいひながら頗る健啖家であつた子規は、日記の約半分は食物に關することでうづめられてゐる。しかし、それでゐて、少しも下品に聞えないのが不思議な點である。まるで、子供のやうな天眞爛漫な心になつてゐるからである。子規の日記は、單なる備忘錄式のものではなく、そのまゝ立派な俳文をなしてゐる。先づ、日記文では、何といつても、子規を以て第一とせねばなるまい。

三　樋口一葉の日記

六月十七日　成りけり、博文館へあておこしたる狀の一つに樋口勘次郎とて高等師範卒業生の文あり、かねてより教科書改良の目的をもつて其のむね校長まできこえ出でつるに、それしかるべしとの贊成をうけ、卒業より此の方すでに一年、一意この事にのみ身をゆだねつ、ひたすらこれが改善を計れど文才なくしてことと心と伴なはず、いたづらにもだえて日を明かし暮すとなり、かねてより君が著作の數々を見て、かかる自在の筆をもちて此のおもふ事書き得られなばいかばかり世の爲人の爲なるべき、いと聞えにくき事なれどもし我がこれに盡くす心をおぼしくませもし給はば一臂の助力を賜はれや、この事人してたのみ參らすべきを生中に人傳せばあやまれる聞えのつたはらんも佗しく、かくうちつけにと書かれたり。ところどころの書店より雜誌の事などいひ來るとは事かはり、かばかり教育に熱心なる人の詞をひくうしていはれたることうけがはざらんも本意なかるべくや、われになし能ふ事かあらぬか、とまれあひ見て事のよしとひききたらん後いかにもせばやと、かへししたためやる。

いつにも御訪はせ給はるべし、御まのあたりにて聞えんといひやりき。やがて此の文よりの文に、いとかたじけなき由をいひで、二十三日の火えう日御在宅たまはれかし、かならず參上すべければと有りき。

六月二十三日　午後、樋口勘次郎約の如く來る、背ひくく色くろく、小ぶとりのせし品格なき人なり、

左のみはものがたる事もおほからず、唯大かたに物うちたのみて、まづ手はじめに桃太郎さるかになどの昔ばなしより着手あらまほししとて漣君のものしたる昔ばなしそこばくさしおきて行く、猶打ちあはせまほしき事あらば御出願ひまつらんも計られずとて、唯これればかりあづかる。
此の人の趣意一あたりおもしろけれど、學校の教科書に小說を用ひんといふやうの計畫ある、いささか行はれがたき事ならずやとかたぶかる、されどそは我がたのまれのほかなれば何をかいはん、おひおひに進みて、さる事の相談をもうけなば、其の非なるよしをいはばやと思ひき。（みづの上）

一葉の歿年、すなはち明治二十九年の日記の一節である。教科書に小說を採用したいと考へてゐる當時の新しい教育家樋口勘次郎氏の見當違と、まだ二十五歲の一葉女史が、「いささか行はれがたき事ならずやとかたぶかる」といひ、「さる事の相談をもうけなば、其の非なるよしをいはばやと思ひき」といつてゐるあたり、同じ樋口でも、その見識は、月とすつぽんほど違ふ。

それはとにかく、女史の日記は、實に、毎日克明に記されたもので、しかも、それがかなりの長篇に亙つてゐる。そのスタイルは、日記的文章といふよりも、むしろ小說的文章に近く、そのまま小說の素材をなすと思はれるものが多い。それに、和文體の、どちらかといへば、源氏の流をくむ、あしびきのやまどりの尾のしだれ尾のやうな感がないでもないし、句讀點の如きも、特別なうち方をしてゐる。隨つて、決して今日眞似てよいスタイルでないことはいふまでもないが、唯、女史が如何に日記に忠實であり、同時に文章道に精進してゐたかといふ事實を知るために引用したのである。

四　徳富蘆花の日記

彼岸

今日彼岸に入る。梅花歷亂として、麥綠已に莖をなしぬ。菜花盛となり、椿はぽたり／＼落ちて地も紅なり。

野に出づれば、田の畔は土筆・芹・薺・嫁菜・野蒜・蓬なんど簇々として足を容るべき所もなし。薹は花となりて、蕗も小き青傘を翳し初めぬ。其の陰に含羞める菫花の何ぞ美しき。蒲公英は小き日をば惜氣もなく田の畔に撒き散らせり。木瓜も紅唇を開きぬ。

田川の水の音を聞け。潺々として滑かに、其の裡に無限の春あり。おたまじやくし初めて生まれて五分ばかり、溫き水に泳げり。農夫は已に田をかへし初めんとす。

川邊には、枯葉、舊根の間より、茅花には大に筍には小き蘆芽の數限もなく茜色に吐出でぬ。

野には雲雀を聞き、我が隣家の欅には、近來日毎に鶯來鳴けり。(三月十八日)

夏

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子開き、簾を下して坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すがすがしく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。靑疊敷く相模灘の上を、習々として渡り來る風の凉しきを聞かずや。

今日初めて蜩の聲を後山に聞きぬ。一聲さやかにして銀鈴を振れる如し。

白日山に入り、凉は夕と共に生ず。外に出づれば川に釣る人あり、談笑の聲あり、笛聲あり、花火を揚ぐる子供あり。

夏のシーズンは始りぬ。（七月十日）

時雨の日

今日は時雨の日なり。

はらはら降出づるかと思へば止み、止みしかと思へば、また思ひ出でたる樣に降出づ。宿の女等幾たびか乾物の出し入れに迷ふ。自然も冬に入らんとして、心騷がしきにやあらん。「忙しう世の思はるる時雨哉」と、古人の句妙なる哉。

日は薄絹につつまれたる樣に光薄く、山茫と打ちけぶり、落葉勝なる木々は打ちしめり、空氣はうつとりとして重し。恰も春陰に似たり、ただ寂しきのみ。（十一月二十七日）

歲除

晴れず、曇れども降らず、鬱陶しき年の暮なり。

我が家にも、山より松を伐り來りて立てぬ。前川に泊する舟の上にも、松あり、注連繩あり。天下事なく、我が家事なく、客なく、債鬼なく、また餘財なく、淡々焉として年は靜かに暮れて行く。(十二月三十一日)

(自然と人生――湘南雜筆)

これはいはゆる備忘錄式の事務的な日記ではなく、湘南に俗塵を避けてゐた詩人德富蘆花が、一年を通じての自然のうつりかはりを日々記入した、うるはしい日記的文章である。文體は、明治三十二年頃のものであるから、今日のものとは大分變つてゐるが、しかし、自然の觀察とその描寫とには、さすがに蘆花獨得のものがある。かなり有名な文章家で、常に蘆花の「自然と人生」を座右に置いて、文章の手本としてゐた人は決して少くなかつたといふことである。文體をそのまま眞似ては時代錯誤であるが、その見方と寫し方の呼吸は、たしかに今でも手本としてよいと思ふ。

五 二葉亭四迷の日記

十月二日 (舊八月十五日) 朝來微雨

衞生大掃除とて朝より家内がたぴしと犇めく。晝頃漸く一通り濟みて手があくと、急に寒くなる。とうと

う耐へきれずしてドテラを引張り出してネルの上に着る、丁度好加減也。

今夜は十五夜なれど、此の雨ではかたなしだ。

十月三日（舊八月十六日） 朝來微雨少焉して歇みたれど重雲擾々たり。

寒さきのふに異ならず、朝來どてらにくるまりて、やれ〳〵意氣地のないことかな。

朝のうち、西本より使あり、松蕈を貰ふ。口上に曰く、國から送つてまゐりましたからと。なるほど市中へはまだ出ぬやうなり。さういへば、笠が固く窄みてゐる。甘さうだ。

松蕈に新蕎麥欲しとおもひけり

十月四日（舊八月十七日） 曇。

寒さ昨日にも彌增して意氣地なしと思へど、ドテラを棄つること能はず。

湯歸りに餘所の垣に紅き花一つ葉がくれて見ゆるにふと目留まり立寄りみるに、その形朝貌に似たり。我が家のは最早疾くに花さかずなりにけるに、こは遲咲にやとおもへど、例のしかと見識らねば、他の花を見紛へるかも知らず。

十月五日（舊八月十八日） 終日細雨。

別に記事なし。ただ、ドテラの戀〻離しがたきを覺ゆるのみ。

十月六日（舊八月十九日） 朝來曇、夕方霽。

今日は朝來寒さ少し緩みて、ドテラを脫ぎ、ネルの單衣の上に綿入羽織で苦にならず。而も障子は東と南とを終日明放ちたれど、その明放ちたるを忘れて執筆に餘念なき程なりし。五六寸の鮎旣に市に上れりと、

晩餐の時母上のお話なり。

今夜二時起出でて月を觀る。半弦よりも少し滿ちたる方にて、殆ど天心に懸りたり。月下蟲聲、風情言はん方なし。露の置渡したるなるべし、しつとりとしたる夜の光景なりき。

蟲の音に垂髫兒はすや／＼と

しん／＼と露降つ夜を鳴き明かす蟲

月下に蟲鳴きてはら／＼と露

四時ごろ用を足しに起き出でたるに木梢を間斷なくポタポタと落つる音す。薄暗き處ゆゑ、且は例の近視眼ゆゑ、何とも視分ちかねたれども、音によりて判ずれば雨の如し。されど目の前の窓の上を見れば、竹格子の影這ひたり、先方褥裏にありても雨の降るらんやうの音を聞けり。さては秋空の定めにて、いつしか雨降り來りしが、今纔かに霽上りて薄月の射せるにもやと推測られたれど、尙心許なかりければ、我が居間に歸りて後、雨戸を一枚くり明けて空を打仰ぐに、明月皎々として、目に見ゆる限り一片の雲だになし。さては露かと、尙一方の最も木立に近き窓の雨戸を繰りて耳を聳つるに、樹の間に葉より葉に落つるはら／＼といふ物の音暫くも絕ゆることなし。今は紛ふべくもなく露の音なり。我が見聞狹くて露の音を讀みたる詩歌あるを知らざれど、こは少くも我に取りて珍しき掘出し物したる心地しぬ。げに露時雨てふ熟語もあるを、今迄知らで過ぎしこそ、うつけたる我が心かな。

蟀のふと鳴き止めば露の音

葉隱れの露の音きく曉や

深夜折々チッチッといふやうなる蟲の音を聞く。聲は壁間に在るものの如くいと近々と聞えしが、いかなる蟲の鳴くらんとあはれなりき。

萩桔梗雨のそぼふる日なりけり

二葉亭晩年の日記である。明治三十九年、「其面影」を執筆の頃のそれである。二葉亭の文學に對するや、科學者の實驗に於けるが如き態度である――と評されてゐる通り、この日記的文章の、十月六日の後半の如きは、二葉亭のものの見方が如何に眞劍であるかを明瞭に示してゐる。殆ど夜通しかかつて、化學の實驗でもするやうな態度で、露の音に聞き入つてゐる。そして、その表現が、おざなりの日記的文章の型を全然破つてゐる。

かうした日記は、その日卽ち、十月六日に認めたものでないことは、記事それ自身が物語つてゐる。しかし、それは數日を經て記したものではない。それが證據には、十月七日の日記が、ちやんと記されてゐるからである。恐らく、十月七日の朝記されたものであらう。

かうなつて來ると、文學者の文章生活は、政治家や實業家の活動以上であるともいへる。この眞劍さが無ければ、決して後世に名をのこすほどの文章は生まれて來まい。

六　高山樗牛の日記

二月十一日（水曜日）大祭紀元節

旦起、南窓を疏して而して以て遠近に眸す。滿目皓々として、西郊忽ち渺茫たる大海に化し、而して浪聲なきを怪（し）む。東安寺の塚森、忽ち變じて瓊林となり、四隣の家屋、化して銀臺となる。珠簾戸端「端」カに挂り、滴聲泌々たり。而して飛雪紛々、或は霏々、或は密々片々として簷角を打ちて舞ふ。凍雀餓を戸端に訴へ、餓鳥釟「飢」カを九霄に叫ぶ。山川糢糊として明暗、佳勝絶景翕然として眉宇に萃り、恍として美嬪簾を捲くの思をなす。

根蔕なくんば何を以てか枝葉をなさん。水源なて「あり」カて而して河流あるなり。我が國皇統連綿として茲に二千有五百の久しきに至るものは、これ其の初大組「祖」カ神武天皇の强梗を祓除し仁德を修めて中原を奄有し玉ふに依る、豈偉大ならずや。是に我が今上聖叡皇帝、毎年本月十一日を以て大祭を行ひ、其の偉勗を謝す。正に門端の國旗と共に盛なり、噫。（樗牛全集）

これは、樗牛が福島中學時代の日記の一節である。時に年十有五。まだ少年のことであるから、やむを得ないともいへるが、しかし、一面からは、少年のくせにいやに氣取つたむづかしいものの言ひ

方をしたものだともいへる。かうした素地が、後年の樗牛をして例の氣取つた文章家たらしめた原因である。しかし、それはひとり樗牛の罪ではなくして、時代の罪であり、又、小學校や中學校の作文指導者の罪でもある。

さすがに時代は進んだ。今日では、尋常三年生に、日記の模範文として左の如き文が與へられてゐる。

七　尋常三年生の日記

八月三日　金曜　晴、夕立

東京のをばさんが、春子ちやんを連れて、お出でになつた。おみやげに、おもしろい本をもらつた。

午後二時頃、ひどい夕立が降つて來た、おざしきでねて居た春子ちやんが、雷の音で目をさまして、わつと泣出した。

八月四日　土曜　晴、後くもり

一郎さんから、はがきが來た。

暑いことですね。皆さん、おかはりはありませんか。こちらは、皆、丈夫です。私は、にいさんと、毎

日、川へ泳ぎに行きます。この頃、少し泳げるやうになつて、うれしくてたまりません。どうか、をぢさんや、をばさんによろしく。

と書いてあつた。

このはがきを、おとうさんがごらんになつて、

「一郎は、なかなか字がうまくなつた。お前も、負けないやうにしなければいけないね。」

とおつしやつた。

けふも、午後、夕立が來さうになつたが、とうとう降らなかつた。（小學國語讀本卷五）

かうした自然の表現法によつて指導されてゐる今日の小學生や中學生は、決して言葉の上でおどかさうとはしない。どこまでも、こまかに見、新しい感覺を養つて、それをそのまま寫さうとするやうになつてゐる。次に示すのは、尋常五年生の女の子の日記である。

八　尋常五年生の日記

三月三日　金曜　晴

今日はいよいよお節供だと思ふと、うれしくてうれしくてたまらない。その上に、妹のおたんじやう日だ

からなほうれしい。妹の名を、やよひちやんといふのは、今日生まれたからださうだ。やよひちやんは朝早くから起きて、

「今日は、あたしのおたんじやう日よ。」

といつて、うたつたりはねたりしてゐた。學校へ行く時、今日のやうな日には學校もお休にしてくれるといいなあと思つたがしかたがない。がまんして行つてみると、やつぱり學校はゆくわいである。五時間目のおけいこがすむと、大いそぎで歸つて來た。そして、おやつには、おひなさまに供へてあつたお菓子をわけていただいた。

お夕飯には、ずゐぶんごちそうがあつた。妹のおたんじやうと、お節供と二つ重なつたからださうだ。皆が一しよにお膳につくと、

「やよひちやん、おめでたう。」

と、おとうさまがおつしやつた。やよひちやんは、どういつてよいのか困つてしまつたやうに、

「おとうさま、おめでたう。」

といつたので、皆で大笑をした。

三月四日　土曜　雨

朝起きてみたら、細い雨がしとしとと降つてゐた。庭のねこやなぎが、けむつたやうになつて、その雨の中にぬれてゐた。おえんがはの下にうづくまつてゐるコント（犬の名）も、どこか歩いて來たのだらう、背中をぬらしてつめたさうだ。

「今日は長ぐつにしなさい。」
お母様が、さうおつしやるので、そのとほりお支度をして學校へ出かけた。
何だか靜かにおちついてゐるやうで、町通も、いつもとは違ふやうに思はれた。護國寺のところの櫻の枝が、雨にうるんで、つぼみが少しふくらんだやうに見えた。
學校から歸つて、お家の中で妹と遊んだ。（國語副讀本）
かうした自然の表現が、だんだん成長して行くと、次に示す吉屋信子女史の日記の文章のやうになる。

九　吉屋信子の日記

六月十五日（金曜）天氣晴。
鎌倉建長寺管長と一問一答の爲、主婦之友編輯局の方達と寫眞部の方とに、案内されてゆく。
青葉の寺院の境内すがすがし。
用を終りて、一行のうちの、婦人記者T さん達と逗子へゆく。それより三崎までドライブ、海邊の宿でお晝御飯をますし、お船に乘る。

油壺へ上陸、横須賀まで自動車、黄昏の軍港を眺めて歸京。
おみやげに、買つた一箱の櫻貝。
久しぶりの、長閑な淸遊だつた。まるで女學生の遠足のやうに面白かつた。
Tさん達は、歸つてから、又社へ戻り、ひと働なさるのを思ふと、私も怠けられない。
家の灯の下で、御夕飯を戴きつつ、今日のおはなしをする。
六月十六日（土曜）書齋でいつもの如く。
夕方、雨の中を赤坂幸樂へ、山田嘉吉氏の古稀のお祝に列す。いろいろのお方におめにかかる。テーブルスピーチをさせられる。早目に歸り、一寸書齋に入る。
六月十七日（日曜）
今日（女の友情）八月號の原稿成る。
數日の苦心なり。
原稿書くと、人並の日曜も祭日もなし。
六月十八日（月曜）
昨日渡した原稿のうち、書きなほしたい部分が出來て、取戻し、一日がかりで筆を入れ、やつと渡す。
六月十九日（火曜）
つゆぞら――ほつとして今日は遊びたい。でも空はくもり、なんとなく、疲れが出て、ぼんやり讀書、レコードを聽き、ピアノを叩き、庭でゴルフの練習、まるで、一寸一日だけの有閑令孃だつた。

今をときめく女流作家の日記である。純な婦人らしい感覺が、清新なスタイルの中ににじみ出てゐる文章である。

靑葉の寺院の境内すがすがし。
おみやげに、買つた一箱の櫻貝。
つゆぞら——ほつと今日は遊びたい。

感覺もリズムも、そのまま美しい詩だ。髪を短くきつて、待合の情景まで描き出す女流作家の日常生活も、決して常の婦人とちがつてはゐない。つつましやかに、「家の灯の下で、御夕飯を戴きつつ、今日のおはなしをする」純なをとめである。「Tさん達は、歸つてから、又社へ戻り、ひと働なさるのを思ふと、私も怠けられない。」といふ努力家は、「昨日渡した原稿のうち、書きなほしたい部分が出來て、取戻し、一日がかりで筆を入れ、やつと渡す。」といふほど、眞劍な態度の作家である。

年代でいふと、昭和に入つてからの日記であるから、最も新しいものであるが、「數日の苦心なり」「原稿書くと、人並の日曜も祭日もなし」といふ風に、文語體のところなどもある。しかし、日記の文章は簡潔をたつとぶので、自然かうしたスタイルになる。

黄昏の軍港を眺めて歸京。
おみやげに、買つた一箱の櫻貝。

の如き、いはゆる名詞止めの手法なども、文の簡潔から來る自然のレトリックで、日記的文章の一特徴である。

日記は、もともと人に見せるために書くものではなく、中には絶對に秘して置きたいことや、僞らざる感情を他人の上に投げかけたものなどをも記して置くので、生前に日記を公にすることは、先づめつたにないといつてよい。隨つて、現代の文壇に活躍してゐる文人達の立派な文を多く揭げることが出來なかつたのはやむを得ない。

第八章　紀行的文章

ここに、紀行的文章といふのは、いはゆる旅行記または旅日記の文章のことである。前にも述べた如く、紀行文は一種の日記文であり、旅行先で日日記すところの日記に他ならない。だから、貫之の土佐日記にせよ、孝標の女の更級日記にせよ、阿佛尼の十六夜日記にせよ、すべて日記と呼ばれてゐるのである。

旅に出て、ちがつた土地の自然や人情に接し、そこに一種の感興を起すといふことは人間の自然の情である。その自然の情からわき上つた感興を記すのが紀行文である。紀行文の萌芽は、既にふるく、萬葉の羈旅の歌にもあらはれてゐる。

旅にありて物をぞ思ふ白浪の邊にも沖にも寄るとはなしに
草枕旅にしをればかりごもの亂れて妹に戀ひぬ日はなし
國遠み思ひな侘びそ風のむた雲の行くごと言は通はむ

交通の不便であつた上古の代には、右の如く、先づ旅へ出て、家郷を懷ふ情が詠歎せられた。ついで、平安時代に入つて、土佐日記や更級日記の如き、本格的な散文の紀行文があらはれ、鎌倉時代に入ると、海道記や東關紀行や十六夜日記の如く、主として京都と鎌倉との往復の旅日記があらはれ、江戸時代に入ると、道路の開通にともなひ旅行者が著しく增加し、極めて多くの紀行文があらはれてゐる。中でも、芭蕉の奥の細道や鹿島紀行の如きは、最もすぐれた俳文的紀行であり、蜀山人の小春紀行や輕井茶話道中粹語錄の如きも、狂歌的趣味たつぷりな面白い紀行文である。小說ではあるが、一九の東海道中膝栗毛の如きも、一種のかはつた紀行文とも見られる。明治以後になると、旅行の範圍がぐつと廣まつて、內地はいふに及ばす、朝鮮・滿洲・支那・南洋はもとより、印度から歐洲、南北アメリカといふ風に、地球のすみずみまで日本人の足跡が印せられ、隨つて紀行文も全く世界的になつた。そして、文人だけでなく、殆どすべての人々が堂々たる紀行文をものしてゐる。それは、學者に、軍人に、實業家に、官吏に、あらゆる階級あらゆる範圍に亙つてゐる。

さて、紀行文の書きかたであるが、それは、だいたい、隨筆又は日記文の呼吸で行けばよい。

第一、先づ何よりも遊子の感覺がみがかれてゐなくてはならぬ。さうでないと、折角の旅の、自然も人情も風俗も、ただ何とはなしに珍しいぐらゐで濟まされてしまふ。それでは、紀行文は生まれて來ない。

第二、珍しい見聞を紹介するのはいいが、それを敎へようとする態度――いはば說明に陷るのは失

敗である。とかく、文筆的素人はこの弊に陷りたがる。しかつめらしい教育家の洋行談のやうになつてはならぬ。

第三、文體(スタイル)は、隨筆または日記文の如く、輕妙で簡潔で、肩の凝らないのがよい。それには、一つは氣持である。旅に出た、のんびりした氣持、それがそのまま文にあらはれてゐるのがよい。

第四、何よりも、文は印象的でなければならぬ。それには、自分が最もあざやかに印象をうけたところを描くべきで、見聞の一々をくどくどと記しては失敗である。

第五、畫のかける人はチケッチを、和歌や俳句の出來る人は和歌や俳句を、ところどころに挿入して置くことも望ましいことである。土佐日記は和歌を、奥の細道は俳句を、それぞれ挿入してゐることによつて、どれだけ文全體をひきたててゐるか分らない。

以下、具體的の文例によつて、紀行文のスタイルや作法を學んで行くこととする。

一　潮來(いたこ)

私は一時間以上そこに待たなければならなかつた。

「來るには來るんだね。」

かう私はもう一度船着場の主人に聞いてみた。

「え、來ますとも……。」

しかし、それが果してやつて來るか、何うか。一時間といふのが、二時間にも、三時間にもなりはしないか。かう思ふと、いつそ戻つて角の旅館に泊つた方が好くはないかとも思はれた。

しかし、どうも、あの旅館では、おちついて寢られさうにも思へなつた。きつと、となりの室で騷がれて一晩中寢ることも出來ないに相違ない、まあ待たう、かう思つて私は船着場のところに立つてゐた。

しかし、さうしたいらだち勝ちな心も、しばらくさうしてゐる中に、次第に靜かに靜かになつて行つた。それといふのも、あたりの夕暮のしいんとした空氣がそれとなく私の心に染込んで來たからであつた。それにしても何といふ靜けさであらう。また何といふやはらかな氣分であらう。私は、そこに小さな泡を作つて靜かに流れて行つてゐる川を見た。夕暮の靜けさに全く頭をたれてしまつてゐる眞菰や蘆を見た。かすかに音をたてて遠く漕いで行く船も見えた。

空は曇つて灰色にぬられてゐる。そしてその空がどんよりとした水の面に落ちてうつつてゐる。

「これは天氣が變るかな。」

突然かういふ聲が耳に入つたので、それとなく私がふり向くと、そこには、さつきの主人が岸につながれた舟を長いたはしで頻りにゴシゴシと洗つてゐた。

「雨だな。」

そこに、さつきの大きな荷を運んで來た男はかう言つて調子を合はせた。

「もう少し降らせたくないもんだがな。」

「本當によ。」

男はそのまま荷車をひいて、そして向かふへ行つてしまつた。

私の待つてゐる船着場には、私と同じやうに船を待つてゐる荷物が五つ六つ、ころがつてゐる。一つは大きな四斗樽を荒繩でからげたものである。一つは小さな醬油樽である。もう一つは、繩でたてよこに編んだ中に、雄雞や雌雞を一ぱい押詰(おしつ)めて入れた籠である。どうかすると、コケコケといふ聲が其處からきこえて來る。

ふと、氣がつくと、ぬかのやうな雨が音もせずにかすかに降つてゐた。

「やあ、とうとう雨だ。」

かう思つてふり返つて見たけれど、もうその時は主人はそこにゐなかつた。私はしかたなしに、持つてゐるかうもりがさを開いた。

しばらく經つた。

と、今度は村の娘か、でなければ若い村の女房らしい、二十一二の女が蛇の目の傘をさしてやつて來た。矢張り、私と同じく、汽船の來るのを待つ一人であるらしかつた。急に、女はなれなれしく私のそばへ寄つて來て話しかけた。

「お祭へ行きなさるんかね？」

「お祭つて、どこの？」

「鹿島の……」
「いや、さういふわけぢやないけれど……。鹿島へ行くには行くのだ。」
「今夜のお祭は賑かだのに、あいにくの雨だな……。」
から女は言つたが、
「お前さん、知らねんけえ。今夜は鹿島の提灯祭つてな、それは大した賑ひだぞ。皆な下から提灯を持つて行つて、お宮の前で殘らず燃してしまふでな。」
「ぢや鹿島は込んでるね?」
私には、その提灯祭よりも、旅館の混雜することが氣になつた。
「賑かぢやともな――。まあ、行つて見なされ、話のたねぢやに――。」
「お前さんも行くのかね、お祭に?」
「いや、わしはさうぢやねえけれどもな、ぢき、そのさきまで行くんだけどもな、お前さん、鹿島に行くなら、一所に行つてくんなされ。」
「……」
私はだまつてゐた。ふと見ると、こまかい雨の降りしきる夕闇の空氣の中に、エンジンの動く音が高く響いて、やがて赤い青い汽船のあかりが次第にこちらに近寄つて來るのを見た。
日は、もうとつぷりと暮れてゐた。(田山花袋著「花袋行脚」)

明治以來の紀行文家としては、先づ田山花袋を以て第一位に置かねばなるまい。その中でも、ここにあげた文の如きは、平明なすつきりしたスタイルのうちに、水鄕潮來の氣分が實によくあらはされてゐる。殆ど日本全國、足跡の至らざるところのない花袋は、「日本に水鄕が三ケ所ある。一つは琵琶湖の附近、一つは宍道湖の附近、一つは霞浦から利根の下流にかけて、いはゆる潮來を中心とした水鄕である。しかし、そのうちで、潮來を中心とした水鄕の趣は、とても他の二つの及ぶところではない。」と言つてゐる。また、或人は、潮來は日本のヴェニスだともいつてゐる。

その水鄕潮來の、雨の夕を描いたのが右の文例である。「小さな泡を作つて靜かに流れてゐる川」「夕暮の靜けさに全く頭をたれてしまつてゐる眞菰や蘆」「かすかに音をたてて遠く漕いで行く船」すべてが靜けさそのもののものである。船着場に船を待つてゐる荷物の中、雞を入れた籠、「どうかすると、コケコケといふ聲が其處からきこえて來た」といふあたりは、水鄕の氣分を描いてまさに點睛の感がある。「ぬかのやうな雨が音もせずにかすかに」夕暮の水鄕を包んでゐる。村の女と鹿島の提灯祭の話をするのも、いかにもあのへんの氣分がよくあらはれてゐる。ことに、最後の描寫、「こまかい雨の降りしきる夕闇の空氣の中に、エンジンの動く音が高く響いて、やがて赤い青い汽船のあかりが次第にこちらに近寄つて來る」といふあたりは、技神に入るともいひたい寫し方である。さすがに、紀行文の大家田山花袋の筆であるとうなづかれる。

二　信濃の旅

　夜の東京の明りが雨雲のなかに消えてゆく。

　私は明日の朝、信濃の丸子といふ町の講演があるので、頭から外套を引冠つて眠ることにした。汽車が急に停つて、がたがたと搖れるたんびに、地震かと思つて眼をさましたことも二度や三度はあつた。まだ去年の地震のおびえが私の心にそれほど深く喰ひこんでゐるのであつた。

　眞夜中であつた。汽車はどこかの寂しい停車場に止つてゐた。妙義山に登る人々の群がなだれを打つて、プラットホームを出て行つたのであつた。闇のなかに提灯が動き、喇叭が響いてゐた。

　夜が明けかかつてゐた。輕井澤といふ聲を聽いた。霧が板葺の屋根をやはらかにつつんでゐる。

　霧の下を飛び飛びに別莊風な家が枯草の中に建てられてゐた。痩せた針葉樹が高原の端を縁取つてゐた。薄い霜が廣いキャベツ畠をほの白くつつんでゐた。

　沓掛、小諸、そんな名は私にとつてはかなり久しい間いろいろな聯想を抱かせてゐた。私は今目のあたり沓掛を見、小諸を見た。淺間は雨雲につつまれてしまつて裾野の秋すら見ることはできなかつた。

　信濃は高原の國である、コスモスの國である、野菊の國である。高原であるせゐか、空氣が澄明であるせゐか、山が美しいせゐか？　私は信濃で見たほど美しいコスモスを見たことがない、信濃で見たほど美しい

野菊を見たことはない。

信濃で見たコスモスは可憐さのうちに山國の人のねばり强さを持つてゐる。山の小さな鐵道官舍の垣根や、農家といふ農家の庭をかざつてゐるのは寶石のかがやきを持つた高原のコスモスである。牛小舍のまはりにも、堆肥の陰にも、石ころ道のほとりにも、小學校の窓の下にもコスモスがかがやいてゐる、みがき上げられた青空と高い嶮しい山脈を背景として。

私はまた信濃の高原の野菊を忘れることはできない。枯草の中に自らなる品位と可憐さと虔しさとを持つた野菊の美は、信濃の高原を旅する人々にどれほどフレッシュな慰めを與へるかも知れない。二坪にも三坪にもあまるほどな白い雪のやうな野菊の群を、淡い霜に掩はれた枯草の中に見出す。

沓掛、追分、小諸……高原の町々はコスモスと野菊につつまれてゐた。

小諸の町といつても、停車場のプラトホームから爪先上りになつた小諸の町を覗いたばかりである。汽車から下りてゆく人たちの後姿も何となしに山國の寂しさを聯想させる。(吉田弦二郎氏著「霧島紀行」)

田山花袋についで起つた紀行文の大家吉田弦二郎氏が、信州の高原を汽車の窓から眺めながら描いたのが右の文例である。すらりとした清新な筆である。名所廻りをするとか、海外へ旅行するとかでなしに、ちよつとした汽車旅行でも、常に感覺を練つてゐる人には、いつも立派な紀行文が生まれる。信州の高原には秋の來るのが早い。この文は、九月頃のことであらうが、もう輕井澤には薄い霜がおりて、追分から沓掛・小諸のあたりには、コスモスと野菊の眞盛りである。實際信越線であの邊で通

る時の氣分は、ことに初秋の頃は、何ともいへない一種崇高な詩情にかられるのが常であるが、多くの人が感じてゐながら、それを表現し得ないところを、詩人は衆人の詩感を代表して表現してくれる。

三　山から海へ

三十年前に測圖をした陸軍の五萬分一は、燒津の見物には殆ど役に立たなかつた。當時一筋半の濱の町は、後の田を埋めて四筋の餘になり、まだ隣村の地へ食出してゐる。舊燒津の面影も分らぬ程、在來の人家も變つてゐる。濱へ出て見れば防波堤は勿論、海が運んだ唯の石までも新しい。濱の松にも老木は少い。あの尙古派のラフカヂオ・ハーンが、どうして此の浦を愛し續けたかを訝るばかりである。

ハーン氏も既に歴史になつたが、龜井知事も故人になりやうが早かつた。元氣な龜井さんも、燒津だけで發動機の漁船がもう百五十艘にもなると聞いたら驚くだらう。勿論元は荒海の危險を凌ぐ爲の發案であつたらうが、安全帶が擴張すれば又その外へ乘出し、さうして常に危險を冒してゐる。剩るから人命を粗末にするので無い證據は、燒津でも絶えず人を招いてゐる。眼に見えぬ促迫が此の世にはあるものである。

宮城・岩手の海岸の村々では、燒津の鰹節商だといふ青年によく逢つた。賣りに來たかと思ふとさうでは無く、此の邊から半製品を買集めて、燒津で仕上げをして出すのであつた。何でも相應な產出のある土地と聞いて居るのに、更に九州からも奥からも、生節をうんと仕込んで行くとは、よくよく人の手の剩つて困る

爲だらうと想像して來てみると、事實は寧ろその反對で、剩つてゐるのは、やはり資本と所謂企業熱とだけであつた。

鈴木町長の話によると、最初は仙郡の漁村から、多くの若者が發動機船の練習に來たのを、聟に取つたり嫁を遣つたり、その他色々の人情の絆（きづな）で緊ぎ留めて、なるべく此の湊の船に働かせるやうにしたが、後には相手にも注文が出來て、稽古濟み次第に多くは還つてしまふさうである。それで近頃は力めて山村の青年を招くやうにしてゐる。なるほど、これならば還つてもしやうが無いから留（とどま）るであらう。船頭が多くて船を山へといふ諺もあるが、人の方はさう自由にもなるまい。折角思ひ切つて出て來た若い衆を、再び寒い山奥へ稗を食べに、戻さぬやうにしたいものだ。

山が平穩なる隱れ里であつた時代は、實は我々に取つてはあまりに長かつた。最初船で渡つて來た此の國民が、流に逆らうて高地に入込んだのは、自然の趨勢といふことは出來ぬ。前には卽ち戰亂の威嚇があり、近世は又人口增加の壓迫があつた。羚羊（かもしか）の躍るやうな山腹に麥を播く程にせぬと、この狹い島に六千萬の生靈を盛ることが出來なかつたのである。海が廣漠の未開地であることに心づけば、彼等の下りて來るのは所謂水の低きに就くやうなもので、これほど成功し易い奬勵は無いのである。（柳田國男氏著「秋風帖」）

我が國へ民俗學（フォルクロアー）を輸入し、そしてそれを完成した柳田氏は、民俗研究の爲に、常に各地を旅行し、多くの紀行文を示してゐられる。

柳田氏の文は、一種の枯淡な味を持つてゐる。この文の如きもその一例である。しかし、この文で

は、氏の專門の民俗學的のところは少く、漁港燒津の發展を物語つてゐるのであるが、紀行文としては、かうしたものも面白いのである。その中でも、氏の專門がちらりと顏をのぞけてゐる。「山が平穩なる隱れ里であつた時代は、實は我々にとつてはあまりに長かつた。」といひ、「最初船で渡つて來た此の國民が、流に逆らうて高地に入込んだのは、自然の趨勢といふことは出來ない。」といふあたりは、民俗學者としての專門的立言で、見逃してはならぬ一節である。しかも、それが現實の燒津に結びつけられて語られてゐるのである。かうした見識で、すべてを見て行くところに、また、すぐれた紀行文が生まれるのである。

四　爾靈山

十年前、明治三十七年の十二月五日の朝、それまでに幾回となく繰返された二〇三爭奪の死鬪血鬪のあと、最終の强襲を行ふべく、北海道師團の選拔兵士が三十人宛一團になつて、上から横から注ぎかくる砲彈、銃彈、擲彈、はては石礫まで亂れ飛ぶ中を、曳々聲して攻上つた勢はどんなであつたらう。何の、それしき、人間が小癪な、といはんばかり猛烈に風は吹きまくる。吉開君が軍隊から持參の謄寫版刷要塞戰記や地圖を展べようとすると、風がばたばたとたたきつけて中々開けさせぬ。無理に開ければ、吹きちぎり吹飛ばすだ

けだ。軍曹は餘儀なくそれらをカーキ服のポケットにしまつて、あれが赤坂山、横長のが海鼠山、と唯大まかに指さして懸命にどなる。その聲すら風に吹きちぎられてよくは聞えぬのである。軍曹が默すと、そこには最早人聲もせぬ、銃砲彈の響もない。大正二年秋十月中旬のからりと晴れた青空、あかあかと日が射して、ひつそり閑とした十年前の古戰跡に唯一つ活きものの如く獰猛な北風が矢聲劇しく吹きまくる。ああ爾靈山、此處の爭奪の爲にのみ日露一萬五千の髑髏が出來た。此の山が吸うた血と汗と涙は到底酌むことも出來ぬ。それから最早九年過ぎた。醜い戰の跡は人の手と月日に淸められたが、今も雨後には山に脂が浮くさうだ。標識碑のすぐ近處で他の捨てたものであらう、余は人骨の一片を拾うた。

　茶色の山を黑蟻が一疋上つて來る、と先刻見たは人であつた。吹飛ばされじと相撲ひつつ、尙も標識碑下に佇むところへ、乘馬靴甲斐々々しく、鞭を振り〱やつて來たのは、今朝程ホテルに來訪した濱口英夫君であつた。濱口君は肥後の人、國民新聞の編輯局の隅や猫を余がしてゐた時、君は發送の方にゐた。地口の名人、國木田獨歩の弟北斗收二君を毆打つた人として余の記憶に殘つて居た人である。今は關東都督府のお役人樣だ。

　打連れて標識碑から少し東に下ると、こはれた大砲、鐵軌など散らばつて居る。露軍の營みかけた急造砲臺が、攻圍軍の大砲に打碎かれて埋沒したのを、後で掘出したもの、と小さな碑の文が語つて居る。

「乃木少尉の墓があつたのは、あのへんです。」と吉開軍曹は谷の西北の一處を指した。そこには風を透して十月中旬の午近い日が白く霜枯の草と土石を照らして居る。（德富蘆花著「死の陰に」）

蘆花の紀行文集「死の陰に」の中、旅順の爾靈山の一節である。古戰場に立つての詩人の追懷が、こまかな筆で寫されてゐる。かうした感興が、そもそも紀行文の本質で、その感興を自然のままにすらすらと運んでゐるところ、さすがに蘆花の筆である。「今も雨後には山に脂が浮くさうだ」「余は人骨の一片を拾うた」の如き、あつさりと敍してゐながら、讀者に一種悽慘な氣持を起させる手法の如き、後人の大いに學ぶべき點であらう。

五　支那の山郭水村

此の世に在つて生涯平和を愛好し、何不自由なく、出來得る限りの享樂生活に耽つてみたいといふは蓋し支那都鄙各地に見る民意の代表的氣分である。軍閥と反軍閥は事實に於て尙戰亂を續け、世界の人士をして尙全支那をば動亂の巷と即斷せしめてゐるやうであるけれども、現實の支那に遊び田舍の方に這入つてみると、山郭水村は多く平和の空氣に滿ち充ちて、戰亂をよそに、どことなくその大陸的な優雅な情趣を泛べてゐる。

南支は長江沿岸の如き、今日最早ペンツ辮子の跡を絕ち、殆どこれを見出し得ないのであるが、少しく遠く內地に入るとか又支那の純田舍あたりにでも這入つてみるといふと、舊式の辮髮姿の老農はたくさんゐる。そして農家の樹下には白羊の五六が仲よくつどひ、草などたべてゐるものもあり、又中には長いひげを垂ら

した首を仰むけに、靜かに牧童の足もとへ近寄つて行かうとしてゐるものもある。或は土饅頭の陵墓の一角に、墨の如く黑い山羊の群の數百頭が、春光を浴びて、おとなしく日向ぼつこをしてゐる景趣もなつかしく眺められる。

又山西省は太原の城外晉祠の田舍を遊歷してゐると、漆黑の山羊の群が河原に出るも出るも、實に千頭近くも出て遊び戯れてゐるのを見た。自分共、棗の並木街道を山から下りて西へ西へと晉祠をさして歸つてゐたときのことである。あちらこちら三々五々にかたまつて戯れてゐる山羊のうち、偉く見えてゐる二頭が双方から向かひ合ひ、あたまを持ちかけ彎曲した角を武器に、互にぶち當て音をさせ、遂に角と角との間に火花をも見んずる勢を示して來た。そして互に角を上方に推しあげるやうに持ちかけて、幾回となく之を繰返してゐるのである。又こちらなる山羊は、氣の利いた面持で、角と角との取組をはじめ、しばしば見合つてゐたかと思ふと、急に角鬪の幕に入る。中にはそこで、咩々と言ふ合ひの手を入れ、拍子をさへ取つてゐる山羊もある。そして、やがてそれは引分となる無邪氣さ、誠に優しい大陸の情趣である。

また、南支那は江南の田舍で、運河のほとり、橋のたもとにたたずみながら、魚を捕る鵜飼の舟の去來などを打眺めてゐる風情も決してわるくない。橋畔の軒下に現れたる纒足姿のかみさんは誕生ばかりの頰紅の女少孩兒を兩手に輕く抱へ、しきりと之をあやしてゐる。紅の繻子に金鳳の刺繡など施した可愛い頭巾を被らせてゐるのである。

すべて、これらは皆、支那の田舍に平和の氣分を象徵せる神のシムボルのやうなものである。

（後藤朝太郎氏著「支那行脚記」）

文筆家の中で、後藤氏ほどの支那通は一人もない。その支那通の後藤氏が、支那の山郭水村の平和なすがたを寫されたのが右の文である。稀に支那を旅行した人などの企て及はざるところのあるのは當然である。廣い支那大陸には、まだ堯舜の時代そのままの民が住んでゐるといふ。後藤氏は、それを目のあたりに見、具體的 事實を寫して印象的ならしめてゐる。

六　夢の都

夢幻的な常夏の國に來て、我々異國の旅人を更に誘ふのはサルタンの都ヂョクジヤでせう。滔々として一時も停まらぬ世の中の推移といふものから、全く掛けはなれて、ひとり昔のまま、封建の制もその儘に停まつてゐるのは此の都でせう。古風な優雅な趣の漂つてゐる夢の都です。

道の兩側には、恐らく十人の人が手を繋いでも抱ききれないと思はれる程大きく高く、蒼々と繁りぬいた榕樹の並木が、街ゆく人を蔽ひ盡くしてゐます。路ゆく夥多の土人中で、殊に我々の目を惹くのはサルタンに仕へる武士の姿です。頭は結髮して更紗を卷きつけ、筒袖の寛い上衣をつけ、更紗のサロンをはいて、腰には一振のクリス（短刀）を差して、素足で悠揚せまらず、町人共を眼下に見下して、悶々と歩を運んでゆきます。驟雨が來て、町人共は吃驚してサロンの裾をからげて駈出しても、武士だけは悠々として歩度も變へぬ程泰然としてゐます。

併し何というても文明の風の吹込まぬのではありません。悠然としてゆくお侍にも、自動車が塵を浴びせて駛つてゐきます。一臺の自動車に行逢ひました。車の傍に、金色に塗られた一本の日傘(パヨン)を立ててありました。王族の召された自動車のことです。この日傘(パヨン)は、即ち王族の標(しるし)で、金色を見てその身分が分るので、身分の貴い程金色の部分が多いのださうです。外出の時は必ず從者が日傘を持つてお供してゐるので、忽ちそれと知ることが出來ます。けれども、自動車の傍に燦爛と輝く金色の日傘を立ててあるのは、時代錯誤(アナクロニズム)のゆきどまりの様な感があります。

王城(クラートン)に祿を食む數千の武士は、王城を圍んで屋敷を構へてゐます。道の兩側は悉く士族屋敷で、土壁を廻(めぐ)らし、邸内に樹の多いのも、我が國の士族町と稍ゝ趣が似てゐます。

サルタンから受けるお扶持は日本の様に米ではなくて金です。月九十錢から年に九千圓も頂いてゐるのまで、幾多の階級があつて、一週か二週毎に參觀交替して忠實に御奉公してゐるさうです。

チョクジヤは又更紗の都です。街には更紗を商ふ店が多く、美しい更紗を掛け並べて、人の心を唆つてゐます。此の町の富士洋行主の澤邊氏は更紗で成功した人で、家にゆくと、多くの瓜哇女が布に更紗の型を蠟で置いてゐました。（徳川義親侯著「馬來の野に狩して」）

馬來の野に、サルタンと共に、虎や象を狩られた時の旅日記の一節である。虎狩や象狩の記事も非常に面白いものであるが、長くなるので、この一節を引用した。上品な筆致の中に、瓜哇の王城の都チョクジヤが、印象的に表現されてゐる。

七　赤道直下の日本人

三月八日。快晴、午前八時頃船はシンガポールの埠頭に横づけとなつた。事務長室の前は、例の如く出迎の男女、兩替をすすめるインド人、支那人、繪はがき屋、雜貨を賣るマレー土人などの群でにぎはつた。左舷の方へは、マレー土人が幾艘となく丸木舟を漕寄せて金を與れとののしり騒ぐ。デッキから白銅や銀貨を海の中に投げてやると、轉ぶやうに飛込んで間違なく口に銜へて來る。土人の飛込むところをデッキの上から撮影する人がある。

檢疫も、旅券の調べも要らぬこととなつて、一行は眞先に上陸した。但しドイツ人は絕對に上陸を許されぬとあつて、船員が大きい聲で觸れまはつてゐる。兜を脫いで、降參してしまつた後まで、かくも恐れられて居るドイツ人の强味が思はれた。

埠頭に立つて居る日本人の中には、土人と殆ど同じ色に煤けてゐる人もあれば、赭く焦けてゐるだけで土人のやうに煤けない人もある。僕はシンガポールに上陸して、先づ赤道直下に働いてゐる日本人の日焦けに、二種あることを發見した。すなはち、その一つは黑く煤けることで、甚だしいのは脣の色まで煤けて來る。つまりアフリカのネグロそのままになる。他の一つは赭色に焦けるので、これは西洋人の焦け方と同じである。試みにこの相違は、赤道直下に在留の年限によつて違ふのかときいてみると、決してさうではない。煤

ける人は、二ヶ月か三ヶ月で黑くなる。又、黑くならぬ人は、一年居ても、二年居ても、唯赭くなるだけであるとのことであつた。さういへば、船の中にも、香港以來、著しくマレー土人に色が似て來た人と、少しも變らぬ人とがある。そこで僕は思つた。マレー土人や、インド人が黑くなるのは、唯、赤道に近く棲んで居るといふだけではない。彼等の皮膚には太陽の光線に觸れて容易く變色する或色素がある。西洋人はその一生をインドや、マレー半島に送つても土人のやうに黑くはならぬ。日本人の中に容易く黑化する人と、黑化せぬ人とあるのは、偶ゝ以て日本民種の血統の單純でないことを立證するものではないか。われわれの祖先には確にインドネジアの血もまじつてゐる。しかし決してインドネジアの血ばかりではない。ツングースの血もあらう。ツングースを通じて傳へられた白人の血もあらう。別に苗族の血もあらう。日本人の中にも、赭くなるだけで、土人のやうに焼けない人も甚だ少くない。（白柳秀湖氏著「山水と歴史」）

多くの洋行者が、シンガポールを通り、そして誰もがシンガポールのことを書いてゐるが、かうした見方をした記事は一つもない。さすがに、するどいと思ふ。大和民族が、東洋的な數種の種族の混合であるといふことは、あらゆる點から考へて、もはや動かすべからざる事實である。また、それは大和民族をして優秀ならしめた原因でもある。合金は强いといふ。英國人が、アングロとサクソンとの合金であるよりも、大和民族は、もつと多くの種類の合金である。さうした新しい眼で見る人には、赤道直下に働いてゐる日本人の皮膚の色をも、決して見逃さないのである。紀行文の素地をなすものは、やはり見識から來る觀察にある。

八　詩の國の町から町へ

ただ忙しくインドの旅をかさねつつ、ベナーレスからラクナウへ、アグラからデリーへと、町から町へ、汽車を乘りかへつつ、經めぐつてゐます。

ベナーレスでは、兎も角も鹿野苑へいそぎました。町から四マイルといふことでした。乾季のこの頃は、道の砂埃が甚だしく、折角の並樹も、木の葉が、ことごとく眞白に砂をかぶつてゐるのでした。その並樹の間を牛車がのそりのそりとあるきます。其の牛車の上から甲高い叫び聲を擧げながら牛をむちうつインド人の黑い顏をすさまじきものにうち見なしつつ、寂しく荒れたやうな村村を、わたくし共の馬車はしづかにはしるのでした。

小春のやうな日かげが、ほやほやと頭の上に照つてゐます。佛がはじめて法輪を轉じたまひしといふ其の地に、わたくし共は、何を求めるといふこともありませんが、何となきなつかしさとあこがれとを以て、道をたどりますのです。車のはしるに從つて起る微風が、肌にこころもちよく涼し味を與へます。

廢墟として殘つてゐるに過ぎない鹿野苑に、ダメークの塔のくづれたるを仰ぎ、アソカの石柱のたふれたるをかいなでつつ、半日を暮しましたが礎の高さの腰うちかけるに丁度いいのを見出し、石だたみのつぎ目に小さな紫の花の咲いてゐるのにながめいつて、いつしか日の傾けるにうちおどろきましたことです。歸

をうながす從者の聲に、はじめてわれにかへつたことでした。――インドはまことに詩の國です。

靜かな町のラクナウへ着いたのは日の暮れがたでした。八日ばかりの月が澄みわたつた空に、はや高く上つてゐましたので、そのひかりの下に、イマムバラの廟ををがむべしと急いだことでした。

先づ其の門のいかめしきにうちおどろきました。門をくぐつて、其の境內のひろきをおもしろしとおもひました。石だたみをわたること數百步、更に石段を上ること數十級、そこに、其の大きな廟が、高高と空に聳えてゐるのでした、長長と左右につらなつてゐるのでした。石段を上つて廟に入らんとする扉のところに、マホメダンのインド人が二人三人ゐて、わたくし共の靴に上靴を被せてくれました。ほのかなる燈火のひかりが廟のおくにをがまれました。

なにがしの王様をここに葬つたとやら、廟の眞中に据ゑられてある石の柩を先づ拜みました。上靴をかぶせてくれた人人が案內をしてくれましたので、其の怪しげなる英語に耳をかたむけつつ、廟のなかをあちこちと見てあるきました。メッカを說き、神の御名を讃ふる案內者は、やはり信仰に生きてゐる人たちでありませうか。やがて廟を立ち出でて、境內の廣い廣い石だたみのまん中に立ち、かさねて、月あかりに、黑く聳えた廟の屋根を仰ぎましたとき、その左右につらなれる石廊の長きを見わたしましたとき、インドはまことに詩の國だと考へたことでした。（牧野英一氏著「海を渡りて野をわたりて」）

刑法の權威たる牧野博士は、一面に於て、和歌をよくし、輕妙洒脫な隨筆をものし、また、かうした、うるはしい紀行文を書かれる。博士は、一九二五年十月二十七日、つつましやかな夫人同伴で歐

米の旅へ赴かれた。そして、歸朝せられてから「留守をしてくれた子供たちへ」として、この紀行文を上梓された。

學者らしい透徹さが、この紀行文をつらぬいてゐる。はじめに「ベナーレスからラクナウへ、アグラからデリーへ」と書出されてゐるが、その順序に從つて、この四つの町の見聞と感想を敍し、各町の最後には、「インドはまことに詩の國です。」「インドはまことに詩の國だと考へました。」「インドは詩の國にちがひありませぬ。」「インドは詩の國なるかな、とおもひました。」と少しづつ修辭をかへて述べてゐられる。そして、最後に、しめくくりとして詩人タゴールに及び、「インドは、げに、哲學も詩である詩の國であるのであります。」と結んでゐられる。他の場合でも、すべてこの行き方である。ちよつと見ると、旅行の順序に從つて漫然と筆を運んでゐるやうであるが、そこに、ちやんと一つの統一を求めてゐられる。この透徹した觀察と、みがかれた感覺とが、紀行文の素地でなければならぬ。さらに、博士の文は、つとめて假名をつかはれてゐるので、いかにもやはらかな感じがする。ことに、ほほゑましく感ぜられることは、インド人の牛飼が牛をむちうつのを、「すさまじきものにうち見なしつつ」などと、清少納言を二十世紀の、しかも、インドに活かされた點である。枕草子の「すさまじきもの」の段に「牛にくみたる牛飼」とある。刑法學者である博士は、また堂々たる國文學者であられる。さればこそ、かうした、うるはしい紀行文が生まれるのである。

九　水郷ヴェニス

ヴェニス行きの汽車の中で、二人の伊太利人と懇意になつた。一人は伯爵で英語を話し、一人は辯護士で佛語がうまい。兩人共獨逸が大嫌ひで、獨逸語は眞平御免といふ。獨逸のことを話しても首を振つていやがる。僕等に伊太利語を知つてゐるかと聞く。なんにも知らぬといふ。佛語は？　と問ふ。少し、ホンの少しと答へる。それなら伊太利旅行に不自由だらうと來たから、そんなに行く先き先きの言葉を心配してゐては、世界旅行はとても出來ぬぢやあないかといつてやつたら、なる程ねーと、感心してゐた。

併し、負け惜しみは、負け惜しみとして、言葉は知らぬより知つてる方がよい。そこで此の伯爵について伊太利語の速成教授をうけた。數字を教へて貰つた。買物用の言葉も習つた。ヴェニスのうまい料理屋の名も聞いた。名代の伊太利料理の名も覺えた。もうこれで大丈夫、さあ矢でも鐵砲でも持つてこいといふ元氣になる。

夜の十時半、ヴェニスに着いて停車場を出ると、すぐ前が運河(キャナル)で、集つてゐたゴンドラは爭つて客を乘せてスーッと行つてしまふ。停車場の人力車が客を乘せてパーッと四散するに似てゐる。折柄十六夜月が雲間を出て、水の都を明かるくして見せる。僕等もゴンドラの一に乘移つて、大運河(グランドキャナル)や、横町のキャナルをユラユラ揺られながら行く。家の戸口がみんな水に面してゐるが面白い。ゴンドラが行違へば、アー・エーと

船頭は合圖し合ふ。靜かなる櫂の音、幽かなる水の香。——幾度も話に聞かされたヴェニスの都、それに遂に來て、あこがれのゴンドラに乘つたかと思ふと、それだけで、もう嬉しくつてならない。

ホテルの部屋は、明かるく美しく、海に面して見晴らしがよい。昨夜の女中部屋とは比較にならない。朝風呂を浴びて、のんびりした氣持になつて、安樂椅子によつてゐると、有田君が聲高に案內記を讀上げる。

ヴェニスの家は槪ね杭の上に建てられたるものにして、その數一萬五千。周圍六哩半。島の數大小合はせて百十七。運河百五十。橋梁實に三百七十八を算す……。

では、そろりそろりと見物に出掛けよう。

ホテル前の河岸通には、無數のゴンドラが客を待つてゐる、又あちこちに往き來してゐる。カメラに納れるにはもつてこいの畫題だ。先づ評判のサン・アルコの廣場に足を運ぶ。日曜で澤山の人出だ。その人の群に交つて、無數の鳩が天使の象徵の如く、何の恐れ氣もなく、人の手にとまり、肩に來て乘つかかる。

（金子隆三氏著「父のおとづれ」）

金子隆三氏は大藏省の高官である。官命を帶びて世界を一周し、おとなしく留守をしてゐたお子さん達へ「父のおとづれ」として、この紀行文を上梓されたものである。輕妙な筆で全編が貫かれ、肩が凝らずに、愉快に讀過せしめられる、極めて手法のすぐれた紀行文である。もとより、人に見せようなどと構へてものしたのでなく、極めてのんびりと、自然に、旅の見聞・感想を筆にされたのであ

るが、それが却つて右の文例のやうに成功してゐるところを見ると、紀行文のコツは、いや他の文でも全くさうであるが、氣取らずに、自然に、氣持のままを表現するに限る。なまじつか、よい文を書かうなどと構へると、却つて見られないものになる。ここが現代文の現代文たる所以でなければならぬ。

一〇　婦人の眼に映つた巴里

巴里へ來て日本がちよつと健康に見える。何故だらう……各國から來たエトランゼ達もさう言ふかも知れない。

巴里は華やかに荒さみ過ぎてゐる。

日本では、ちよつと雨が降ると道が惡いのなんのと、變にグチをならべてゐたが、かう歩道がカッンカッンと身にこたへては一里も歩けばくたびれてしまふ。「さう巴里を惡く言ふものではない」さう言つて叱る巴里の日本人もゐるが、まるで自分を佛蘭西人だとでも思つてゐるのだらう。

ところで女のお化粧だが、こつちのお婆さんを一人日本へ連れて行つて銀座を歩かせたら、皆おばけだといつて笑ふだらう。頬紅が猿のやうで、唇は朱色、瞳をかこむ青いドウランを引いて、何の事はない、油繪

の道中だ。ただし、どこの國も若い女は美しいのだが、お化粧のめだたない、働いてゐる女はとても水々していい。巴里の働いてゐる女にどれだけの自覺があるのか、まだ日が淺くて分らないが、モンマルトンの下の新宿のやうな街を歩いてゐた時、夜店を出してゐる若い美しい女を見た。
あんな可愛い女ならば、ちよつと飾つてカフエーに男を探せばいいのに、と思ふくらゐ、ちよつと類なく良い顏であつた。
辻々の花屋には、カーネーション、すみれ、菊、ミモザなぞがとてもいま盛りだ。土が見られないせゐか、パッと咲出た花屋の色を見ると、せいせいとしていい氣持になる。
私は街を歩いても、古い建築物を見るのが樂しみだ。苔の生えたやうな古風な街並の水道の栓一ッにも何か刻んである。
冬の巴里も、住んでみればなつかしくなるだらう。だが、春の木の芽のふき出る巴里はさらにいいだらう、巴里が荒んでみえるのは夜が長いせゐかも知れない。
巴里は繪描きの來る街だ。文學者が來るにしても、言葉を本當に持たなければ、すぐ淋しくなるだらう。私の最初の友人デイモンドといふ巴里の女は、「貴女が段々好きになつて來て困る。甘い言葉を早く覺えてくれ」中々耳の裏のくすぐつたい事を言ふ。
こんな優しい女が居るのだもの、男達は巴里が面白いに違ひない。「そのうち、エッフェル塔へ連れて行つてやる」と言ふ。エッフェル塔に登つたつて面白くないだらうと言へば、「下から風が吹きあげて、いい氣持よ」巴里は輕いところだ。（林芙美子著「三等旅行記」）

清新なすつきりした筆である。さすがに女性だけあつて、先づお化粧のことが筆に上る。その他、すべて男性と觀點のちがふところが面白い。ちよいちよいと輕い皮肉が、垢ぬけのした筆の先から飛出て來るあたり、理智的な才媛のおもかげがしのばれる。

一一　ハイル、ヒットラー

彼の飛行機がこの廣場の上へ現れると、二十萬の大衆は一時に立上り、右手を高く天に突出して、

「ハイル！　ヒットラー！」

と叫んだ。聲は殷々として闇の虛空に震ふ。ヒットラーは機上より、下界に挨拶してゐるのだ。やがてその飛行機が着陸場の方に消えると、待つ程もなく、自動車の爆音轟々と場外に聞えて、彼が到着した。

と、一時に場內の燈火を消し、ただ一臺の探照燈を赤々と場の一隅に向くるよと見れば、闇の中に一臺の自動車あり、その運轉手臺にヒットラーが立つてゐる。

萬雷のやうな拍手に迎へられながら、ヒットラーは靜々と場內を一周し出した。自動車競走に使ふ板の床の上を、彼は觀客席に沿うて場內を一巡してゐるのだ。彼の車が過ぎると、その前に居る聽衆が總立ちになつて熱狂する。

爛々たる彼の雙眸は、探照燈の光をうけて光つた。その黄褐色の突撃隊の制服、黒の長靴、黒ネクタイ、さうして、栗色の髮、八字髯、政戰十年風霜に晒された赭顏。
それが靑年獨逸の偶像ヒットラーだ。
やがて高塔の上から、ヒットラーの聲が響き渡つてくる。
「獨逸民族の運命を決すべき政戰は、いま目睫の間にある。諸君はこの日、何事を決せんとする乎。」
それは幅のある太いベースの聲だ。南獨の柔かい發音は、その男性的な音聲と相俟つて耳に快き旋律を調べる。連日の政戰は、その咽を痛めて、嗄れたる聲に悲壯な哀音が籠つてゐる。
一句、一句、その幅の太い聲が、暗夜の空氣を押出してくる。それは全く聲が空氣をひた押しに押してゐるのだ、彼が兩手でこの大空の空氣をひた押しに押してゐるかのやうに。
「獨逸民族今日の窮乏を見よ！
六大洲に雄飛した獨逸の威容はどこにいつた！　いま何故に我等は全世界嘲笑侮蔑の的となつてゐるのだ。
それはヴェルサイユの條約以來、國を賣つた政治家の失敗のためだ！」
「さうだ！　さうだ！」さういふ聲がドッと起ると、滿場は總立ちになつて彼を喝采した。
「しかるに何事ぞ、この危急存亡の秋に當り、徒に紛々たる政爭を事として、國民國家の休戚を忘れ去らんとは！　今日の獨逸の憂は、外にあらずして內にある。三十の政黨に分れて爭ふ舊政黨・舊政治家の心術にある！
葬れ！　これら三十の舊政黨を葬れ！　彼等は獨逸を今日の窮狀に顚落せしめたる罪人である。

新しき獨逸よ立て！　獨逸民族よ團結せよ！　團結して一國一黨の國となり、この國難の獨逸を救へ！
この獨逸を救はんとする我々新政黨に政權を與へよ！　未だ一度も政界の習慣になじみたることなき無傷の我等青年獨逸黨に政權を與へよ！
我等をして中世獨逸の宗教情操により、古典獨逸の英雄情操により、新しき大獨逸を建設せしめよ！」
「さうだ、さうだ！全くさうだ！　ハイル、ヒットラー！」
二十萬民衆の歡呼は、雷のごとく震ふ。
闇の空氣が身震ひして躍進獨逸の興奮に搖れてゐる。
私は股々と我が耳に鳴るヒットラーの聲に聽きながら、遠い遠い祖國のことを考へてゐた。

（鶴見祐輔氏著「歐米大陸遊記」）

題材が題材である上に、書く人が書く人である。かうした機會と場面に、よくも鶴見氏が遭遇したものである。我々は、その場面の映畫を見るよりも、もつと鮮かな印象を此の文から受取る。かうした場面を寫すに、鶴見氏以上の適任者は、現代の日本には、さう多くはゐまい。

一二　沙翁の靈廟

私たちは、町の南端エーヴォン河の畔に在るといふホーリー、トリニティー寺院(チャーチ)を訪れた。古雅な朝の町は、ちやうど日本の宇治の町でも歩いてゐるやうな、靜かな、すがすがしい氣分であつた。やがて町が盡きて、綠の樹立やや深き間から、高く大空を衝くゴシックの尖塔を見た。此の時である、會堂の鐘が朝の空氣を振るはして響き出した。ああ其の美しき諧調!!　鐘はアルペジオ、スケールに似た音階をたどつて上つた。さうしてそれが幾度か繰返された。今度は三度の音をたがひ違ひに上つた。さうしてそれがまた幾度か繰返された。果は殆どあらゆる旋律が八つの調によつて自在に打出された。恍惚として私の耳は此の快き諧調に捕へられた。

鐘は止んだ。ちやうど其の頃私たちは寺院にたどり着いたのであつた。

しかし美しいものは鐘の音ばかりではなかつた。簡素な寺院と思つた其の內部は、まるで燦爛たる光彩そのものであつた。殊に中央の奥、內陣(チャンセル)の三方に輝く大窓の模樣硝子の華やかさ美しさ。此の小さな町の寺院としては少し贅澤過ぎると思はれたも道理、實にこれこそ世界的文豪の靈廟として、世界が此の寺を裝飾するのであつた。此の模樣硝子は總べてアメリカ人の寄贈に係るといふ。かのワシントン、アーヴィングの筆が大いに與つてゐるに相違ない。此の華麗な內陣(チャンセル)の聖壇のもと、左の鋪石の下に沙翁は眠つてゐるのだ。さ

うして之と並んで其の妻アン、ハサウェー、其の娘スーザン、ホール、娘の夫ホール博士、沙翁の孫女エリザベスの夫トマス、ナッシュ等、沙翁の一族が此處に屯してゐる。まことに、アーヴィングの言ふ如く、ホーリー、トリニティー、チャーチの堂宇は、沙翁の靈廟そのものであつた。左の壁間に安置する沙翁の胸像は、彼の死後間もなく、ジェラード、ジョンソンによつて作成されたものださうだ。（井上赳氏著「祖國を出でて」）

筆者井上赳氏は、文部省圖書監修官として、文章の標準を示すべき立場にある人である。本文の如きは、必ずしもさうした窮屈な責任感などにかられて書いたので無いことは勿論であるが、しかし、筆の運び方にせよ、文字や語句のつかひ方にせよ、句讀點や送假名の末にいたるまで、そつくりそのまま教科書に載せていい文である。つまり、どこまでも正しくそして整つてゐる文である。

一三　アメリカの紅葉

アメリカの紅葉は實に良い。しかし西洋人は東洋人のやうに紅葉を賞美しないものか、私はこれまで西洋人の話に紅葉の事を聞いたことが餘りない、また書いた物でも紅葉の事を讀んだことがない。尤もこれは詩の本などを餘り讀まないからかも知れない。

先年日本へ來たことのあるショットウェル博士がカーネーギー平和財團の部長をして居て、其の事務所が

ニューヨークにあるからニューヨークに住んで居る。學者といふものは大抵學者臭いところのあるものだけれどもショットウェル博士は少しもそんなところがなくて、如何にもあつさりして居るから、一見頗る平凡な人のやうに見えるが、流石にえらいと思つた。滿洲問題に對して國際聯盟が裁判官のやうな態度を取りはじめた時、ショットウェル博士は、こりや大變な失策をした、何とかしなければならぬと言うて、非常に當惑して居た。國際聯盟は武力的制裁力を持たない、其の國際聯盟が裁判官のやうな態度を取つて居ては、日本は決して言ふことを聽かぬに相違ないといふことに、すぐ氣がついたのであらう。

ショットウェル博士は、ニューヨークから汽車や自動車で三時間ばかりのキャット・キルといふ山に別莊を持つて居る。其の別莊へ招かれた。滿山悉く紅葉である。紅葉と言うても無論赤のみでなく、黄だのその他色々の色がまざつてゐる。實に綺麗である。色々の木が紅葉するのである。しかし、カナダが紅葉の名產地で、紅葉を國の紋所にして居る程の處であるから、其の地續きの米國に紅葉の多いのは當然である。

あちらでは紅葉と雪との時期が非常に密接して居る。カリフォルニヤからニューヨークへ行く途中、汽車から良い紅葉の山を大分見た。そして、ニューヨークへ着いたのは十月の初旬であつたが、間もなく雪が降つた。（尾崎行雄氏著「外遊斷想」）

詩人は詩を、學者は學問を、政治家は政治を見る。政治家尾崎氏は、アメリカの紅葉と題しても紅葉だけを筆に上せはしない。ショットウェル博士の政治的見識に言及される。結局、紀行文もまた、その人である。

第九章　書翰的文章

ここに、書翰的文章といふのは、普通にいふ手紙の文章のことである。古くから、支那で書翰とも書簡とも書かれてゐるが、ここでは書翰の文字を用ひる。書翰文はまた手紙と呼ばれる外に、書牘文とも、尺牘とも、尺素とも、書狀とも、書札とも、消息文とも、消息とも、通信文とも、日用文とも、その他さまざまに呼ばれてゐる。

さて、書翰文は、いつたい何のために書くかといふことから考へて行く。一口にいへば、書翰文は相手の人に會つて直接話をする代りに、文字で書きあらはすものである。だから、簡單な手紙の書出しに往々「舌代」などとも書かれることがある。佐々政一先生は、左の如く述べてゐられる。

書翰文は、若し面會する事が出來さへすれば、口上で述べたいのであるが、それが出來ない爲に、文字に記すといふのが普通である。（修辭法講話）

すなはち、相手の人と遠くはなれてゐるとか、電話の便がないとか、また、すぐそばにはゐるが、

聲を出しては工合がわるいとか、その他さまざまの事情で、その人に會つて話す代りに書くのが、いはゆる書翰文である。

書翰文を極く大まかに分類すると、實用的と非實用的との二種に分れる。實用的の方は、いはゆる業務的・事務的・公用的などの場合であり、非實用的の方は、いはゆる友誼的・趣味的・文學的などの場合である。

また、書翰文を發信者と受信者との間柄から區別すれば、個人と個人との間にとりかはされる所謂私信と、個人と團體との間にとりかはされるものとの二つの場合がある。

個人と個人との間の書翰文、たとへば、親子・兄弟・姉妹・親戚・朋友・知己などの間にとりかはされる書翰文は、「會つて話をする代り」といふ書翰文の本質を最もよく發揮するものといへる。もちろん、この場合でも實用的の用件だけのことも多い。たとへば、物を送つた通知とか、それを受取つた返事とか、何かを依頼するとか、注文するとか、祝儀・不祝儀の招待とか、その返事とか、さういふのは、唯用件だけを記すもの、いはば實用的・業務的のものである。しかし、遠く故郷をはなれてゐる息子や娘から、父母に宛てる手紙、最も敬愛する親友に自分の近況や心境を陳べるもの、親戚への御無沙汰わび、病氣見舞、時候伺ひ、旅行先からのたより、中には綿々たる情緒を訴へる戀文などは、非實用的・友誼的のものであつて、かうした個人間の書翰文は、書くものにとつても受取るものにとつても、最も嬉しいもの趣のあるものである。手紙といへば、いつも何かの依頼とか用件とか

だけでは、餘りに事務的で興が無すぎる。差出人の名前を見ただけて、「ああ、また例の無心か。」では、全くやりきれない。

個人と團體との間の書翰文は、たとへば、實用的のものでは、社員が會社へ出す缺勤屆、個人から官廳へ提出する諸屆書類、學校へ出す入退學願書の類、政府や議會への請願書だの建白書だの上表文などの類、また、官廳からの通牒や照會などの公用文等がそれであり、非實用的のものでは、新聞や雜誌などの上での、興味ある「何々だより」の類から、頗るてきびしい公開狀の類、さては、手紙の形式で書く評論や小説などの類がそれである。この方は、「會つて話をする代り」といふ書翰文の建前からすれば、いくらか遠ざかつてゐる、たとひ會ふことが出來ても、口上だけではならぬので、ちやんと一定の書式に從はねばならない規則がある。それは、諸屆書・諸願書・公用文などの類であるが、更に、非實用的なものすなはち「何々だより」や公開狀や評論や小説のやうなものは、殆ど一般の文章と性質を同じうし、唯、形式だけを書翰文に藉りたまでのものである。

さて、書翰文の書きかたであるが、それは、右に述べたやうな、いろいろの場合により、書く内容により、その長短により、受取る人との關係や受取る人の年齡や理解力により、決して一概に、「かくの如く書くべきものである。」と決定的にいへるものではない。長短といふことからだけいつても、例の「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥せ。」の如き短いものから、忠臣藏に於ける茶屋場の由良之助が緣の下までぶらさげる長いものまでである。隨つて、その書きぶりも、まさに千差萬別で

なければならぬ。

ただ、一般的に、すべての書翰文に通じて言へることは、

禮儀を失はず、感情を害せざるにはじまりて、人を動かすに終る。

といふ古來の金言である。さうして、特殊の書式などの定まつてゐない書翰文にあつては、その人に會つて話すといふ氣持のままで書けばよい。言葉遣などでも其の通りで、目上の人には、その人に會つてつかふ通りの言葉、同輩には同輩につかふ通りの言葉、目下の者に對しては目下の者につかふ通りの言葉をつかへばよい。特に、手紙の上だけで、變な調子の言葉をつかふなどは、もう時代後れであらう。だから、今の世に、候文などはもうよした方がよいのである。人によつては、候文でなければ禮儀に反する、口語はいはば不斷着のやうなもの、候文は禮服のやうなものだ、などと唱へる人もある。では、その人は、人に會つて丁寧な言葉をつかふ時に、果して候口調をつかふであらうか。「御許様には其の後御變りも無之候や、さて此のたび……。」まるで、狂言に出て來る太郎冠者の口調ではないか。口語で話して失禮でないものが、手紙の上では失禮になるなどといふことは、全く理由の無いことである。ただ、人の家を訪問すれば、誰でも、「今日は」とか「御免下さい」とかの挨拶をし、それからすぐに用件には入らず、時候の挨拶や御無沙汰詫などをし、さて用件を話して歸る時には、「左様なら」とか「失禮いたしました」とかの挨拶をする。さうして、それらの挨拶の言葉は、

實は必ずしもその言葉通りの內容をもつてゐるものではなく、單なる形式的な挨拶の言葉に過ぎない。別に惡いこともしないのに「御免下さい」といひ、大して失禮な振舞もしないのに「失禮いたしました」といふ。だから、かういふ單なる形式的の挨拶の言葉などは、手紙の上で昔から習慣になつてゐるところの「拜啓」とか「拜復」とか「早々」とか「敬具」などの言葉を、ただ形式的につかつてもいいと思ふ。だが、それすらも、親しい友達などには、つかはない方がいいくらゐである。親友の榮轉などを祝する手紙には、

おめでたう、大兄の今日あるは當然なことながら、今朝の新聞を見て、僕も家內もともに喜んだ。奥さんやお子さん達、それから鄕里の御老人なども、さぞかし喜んでゐられるだらう。何れ御出發までには、一晩ゆつくり語りたいと思ふが、とりあへずお祝まで。奥さんによろしく。

まあ、こんな風な工合に書くと思ふ。若し、これを

拜啓　おめでたう、……奥さんによろしく。敬具。

と、前と後に挨拶の言葉をつけたら、隨分變なものであらう。但し、さうした、うちとけた親友などでない場合には、「拜啓」も「敬具」もつけてよからうし、また、時には、候文の方が都合のよい場合すらあるから、一概にはいへない。何れ、さうした個々の具體的の問題は、具體的の文例について

述べることとする。
そこで、書翰文の書きかたの大綱を、まとめて左に掲げる。
第一に、どんな文でもさうであるが、とりわけて書翰文は、よく意味が分るやうに書かれてゐなければならぬ。何のことをいつてゐるのか分らないやうなのは、最も無意義な書翰文である。それゆゑに、受取る人の理解力に適應して、自分の言はうとするところを盡くすやうに心がけねばならぬ。隨つて、よく問題になることであるが、候文はとにかくとして、新しい口語文の書翰には、句讀點をうつた方がよい。句讀點が無ければ、幾樣にも意味のとれることがある、すなはち意味が曖昧になりがちだからである。西洋の書翰文などには、すべて句讀點が施されてゐる。
第二に、書く內容の性質と、受取る人の心情とを考へて、長短よろしきを得なければならぬ。ちよつとした用件などの場合に、前後にくどくどと、餘計なことを書立ててはならぬ。ことに、受取る人が多忙の身であることを知つたならば、要領よく用件だけを書いて送らないと、破つて捨てられてしまふかも知れない。しかし、鄕里の父母や兄弟や親戚などへ出す手紙には、唯用件だけ書いたのでは、少しもあたたかみがない。さういふ場合には、大部分を近況や心境の敍述に費し、用件は最後にちよつと簡明に記すといふ風にすることも必要である。
第三に、受取る人に對して氣持よく感ぜしめ、明瞭なまたは強い印象を與へて、先方を心から動かすやうに書かなければならぬ。これが、書翰文に於ける最も重要な點である。それには、修辭上の技

術とか手法とかも必要であるが、第一は、まごころをこめるといふことである。誠意によつて動かされざるものは未だこれあらざるなりで、誠意があれば、自然にそれが言葉の上にも力となつてあらはれ、文字の書きぶりなども亂雜な走り書きにもなるまい。隨つて、受取る方でも、何とはなしに氣持よく讀み、知らず識らず、その誠意に動かされるに相違ない。

先づ、書翰文の書きかたに於ける大綱は、右の三點である。

最後に、毛筆書きかペン書きか、日本紙の卷紙か洋紙の書翰箋かといふやうな問題について、少し述べて置く。候文を廢して口語文にしたいといふ我々の主張からすれば、もう毛筆で卷紙に書くなどといふことは、時代後れだと思ふ。西洋などでは、すべてペン書きであり、用紙も卷紙ではないが、別に失禮だと思ふ人もない。西洋と日本とでは習慣が違ふといふ人もあらうが、今日の日本人は、銀行員でも會社員でも八百屋の小僧でもすべてペンを使用してゐる。もう「矢立」の名さへ知らない青年が多くなつてゐる。手紙にだけ毛筆でなくてはならぬなどとなると、つい億劫になり筆不精になつて御無沙汰勝になる。中には、中味だけを洋紙の書翰箋にペンで書き、封筒だけを毛筆書きにする、いはば折衷式のやり方もあるが、何もそんなことにこだはる必要はないと思ふ。すべて一般的には、ペン書きが一番いいと思ふ。

但し、書翰文は一面に於ては一種の禮儀作法のやうな性質をもつてゐるから、どんな場合にでもペン書きとばかりは行かないことがある。たとへば、儀式的なお祝狀とか、長上の固くるしい氣むづか

しい人に出す手紙とか、非常に古典趣味の人に出す手紙などには、どうもペン書きでは工合の悪いことがある。向かふさまに、失禮な奴だと思はれたのでは、第一に書翰文の本質たる「禮儀を失はず、感情を害せざるにはじまりて、人を動かすに終る。」に反する、いはば手紙を書く目的を無にしてしまふ虞が十分にあるからである。これは、いはば過渡期の現象として、やむを得ない。なほ、巻紙の天地をどのくらゐ明けるとか、書出しは端から何センチはなし、終は幾センチ明けるとか、封筒にはどんな風に書くとか、その他のいろいろの作法などは、女學校の作法教科書などにも書いてあることだから、ここには省略する。

では、これより書翰的文章の具體的實例に入つて、さまざまの場合についての注意を述べることとする。

一　友誼的書翰文

ここには、肉親・親戚・師弟・朋友・知己などの間にとりかはされる、友情的・趣味的・文學的な書翰文例を掲げる。「拜啓」とか「敬具」とかのつかひ方、敬語のつかひ方、敬稱の書きかた、一般的な言葉のつかひ方などに注意して、文例を讀んで頂きたい。

夏目漱石より鬼村氏へ

此の間は御地の名産の昆布の砂糖づけを下さいましてありがたう御座います。をばさんに宜敷仰しやつて下さい。あなたの病氣はどうですか、胃擴張には運動がわるいやうに思ひますが醫者は何といひますか。虞美人草の縮刷を本屋から取寄せましたから一册上げます。是はよんでもつまりませんが、折角だから小包で送るのです。御養生を專一に願ひます。以上。

六月二十七日　　　　　　　　　夏目金之助

鬼村元成様

ああ號を書くのを忘れた、露塔でしたかね、失敬。それから習慣はどうでもいいが、自分より年上のものへ手紙をやる時には自分の號はかかないのが禮になつてゐます。ただし宛名のときは書くのが尊敬を表する事になるのです。併し今の世だから、實際はどつちでも構ひません。(漱石全集)

先輩または長上から、後輩へ宛てた手紙の一例である。全體の言葉遣から見て、極くうちとけた間柄でないことが分る。たとへば、「御地の名産の昆布の砂糖づけを下さいましてありがたう御座います。」といふやうな言葉遣でも分る。同じく漱石の手紙でも、和辻哲郎氏に與へた手紙などになると、「ちと御出掛けなさい」といふ風な言葉遣をしてゐるのである。

この手紙には、「拜啓」がなくて「以上」だけがある。「御養生を專一に願ひます」だけでは物足り

なく、そこへ「以上」と書いて、しめくくつたのであらう。それでよいと思ふ。

敬稱も「君」でなくて「樣」であり、自分の方も、ちやんと姓名を書いてゐる。極くうちとけた場合には、「敬稱」を「君」にし、自分の方は「金之助」と名前だけを書くが、この場合はさうでない。つまり、手紙は、その人との交友の深淺、心持のデリケートな差によつて、敬語も敬稱も文中の言葉づかひも、すべてかはつて來る。

この文例の追書が、書翰文に於ける敬稱について十分示してゐる如く、長上にやる手紙には、自分の號は書かないで、正しく姓と名とを記さねばならぬ。長上の場合に、自分の姓だけまたは名前だけを記すのは失禮に當ることになつてゐる。但し、肉親の長上には、姓を書かぬ。また、長上への敬稱としては、その人に號があるなら、「たとへば夏目漱石先生　侍史」といふ風に書くのがよい。

今左に、前後の挨拶・敬稱・脇附等の慣用語をならべて置く。

〔前〕　拜啓・拜呈（普通）。謹啓・肅啓（鄭重）。拜復（返事）。急啓・前略（急ぎ）。
父上樣・母上樣・御父上樣・御母上樣・兄上樣・おなつかしき姉上樣（呼びかけ、肉親）。山川先生（長上・師）。水村大兄・澤田學兄・針田兄・花村樣（友人）。

〔後〕　早々・草々・匆々・以上・不一（普通、急ぎ）。敬具・敬白・拜具・頓首・謹言（鄭重）。
失敬・さらば・ではさやうなら・さよなら（友人）。かしこ（女）。

〔敬稱〕　樣・殿・先生（長上、一般）。閣下（軍人、大臣）。國手（醫師）。畫伯（畫家）。詞兄（文人）。君・

兄・大兄・學兄（友人）。御中（團體）。
（脇附）侍史・御座右・虎皮下（長上）。親展・必親展・御直披・直披（封書、秘密）。平信・御共展・御共披（封書、非秘密）。家扶御中・執事御中（華族）。御許に・御前に・御あたりに（女）。猊下（僧侶）。

父より子供へ

けさ御前たちから呉れた手紙をよみました。三人とも御父さまの事を心ぱいして呉れて嬉しく思ひます。この間はわざ〳〵修善寺まで見舞に來てくれてありがたう。びやうきで口がきけなかつたから、御前たちの顏を見ただけです。

此の頃は大分よくなりました。今に東京へ歸つたら、みんなであそびませう。

御母樣も丈夫でここに御出でです。

るすのうちは、おとなしく御祖母樣さまのいふことをきかなくてはいけません。

三人とも學校がはじまつたら、べんきやうするんですよ。

御父樣は此の手紙をあふむけにねてゐて萬年ふででかきました。

からだがつかれて長い御返事が書けません。

御祖母さまや、おふささんや、お梅さんや、淸によろしく。

今ここに野上さんや小宮さんが來てゐます。

東京へついでのあつた時、修善寺のおみやげをみなさんに送つてあげます。

左樣なら。

（漱石全集）

夏目漱石が病氣で修善寺へ轉地してゐた時、東京の留守宅のお子さん達に宛てた手紙である。原文は、「びよう氣」「あそびましよう」といふ風に、わざと發音通りに、よみやすく書いてある。「萬年ふで」なども、お子さんたちに分りやすくといふつもりであらう。その他、假名を多くつかつて、すべてお子さんたちの理解に適するやうにと力めてゐる。書翰文は、如何なる場合でも、先方の理解力に適應するやうに書くべきである。

娘より父母へ

東京の皆さんお元氣ですか。父さんも母さんも、姉さんのお家でも、お祖母さんもおかはりありませんか。菊の盛りも過ぎた今頃は南澤ももう段々寒くなるし、また私のゐないことも何となく寂しく思つてゐて下さるでせう。寒くなるとまた母さんのお腹（なか）に障ることが心配です。どうか無理をしないやうにお願ひします。毎晩おそくお歸りの日がつゞくと、どうしても疲れますから、父さんも母さんも日のある中に家へ歸つていらつしやれるやうにと、夕方になると祈つてをります。消費組合（おみせ）の方（かた）たちも一生懸命のあまり無理をしてしまはないやうに、私ももう少し落ちついたら、心に浮かぶ計畫をお送り出來るやうになるでせう。どうか皆さんの送つた出張員がよい勉强の出來るやうに助けて下さいませ。

早いものです。今朝はもう四日目の朝を迎へました。その間のことを一つ一つ、その時私は隨分悲しく思

つた、この時から考へたとお知らせしたいのですけれど、そんなことをしてゐたら、短い秋の日はすぐたつてしまひます。大事な勉强が出來なくなります。

この二三日は、まだ慣れない生活と言葉に不安を感じながら、はじめて知り合ふ人々の中に、いろいろな印象をうけて生活をしてゐると申し上げたならば、一番適切でせうか。

これから日記のやうにして毎日の生活をお知らせしたら、段々はつきり分つていただけることと思ひます。先づはじめに登場人物を御紹介しておきます。（以下略）

（オックスフォード滯在中の羽仁惠子氏より、東京の父母、即ち羽仁もと子氏御夫婦へ宛てた手紙、「羽仁もと子著作集」）

婦人の手紙だからとて、「かうでしたわ」とか「さうなのよ」とかいふやうな言葉は、手紙の上では餘りつかはない方がよいと思ふ。この手紙などは、讀んでゐて少しもうはつちやうしなところのない、いかにもしつかりした感じを與へてゐる。若い婦人の學ぶべき點である。

國木田獨歩より小杉未醒氏へ

概して僕の經過は佳良の方だ。殊に昨今の天候は大いに病人に利あり。けれども散歩が出來ぬのが何より不快である。散歩するとすぐに熱が出る。

要するに當分廢人だ、死ねば瓦礫だ。

昨今松魚の漁があるので、やたらに食つてゐる。四五日前に餘り多量に貪つたので酔はされた。しかし平氣で其の後も食つてゐるが實にうまい。そして安い。食ふたびに、さしみずきの田山にたらふく食はして、ウマイウマイと例の口調で言はしてみたいと思ふ。

酒は殆どやめた。ウマクなくなつた、飲みたいと思はなくなつた、其の代りメシの量が少しふえた。この現象を主觀すれば病人には喜ばしい事だと感ずる。客觀すれば人間が意氣地がなくなつて安ッぽくなつたやうに思はれる。先づ杯を擧げて別乾坤に忘我する能はず、イキなり箸を握つてめしをぱくつくのは現金すぎてイヤな氣がする。僕も健康恢復の曉は希くは美酒に醉はん哉と思つて居る。併し瓦礫になつても仕方もねエだ。

何しろ天候も定まり加減だ。君も氣のクシヤ／＼する事があるだらう、僕もイラ／＼することもある、けれど此の美なる秋晴の面に免じて根性を横着に持たうではないか、いはゆる樂天家になりませうよ。以上。

（獨歩書簡）

中年の男同士の手紙は、こんな風な言葉遣になるのが自然である。但し、「この現象を主觀すれば」「客觀すれば」などは、當時の一種の流行語なのであらう。今日の言葉ではない。中年の男同士の手紙に、いや、他の場合でもさうであるが、妙な最上級な空虚な言葉をつかふのは禁物である。たとへば、「おお大兄よ……僕は感激の涙をこぼした」などといふのがそれで、かうした空な言葉をつかはれると、貰つた方で失望してしまふ。感激してもいいが、その内容を具體的な言葉で活かすやうに工

夫しなくてはならぬ。

高山樗牛より姉崎氏へ

五月十四日から同二十日に亙つた君の精神に充ちた手紙を、二十四日の他の手紙並に葉書、タイムス週報と併せて一昨日受取つた。即日にも、又昨日にも返事を書きたかつたが、此の頃は梅雨期の最中で、健康の少からず衰へた爲、氣力が沮喪して幾度か机に向かつて遂に筆を執りかねた。今夜は力めて書くが、許して吳れ、ドーモ長く書く譯には行かぬ。君の精神に充ちた手紙に應ふべき僕の感情の十一をも現すことが出來ぬ。吳れ吳れも殘念ではあるがドーカ赦して吳れ。

ショペンハウエル・ニイチエ・ワグネル、此の三人の間の關係を論じた君の文によりて、僕は此の三人間の關係其のものを知ることよりも、君の精神の要求の那邊にあるかを知る處に僕は少からず幸福を感ずる。此の事に就いては、僕は君に滿幅の敬意を捧げねばならぬ。恐らくは、僕は尙ニイチエの理想に彷徨する者であらう。愛の福音に應へ得る迄には、尙多少の曲折を經ねばならぬのであらう。此の事は僕の中心の慚愧で、又同時に懺悔である。此の間の僕の精神狀態は、他日精しく君に打明けたいと思うてゐる。日蓮に對する君の批評も、大いに僕を啓く所がある。併しながら國家と宗教との關係については、君の日蓮觀には、多少の不備がある樣だ。丁度此の事を明後日發行する太陽紙上に、僕はザット書いて置いたから、自然君の手に屆いたら是非一讀して吳れ。僕は日蓮に於て其の信念の爲に國家をも犧牲にする偉大なるイゴイストを觀た。今日の道學先生的倫理說に勝へざる僕の大なる安慰は、此の人の此の特質に現れた。是の如くにして安

立し得らるべくんば、天下他に何物を要せざる如く感ぜらるるのが、僕の目下の病であらうも知れぬ。ワグネルに就いては僕も少し研究してみたい。近日井上さんの處から借受けることにしよう。

君の今度の論文は、先度のよりもインハルトが多い樣に僕は思ふ。……

土井からは度々書面や書物を貰つたが、トント無沙汰をして居る。何も病氣を楯にするではないが、不快な日には一日茫然として何事もせずに、陰鬱な考をとりとめもなくたどりつゝ暮すこともある。同君も健康になつたか、肺などに故障があつたら何事を措いても心配せねばならぬ。願くは僕の友人間の肺病は、僕一人で負擔したいものだ。これは恐らくは訛傳ではあらうが、僕はドーモ氣になる、先日……新歸朝者の談に、姉崎は肺が惡い樣だと話したと僕に告げた。そんな事は無論噓だらうが、先年キールで肋膜然たる風邪など引いた事もあれば、此の點はドーカ十二分に注意して呉れ。

僕の寫眞をよこせと言はるるが、僕も送りたいは山々だ。唯ドーモ此の痩せに衰へた面貌を、遠方にゐる君に送るに忍びないのだ、ドーカもう少し肥つてからと毎々思つて居るが、其の肥りが中々來ない。僕の此の心根を憐と思つて呉れ。僕が此の儘に死んだら、君の送別に丁酉會連と一所に撮つたのが、君の僕に對する永遠の想像となるであらう。其の方が僕は願はしい。但し此の秋にでもなつたら、君に送り得べき寫眞も撮れるかもしれぬと、僕はひそかに願つて居る。

日本では、今年程雨の多い年はない。四月花の頃から天氣の續いたことは極めて少い、實に不愉快な年であつた。僕の家には二百坪ばかり地面がある（家を合はせて）。其の中に小さい花壇を拵へて、草花などを植ゑて樂しんでゐる。これで平和な樂しみが得らるるか如何か、今尙試驗中だ。先日、土井が花の種を送つ

て呉れたので、兩三日前早速蒔いた。今日はもう出さうなものと、其の翌日から小兒の樣にノゾイて居る。

此の地には、語るべき友は田中智學氏の外には一人もない。氏の門弟の一人は、如何いふ因緣かヒドク僕を慕つて、朝夕病氣回復の祈禱を僕の爲にして呉れて居る。田中氏は扇ヶ谷の奧に居る、相見ることも一月に一度位で、日々寂寞な生活をしてゐる。山水の風景も餘り面白くない。ドーモ淸見潟のあたりが思ひ出される。

社會も別に變つた事もない、學界も別に變つた事もない。ダルマパーラが先達田中氏を訪うて當地に來たので、氏の依賴で一日接待してやつた。……

太陽の文章でも見らるる通りに、近來僕の意氣が少からず衰へたことを自覺する。會心の文章などはトント書けない、强ひて文を賣るの已むを得ざる境遇を僕は悲しむ。

此の頃メレヂスキーの Death of Gods を讀んで、少からず面白く感ぜられた。ヘレニスムとクリスチアニスムの爭は永久のものであらう。

別紙は土井に序に屆けて呉れ。

七月三日　　　　林　次　郞

ロンドンなる

潮　風　兄

（樗牛全集）

樗牛の書いた論文や其の他の文章には、一種の氣取つた美文めいたところがあつて、餘り敬服され

ないが、かうした友情の發露――眞情の吐露になつて來ると、まさに天下一品である。これほどの友情が今の世に多くあらうか。友人達の肺病は自分一人で引受けたいとまで言つてゐる。その純眞さと、あくまで精神的精進をめざして生きょうとする強い精神力は、近世稀に見るところである。その精神力が、いはばまごころが、かうした書翰文をなさしめたのである。だから、書翰文の要諦は、一にまごころにある。さうして、そのまごころをあらはす爲には、自分自身のことばをつかはなくては駄目だ。「拜啓陳者」では、まごころのあらはれる筈がない。

夏目漱石より芥川・久米兩氏へ

此の手紙をもう一本君等に上げます。君等の手紙があまりに潑剌としてゐるので、不精の僕ももう一度君等に向かつて何か言ひたくなつたのです。いはば君等の若々しい靑春の氣が、老人の僕を若返らせたのです。今日は木曜です。併し午後（今三時半）には誰も來ません。例の瀧田樗陰君は木曜日を安息日と自稱して必ず金太郎に似た顏を僕の書齋にあらはすのですが、その先生も今日は缺席するといつてわざわざ斷つて來ました。そこで相變らず蟬の聲の中で他から賴まれた原稿を讀んだり手紙を書いたりしてゐます。昨日作つた詩に手を入れて見ました。「癲狂院の中より」といふ色々な狂人を書き分けたものだといふ原稿を讀ませられました。中々思ひつきを書く人があるものです。
芥川君の俳句は月並ぢやありません。もつとも久米君のやうな立體俳句を作る人から見たら何うか知りま

せんが、我々十八世紀派はあれで結構だと思ひます。其の代り畫は久米君の方がうまいですね。久米君の繪のうまいには驚いた。あの三枚のうちの一枚（夕陽の景？）のは大變うまい。成程あれなら三宅恒方さんの繪をくさす筈です。くさしても構はないから、僕にいつか書いて與れませんか。（本當にいふのです。）同時に君がたは東洋の繪（ことに支那の畫）に興味を有つてゐないやうだが、どうも不思議ですね。そちらの方面へも少し色眼を使つて御覽になつたら如何ですか、其所には又そこで滿更でないのもちよい〳〵ありますよ、僕が保證して上げます。

僕は此の間福田半香（華山の弟子）といふ人の三幅對を如何はしい古道具で見て大變旨いと思つて、爺さんに價を訊いたら五百圓だと答へたので、大いに立腹しました。是は繪に五百圓の價がないといふのではありません。爺なるものが僕に手の出せないやうな價を言つて、忠實に半香を鑑賞し得る僕を吹飛ばしたからであります。僕は仕方なしに高いなあと言つて、店を出てしまひましたが、其の時心のうちでそんならおれにも覺悟があると言ひました。其の覺悟といふのを一寸披露します。笑つちやいけません。おれにおれの好きな繪を買はせないなら、已むを得ない。おれ自身で其の好きな繪と同程度のものをかいてそれを掛けて置く、と斯ういふのです。それが實現された日にはあの達磨などは眼裏の一翳です。到底芥川君のラルブルなどに追ひつかれる譯のものではないのですから、御用心なさい。

君方は能く本を讀むから感心です。しかもそれを輕蔑し得るために讀むんだから偉い。（ひやかすのぢやありません、賞めてゐるんです）。僕思ふに日露戰爭で軍人が露西亞に勝つた以上、文人も何時迄恐露病に罹つてうんうん蒼い顏をしてゐるべき次第のものぢやない。僕は此の氣餒をもう餘程前から持廻つてゐるが、

君等を惱ませるのは今回を以て嚆矢とするんだから、一遍丈は默つて聞いてお置きなさい。

本を讀んで面白いのがあつたら敎へて下さい。さうして後で僕に貸して吳れ給へ。僕は近頃めちやめちやで昔讀んだ本さへ忘れてゐる。此の間芥川君がダヌンチオのフレームオブライフの話をして傑作だと言つた時、僕はそんな本は知らないと申し上げたが其の後何時も坐つてゐる机の後にある本箱を一寸振返つて見たら、其所に其の本がちやんとあるので驚いちまひました。たしかに讀んだに相違ないのだが何が書いてあるかもうすつかり忘れてしまつた。出して見たら或は鉛筆で評が書いてあるかも知れないが面倒だから其の儘にしてゐます。

きのふ雜誌を見たらショウの書いた新しいドラマの事が出てゐました。是はとても倫敦で興行出來ない性質のものださうです。グレゴリー夫人の勢力ですら、ダブリンの劇場で跳ねつけたといふ猛烈のもので、無論私の刊行物で數奇者の手に渡つてゐる丈なのです。兵隊がV・C・を貰つて色々なうそを並べ立てて景氣よく應募兵を煽動してあるく所などが諷してあるのです。ショウといふ男は一寸いたづらものですな。

一寸筆を休めて是から何を書かうかと考へてみたが、のべつに書けばいくらでも書けさうですが、書いた所で自慢にもならないから、此所いらで切上げます、まだ何かいひ殘した事があるやうだけれども。

ああさうだ、さうだ。芥川君の作物の事だ。大變神經を惱ませてゐるやうに久米君も自分も書いて來たが、それは請合ひます。君の作物はちやんと手腕がきまつてゐるのです。決してある程度以下には書かうとしても書けないからです。久米君の方は好いものを書く代りに時としては、どつかり落ちないとも限らないやうに思へますが、君の方はそんな譯のあり得ない作風ですから大丈夫です。此の豫言が的中するかしないかは

もう一週間もすると分ります。的中したら僕に禮をお言ひなさい。外れたら僕があやまります。

牛になる事はどうしても必要です。我々はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。僕のやうな老獪なものでも、只今牛と馬とつがつて孕めることあるあひの子位な程度のものです。

あせつてはいけません。頭を惡くしてはいけません。根氣づくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか與へて呉れません。うん／＼死ぬ迄押すのです。それ丈です。決して相手を拵へてそれを押しちやいけません。相手はいくらでも後から後から出て來ます。さうして我々を惱ませます。牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです、文士を押すのではありません。

八月二十四日　　夏目金之助

芥川龍之介樣

久米正雄樣

君方が避暑中もう手紙を上げないかも知れません。君方も返事の事は氣にしないで構ひません。（漱石全集）

書翰文は、受取る相手の心情や境遇を考へて長短よろしきを得なければならない。相手が外國へ留學してゐるとか、または避暑に行つてゐるとか、溫泉へ行つてゐるとかいふやうな場合には、樗牛が姉崎氏へ送つた手紙やまたこの文例のやうに長いものになつてよいわけである。この文例は、いかにも眞情のこもつた手紙で、かうした手紙を貰ふことの出來た人達の幸福を、つくづく羨ましいと思ふ。

そして、やつぱり候文では、このあたたかみが出て來ないと思ふ。

大町桂月より登張竹風氏へ

先夜は、松本道別と共に、不意に襲擊申上げ、大いに失禮致候。いろいろ御馳走に預り難有御禮申上候。さても其夜、梅花香底、朧月の下、兄と手を分ちて大森驛に參り候ひしが、間もなく、上り汽車有之、品川驛まで參りて下車いたし候。嚢中、なほ醉を買ふに足るの阿堵物有之、これが所謂梯子酒にや、何處かで今一つ飲んで行かうと、品川の遊廓に入り申候。東京通の道別がここと指さす料理屋は既に戸ざしたり。漸く一軒の牛肉屋のまだ店をひらき居れるを見出して、それに、はいり申候。酒肉を運び來れる女に向かひ、これから行かうと思ふが、不案内也。一番別嬪の多き處は何處ぞと、心にもあらぬことをいへば、へ……、お歸りでせうとて取りあはず、道別の顏をじろりと見て、背いて袖を口にして去る。小生は胡麻鹽頭、道別は禿げあたま、三十代の男を五十以上と見て、いけすかない、老爺のくせにと思ひしなるべしと、二人にて微笑いたし候。二本目の酒未だ盡きざるに、電車がなくなりさうに候へば、あはや、上野行の最終の電車が、今出むとする處、急いで乘りて、銀座の尾張町まで參り、道別と別れて、小生のみ下り申候。されど夜既に一時近く、新宿行の電車は、最早無之候。まゝよ、歩かむ。數寄屋橋を入り、日比谷公園に沿ひ、櫻田門を過ぎ麴町の通を經て四ッ谷見附にいたるまで、凡そ一里の路、都の中央ともいふべき處、人の氣全く絶えて、ただ電燈・瓦斯燈が光るのみにて、恰も空山に入りたる心地いたし候。都も夜半は仙境に候。

四ッ谷見附を出候ふ時、はじめて、人に逢ひ申候。卽ち、「鍋燒うどん」に候。外濠の水、凝つて流れず、

土手に連れる老松、音を立てず、天地も眠れる眞夜中に、「鍋燒うどん」と長く引く聲、きけば、何となく詩的に候。四ッ谷通に參り候へば、一品料理の中より、一人の男出で來り、やがて、横道へそれ申候。なほ二三の一品料理を見うけ申候。これは晝間見うけぬ處、夜に入りて、露店を張り申すにて候。新宿に近づけば、蕎麥屋は、多くまだ起きて居り申候。女郎屋も、まだ店をひらける處有之、出る人もあれば、入る人も有之、草木も眠る丑三の空、ここのみはなほ人間が活動いたし居り候。とかく、人間は、肉慾の動物、夜半ここの色の巷のみが生氣あるを見るにつけても、この頃、自然派の名に託して肉慾を描くもの多きも、さる事と一笑いたし候。新宿の色の巷をはなれ候へば、大久保一村唯犬の聲のみいたし候。午前三時過ぎ、やつと家にかへり申候。

先夜の事、書いても差支なしと、御快諾ありしまゝ、「大森の一夜」として、讀賣新聞の日曜附錄に出し候ひしが、定めて御覽のことと存候。されど、ただ夫語り妻彈くでは世或は令閨樣のお里を疑ふべく、それでは令閨樣にお氣の毒と存じ、「夫人としては珍しき事」、「家にありし日、母に習ふ」など言ひて、良家の女なることを書きあらはしたるは、聊か苦心の存する處と、御看取下されたく候。

福田琴月に話し申候處、同行せざりしを殘念がり申候。御承知にも候はんが、琴月は大阪の人、本場じこみの喉自慢、是非、兄の喉をききたし、大和太夫も聽きたしと申居り候間、小生が嚮導となりて、また、いつ襲擊申上ぐるかも計られず。御用心あれ。

白河鯉洋は、また、我等仲間の笊碁の集會を催したしと申居り候。我等仲間の笊碁にては、ともかくも、兄と小生とが兩大關、樗牛もし世にあらば、兄は、或は關脇に落ちむか。斯く申すが御不服に候はば、いざ

一日の閑を偸みて、雌雄を決し申さむ。鯉洋・健堂・醒雪などは、二目もしくは三目は弱く候へども、さまで、段ちがひには候はず。浮世を離れたる十二社の茶亭あたりにて、一會催さむと存申候。檄を飛ばさむ日、請ふ、必ず出馬せよ。急々如律令。(桂月書翰)

候文も、これほどにこなせるなら結構である。輕妙にして洒脱、飄逸にして風雅、桂月の候文は全く獨得の妙味を持つてゐる。但し、素人が眞似ると、虎を描いて狗に類する處あり、妄りに學ぶべからず。

大町桂月より岡田良平氏へ

拜啓仕候　拜顏の榮を得ざることを幾んど二十年、今日忽ち尊翰に接して、目のあたり御謦咳に接するの心地致申候。

淺學非才の身、文藝委員會の委員に御推擧下され候事、此上も無き光榮に存じ奉り候。唯恐れ候ふは、同委員の職責如何を存ぜず、隨つて微力果して能く其任に堪ふるや否やを知らざるの一事に有之候。甚だ御手數に候へど此儀尊諭を煩はしたく願上候。右取敢ず御返事迄此の如くに御座候。謹言。(桂月書翰)

大町桂月より三宅雪嶺氏へ

拜啓仕候　昨日は、文藝講演會へ御出馬下され難有御禮申上候。

先生の御文章も御演說も力ありて沈痛、敬服に堪へず、唯虎を描いて狗に類するを恐れて、妄りに學ばざるのみ。御令閨には、紙上にて御目にかかること十餘年。過日參上いたしし節、はじめて實際にお目にかかり候へども、夕にほのめく三日月の見えしかと思へば、やがて、見えずなりて、言葉をかはす間もなく、名殘惜しう存候ひき。

取りあへず手紙を以て御禮申上候。頓首。(桂月書翰)

大町桂月より佐々醒雪氏へ

雨に暮れ候ひし春哉。新綠今や人に可也。知らず、御近況如何。文章世界に於ける文豪傳、大いに面白く、東亞新聞に於ける戀愛史も面白く拜讀仕候。聞く、酒は相變らずお盛なりと。小生事近來、胃の方は、だいぶよくなりて、酒の方は、弱くなり申候。飮んで面白く、飮まずとも面白きの域に達しかけ申候。自らおもへらく、これ活氣なくなりたるに非ず、酒の上に超脫したるなりと。知らず、御高見如何に候や。

一つまた御賴有之、來る十日(日曜)午後零時半より例の和强樂堂にて、第二十四回目文藝講演會を相催候間、御都合よろしく候はば、御出馬下されまじくや、御願申上候。廣告の都合有之候間、御都合の如何、御一報を煩はしたく候。(桂月書翰)

岡田良平氏――三宅雪嶺氏――佐々醒雪氏と、三段に亙つて謹嚴さの程度に差異がある。この文例は、極めて謹嚴な目上の人へ、普通の目上の人へ、同輩へ、この三段に亙る書翰文の好適例であらう。

さうして、文部大臣とか文部次官とかいふやうな、いかめしい人には、右の文例のやうな態度の候文が最もふさはしいと思ふ。但し、口語文を主張されるやうな、ものの分つた大臣や次官の場合は、此の限りでない。

與謝野晶子氏より津輕の友へ

啓上、お寒き折柄に候。東京さへ是程なるに、まして津輕の北風は如何ならんと想ひまゐらせ候。皆樣、お變りも入らせられず候や、伺ひ上げ候。いつもながら、其日其日の忙しさに取りまぎれ本意なき御無沙汰になり申候。おわび申し上げ候。わたくしの方は、みな健かに候。市内に住みし頃、よく風を引き候藤子も、郊外へ移り參りてより、全く生まれ變りしほど達者になり申し候。やはり空氣の宜しきと、日光によく當るゆゑと存じ喜びをり候。

さて、このたびは、また例年の如く、見事なる林檎を、遙々と澤山にお遣はし下され、かたじけなく存じ申し候。書齋・食堂・二階の床の間、いづこにも美しき光と香とを滿たし候へば、俄に福分の多き身の上の心地致し申し候。幾重にもおん禮申し上げ候。

これにつけても、お二人樣はじめ、御地の皆樣を、おんなつかしく思ひまゐらせ候。安田秀次郎樣いまさぬ世となりても、今一度まゐりて、林檎の赤らむ廣き丘より、入日の中の岩木山を望みたく、また皆樣と、秋の長夜のお物語致したく候。

既に立蔀など多ごもりの御用意遊ばし、爐に親しみ給ふおん頃と、お噂申しをり候。もう雪が降りて候や。
さぞさぞ、おんいぶせくおはしまし候ふべし。御機嫌よく入らせられ候ふやう、皆様のおん上を祈り上げ候。
おついでに、坂本・工藤両先生へも、わたくしども夫婦の敬意を、よろしくお傳へ下され度く候。拜具。

（與謝野晶子氏著「女子新作文講話」）

婦人の書翰文に於ける候文の例として掲げる。一般に候文の送假名には、桂月の文例の如く、「御願申上候」といふ風に假名を送らないのが慣例であるが、婦人の候文などには、この文例のやうに、「おわび申し上げ候」といふ風に假名を送ると、やはらかみが出て來る。ついでに、「候ふ」なる動詞の送假名であるが、終止形および連體形の時には、「喜びをり候」「風を引き候藤子も」の如く假名を送らないのが例になつてゐる。下に「間」「處」などの接續詞の來る時も「候間」「候處」といふ風に假名を送らないのが習慣である。他の未然形や連用形や已然形や命令形には假名を送る。たとへば、「候はず」「候ひて」「候へば」「候へ」の如くなる。また、德川時代から「候得共」などと書いて來たが、これだけは止めたいものである。「候へども」と書くべきである。候文には、右のやうな特殊の慣例もあり、また「被下度候」「可有之候」「奉願上候」といふやうな鷲式の漢文めいたところなどもあり、「候」の字一つのつかひ方で、文が活きたり死んだりする。昔の寺子屋敎育などでは、そんなところにのみ力を注いだのであつたが、黒船の渡來以後、日本人も大分めざめて來て、昭和の今日で

は、もう候文なんかやめようといふやうになつて來たのである。

病氣見舞

暫くお便りを伺ひませんので、どうなさいましたことかと案じて居りました處、今朝ほど高岡さんからあなたが御病氣で房州の方へ御轉地になつたと承つて、ほんたうに驚きました。

いつか御伺ひいたしました時には多少御氣分がお勝れにならないやうにもお見受け致しましたけれど、御轉地になる程とは存じませず、それにそんなお話を少しも伺ひませんでしたので、全く突然でびつくり致しました。どうか大したことでなければと案じて居ります。申し上げるまでもなく御病氣中は何事もお忘れになつて、養生專一に遊ばしますやう、殊に氣丈なあなたのことゆゑ、さぞお氣を揉んでいらつしやるでせうが、病は氣からといふこともあり、くれぐれ御無理をなさらずに、どうぞお氣ながに御靜養遊ばしますやう、ひたすらお願ひいたします。

別送のレコード二枚今日銀座まで出向きました序に、あなたのお好きな西洋音樂の新譜をさがしてみました。少し賑やかではございますが、お氣晴らしにおかけ下さいましたら幸ひと存じます。

これから追々と暖かに向かひますので、御病氣のためにもお宜しいのではないかと存じます。どうぞあなたらしい御元氣を出して、一日も早く御全快、御歸京なさいますやうお待ち申し上げます。

御母樣も御一所に御附添のよし、どうぞよろしくお傳へ下さいませ。

ではくれぐれも御大切に。(婦人倶樂部より)

その人に會つて話すとほりの態度で言葉をつかつてゐる。書翰文は、まさにかくあらねばならぬ。

九條武子より瀨下夫人に

思はぬ日數を重ねましたが、昨夕歸りました。その後いかが？　この間は、手術後はじめての御手紙ありがたう。大層しつかり書けていらしたので、嬉しく安心しました。ほんとに苦しかつたでせうとも――。よく我慢していらつしやいました。すつかりなほつたら、どんなに快い日があなたを待つてゐるでせう。いろいろお話承りましたが、ほんとにあなたは時機を失はれなかつた事が、第一御しあはせだつたと思ひます。私もほつと安心しました。しかし、あとの快復も氣長に思つていらつしやいませ、決して氣を短く持たないで。絲ももう拔けました由、きつと一日々々、一時間々々々、よくなつてゆくのです。あなた自身で有仰るとほり、全く運のつよい方、それはあなたの親しい者が、心からおまもりしてたのでせう。神や佛は目にみえずとも、自分の心そのものの中に、そのお力はこもるものなのです。あなたが、大きな運命の前に虛心平氣な覺悟をなさつた、そして、先生や親しい者のすべてを信じて、あの冷たい臺の上に上られたその御氣持が、私には想像されます。そして信の尊さは勇士の心、又、つつましい聖女の心とも思へるではありませんか。私からお送りしました物、心より喜んで下さつて、私こそ嬉しく思つてをります。おもかつたか、どうかと、あとで心配してゐました。もつと、かはいい柄があればいいのに、何分えらむひまもなく、ただそこにあつたのをいひつけまして、心足らぬ思がします。

一度は御見舞申したくは存じますものゝ、いろいろな用事が、待つてたとばかりに私を苦しめて居ります

ので、とても思ふ時間が得られません。けれども、もう少しよくおなりになつてからの方がいいかも知れません、却つてお疲れになつてはいけませんから。十七日から二十七日迄、貧しき人達の爲に診療班が出ますので、私もその方に、毎日午後から夜にかけて働きにまゐります。さうかうしてゐる間にお正月――。あなたも受難の峠を越して、たとひ病院の中でも、いいお正月をお迎へなさいませ。

御退院の日が來たならば、知らせて下さい。

無憂華のこと、喜んで下さいまして、おやさしきお心をありがたくいただきました。知らない人達の御親切を、私はしみ〴〵この頃感謝してをります、こんなに讀んでいただけるとは、全く思ひもよらなかつたことですから。あの中で、あなたの御心に觸れることもあらば、どんなにか嬉しいでせう。では御大切になさいませ。

十二月十三日夕　　　　　　　　　武　子

倭文子様

けふの（?）讀賣に、あなたの民謠が出てゐました。大層いいと思ひました。（九條武子夫人書簡集）

婦人の書翰文では九條武子夫人の文を以て第一となす、といはれてゐる通り、武子夫人の書翰は、どれをとつてみても、實にあたたかい慈愛に滿ちたもの、禮儀正しいもの、品格のそなはつたものばかりである。ここにあげた文例の如き、病める人に對して、あふるるばかりの同情と慰藉の念に滿ち、そして、會つて語るままの自然な表現法をとつてゐる。「ほんとに苦しかつたでせうとも!――。」と

いふ言葉のごとき、ほんの一例であるが、特に注意して味ふべき言葉である。もしこれが、「ほんとに苦しかつたでせうね。」となつては、もう空虚な感が伴なふ。ことに、かうした長い手紙を病後の人に送つた武子夫人は、この手紙を更に紙に包んで、「御氣分のいい時あけて下さい」と記されてあつたさうである。

弔慰の口語文

謹啓　御父上樣には御手厚き御看護の甲斐も無く遂に御逝去遊ばされました由誠に驚き入りました。御高齡とは申しながら平素至つて御丈夫でいらせられましたのに、俄の御訃音に接しまして、つくづく人の世の無常を感じさせられます。さぞかし皆々樣御力落しの御事と御愁傷の程深く御察し申し上げます。早速參上いたすべき筈で御座いますが、何分遠方のこととて思ふにまかせません。甚だ略儀では御座いますが書中を以て御弔詞申し上げます。

爲替にて誠に失禮で御座いますが、心ばかりの御香料、何か御生前御好みの御品に御換へ下され御靈前に御供へ下さいますやう御願ひ申し上げます。

先づは取急ぎおくやみまで。あら〱かしこ。

月　日　　　　立花芳子

木村柳二郎樣

弔慰の候文

謹啓　御尊父様には御手厚き御看護の甲斐も無く遂に御長逝遊ばされ候由唯々驚入申候

御高齢とは申しながら平素至つて御淸健に渡らせられ候ひしに俄の御訃音に接しつくづく人生の無常を痛感致候と共にさぞかし皆々様御悲歎の御事と拝察し奉候

早速拝趨可仕筈に御座候へ共何分遠方の事とて意にまかせず御會葬の禮をも缺き候儀惡しからず御諒恕被下度候

爲替にて失禮ながら御香料拝送仕候間御生前御好みの品に換へさせられ御靈前に御供へ被下度願上候

先は取急ぎ御弔詞申上度如斯に御座候　かしこ

月　日　　　　立花芳子

木村柳二郎様

弔慰といふやうな、特別にあらたまつた場合には、時に𧘕𧘔をつけた候文の方がよいこともあるので、ここに二つ並べて掲げてみた。

しかし、口語文の方でも、さう大して失禮にも當らないやうである。その二つの文例を、どうか讀みくらべてみて頂きたい。

石川啄木の年賀狀

謹賀新年

もう間もなく我々が交際を始めた一週年記念日が來る。この一年の間に、君が病中の僕に對してそそいでくれた友情が、友のすくない僕にとつてどれだけ貴いものであつたかは、君も知つてゐてくれるだらう。僕はそれを年をとるまで忘れたくないと思ふ。

どうか今年はいい事が澤山あつてくれ――君のためにも、さうして僕のためにも。

一九一二年元旦　　石川一

土岐善麿樣

謹賀新年

とうとう去年は病氣のうちに送つてしまひました。隨つて御無沙汰ばかりで何とも濟みません。寒いのがよくないやうですから、春暖の頃までは多分かうして行火(あんくわ)に寢てゐなくてはならないだらうと思つてゐます。

四十五年元旦　　石川一

金田一(きんだいち)京助樣

年賀狀なども、一般の人には、「謹賀新年」だけでよからうが、親友などに對しては、右の文例の

やうに、心のこもつたことばがあつて欲しいものである。右の文例で注意したいことは、たつた一年間の交際である土岐氏に對しては、あの通りうちとけた言葉づかひをしてゐるに反し、同鄕の友人で、しかも十數年來の友人である金田一氏に對しては、やゝ丁寧な言葉づかひをしてゐることである。かういふことは誰にでもあることで、その人柄によつて、すぐに心からうちとけられる人と、なつかしく思ひ敬愛してはゐるが、どことなく、うちとけた言葉のつかひにくい人とがあるものである。さうして、手紙の上には、その心持のまゝの言葉が出て來る。それが自然なのである。

信州の姪に年始狀（主婦より）

お揃ひ御機げんよう新しい年を御迎へなされた御喜を申し上げます。いつぞやは細々の御たよりを戴きましたのに、御返事も上げず、失禮致しました。お芽出たいやうな御便りでありましたが、ほんとに此の上めでたさはありません。どうか身體を大事にして、可愛い赤ちやんを御生みなさい。

その後毎日日記をつけてお出でなさうですが、御心掛うれしう存じます。どうかいつまでも〳〵御つづけなさいまし。いつか信州に旅行でもしました時、その蜜のやうに甘さうな日記を見せて貰ふのが何よりの御馳走らしう思はれます。赤ちやんが生まれても、どうか古い女にならずに、新しきにお進みなさい。私共の日記は去年公にした半農生活といふ小さい本に五六日分載せました。いつか見て戴きませう。△△叔父さんも遂におかくれになりました、お驚きなされたでせう。早い遲いの別こそあれ、御互にいつかは斯く成り果

てろのです。せめて此の世にある中は、淸い樂しい生活を送つて、靜かに「おさらば」を告げたいと思ひます。御互に丈夫で幸福に長生を致しませう。おむつまじき只今の御生活まことにうれしう存じます。長へに幸多かれと祈り上げます。さらば。（五十嵐力氏著「我が書翰」）

目上の婦人から目下の婦人へ宛てた年賀狀の一例である。目下の人に對して、「あなた」といつたものか「お前」といつたものか、「そのもと」か「そもじ」か——といふやうな代名詞については、手紙を書く時に誰も苦心するものであるが、出來ることなら、全然代名詞をつかはない方がよいのである。この文例には、代名詞がひとつもつかつてない。さすがに修辭學者の文である。

ついでに、一般の年賀狀であるが、印刷のものは、餘りごたごたと長くない方がよい。「謹賀新年」「恭賀新年」「賀正」「明けましておめでたうございます」「謹んで新年のおよろこびを申し上げます」といつたやうなもの、または、それに和歌か俳句の一つも入れるといふやうなものであつて欲しい。同じ市町村內ならば名刺を持つて行くだけなのだから、名刺のかはりに、極く簡單な文句であつて欲しい。何しろ何百枚も何千枚も元旦の朝投込まれるのである。ごたごたと六號活字などで組まれたものなどを讀ませられたんでは、折角の屠蘇機嫌も醒めてしまふ。中には、年賀狀を宣傳や廣告につかはうとする拔目のないのもあるが、お正月だといふのに餘りにせちからすぎる。また、一年中の御無沙汰を一枚の葉書に印刷で濟まさうとして、前の年の一年間の主なる出來事を報告的に羅列したのな

どもある。律儀的な點には敬意を表するが、貰つた方では大抵讀まないのが普通である。

但し、「石川啄木の年賀狀」「信州の姪に年始狀」の如く、親友や親戚への年賀狀などは、右の文例のやうに、あたたかみのあるものであつて欲しい。

二　實用的書翰文

ここには、個人と個人との間にとりかはされる用件本位の書翰文例を掲げる。たとへば、招待・案內・通知・挨拶・禮狀・紹介・依賴等である。それらは、前にも述べた如く、出來るだけ簡明に要領よく、しかも禮儀をうしなはないといふ點に注意して書けばよい。

結婚披露の招待

謹啓　愈〻御淸祥の段御慶び申上げます。陳者今般海軍中將川島武治殿御夫妻の御媒酌に依り鶴吉長男一太郎と龜三次女松子と婚緣相整ひましたに就き右御披露旁〻粗餐を差上げたう存じますから、御多用中誠に恐入りますが、來る七月十七日（土曜）午後五時東京會館まで御來臨の榮を賜はりたく此段御案內申上げます。

敬　具。

昭和十年七月吉日

松野鶴吉
梅山龜三

石部金吉殿
同　令夫人

追て御手數ながら御來否來る十三日までに御一報願上げます

祝賀會の案内

拜啓　豫て同窓會誌上にて御承知のことと存じますが、來る十日（日曜）午前十時より母校校庭に於て、平田先生御在職滿二十五年祝賀會を催し、同先生及び御家族を御招待申上げます。何卒御繰合せの上御臨席下さるやう御願致します。敬具。

年　月　日

平田先生在職二十五年祝賀會委員

杉野平太殿

送別會の案内

拜啓　益〻御清榮の御事とお喜び申上げます。扨今般白石梧平君には新京大學教授として御榮轉されることになりました。就ては同君の行を壯にする爲、來る十五日（金曜）午後五時より文藝會館に於て送別會を催したいと存じます。是非貴兄の御出席を希望致します。會費三圓、當日頂戴致します。匆々。

月　日

世話人　大野源藏

滋賀寛

古内太郎樣

謝恩會の案内

此度私どもが目出度本校卒業の榮譽を荷なひましたことは偏に校長先生を始め諸先生の御懇篤なる御薫陶と御親切なる御指導との賜に外ならぬことと深く感謝致します。就きましては聊か謝恩の微意を表する爲來る二十三日午後五時寄宿舎食堂に於て粗餐を差上げたう御座います。御繰合せ御臨席下さいますれば光榮の至りに存じます。

三月十九日

卒業生一同

德野たか子先生

法會の案内

拜啓　來る六日午後四時より亡父の三回忌法會を相營みたく、御多用中誠に恐入りますが、御繰合せ御光來を願ひます。

月　日

小川太郎

中山小二郎殿

葬祭の通知

祖父德二郎儀豫て病氣の處藥石効なく今十七日午前八時死去致しましたから御通知申上げます。
追て來る二十日午後三時より四時まで自宅に於て告別式を相營みます。

五月十七日

孫　何　誰

親戚　何　誰

何　某　殿

葬祭の通知

父赤坂五郎儀今朝五時三十分死去致しましたから此段御通知申上げます。
追て來る五日午後一時より二時まで青山齋場に於て葬儀を相營みます。

八月二日

嗣子　何　誰

男　何　誰

親戚　何　誰

總代　何　誰

友人　何　誰

總代　何　誰

何某殿

辯護士開業の通知

謹啓　寒氣嚴しき折柄益〻御淸安の御事と御悦び申上げます。扨小生これまで久しく判事を奉職して居りましたが、此度辭職の上來る二月一日より左記肩書の處にて辯護士の業務に從事致すことに相成りました。就きましては將來一層御厚誼を賜はりたく、右御通知を兼ねて御依賴申上げます。敬白。

一月二十五日

東京市麴町區七番町七番地　猪又法律事務所

法學士
辯護士　猪又耕作

山口勝二殿

會費徵收の通知

拜啓　益〻御健勝のことと存じます。陳者本會々費は自今半年毎に金壹圓五拾錢宛申受けることに改め、集金郵便に委託して徵集することに決めました。右御承認を願ひます。尙本年度上半期は來る五月中旬中に申受ける筈ですから、前以て申上げて置きます。

追て右會費は御不在の折でも御渡し下さるやうに御願します。

四月十五日

迷朗會會計部

金野梨造殿

定期總會の通知

拜啓　來る七月二十五日午前九時より本社樓上に於て昭和十年度上半期決算報告其他別紙記載議案に就き株主總會を開きますから、何卒御繰合せ御臨席下さる樣願上げます。萬一御不參の場合には御手數ながら封中の委任狀へ夫々御記入御捺印の上右期日前に本社へ御送附を願ひます。敬具。

七月十五日

大日本家畜株式會社

翠野深作殿

暇乞の挨拶

拜啓　先夜は小生の爲盛大なる送別の宴を御催し下され且又有益なる御鞭撻の辭を賜はり誠に有難く厚く御禮申上げます。愈〻來る二十七日午後九時東京驛出發、新京に赴任致します。就ては出發前御暇乞に參上致すべき筈でありますが、何かと準備に追はれてゐますので、略儀ながら書中で御挨拶申上げます。匆々。

五月二十四日

白石梧平

古内太郎樣

入隊の挨拶

拜啓　私事此度一年志願兵として左記の聯隊に入營致しました。在營中は自然御無沙汰勝になることと存じ

ますが、何卒悪しからず御思召を願ひます。草々。

十二月五日

歩兵第四十五聯隊第三中隊第二班

荒尾岩吉

天道公平殿

赴任の挨拶

拜啓　新綠の候貴臺益々御健勝の御事と拜察致し御慶び申上げます。さて私事東京高等師範學校並東京文理科大學在學中は種々御懇篤なる御指導御鞭撻を賜はりまして誠に有難うございました。御蔭をもつて今春無事卒業致し本月初より何縣何中學校に奉職することになりました。今後は一身を捧げて國家教育の大業に專心從事する覺悟でございますが、淺學菲才、子弟教育の大任に堪へ得るや否やを危ぶんでゐる次第でございます。何卒今後共倍舊の御指導と御鞭撻とを賜はりますやう伏して願上げます。

先づは右取敢へず御禮旁々御挨拶申上げます。敬具。

昭和十年四月

吉田松男

大山平八郎樣

記念品の禮狀

拜啓　貴會在職中は格別の功績もなく、誠に汗顏の至りに存じます。唯幸に大過なきを得ましたのは、全く皆様の御援助御指導の結果に外ならぬことと深く感謝致します。然るに此度特に御鄭重なる御挨拶と共に高貴なる記念品を御贈與下さいまして誠に恐縮に堪へません。折角の御厚意を御辭退申上げては却つて失禮と存じ、有難く頂戴仕り永く家寶と致します。失禮ながら書中を以て厚く御禮申述べます。敬具。

月　日　　　　　　　　　　　　　　　　中村豐之助

財團法人　大日本武德會　御中

見送の禮狀

本日英國へ出發の際は御多用中態々御見送下さいまして誠に有りがたう御座います。略儀ながら書中を以て厚く御禮申上げます。

月　日　　　　　　　　　　　　　　　　杉村廣次郎

高松晉作殿

寄附金の禮狀

謹啓　今般本會の趣旨に御賛同下され、事業費中に金五百圓を御寄附下さいまして御厚志誠に有難う御座い

ます。本會は永く御芳名を記錄に留め、尙事業の進行に就ては時々御報告申上げる筈で御座います。先づは右取敢へず御禮のみ申述べます。敬具。

年　月　日

大日本防火會會長

男爵　梶　野　仲　郎

眞仁喜德太殿

當選の禮狀

謹啓　今回の總選擧に際し不肖淺學菲才をも顧みず、衆議院議員として立候補いたしましたところ、幸に最高位を以て當選の榮を得ましたことは、偏に貴下及び同志諸君の熱誠なる御援助の賜に外ならず、玆に衷心より厚く御禮申上げます。尙今後共一層の御厚誼を賜はりますやう御願致します。敬白。

年　月　日

犬　飼　現　八　郎

里見小文吾殿

會葬の禮狀

祖父德二郎葬儀の際は御多用中態々御會葬下され且又御鄭重なる御供物まで賜はり、誠に感謝の至に堪へません。略儀ながら書中を以て御禮申上げます。

年　月　日

孫　中　川　德　五　郎

本田五九郎殿

弔問の禮狀

父五郎死去の節は早速御懇篤なる御弔詞を賜はり、誠に有りがたう御座いました。右取敢へず書中で御禮申述べます。

年　月　日　　　嗣子　赤　坂　泰　助

茅　野　三　平　殿

贈物の禮狀

大江君、見事の鯛をありがたう。

新著の前途と、著者と出版者の前途を祝して、目出鯛の馳走に今日は舌鼓をうたう。先づは御禮まで。

三月一日　　　德　富　健　次　郎

大　江　保　吉　樣

同鄕人の紹介

拜啓　其後は御無沙汰いたしました。御變りもありませんか。御多用中とは存じますが、小生同鄕の友人猪村廣吉君を御紹介申上げます。同君は獨力を以て「經濟發展」といふ雜誌を經營してみますが、その雜誌に

何か貴兄のお話を掲載させて頂きたい由、御忙しいところ誠に恐縮ですが、どうか一寸でも御引見下さる樣御願致します。

月　日　　　　大杵節介

保田善二郎樣

社員の紹介

弊店社員東條清次を御紹介申上げます。御多用中恐入りますが、取引上の件に就き御高見を御示し下さるやう御依頼致します。

月　日　　　　石黒五兵衞

天野太吉樣

求職者の紹介

拜啓　過日御社に於て社員若干名御增員の由聞及びました。就ては小生同鄕の矢國辰藏と申す者を御推薦申上げたいと存じます。同人は至極眞面目な性質で御社の御方針に叶ふ人物と信じます。別紙履歷書を封入しますから、何卒御銓衡の上御採用下さいますれば誠に幸甚に存じます。敬具。

月　日　　　　佐々木邦雄

大日本勇敢會巷談社社長

野田精二樣

保證人の依頼

拜啓　其後は御無音に打過ぎ誠に申譯ございません。皆々樣御變りもございませんか。扨此度同郷の友人の次男で石部金助と申すもの、東京帝國大學法學部に入學致しましたが、生憎御地に知人がないさうですから是非貴兄に保證人を御依頼申上げたいと存じます。當人は至極堅實な人物で在學中御迷惑を掛けるやうな事は萬々あるまいと信じますから、何卒枉げて御聞濟み下さるやう御願申上げます。匆々。

四月二日　　頼母木敬三

田鹿庄治兄

就職の依頼

大變御無沙汰致しました。貴兄益々意氣おさかんで御活動のこと、毎月の××誌上で拜見致し羨ましく思つてゐます。ところで僕の方ですが、今度愈々退職することに決心いたしました。どうも四十やそこらで後進の爲に勇退しなければならないなどは、妙な話であり、一面からは自分の無能を證明するやうなわけでお恥づかしい次第です。實は縣の方で今すぐにもやめろといつたわけではないのですが、某々氏等の例を考へても、老いぼれて仕事の出來なくなつた時にやめたのではどうにもならぬと考へたので愈々決心したわけです。そこで一つ捲土重來とでもいふか、新規蒔直しとでもいふか、とにかく、全く素裸體になつて、一つ大いに

何かやつてみたいと思ふのです。取敢へず近々上京するつもりですが、上京してもすぐに、僕のめざす仕事に手をつけられるかどうか疑はしいものだと思つてゐます。で、その間何か僕に出來さうな仕事がありましたら、どうかお手傳させて頂けませんか、若し貴兄のところで手が餘つてゐるやうでしたら、どこか他の方面を御周旋願ひたいのですが――まことに恐縮ながら、平素の御懇意に甘え、取敢へず書中で御願申上げます。

月　日　　　　　　　　　　只野凡平

小丸太郎賢臺

まだこの外に、注文の手紙とかそのほかいろいろあるだらうと思ふが、實用的書翰文例はこのくらゐで切上げる。

最後にちよつと、かうした書翰文の送假名法について述べておきたい。普通の文にあつては、「此の」「其の」「願ひ上げ」「申し上げ」「恐れ入り」といふ風に送るべきであるが、かうした實用向きの書翰文に於ては、「此度」「其後」「願上げ」「申上げ」「恐入り」といふ風に、多少送假名を省略していいと思ふ。この文例は、主として、文部省編纂の「口語文用例集」によつて示したものであり、送假名や文體なども大體それに從つたものである。

三　公用的書翰文

ここには、屆書・願書・證書・通牒・照會・回答などの、いはゆる公用文の例を、文部省編纂の「口語文用例集」の中から引用する。

缺勤屆

本日病氣ノ爲缺勤シマスカラ、御屆致シマス。

年　月　日　　　　何　誰　㊞

、、、、、殿

忌服屆

本日母方ノ伯父ガ死去シマシタノデ、定規ノ忌服ヲ受ケマスカラ、御屆申上ゲマス。

年　月　日　　　　何　誰　㊞

、、、、、殿

出發屆

本日福岡縣下へ向カツテ出發シマスカラ御屆申シマス。

何　誰　㊞

年　月　日

、、、、、殿

外國渡航屆

何年何月何日北米合衆國ニューヨークへ出發致シマスカラ、御屆シマス。

本　籍

住所　族籍　職業

何　誰　㊞

生年月日

年　月　日

何市區長　何某殿

轉寄留屆

何府縣郡市町村番地戸主某

長男　平民　何　誰

右ハ是マデ何市區町番地何某方ニ同居寄留シテ居マシタガ、何年何月何日カラ何市區町番地何某方ヘ同居寄留換ヲシマシタカラ御屆致シマス。

年　月　日

寄留者　何　誰　㊞

何市區町番地　家主（差配人）何　誰　㊞

何市區長　何某殿

轉地療養願

病氣療養ノ爲來ル七日カラ向カフ二週間神奈川縣下湯河原地方ヘ轉地シタイト思ヒマスカラ御許シ下サイ、別紙醫師ノ診斷書ヲ添ヘテ御願シマス。

年　月　日

何　誰　㊞

、、、、、殿

辭職願

病氣ノ爲（家事上ノ都合デ）辭職シタイト思ヒマスカラ、許可ヲ願ヒマス。

年　月　日

何　某　㊞

、、、、、、殿

入學願書

師範學校中學校高等女學校教員志望デスカラ、御試驗ノ上入學御許可相成ルヤウ、別紙履歴書身體檢査書學業成績書ヲ添ヘテ御願申上ゲマス。

何道廳府縣何郡市町村番地戸主或ハ何某何男女等
道廳府縣華士族平民

年　月　日（第一志望何科何部
第二志望何科何部ト朱書スルコト）

何　誰　㊞
生年月日

何高等師範學校長　何某殿

在學證書

宿所
本籍族（戸主デナケレバ何某男或ハ弟等）

何　誰
生年月日

右ノ者在學中ノ一切ノ事件ハ私（ドモ）ガ御引受致シマス。
今後私（ドモ）ガ住所ヲ移轉シ、又ハ印章ヲ改メタ節ハ速ニ御屆ケ致シマス。

宿所
本籍族
保證人　何　誰㊞
生年月日

年　月　日

某大學某學部長　何某殿

前記保證人何某ハ成年者デ、何某ノ父（其ノ他ノ續柄）デアリマス。

某市區町村長　何　誰㊞

前記保證人何某ハ成年者デ、東京市內ニ土地（又ハ家屋）ヲ所有シテ居リマス。

某區長　何　誰㊞

推擧書

何　誰
生年月日

右ノ者ハ本校ノ卒業者デ、師範學校中學校高等女學校ノ敎員ヲ志望シテ居リマス。學力品行共ニ適當ノ者ト認メマスカラ、別紙本人ノ履歷書身體檢査書學業成績書及ビ人物考定書ヲ添ヘテ推擧致シマス。

年　月　日

何學校長　何　誰㊞

何高等師範學校長　何某殿

委任狀

何市町丁目番地何某ヲ拙者ノ代理トシテ左記ノ權限ヲ委任シマス。

一、何々（委任事項ヲ記載スルコト）

二、何々（同上）

年　月　日

何市町丁目番地

何　誰　㊞

近視豫防ニ關スル件

近視ノ豫防ニ就イテ、此ノ度文部大臣カラ地方長官ニ對シテ別紙ノ通リ訓令サレマシタカラ、貴校デモ訓令ノ趣意ニ基イテ、各注意事項ヲ御斟酌ノ上然ルベク御措置ナサル樣命ニ依ッテ通牒シマス。

年　月　日

次　官

各直轄學校長宛

外國旅券送附ノ件

外國旅券

右送附シマスカラ、本人ヘ御渡シ下サイ。尙歸朝ノ上ハ直ニ返戻スル樣ニ御取計ヲ願ヒマス。

年　月　日

秘書課長

地方長官宛

直轄學校長宛

財團法人設立ニ關スル件

貴管下何某カラ何々財團法人設立ノ件ニ關シテ提出シタ申請書ガ貴廳經由濟ニナッテ居リマスカラ廻附シマス。一應御調査ノ上意見ヲ具シテ御進達ヲ願ヒマス。

報告督促ニ關スル件

何月何日第何號デ何々ノ件ニ關シテ照會シテ置キマシタガ、未ダ御回答ガナイノデ處理上ニ差支ヘマスカラ、至急御回報相成ル樣重ネテ照會致シマス。

以上の如きが、いはゆる公用的の書翰文であり、昔は、多くは候文の形式をとつてゐたが、大正十年四月、文部省に於て、右の如くに口語體の形式に改めることを一般官民に奬勵する意味で、「口語文用例集」として出版したものである。そして、凡例の一節に、「口語文ニ於テモ、句讀ト濁點ヲ施スコトハ、必ズ忘レナイ樣ニシタイモノデアル。」と記してある。すべて、公用文なども候文を廢して、右のやうに口語文に改めるのがよいのである。左に、候文と口語文のと同趣旨の公用文を並べて

みる。

今般何某官命ニ依リ別紙取調表之通海外ヘ出張可致候ニ付外國旅劵御交付相成度別紙寫眞二葉相添ヘ此段及御照會候也

今般何某ガ官命ニ依ッテ別紙ノ豫定デ海外ニ出張シマスカラ、外國旅劵ヲ御渡シ下サル樣寫眞二葉ヲ添ヘテ照會致シマス。

口語文だからとて、別に文字の數が多くもならないし、句讀點や送假名まで入つて、意味が明瞭になるのである。「出張可致候」とか「及御照會候也」とかいふ、支那人にも分らないやうな、東鑑式の漢文などは、もう昭和の聖代には引込んでよい代物ではなからうか。

四　書翰文の形式をとれる文

ここには、書翰文の形式を藉りて、何事かを一般社會に呼びかける文章の例として、正岡子規の「歌よみに與ふる書」と芥川龍之介の「或舊友へ送る手記」とを掲げる。前者は明治三十一年のもの

で候文であり、後者は昭和二年のもので口語文である。

歌よみに與ふる書

先輩崇拜といふことは何れの社會にも有之候。それも年長者に對し元勳に相當の敬意を盡くすの意ならば至當の事なれども、それと同時に何かは知らず、其の人の力量技術を崇拜するに至りては愚の至りに御座候。田舍の者などは御歌所といへば、えらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの樣に考へ、隨つて其の人の歌と聞けば讀まぬうちから、はやよきものと定め居るなどありうちの事にて、生も昔は其の仲間の一人にて候ひき。今より追想すれば、赤面する程の事に候。御歌所とてえらい人が集まる筈も無く、御歌所長とて必ずしも第一流の人がすわるにもあらざるべく候。今日は歌よみなる者皆無の時なれども、それでも、御歌所連より上手なる歌よみならば民間に可有之候。田舍の者が元勳を崇拜し大臣をえらい者に思ひ政治上の力量も識見も元勳大臣が一番に位する者と迷信致候結果新聞記者などが大臣を誹ると見て「いくら新聞屋が法螺吹いたとて、大臣は親任官、新聞屋は素寒貧、月と泥鼈程の違ひだ」などと罵り申候。少し眼のある者は元勳がどれ位無能力かといふ事大臣は廻り持にて新聞記者より大臣に上りし實例ある事位は承知致し說き聞かせ候へども田舍の先生は一向無頓着にて不相變元勳崇拜なるも腹立たしき譯に候。あれ程民間にてやかましくいふ政治の上猶然りとすれば今迄隱居したる歌社會に老人崇拜の田舍者多きも怪しむに足らねども此の老人崇拜の弊を改めねば歌は進歩不可致候。歌は平等無差別なり、歌の上に老少も貴賤も無之候。歌よまんとする少年あらば老人杯にかまはず勝手に歌を詠むが善かるべしと御傳言可被下候。明治の漢詩壇

が振るひたるは老人そつちのけにして靑年の詩人が出たる故に候。俳句の觀を改めたるも月並連に構はず思ふ通りを述べたる結果に外ならず候。

緣語を多く用ふるは和歌の弊なり、緣語も場合によりては善けれど普通には緣語かけ合はせなどあれば、それがために歌の趣を損ずる者に候。よし言ひおほせたるとて此の種の美は美の中の下等なる者と存候。無闇に緣語を入れたがる歌よみは無闇に駄洒落を並べたがる半可通と同じく、御當人は大得意なれども側より見れば品の惡しき事夥しく候。緣語に巧みを弄せんよりは眞率に言ひながしたるが餘程上品に相見え申候。

歌といふといつでも言葉の論が出るには困り候。歌では「ぼたん」とは言はず「ふかみぐさ」と詠むが正當なりとか、此の詞は斯うは言はず必ず斯うといふしきたりの者ぞなど言はるる人有之候へども、それは根本に於て旣に愚考とは異なり居候。愚考は古人のいうた通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く唯々自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。故に俗語を用ひたる方其の美感を現すに適せりと思はゞ雅語を捨てて俗語を用ひ可申、又古來のしきたりの通りに詠むことも有之候へども是はしきたりなるが故に其を守りたるにては無之、其の方が美を現すに適せるがために之を用ひたる迄に候。古人のしきたりなど申せども其の古人は自分が新に用ひたるぞ多く候べき。

牡丹と深見草との區別を申さんに生等には深見草といふよりも牡丹といふ方が牡丹の幻影早く著しく現れ申候。且「ぼたん」といふ音の方が强くして實際の牡丹の花の大きく凛としたる所によく副ひ申候。故に客觀的に牡丹の美を現さんとすれば牡丹と讀むが善き場合多かるべく候。

新奇なる事を詠めといふと、汽車・鐵道などいふ所謂文明の機械を持出す人あれど大いに料簡が間違ひ居

り候。文明の機械は多く無風流なる者にて歌に入り難く候へども、若しこれを詠まんとならば他に趣味ある者を配合するの外無之候。それを何の配合物もなく「レールの上に風が吹く」などとやられては殺風景の極に候。せめてはレールの傍に草が咲いて居るとか、又は汽車の過ぎた後で罌粟が散るとか薄がそよぐとか言ふやうに他物を配合すればいくらか見よくなるべく候。又殺風景なる者は遠望する方宜しく候。茶の花の向かふに汽車が見ゆるとか、夏草の野末を汽車が走るとかするが如きも殺風景を消す一手段かと存候。いろ〳〵言ひたきまゝ取集めて申上候。猶他日詳かに申上ぐる機會も可有之候。以上。(子規全集)

和歌に關する自己の意見を、一般の讀者に向かつて述べてゐるのであつて、書翰文の形式を藉りた普通の文である。子規は、普通には俳句の革新者として知られてゐるが、實は今日の歌壇のもとを拓いたのは實に正岡子規である。子規から伊藤左千夫、それよりアララギ派へと展開したものであつて、子規の歌壇革新の功績は沒すべからざるものである。それはとにかくとして、右の文例の如きは、候文としても極めて流暢なまた清新なものであつて、その表現的手法は、今日でも眞似てよいものと思ふ。

或舊友へ送る手記

誰もまだ自殺者自身の心理をありのまゝ書いたものはない。それは自殺者の自尊心やあるひは彼自身に對する心理的興味の不足によるものであらう。僕は君に送る最後の手紙の中にはつきりこの心理を傳へたいと

思つて居る。もつとも僕の自殺する動機は特に君に傳へずともよい。レニエは彼の短篇の中に或自殺者を描いて居る。この短篇の主人公は何のために自殺するかを彼自身も知つて居ない。君は新聞の三面記事のうちに生活難とか病苦とか、或は又精神的苦痛とか、種々の自殺の動機を發見するであらう。併し僕の經驗によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機にいたる道程を示して居るだけである。自殺者は大抵はレニエの描いた樣に何のために自殺するかを知らないであらう。それは我々の行爲する樣に複雜な動機を含んで居る。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の將來に對する唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出來ないであらう。併し十年間の僕の經驗は僕に近い人人の僕に近い境遇に居ない限り僕の言葉は風の中の歌の樣に消えることを敎へて居る。隨つて僕は君を咎めない。……

僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた。僕のしみじみした心理になつてマイレンデルを讀んだのもこの間である。マイレンデルは抽象的の言葉に巧みに死に向かふ道程を描いて居るのに違ひない。が僕はもつと具體的に同じことを描きたいと思つて居る。家族達に對する同情などはかういふ欲望の前には何でもない。これも又君には in human の言葉を與へずには措かないであらう。けれども非人間的とすれば、僕は一面には非人間的である。——何でも正直に書かなければならぬ義務を持つて居る。(僕は僕の將來に對するぼんやりとした不安も解剖した。それは僕の「阿呆の告」の中に大體は盡くしてゐるつもりである。たゞ僕に對する社會的條件——僕の上に影を投げた封建時代の事だけは故意にその中に書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたかといへば我々人間は今日でも多少は封建時代の中に居るからである。

僕はそこにある舞臺の外に背景や照明や登場人物の――大抵は僕の所作を書かうとした。のみならず社會的條件などは、その社會的條件の中にゐる僕自身に判然と分るかどうかも疑はない譯にはゆかないであらう。）――僕の第一に考へたことはどうすれば苦しまずに死ねるかといふことだつた。縊死は勿論この目的に最も合する手段である。が、僕は僕自身の縊死してゐる姿を想像し贅澤にも美的嫌惡を感じた。（僕は或女人を愛した時も彼女の文字の下手だつた爲に急に愛を失つたのを覺えてゐる。）溺死も水泳の出來る僕には到底目的を達する筈はない。のみならず萬一成就するとしても縊死よりも苦痛は多いわけである。轢死も僕には何よりも先に美的嫌惡を與へずにはゐなかつた。ピストルやナイフを用ふる死は僕の手の震へてゐる爲に失敗する可能性を持つてゐる。ビルディングの上から飛下りるのもやはり見苦しいに相違ない。

　僕はこれ等の事情により藥品を用ひて死ぬことにした。藥品を用ひて死ぬことは縊死することよりも苦しいであらう。併し縊死することよりも美的嫌惡を與へない外に蘇生する危險のない利益を持つてゐる。唯この藥品を求めることは勿論僕には容易ではない。僕は內心自殺することに定め、あらゆる機會を利用してこの藥品を手に入れようとした。同時に又毒物學の知識を得ようとした。

　それから僕の考へたのは僕の自殺する場所である。僕の家族たちは僕の死後には僕の遺產によらなければならぬ。僕の遺產は百坪の土地と僕の家と僕の著作權と僕の貯金二千圓のあるだけである。僕は僕の自殺した爲に家の賣れないことを苦にした。隨つて別莊の一つもあるブルヂョアたちに羨ましさを感じた。君はかういふ僕の言葉に、ある可笑しさを感じるであらう。僕も今は僕自身の言葉にある可笑しさを感じてゐる。が、このことを考へた時には事實上しみじみ不便を感じた。この不便は到底避けるわけには行かない。

僕はただ家族達の外に出來るだけ死體を見られないやうに自殺したいと思つてゐる。併し僕は手段を決めた後も半ばは生に執着してゐた。隨つて死に飛入るためのスプリング・ボオドを必要とした。（僕は紅毛人達の信ずるやうに自殺することを罪惡とは思つてゐない。佛陀は現に阿含教中に彼の弟子の自殺を肯定してゐる。曲學阿世の徒はその肯定にも「やむを得ない」場合の外はなどといふであらう。併し第三者の眼から見て「やむを得ない場合」といふのは見す見すより悲慘に死ななければならぬ非常の變の時にあるものではない。誰でも自殺するのは彼自身に「止むを得ない場合」だけに行ふのである。その前に敢然と自殺するものは寧ろ勇氣に富んでゐなければならぬ。）このスプリング・ボオドの役に立つものは何と言つても女人である。

クライストは彼の自殺する前にたびたび彼の友達（男の）に道連れになることを勸誘した。又ラシイヌもモリエエルやボアロオと一よにセエヌ河に投身しようとしてゐる。併し僕は不幸にもかういふ友だちを持つてゐない。

唯僕の知つてゐる女人は僕と一所に死なうとした。が、それは僕等の爲には出來ない相談になつてしまつた。そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。

それは誰も一しよに死ぬもののないことに絶望した爲に起つた爲ではない。寧ろ次第に感傷的になつた僕はたとひ死別するにもしろ、僕の妻を劬りたいと思つたからである。同時に又僕一人自殺することは二人一しよに自殺することよりも容易であることを知つたからである。そこには又僕の自殺する時を自由に選ぶことの出來るといふ便宜もあつたのに違ひない。

最後に僕の工夫したのは家族たちに氣づかれないやうに巧みに自殺することである。これは數ヶ月準備した後、兎に角ある自信に到着した。（それ等の細部に亙ることは僕に好意を持つてゐる人々のために書くわけに行かない。尤もここに書いたにしろ法律上の自殺幇助罪（このくらゐ滑稽な罪名はない。若しこの法律を適用すればどの位犯罪人を殖すことであらう。藥局や銃砲店や剃刀屋はたとひ「知らない」と言つたにもせよ、我々人間の言葉や感情に我々の意志の現れる限り、多少の嫌疑を受けねばならぬ。のみならず社會や法律はそれ等自身自殺幇助罪を構成してゐる。最後にこの犯罪人たちは大抵は如何にもの優しい心臟を持つてゐることであらう。）幇助罪を構成しないことは確である。）

僕は冷やかにこの準備を終り、今は唯死と遊んでゐる。この先の僕の心もちは大體マイレンデルの言葉に近いであらう。

我々人間は人間獸である爲に動物的に死を怖れてゐる。所謂生活力といふものは實は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獸の一匹である。しかし食色にも倦いたところを見ると、次第に動物力を失つて居るであらう。僕の今住んでゐるのは氷の樣にすみ渡つた病的の神經の世界である。

僕はゆふべ或賣笑婦と一しよに彼女の賃金（！）の話をし、しみじみ「生きるために生きて居る」我々人間の哀さを感じた。

若しみづから甘んじて永久の眠にはいることが出來れば、我々自身の爲に幸福でないまでも平和であるに違ひない。併し僕のいつ敢然と自殺出來るかは疑問である。唯自然はかういふ僕にはいつもよりも一層美し

い。君は自然の美しいのを愛ししかも自殺しようとする僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである。

僕は他人よりも見、愛し、且又理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には滿足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずに置いてくれ給へ。僕は或は病死のやうに自殺しないとも限らないのである。

附記　僕はエムペドクレスの傳を讀み、みづから神としたい欲望の如何に古いものかを感じた。僕の手記は意識してゐる限り、自ら神としないものである。いやみづから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムペドクレス」を論じ合つた二十年前を覺えてゐるであらう。僕はあの時代にはみづから神にしたい一人だつた。（芥川龍之介集）

芥川氏は、昭和二年七月二十四日早朝、自ら生命を絕つた。この文例は、氏が死を選ばねばならなかつた理由や心情を述べたものであり、形式は書翰文に藉りてゐるが、普通の文章と何ら變るところはない。

なほ、世には、書翰文の形式で書いた小說や論文も多いが、それらは、何れも一般的文章と變るところがないから、書翰文として論ずべき限りでない。

第十章　式辭的文章

ここに、式辭的文章といふのは、各種の儀式の場所に於て朗讀される文章のことである。たとへば、祝辭・弔辭・告辭・訓辭・答辭の類がそれである。

これらの文には、昔から一種の型があつて、祝辭ならば「維時」にはじまり「聊か蕪辭を述べて祝辭となす。」に終り、弔辭ならば「嗚呼」にはじまり「哀悼の至りに堪へず、謹んで弔意を表す。」に終るといつた風なものが多かつた。しかし、かうした單なる形式的の祝辭や弔辭は、唯一片の儀禮としてその場を過すといふ趣があつて、およそ意味の無いものである。告辭や答辭にしてもその通りで、唯一片の形式に過ぎないやうな告辭や答辭ならば、むしろ無い方がましである。ただ、政黨の總裁が地方の一黨員に對する祝辭や弔辭を代讀せしめる場合とか、大きな團體の會長が一會員に祝辭や弔辭を呈するとかいふやうな場合などは、もとより單なる形式的のものでも一向構はないが、さうでない場合、たとへば先輩や友人のために祝ふとか、その死を悼むとかいふやうな場合には、ほんたうにその先輩や友人に心から呼びかける言葉を以てすべきで、昔からの妙な型などにとらはれることは絶對

に避くべきである。といふと、中には、さういふ型が無くてはどうも書きにくいなどといふ人があるかも知れないが、決してそんなことはないのである。學校に於ける卒業式に當つて、生徒の讀む答辭なども、全然型にとらはれない小學校の兒童の答辭などの方が最も聽く人をして感動せしめるのであつて、中學生のはそれよりやや劣り、專門程度の生徒のものは更に劣るといつた妙な現象を、しばしば見るのであるが、それは中學生や專門程度の學生等が、一種の型にとらはれてゐるからである。式辭的文章の場合もまた書翰文の場合、いや他のすべての場合とひとしく、要するにまごころである。純眞なまごころから出た言葉ならば、必ず聽く者をして感動せしめずには措かないのである。

式辭的文章もまた、個人から個人に述べる場合、個人から團體に述べる場合、團體から個人に、また團體から團體にといふ風に、書翰文の場合と略〻ひとしいが、その書翰文と異なるところは、儀式的・公開的といふ點にある。書翰文ならば、その相手だけにものを言ふのであるが、式辭的文章は相手のみならず、そこに來會してゐる一般の人達にも知らせるといふ性質をもつてゐる。ことに、弔辭の如きは、相手はもう耳も聞えず目も見えず、いくら「在天の靈髣髴として來りうけよ。」などと言つても、果して來りうけるかどうか分らないのであつて、いはば、むしろ來會者に知らせるといつた趣が多分に含まれてゐる。だから、或人の如きは、弔辭は死者の靈柩にむかつて讀むべきものではなく、來會者の方へ向いて讀むべきものだ、などとさへ言つてゐるほどである。さういふわけで、式辭的文章は、多くの人に聽かせる文章であるから、內容からいへば、餘りに個人間の私事に亙つてはな

らないし、形式からいへば、儀式にふさはしいところの、多少荘重味が必要である。浴衣がけで、「やあ、おめでたう。」とか、「そいつあ氣の毒だね。」などといふ時とは、大いに趣を異にしてゐる。

いま、右に述べた諸點を總括して、式辭的文章の書きかたを示すと、凡そ左の如くなるであらう。

第一、まごころから出た言葉、自分自身の言葉をつかふべきである。隨つて、一般的には、もちろん口語體の方がよい。

第二、儀式的といふことを考へて、その言葉遣は親しみのうちにも禮儀を失はず、公開的といふことを考へて、內容は餘り私事にわたらないやうに注意すべきである。

第三、聽覺に訴へる文章であるから、耳にこころよく響く音樂的な要素が必要である。そのためには、文を書く時にも注意し、書きをはつてからは一應朗讀してみることが必要である。

第四、餘り長いのは禁物である。聽者が飽きてしまふからである。短いうちに、强い印象を與へるやうに工夫しなくてはならぬ。たとへば、菊池寛氏が故芥川龍之介氏を悼んだ文の如きは、左の如く極めて短いものである。

君が自ら選み自ら決したる死について我等何をかいはんや。ただ我等は君が死面に平和なる微光の漂へるを見て甚だ安心したり。友よ、安らかに眠れ。君が夫人賢なれば、よく遺兒を養ふに堪ふべく、我等また微力を致して君が眠のいやが上にも安らかならんことを力むべし。ただ悲しきは君去りて我等が身邊とみに蕭條たるを如何にせん。

ただこれだけである。が、しかし、この強い友情の言葉は、くどくどと數千言を費した儀禮的弔辭などに比し、どのくらゐ強い印象を聽者に與へてゐるか分からない。

以上、式辭的文章について述べた四條は、一般的にいつたのであつて、祝辭・弔辭・告辭・訓辭・答辭等、各種の場合によつて、各〻内容も形式も異なるし、また呼びかける相手が長上か同輩か目下かによつても異なる。それらの具體的のことは、具體的の文例について述べて行く。

一　文部大臣の祝辭

茲ニ畏クモ
皇后陛下ノ行啓ヲ仰ギ奉リ東京女子高等師範學校ノ開校六十年記念式ヲ擧行セラルルニ當リ一言祝意ヲ表スルハ余ノ深ク光榮トスル所ナリ
恭シク惟ミルニ本校ガ辱クモ
昭憲皇太后親臨ノ下ニ開校ノ典ヲ擧ゲタルハ明治八年ニ在リ翌年　御下賜ノ御歌ハ長ヘニ本校校歌トシテ生徒教養ノ中心トナリ大正ノ御代ヲ經テ昭和ノ今日ニ至ルマデ
國母陛下ノ行啓ヲ仰ギ令旨ヲ拜スルコト實ニ七回今又面ノアタリ懇篤ナル令旨ヲ奉戴シ恐懼感激ノ至ニ堪ヘズ恩寵益〻加ハリ榮光愈〻輝ク　サレバ本校一同敬ミテ慈訓ヲ遵奉シ本邦女子教育ノ淵源トシテ夙ニ顯著ナル成績ヲ擧ゲ中ゴロ第六臨時教員養成所ノ附設ヲ見ルニ及ンデ校運彌〻隆ニ卒業生ヲ出ダスコト無慮五千四

百有餘名ヲ算シ今ヤ干支元ニ還リテ恰モ人生ノ華甲ノ壽ヲ迎フルト其ノ祥ヲ同クス曷ゾ慶祝ニ勝ヘム
抑ヽ乾坤德ヲ異ニシ陰陽行ヲ同ジクセザルハ天地ノ大道ニシテ本校教育要旨ノ明示スル所ナリ輓近文化ノ向上ニ伴ナヒ女子爲ス有ルノ範圍漸ク擴マリ思想ノ推移風俗ノ變遷頗ル著シキモノアリト雖モ斯ノ大道ハ儼トシテ萬古易ルベキニアラズ殊ニ我ガ國ニ在リテハ貞淑ヲ以テ婦人ノ生命トナシ德化卽チ教育ノ眞髓タルコトヲ深ク胸底ニ牢記シ造次ニモ之ヲ忘レザルヲ要ス職員各位生徒諸子庶幾クハ記念スベキ今日ノ盛儀ヲ契機トシテ光輝アル既往六十年ノ歷史ヲ顧ミ緊迫セル邦家內外ノ情勢ニ稽ヘ擧校心ヲ一ニシテ偏ヘニ令旨ヲ奉體シ校訓ヲ服膺シ以テ他日人ノ師表トナリ母儀ノ鑑トナルベキ重大ナル使命ヲ達成スルニ於テ萬遺憾ナキヲ期セラレムコトヲ盛式ニ際シ聊カ所思ノ一端ヲ陳ベ以テ祝辭トナス

昭和九年十月二十九日

文部大臣　松田源治

最も莊重を極め嚴肅を極めたる祝辭の一例としてあげる。蓋し、行幸啓を仰ぎ奉る場合に於ける祝辭、また文部大臣の朗讀する祝辭の如きは、まさにかくの如く莊重にして且嚴肅を極むべきものであらう。而して、本祝辭は漢文脈の文體であるが、今後はその莊重味と嚴肅味とを失はずに、しかも口語體で表現するやうな工夫もあつて欲しいと思ふ。

二　校舍落成式告辭

東京市×××女子高等小學校復興建築工竣リ本日落成ノ式典ヲ擧行セラルルニ臨ミ聊カ慶祝ノ意ヲ表スルハ

余ノ最モ欣幸トスルトコロナリ
抑々本校ハ明治四十一年ノ創立ニシテ爾來年ヲ閲スルコト二十年本市女子教育上貢献スルコト尠カラザリシガ先年大震火災ノ厄ニ遭ヒテ校舍一切ヲ失ヒタルハ甚ダ遺憾トスルトコロナリ爾來假校舍ニ於テ多大ノ不便ヲ忍ビ而モ專心能ク教育ノ實績ヲ收メテ今日ニ至レリ而シテ校舍復興ノ業ハ市區當路名譽職其ノ他學校關係者ノ熱心ナル盡力ニヨリテ着々工事ヲ進メ茲ニ新校舍ノ落成ヲ見タルハ誠ニ慶賀スベキナリ
惟フニ平時ニ處シテ變時ヲ忘レザルハ先聖ノ教フルトコロ物質上ノ充實ハ往々ニシテ精神上ノ空疎ヲ招キ施設ノ完備ハ時ニ創造ヲ阻害スルノ惧ナキニ非ズ　由來高等小學校ニ於ケル教科課程ノ改善ハ多年ノ宿望タリシガ要ハ一層實際生活上ノ知識技能ヲ重ンジ之ガ連絡ヲ密接ニスルニ在ルヲ以テ曩ニ小學校令ノ一部ヲ改正セラレ一般ノ要求ヲ容ルルニ至レリ　而シテ今本校ヲ見ルニ其等ノ要求ヲ考慮シ周到ナル注意ヲ拂ヒテ内部ノ設備殆ド間然スルトコロナシ
冀ハクハ本校教員諸氏協力一致以テ新校舍ノ活用ヲ完ウシ更ニ研鑽ヲ累ネテ内容ノ改善充實ヲ圖リ常ニ中外ノ時勢ヲ洞察シ大イニ時弊ヲ匡正シテ國民精神ノ作興ニ力メ上ハ以テ聖旨ヲ奉體シ下ハ以テ世ノ寄託ニ背カザラムコトヲ　一言陳ベテ告辭トス

昭和三年五月二十八日　　東京府知事　何某

校舍落成式に於ける知事の告辭である。莊重のうちに、祝意を表しつつ、學校經營について周到懇切なる希望乃至訓諭を述べてゐる。文體はやはり舊來の漢文調であるが、今後は追々口語體にかはつ

て來ることと思ふ。

三　太田君の還暦を祝す

太田秀穗君と僕との交友は、明治二十三年今の一高、時の第一高等中學校へ入學した豫科時代にはじまり、君は文科に、僕は法科に、春秋ここに幾十星霜、別れわかれになつてゐたのが、大正の初め僕が臺灣に赴任していくばくもなく、君を臺北師範に迎へ、ここに舊交を溫めることとなつた。次で相前後して臺灣を去るや君は多摩少年院長に聘せられ、最近までその職につくされてゐた事は既に周知の事柄である。

太田秀穗君は見るがままなる惠比須樣である、大黑樣である。この、いら〳〵とげ〳〵した世の中に、君は春風駘蕩たる中に渾然として珠の如き存在である。育英の職にありては何よりも尊い有德人であり、殊に少年感化の職にありては君そのものが大慈大悲の權化であつた。

僕が壇上に又はマイクロホンの前に立つときは、君はすぐあとから必ず所感一束のあいさつをおくつてくれる。僕が駄作を矢つぎ早に出版する每に、君は讀過せる後、必ず一片批判の文をよこしてくれる。僕はいつも君の厚き友情に浴し、自らその負荷の重きに過ぐるを感じつゝある。

君はよき妻を持ち、よき子を持ち、家庭もまさしく圓滿具足である。目出度ききはみである、美しきかぎりである。此の世からなる惠比須さま大黑さまの、いやが上にも目出度く榮えゆくことを心から祈る。

（下村海南氏）

友人の還暦祝賀會に於ける祝辭として、最もくだけた、そして如何にも人間味に滿みたあたたかみのある文である。つまり、その人に會つて語るがままの氣持を、そつくりそのまま文にあらはしたからである。そして、極めて簡潔であり且印象的である。さすがに操觚界の重鎭の筆であることを思はせる。

四　衆議院議員の當選を祝す

本日玆に××君の衆議院議員當選の祝賀會を開くに當りまして、一言祝辭を申し述べることを得まするのは友人たる私にとりまして誠に光榮とするところであります。

抑〻今回の選擧たるや、金權と官權との力暴威を逞しうして、買收・妨害・彈壓等あらゆる不正卑劣の手段が行はれ、識者をして顰蹙を禁ぜざらしめたのでありまするが、君は此の激烈なる競爭渦中に起ち、獨り毅然として正々堂々の政陣を張り、能く逐鹿場裡に輿望を收めて、當選の凱歌を奏するに至りました。これは、實に近來の一大痛快事であります。

思ふに君の淸廉高潔なる人格は、威權も之を屈する能はず、黃金も之を枉ぐる能はず、遂に當選の月桂冠を贏ち得たるものでありまして、まことに憲政治下の美事と申さねばなりません。是より選擧區民は一層君の高風を仰ぎ、君の人格に信頼することは疑ないところであります。

希はくは君進んで正義の地盤に立ち、遠大の抱負と拔群の識見とを以て議政壇場に臨み、侃諤の議よく協

賛の誠を竭し、上　聖明に對へ奉り、下國民の輿望に副はんことを。斯くの如くんば、政界風濤の事、決して不可能事ではありませぬ。願はくは邦家の爲に自重自愛、國利民福の增進に奮闘努力せられたい。

茲に君が當選を祝するに方り、一言所懷を述べて祝辭に代へる次第であります。(某氏文)

口語體であるが、その中に漢文口調をとり入れた、きびきびした調子であつて、かうした祝辭には、如何にもふさはしいものである。

五　芳宜園大人の御前に

ここに文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奧津城の御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなねつきて申さく。

あはれ悲しきかも、君は我に十をいひて一年のこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、我は未だ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびに行きかひたる時、あしたに參るとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべに罷るとては君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。書讀むとては君を師とも尊み、歌作るとては我をおとといのつらにぞ數へ給ひける。中頃にして、君は仕の道に暇なくおはし、我は世のさがにかかづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、我も同じちまたに移り住めば、花を尋ぬとては我道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世に

ありふるわざのまめごとも、あだごとも、かたみにへだてなく、心をかはせること今に二十年、その初を繰返し數ふれば、相友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今後れ奉りて、いつの世にか相見む、何れの時にかこととはむ。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらむ、かかるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも、文の林世々に衰へ、言の葉の道日に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて古に復り青雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥みここにひかれて、尙怪しみとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君獨り心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世に盛になりにたるなり。その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりどりに備らざるはなし。その古を寫せるは藤原・寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡くさゞることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなむあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

さるを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かゝるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも、わがかく言擧するを、泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙かに見そなはせとなむ申す。（村田春海「琴後集」）

これは村田春海が加藤千蔭の墓前に捧げた弔祭の辭である。この文は、擬古文であつて、今日眞似るべき文體でないことはいふまでもないが、その友情の如何にも美しくまた濃やかであつたこと、文のきちんと整ひ、言葉の極めてうるはしい點等に於て、弔祭文として古今に絶する名文とたたへられてゐる。我等は、そのすがたをそのまま とりいれることは出來ないが、そのこころを學び、それを新しいすがたに於て表現する工夫をしなければならぬ。本文は左の如き仕組になつてゐる。

第一、冒頭の挨拶のことばを述べる。

第二、五十年來交友の情を述べる。

第三、國文學及び歌道に於ける故人の功績を稱へる。

第四、結尾として故人に對す哀悼の情を述べる。

いつでも此の順序に從はねばならぬといふのではないが、かうした種類の文を書く時には、一二三四といふ風に項目を分け、それに材料を排列し整理してから文を書きだすやうにしなければならぬ。

六　星亨君を悼む

衆議院議員從二位勳二等星亨君、本月二十一日東京市參事會議堂に於て、兇豎の刺す所となりて遂に薨ず。嗟吁哀哉。君や剛明超邁の資を以て、力を國事に致し、勇往果決、遂げずんば已まざるの慨あり。其の我が

會に在るや、奮勵共の事を擧げ、人皆幹局に服す。其の功たる豈に偉ならずとせんや。而して今や不幸兇刃に罹り、急焉玉碎す。曷ぞ獨り我が會の爲に歎惜すべきのみならんや。寔に昭代の遺憾なり。今其の葬に會し、悲痛慘憺哀哭已むなし。恭しく弔す。(伊藤博文)

政友會總裁伊藤博文が、黨員星亭の死を悼んだ文である。漢文脈の文であつて、前の文例、村田春海の和文脈の文とよい對照である。

次には口語體の弔辭を揭げる。

七　芳賀矢一先生の尊靈の御前に申す

謹みて故芳賀矢一先生の尊靈に申し上げます。

昭和二年二月六日、曉の風寒き午前四時四十分、先生は天壽盡き、溘焉として現實を御去りになりました。恩師と仰ぎ慈父と慕ひ奉る私共も、もはや再び先生の優しき御顏を拜し、溫き御言葉に接し、親しく厚き御教訓と、懇なる御指導と、深き御暗示とを仰ぐことは出來ません。淋しい諒闇の天はいとど淋しくなりました。冷たき二月の心は一入冷たくなりました。今にして先生が私共の靈の力であり、光であらせられたことを痛感させられます。

先生が我が國文學界にお出でになりましたことは、實に我が國文學界に限りなき惠でありました。獨り過去に於ける惠であつたばかりでなく、先生を失つた現在に於ても、將來に於ても、亦同じく惠であるに相違

ありません。國文學の研究に西洋科學の方法を取入れて、國文學の特質を闡明し、我が傳統の精神に科學の精神を調和し、これを統一して新なる國學を建設することになされました先生畢生の御努力は、實に我が國民の永久に忘却すべからざる、偉大なる御功績を遺されました。嘗て先生の御敎を仰ぎ、先生の御唱道を聞き、先生の御指導を受けた私共は、各ゝその趨ふ所に就いて、先生の御業を紹ぎ先生の御志を成さうと奮勵致して居ります。先生の築かれました基礎の上に、國學の新建設と國文學の新研究とは、蒼々としてその成果を見つゝあるのであります。今や國文學は汎く社會の認むる所となり、專攻學者は年を逐うて多數に上り、斯學空前の盛觀を呈するに至りましたのは、これ全く先生の御開拓の賜であります。先生は、明治以來の國文學界の先輩であらせられたばかりでなく、なほ永遠に消ゆることなき國文學界の光であらせられると、固く信ずるのであります。

同時に、先生は我が國語敎育界にも、亦不滅の偉業を遺されました。小學國語讀本は實に先生の御力によつて眞の我が國語讀本になつたと申しても、誰もこれを否定することは出來ません。その他御著述に御講演によつて、直接間接になされました御指導の功は、我が國民の銘記する所であります。

先生は御生前よく「自分はもう學問に敎育に成し得べき總べてを成し盡くしたものであるから、もう生きてゐる要はない。」と述懷せられました。私共はこの御言葉に接する每に、限りなき悲愁の思に胸を閉されました。私共の先生に期待することは、學界にも敎育界にもまだ多々ありますのに、不幸にして宿痾は先生の御活動を中途に封じてしまひました。先生御胸中の御遺憾は御察し申し上ぐるだに、實に涙の種であります。

私共は公人としての不朽なる御功績を仰ぎ稱へると共に、又私人としての先生の玉の如き御人格に無限の

愛慕と、世の常ならぬ御恩誼に無上の感謝とを捧げるものであります。寛容と溫情とは先生の御性格の最も美はしい一面でありました。嘗て大學に於ける先生の御講筵に列し、先生の御薫陶に浴した私共は、一身上に就いてまでも、一方ならぬ御愛顧、御指導を受けた事を忘れることが出來ません。かかることにまで、先生の溫情に甘えて事多き御身を煩はし奉つたことを、今更勿體なく思はずにはをられません。それにもかかはらず先生は如何なる場合にも懇切に御教導下さいました。故に公私に關して深い苦惱煩悶を抱いたものは、先生の膝下に走つて、先生の御身に縋りました。そして先生の溫情に再生の惠に浴したものも、決して一二には止りません。私共の先生を慕ひ仰ぐ事の深いのも、寔に故あることであります。思掛なき先生の訃報を得て、驚きと悲しみとで、私共は唯茫然として、親に別れたやうでありました。ただちに先生の門に走り、先生の御亡骸の前にひれ伏しましたが、もとのままなる平和な御顏にも、もはや溫い血の色を拜することは出來ません。柔しき御口にも、もはや御聲を聞くことは出來ません。これまで濫りに先生の寬大に甘え、先生の溫情を勞はし奉つたことが、そぞろに後悔されます。受けた海山の御恩に對して、報い奉つたものの餘りに少かつたことが愧ぢられます。せめて心ゆくばかり御詫び申さうにも、今はそれすら叶ひません。何と悲しきことでありませう。先生の廣い御心はこれをしも御恕して下さいませうか。

さりながら先生、先生の偉大なる御精神は、深く私共の精神に染込んでをります。先生の君國に對する忠愛の熱火は、常に私共の魂を燃立ててをります。先生の堅實なる學風は、強く私共の愛慕する所であります。私共はこの精神、この情熱、この學風を以て、先生の御遺志をつぎ、先生の御遺業を成す事に全力を竭すを以て、報恩第一の道と致すことを御許し下さいませ。又御遺しになりました令息令孃方は皆俊秀にいらせら

れ御家門のこと、外から介意することは更にありませんが、若し萬々一私共の微力を捧げる機會がありますならば、せめてこれを鴻恩に報い奉る一つの道と致したいと存じます。この無禮な微意をもどうか御許し下さいませ。

先生、現實では斯うして御別れ致します。併しながら先生、先生は何時までも私共の精神の力であつて下さいませ、生命の光であつて下さいませ、さうして永久にお別れする事のない師弟であつて下さいませ。

昭和二年十二月十二日　　東京帝國大學門下生總代　藤　村　作

さすがに、國文學の泰斗たる藤村博士の文である。これほどまでに、まごころのあらはれた弔辭は、殆ど見ることが出來ない。生ける人にものいふ如くといふが、この弔辭の如きは、まさにそれである。これが、もし舊來の「謹んで哀悼の意を表す」式の文體であつては、到底この心持をあらはすことは出來ないであらう。

八　學習院卒業式告辭

本日卒業生諸子の爲に、卒業證書授與の典を擧ぐ。惟ふに諸子の任重く道遠き事は必ず諸子の自ら期せる所ならん。今より後益〻勉勵して、學德の進修を圖らんとするは固より其の所なり。余の諸子に告ぐべきものは既に平生に於て之を盡くせり。今に及びて又何をか言はん。唯當に身體を鍛へ精神を練り、貫くに忠誠を

以てすべし。余の特に諸子に望む所は此の如きのみ。諸子夫々を力めよ。（學習院長　伯爵　乃木希典）

如何にも乃木將軍の面目躍如たる告辭である。簡潔にして要を得、印象のあざやかな告辭である。

九　卒業式告辭

本日府立高等學校第一回卒業式ヲ擧行セラルルニ方リ親シク祝辭ヲ述ブルヲ得ルハ私ノ最モ欣幸トスル所デアリマス

惟フニ本校ガ昭和四年ノ春ニ創立セラレマシテヨリ既ニ三ヶ年其ノ間學校當局ノ熱誠ト學生諸子ノ勵精トニ依ッテ着々實績ヲ擧ゲ今ヤ茲ニ多數有爲ノ俊秀ヲ社會ニ送リ出スニ至リマシタコトハ本府トシテノミナラズ實ニ邦家ノ爲ニ慶賀ニ堪ヘナイ次第デアリマス

抑ヽ本校設置ノ目的ハ高等學校令ニ基ヅキ高等普通教育ヲ完成スルト共ニ特ニ國民道德ノ充實ニ力ムルコトニアリマシテ諸子ハ螢雪ノ功全ク成リ所期ノ成果ヲ修得シテ愈ヽ活社會ノ指導者トシテ立チ或ハ更ニ大學ニ進ンデ學術ノ蘊奥ヲ極メントセラレルノデアリマス　諸子ノ前途ハ洋々タルモノデアリマス其ノ任務ハ重且大ナリト謂ハナケレバナリマセン

今ヤ我ガ國家ハ内外共ニ頗ル多難ニシテ内ハ思想ニ經濟ニ不純ト不安トヲ來シ外ハ變調ヲ呈セル國際ノ政局ニ直面シテ居ルノデアリマス　國民宜シク眼ヲ宇内ノ大局ニ注ギ上下一致シテ内國力ノ充實に力メ外國威ノ伸張ヲ圖ラネバナラヌノデアリマス申スマデモナク靑年ノ元氣ハ國家隆昌ノ源泉デアリマス靑年愛國ノ熱血溢ルル所國家ハ必ズ興隆シ靑年靡頽ノ惡風漂フ所國家ハ必ズ衰亡スルコトハ古今ノ史實ニ徵シテ明白デアリ

マス　今ヤ我ガ國家ハ諸君ノ前途ニ多大ノ期待ヲ繋ケテ居リマス殊ニ諸君ハ我ガ國政治教育經濟等文化ノ中樞タル發轂ノ下ニ在ル最モ有爲ノ靑年デアリマス諸君ノ言動ハヤガテ全國ノ靑年ニ反映スル不言ノ目標デアリマス　一タビ此ニ思ヒ到レバ一層諸君ノ奮勵ヲ望マザルヲ得ナイノデアリマス　既ニ今回ノ變局ニ當リ萎微沈滯ノ途ヲ辿リツツアルカノ如クデアツタ國民精神ガ勃然トシテ蘇リ日本國民本來ノ純眞ナル赤誠ニ立返ツテ上下一體ノ活動ヲ續ケテ來マシタ事ハ諸子ノ目睹セラルル通リデアリマス　就中或ハ滿洲ニ或ハ上海ニ克ク國權ヲ擁護シ國威ヲ發揚シ東洋永遠ノ平和ノ爲ニ身命ヲ捧ゲツツアル皇軍ノ意氣ハ誠ニ國民精神ノ代表的ナル發露ニ外ナラヌノデアリマス　然レドモ時局ノ前途ハ尙逆睹スベカラズ國民タルモノハ一日モ安逸ヲ貪ルヲ許シマセヌ

今ヤ諸子ハ其ノ修養シ鍛錬シタル所ヲ以テ世ニ出デントスルノデアリマス　庶幾ハクハ自重自愛セラレ努力勉勵以テ國家社會ノ期待ニ背カズ諸子ガ本來ノ使命ヲ全ウセラレ併セテ本校第一回卒業生トシテノ榮譽ニ顧ミ後進ヲ指導シ以テ諸子ニヨツテ築カレタル校風ノ美點ヲ益々發揮シ本校ノ意義生命ヲ愈々顯揚セラレムコトヲ冀ツテヤマヌ次第デアリマス

昭和七年三月××日　　東京府知事　藤　沼　庄　平

知事の告辭の如きは、大抵文語體の漢文口調ときまつてゐるものであるが、本文の如きは口語敬體のいかにも堂々たる淸新な文體(スタイル)である。かうなつてはじめて、しんみりと知事の告辭に耳を傾けるといふ心持を聽者に起させるのである。一片の形式的なものでないからである。

一〇　小學校長の訓辭

本日本校第××回卒業證書授與式を行ふこととなりました。皆さんは此の學校に入學してから滿六年の間、雨の降る日も風の吹く日も、また暑い時も寒い時も、よく精出して勉强して怠らなかつたので、今日澤山の御客樣の前で卒業證書を頂くやうになつたのであります。皆さんも定めて嬉しいことであらうと思ひます。又父兄の方々も御同樣に嘸や御滿足のことであらうと思ひます。ここに私は、皆さんを始め父兄の方々に心から御祝の言葉を申し上げます。

いふまでもなく、皆さんは日本國民として是非受けなければならぬ敎育を受けをはつたのであります。併し世の中が日一日と開けてまゐりますので、これからの國民は義務敎育を受けただけでは、到底十分とはいへないのであります。小學校では、皆さんが將來何をするにしても必要な土臺をつくつただけでありまして、この土臺を基として、皆さんは上へ上へと伸びて行かねばならぬのであります。皆さんの中には進んで中等學校に入學する人もありますが、それらの人は今後とも今まで通りよく先生の敎を守つて勉强すれば宜しいのであります。しかし、是から家に在つて父母の仕事を手傳ひ、或は他に出て働く人に對して、私は特に一言申しておきたいことがあります。それは外ではない。今日までは皆さんには常に先生がついてゐて、何かにけて注意を與へたり勵ましたりしてゐたのであるが、今後世の中へ出ると事情がちがつて、時には惡い方へ誘ひ込まれるやうなこともあり、又仕事の方面に於ても競爭が激しいので、餘程しつかりしてゐないと惡い方へ引込まれたり或は競爭に負けて、世の落伍者となるやうなこともあります。若しさういふことになる

と、長い間學校へ通はせて頂いた父母や、多年親切に敎へて下さつた先生に對して、誠に申譯のないことであります。一體、學問は學校でなければ出來ぬといふことはないので、心掛さへよければ、どこに居ても何をしてゐても出來るのであります。それで皆さんは今後どんな仕事をしてゐても、少しでも暇があらば、今までのやうに勉强を怠らず、殊に世間の人々の言ふことすることを一々心にとめて、善いことは手本とし、惡いことは他山の石として修養を怠らぬやうにしなければなりませぬ。皆さんの前途は永いのでありますから、萬事に氣をつけて精神の修養をなし、身體を丈夫にして他日の成功を期せねばなりませぬ。どうか、いつまでも今の言葉を忘れないやうにして、立派な日本人になつて、家のため國のため役に立つやうになつて下さい。では、これを以てお別れの言葉としますが、卒業してからも、どうか時々學校へやつて來て、皆さんの元氣なお顔を先生方にお見せして下さい。また、遠方へ行かれる人は、時々先生方へお便りを下さい。先生は皆さんの大きくなり立派になるのばかり樂しみにしてゐるのです。

終に臨みまして、御多用中態々御臨席下さいました來賓諸氏並びに父兄の方々に對し、本校職員を代表して厚く御禮を申し上げます。

口語體であること、平明であること、懇切丁寧であること、つまりまごころから、相手にむかつて話しかけるといふ氣持からのみ、訓辭は生まれて來なくてはならぬ。

二　卒業兒童總代の答辭

六年、本當に思出の多い六年間でありました。その六年を終へる今日の僕等の心は、過去の追憶と、先生方の御鴻恩に對する感謝と、前途への希望とで、表現しがたいものがございます。僕等が初めて見た占春園の櫻は年々歳々、同じやうに花を開き、開いては又散つて、今年も亦開きはじめました。併し之を眺める六年後の今の僕等は背丈ものび、知識も豐になつて、帝國の將來とか、日滿親善とか、又世界の大勢とかいふやうなことまでも口にする程になりました。先生方を始め、僕等の父、僕等の母は、「まあ何といふ變化でせう、何と大きくなつた事でせう。」とおつしやいます。此の變化此の成長こそは長い年月、僕等一人一人を我が子の如くいつくしみ敎へ導いて下さつた諸先生方の御親切の賜であります。この六年における僕等の思出は數限りありませんが、就中最も光榮あり最も感激に充ちて一生を通じて忘れることの出來ないのは、昭和六年十月三十日、我が校の創立六十週年記念日に　天皇陛下の行幸を仰いだ事であります。記念すべきこの日おそれ多くも　天皇陛下には御勅語を賜はりました。僕等は朝夕占春園の橋のたもとにこの光榮を記した記念碑を見て忠君愛國の思を深くし立派な日本國民にならうと決心するのでございます。六年間の樂しい思出は尙それからそれへとつづきます。「わー」といふ突撃の聲と共に白い玉がとぶ、軍旗を奪ひ合ふ、勝利を誇る萬歲の歡聲、このやうな勇ましい擬戰の有樣が今僕等の眼の前にまざまざとあらはれてきます。と思ふと、その思出は熊手を手にして砂をかきまはしながら大きな貝を見つけた喜の聲とかはつて、うららかな春の日の樂しい潮干狩の繪卷物に續いてゆきます。其の他五十鈴川の流に心身を淸め神宮を拜し奉つた

修學旅行、鍬を手にして土を耕し汗を流した農園、萬國旗の下にかけまはつた運動會、花をあびながらとびまはつた占春園での鬼ごつこ、皆樂しかつた思出であります。かうして主事先生をはじめ三十餘人の先生方は野外に教場に愉快に且懸命に僕等を教へて各〻特有の天性をのばし、日本國民としての自覺と智能とを持つやうに指導して下さいました。僕等はそのあたへられた自覺と智能とを基礎として各〻のびる所へのびてゆきます。今日はお別れの日であります。僕等は卒業してゆきます、別れて行きます。そしてちりぢりになりますが、只今の學長先生の御訓辭と、諸先生の長い間の御敎訓とは、僕等の心に强くのこつて、なつかしい思出と共にいつまでも忘れることは出來ないのでございます。僕等は誓つて御敎訓の趣旨に從ひ、御鴻恩の萬分の一に報いたいと存じます。

今や、新校舍も出來上りました。だんだんにとりこはされて行く舊校舍を心の奧になつかしみながら、この新しい講堂での第一回の卒業生として卒業證書をいただく僕等一同の心はいひしれない感激にふるへてゐます。

尋常科、高等科、男女卒業生一同を代表して、心からなる感謝の言葉をのべ、謹んで答辭と致します。

昭和十年三月二十五日　　卒業生總代　永井道雄

これが、東京高等師範學校附屬小學校尋常科第六學年を卒へようとする兒童の答辭である。筆者は、永井柳太郎氏の子息であるとのこと。また、父兄も敎師も全然手を加へない文章であるとのことである。全く舊來の型にとらはれない、自然のままの文體(スタイル)である。やや冗漫に流れたといふ憾みもないで

はないが、反面には、まごころから、すべてを言ひつくさうとした純眞さが認められる。蓋し新しい答辭の模式的な文章といへるであらう。

一二　中學校長の訓辭

本日本校第××回の卒業生諸子を送るに當り、少しく所感を述べて諸子の前途を祝福すると同時に告別の辭と致したいと思ふのであります。

顧みれば諸子が本校に入學以來孜々として積まれた硏鑽は、諸氏をして學問の基礎を築かせたのでありま す。思ふに時代の進運に伴なひまして我々の生活は日に月に複雜となり、又極めて科學的となり、舊來の慣習や傳統を以てしては到底解決が出來なくなり、總べて生活の基礎を學問の上に置くやうになつて來たのであります。故に我々が完全に生活する爲には先づ學問の發達を計らねばならないのであります。諸子はすでに螢雪の功空しからず、本日を以て中學五年の課程を終へ、高等普通敎育を修得せられたのであります。其の基礎知識を土臺として各自に必要なる學問の硏鑽をなし、他日の大成を期せねばならないのでありまして、これは更に高等の學校へ入ると、直に實業界に身を投ずるとによつて何等の區別はないのであります。かくして遼遠なる諸子の前途に光明を認めるのであります。

更に私は現時の思想界に處する諸子の注意を喚起しておきたいのであります。今や我が國の思想界は全く混亂たる狀態でありまして、一方には未だ洗練を經ない未熟な新奇な說が盛に宣傳されてゐるかと思へば、一方には極めて頑固なる舊思想が國粹の假面を被つて徒に跋扈してゐるのであります。隨つてやゝもすれば

血氣にはやる青年が、左しては新奇の說に惑はされ、右しては頑固なる國粹主義に盲從するといふ現象を呈してをります。これは、國家の前途に對し、まことに深憂に堪へないところであります。勿論、新奇の說は一切之を排斥するといふやうな頑固であつてはなりません。世の進運に伴なうて新奇の說でも確によいものは之を採るだけの大國民的雅量が無くてはなりません。又、舊思想を固持せんとする國粹的思想でも、之を一概に頑固なりとして排斥せよといふのではありません。その中には、確にとるべき幾多の長所をもつてゐます。唯徒に新に奔り舊になづむことは、最も誡めねばなりません。諸子は將來種々の思想に接觸するのでありますが、既に學び得た信念を基礎として、之に公正なる判斷を下し、正義のためには一步も讓らないだけの大勇猛心を堅持して居らねばならないのであります。青年の心は白紙であります。一たび何等かの色に染まつたものは、それが先入主となつて、永く拭ひ去ることが出來ないのであるから、特にこの點に留意し、千古を通じて誤らない道德を遵守し、苟も國士たる面目を辱しめざるやうに望むのであります。

要するに、諸子は自今益〻自奮の精神を發揮して切瑳琢磨し、體育に留意して健康を增進し、誘惑に抵抗し荒怠を誡め、國家有爲の士となつて上は國恩に報い下は父母の期待に背くことのないやうに、私は切望してやまないのでありまして、諸子の覺悟も、まさに斯くあるべきを信じて疑はないのであります。諸子と別るゝに臨み、一言以て諸子の前途を祝福し諸子の健康を祈る次第であります。

これは、中等校長の訓辭として普通一般の型であるが、その學校學校に於ける特殊的事情に應じて、如何樣にも具體化し特殊化さるべきである。なほ、師範學校・高等女學校・各種實業學校等に於ける

校長の訓辭にしても同樣である。何れにせよ、今日はこの文例の如く口語體のものでなければならぬ。「一言以て訓辭となす」のは、時代後れであるのみならず、生徒に對して何等のあたたかみもない。

一三　師範學校卒業生總代答辭

本日生等××名の爲に盛大なる卒業證書授與の式典を擧げられ、朝野貴賓の御來臨を辱うし、加ふに知事閣下の後渥なる御訓諭と校長先生の御懇篤なる別辭とを賜はり、生等の誠に光榮とし且感激措く能はざるところでございます。

顧みますれば、生等が本校に入學を許されましてより既に五星霜、此の間生等蹇駑（けんど）の才を以て學業を修め刻苦精勵その業に力めましたとは申しながら、嚴肅なる校長先生の御薫陶と、諄々として倦むなき諸先生の御訓導とに依らずんば、どうして今日の榮譽を荷なふことが出來ませう。まことに鴻恩海岳も啻ならず、何を以て謝し、何を以て報ゆべきかを知らないのであります。

今や我が國内（うち）には經濟國難・思想國難の叫ばるゝあり、外（そと）には國際關係日に重大性を加へるあり、まさに國家の非常時に際會してをるのでございます。此の難局に善處し、我が國運の發展を圖らんとすることは決して容易の業ではありません。併しながら、その根本は一にかゝつて國民の覺醒にあり、努力にあると確信いたします。而して、國民の覺醒・努力を促す者は、教育者を外にして果して何人が之に當ることが出來ませう。國力興隆の責職として教育者の雙肩に懸れるものあるを想ふ時、而して特に學校教育の根柢は實に初等教育にあるを思ふ時、特に其の任に當らんとする生等の職責が、如何に尊嚴にして重大なるかを痛切に感

ずるのでございます。思うてここに至れば、生等果してよく其の重任に堪へ得るや否やを衷心より危むものであります。併しながら、生等はここに、勇躍して其の重任に赴かうといたします。生等もとより學淺く德薄きものではございますが、上は詔勅の御趣旨を奉戴し、下は平素の明訓大誡を遵守し、夙夜精勵以て其の職責を盡くす覺悟でございます。ここに、敬慕措く能はざる諸先生並に交情厚き同窓諸君と袂を別ち、懷しき校門を辭するに臨み、既往を回顧し將來に想到して悲喜交ゝ胸に迫り、意を盡くすことが出來ませぬ。唯わづかに所思の一端を述べ、謹んで答辭といたします。

中等學校卒業生の答辭として一般の形式がこれである。これを、その立場立場に於て具體化し特殊化すればよいのである。最後に、ちよつと注意して置きたいことは、よく卒業生の答辭の終の方に、「涕涙轉た禁ずる能はず」などといふ文句をつけたがるものであるが、答辭を書いてゐる時に泣いてゐる者もあるまいし、また、朗讀の際、そこへ行つたら泣かうなどと豫想してゐるものもあるまい。心にもない誇張を文中に挿入するのは古いばかりでなく、人の心をうごかさない。要は、やはり、まごころにある。まごころから出た言葉をすなほにつかふにある。そして、それはあらゆる文章を通じて原則とさるべきものである。

現代文章概論　終

世に「悪文の魅力」といふことばがある。谷崎氏の「文章讀本」の中でも、そのことを論じてゐる。それは、餘り文章をなだらかに流暢に書くと、恰も輕舟に乘つて、すうつと溪流を下るやうなもので、その快感にまぎれて、ついうつかり過してしまひ、兩岸の景色などが強く頭にのこらないやうに、あまりととのつた文章から受ける印象は強くないことがある。だから、表現効果をめざすためには、わざとゴツゴツした調子の文を書き、わざと變なあて字を書いたり、假名遣を違へたりして、字面を蕪雜にするといふ手段さへとることがある、といふのである。

繪畫などでもさうで、餘りととのつたものよりも、無造作にかきなぐつたやうな文人畫などを、「これは面白い。」と思ふことがある。また、三角形みたやうなものだけを並べた、未來派だとか印象派だとかいふものから何かかう妙な印象を受けることがある。

酒をたしなむ人の味覺は、普通の人にくらべると、多少ちがつたところがある。普通の人が嘔吐をもよほすやうな、腐つたしほからのやうなものの方が、非常に好物なのである。が、それも、酒を少しはじめたばつかりのやうな素人には、まだ分らない味覺で、よほど酒道の大家にならぬと、そこまで行かぬ。

悪文——未來派——腐つたしほから、さういふやうなものに、はじめから食ひつかうとするのは無理である。それは、餘程その道の達人になつてからの話である。

附録

1 送假名一覽表
2 國語假名遣一覽表
3 字音假名遣一覽表
4 文法一覽表
5 句讀法一覽表
6 常用漢字表

送假名一覽表

アカス　明かす
アカラム　赤らむ
アカリ　明り（名）
アガリ　上り（名）
アガル　上る
アカルイ　明かるい
アキタラズ　慊らず
アキナフ　商ふ
アキラカニ　明らかに
アキラケシ　明らけし
アキラム　明らむ
アキラム　諦む

アクル　明くる
アケル　明ける
アゲル　上げる
アザヤカ　鮮か
アソビ　遊（名）（遊びは否）
アソビニ　遊びに
アタカモ　恰も
アタタカイ　暖い
アタタカサ　暖さ
アタタカナ　暖な
アタタカミ　暖み
アタタム　暖む

アタラシイ　新しい（新らしいは否）
アタリ　邊（名）（邊りは否）
アタリ　（日）當り（名）
アタル　當る
アヂハフ　味はふ
アツカフ　扱ふ
アツカヒ　（氣違）扱ひ
アツク（ウ）ス　厚くす　篤くす
アツマツテ　集つて
アツマリ　集り（名）
アツメル　集める
アハス　合はす（併す）
アハセテ　合はせて（併せて）
アヒ　（空）合（名）
アブラコイ　油こい

アヘテ　敢へて（肯て）
アマク　甘く
アマネク　普く（普ねくは否）
アマヤカス　甘やかす
アマリニ　餘りに
アマンズ　甘んず
アミカタ　編方（名）
アム　編む
アメフル　雨ふる
アヤシム　怪しむ（異む）
アヤブム　危む
アヤマリ　誤（名）
アヤマル　誤る
アラカジメ　豫め
アラタニ　新に（新たには否）
アラタマル　改まる

アラタム　改む
アラハス　表す　著す　現す
アラハル　現る
アラマホシ　有らまほし
アリガタイ　有難い（有り難いは否）
アル　或（或るは否）
アルヒハ　或は（或ひは否）
イカガハシ　如何はし
イカデカ　爭でか
イカラス　怒らす
イカリ　怒（名）
イカル　怒る
イキホヒ　勢（勢ひは否）
イケドリ　生捕（名）
イケドル　生捕る

イサマシイ　勇ましい
イソガシイ　急がしい（忙しい）
イソギ　急ぎ（名）
イダス　出だす
イタヅラニ　徒に（徒らには否）
イタハシイ　痛はしい
イタマシイ　悼ましい
イチジルシイ　著しい
イヅクンゾ　何んぞ　焉んぞ
イヅレ　何れ
イトハシイ　厭はしい
イニシヘ　古（名）（古へは否）
イハク　言はく（曰く）
イハヒ　祝（名）
イハフ　祝ふ
イハンヤ　況んや（況やは否）

イヒカタ　言方
イヒガタイ　言ひ難い
イマシム　戒む（戒しむは否）
イマダシ　未だし
イマハシ　忌まはし
イマメカシ　今めかし
イマメク　今めく
イヤシクモ　苟も（苟くもは否）
イヤシム　卑しむ　賤しむ（陋む）
イラダツ　苛だつ
イリ　入（名）
イル　入る
イレル　入れる
イロヅク　色づく
イロドル　色どる（彩る）
イロメク　色めく

イヨイヨ　愈ゝ（愈よは否）
ウカブ　浮かぶ（泛ぶ）
ウカベテ　浮べて
ウキクサ　浮草（名）
ウケタマハル　承る
ウケトル　受取る（受け取るは否）
ウゴカス　動かす
ウシロ　後（名）（後ろは否）
ウシロメタイ　後めたい
ウスク（ウ）ス　薄くす
ウタガハシイ　疑はしい
ウタガヒ　疑（名）
ウタガフ　疑ふ
ウチ　打（臺）（名）
ウツ　打つ　討つ
ウヅマル　埋まる

ウヅメル　埋める
ウヅモル　埋もる
ウトマシイ　疎ましい
ウトンズ　疎んず
ウマル　生まる　産まる
ウラナフ　占なふ（占ふは否）
ウラミ　怨（名）
ウラム　恨む
ウラムラクハ　恨むらくは
ウラヤマシイ　羨ましい
ウララカ　麗か
ウリ　（物）賣（名）
ウル　賣る
ウレシイ　嬉しい
ウレシガル　嬉しがる
ウレヘ　憂（名）

ウレヘル　憂る
オイテ　於て
オイバム　老いばむ
オキ　（物）置ー　（一日）置ー　（名）
オキル　起きる
オクマル　奥まる
オクリ　（見）送ー　（名）
オクル　送る
オケル　於ける
オコス　起す　興す
オゴソカニ　嚴かに
オコタリ　怠ー　（名）
オコタル　怠る
オコナヒ　行ー　（名）
オコナフ　行ふ
オゴリ　奢ー　（名）

オコル　起る　興る
オゴル　奢る
オサフ　押さふ　（抑ふ）
オソラクハ　恐らくは
オソレ　恐ー　虞ー　（名）
オソル　恐る
オソロシイ　恐しい
オチイル　陥る
オチユク　落行く
オツテ　追つて
オトシ　落しー　（名）
オトス　落す
オドロカス　驚かす
オドロキ　驚ー　（名）
オドロク　驚く
オナジク（ウ）ス　同じくす

オノオノ　各ゝ
オヒシゲル　生ひ茂る
オヒタチ　生ひ立ちー　（名）
オホイニ　大いに
オボシメシ　思召ー　（名）
オボシメス　思召す
オホス　仰す
オホセ　仰ー　（名）
オホムネ　概ね
オホヤケニス　公にす
オモク（ウ）ス　重くす
オモヒ　（物）思ー　（名）
オモヒダス　思ひ出す
オモヒデ　思出ー　（名）
オモヒニ　（お）思ひに
オモフ　思ふ

オモフニ　思ふに　惟ふに
オモヘラク　思へらく
オモムキ　趣（名）
オモムク　赴く
オモムロニ　徐に（徐ろには否）
オヨソ　凡そ
オヨビ　及び
オヨブ　及ぶ
オヨボス　及ぼす
オリ　（乘）降り（名）
オリル　下りる　降りる
オロカ　愚（名）
オロカシイ　愚しい
オロス　下す　降す
オモンズ　重んず
オモンミルニ　惟るに

カガマル　屈まる
カガヤカス　輝かす
カガヤク　輝く
カカリ　（出納）掛（名）
カカリデ　（總）掛りで
カカル　（取）掛る
カキ　書き（名）
カキトル　書取る
カギリ　限（をつくす）（名）
カギリニ　限りに
カク　書く
カケダス　駈出す
カサナル　重なる
カサネル　重ねる
カシコマル　畏まる
カスカ　微か

カタク（ウ）ス　堅くす　固くす
カタジケナク（ウ）ス　辱くす
カタドル　象どる　形どる
カタハラニ　傍に
カタマル　堅まる　固まる
カタラフ　語らふ
カチ　勝（名）
カツ　且（且つは否）
カツ　勝つ
カツテ　嘗て（嘗つては否）
カナシミ　悲しみ（名）
カナシム　悲しむ
カナラズ　必ず
カナラズシモ　必ずしも
カネテ　豫て
カネテ　兼ねて

カハリ　（身）代り（名）
カハリニ　代りに
カハル　代る　變る
カヘツテ　却つて
カヘリ　歸（を待つ）（名）
カヘリ　（宙）返（名）
カヘリニ　歸りに
カヘリミチ　歸り途（名）（歸途（きと）との區別）
ガヘンズ　肯んず
カマヘ　構（名）
カマフ　構ふ
カラウジテ　辛うじて
カリ　（兎）狩（名）
カリ　借（がある）（名）
カリマウス　借り申す

カルクス　輕くす
カレ　彼（代）
カレバム　枯ればむ
カロンズ　輕んず
カワカス　乾かす
カヲラス　薰らす
カンガフ　考ふ
カンガヘ　考（名）
カンガヘデ　考で
キエル　消える
キエヲハル　消終る
キガカリ　氣掛り
キコエル　聞える
キコシメス　聞召す
キザミ　刻（煙草）（名）
キザミアグ　刻み上ぐ

キザム　刻む
キシガタシ　期し難し
キズツク　傷つく
キタス　來す（來たすは否）
キダテ　氣立（名）
キタル　來る（來たるは否）
キヅク　築く（城づく）
キハマリ　極り（名）
キハマル　極まる（窮る）
キハミ　極み（名）
キバム　黄ばむ
キハメテ　極めて
キマル　極る
キヨク（ウ）ス　淸くす
キヨマル　淨まる
キヨメル　淨める

キヨラカ　淸らか
グアヒ　工合（名）
クイ　悔（名）
クイル　悔いる
クサラカス　腐らかす
クシケヅル　櫛けづる（梳る）
クダサル　下さる
クチソソグ　口そそぐ（嗽ぐ）
クハハル　加はる
クフ　食ふ
クユラス　薫らす
クラス　暮す（暮らすは否）
クラハス　食はす　啗はす
クラフ　食ふ
クラベウマ　競馬（名）
クラマス　暗ます

クリカヘス　繰返す
クル　繰る
クル　來る
クルシミ　苦しみ
クルシム　苦しむ
クルハス　狂はす
ココロミル　試みる
ココロヨシ　快し
コタヘ　答（名）
コタヘル　答へる
コトトス　事とす
コトナリ　異なり
コトニス　異にす
コトワリ　理（名）
コトワル　斷る
コノマシ　好まし

コハバル　强ばる
コヒシイ　戀しい
コヒネガハクハ　希はくは
コマカイ　細かい
コマカニ　細かに
コマヤカ　濃やか
コヤス　肥す（肥やすは否）
コラス　凝らす
コロガス　轉がす
コロシ　（人）殺（名）
コロス　殺す
コロバス　轉ばす
コロホヒ　比ほひ
サイハヒ　幸ひ（私は……）
サイハヒニ　幸に（私は……）
サカサマニス　倒にす

サカシマニス　倒にす
サカラフ　逆らふ
サカリ　(花)盛(名)
サカン　盛(名)
サカンニ　盛に
サキ　先(先きは否)
サキダツ　先だつ　前だつ
サキニ　前に　先に
サキンズ　先んず
ササゲツツ　捧げ銃(名)
サシダシ　差出し(名)
サシダス　差出す
サシニ　(一)刺に
サダカニ　定かに
サダマル　定まる
サダメ　定め(名)

サダメテ　定めて
サハリ　障(名)
サハル　障る
サマス　覺ます
サマタグ　妨ぐ
サマタゲ　妨(名)
サマタゲニ　妨に
サムケシ　寒けし
サヤケシ　爽けし
サワガシ　騷がし
サワガス　騷がす
サワギ　騷(名)
サワギニ　騷に(なる)
サヲサス　棹さす
シアガリ　仕上り(名)
シアハセ　仕合はせ(名)

シカシ　併し
シカ(ウ)シテ　而して
シカシナガラ　併しながら
シカモ　而も　然も
シカラバ　然らば
シカリ　然り
シカルニ　然るに
シカレドモ　然れども
シキリニ　頻りに
シタガツテ　隨つて(我々は……)
シタガツテ　從つて(……に從つて)
シタシミ　親しみ(名)
シタシム　親しむ
シタハシイ　慕はしい
シヅカニ　靜かに

シヅケサ　靜けさ
シヅケシ　靜けし
シヅマル　靜まる　鎭まる
シヅマル　沈まる
シヅメ　鎭め（名）
シバシ　暫し
シバシバ　屢ゝ
シバラク　暫く
シヒテ　强ひて
シラス　知らす
シリ　（物）知り（名）
シリウル　知り得る
スカス　透かす
スグニ　直に
スクナイ　少い
スクナカラズ　少からず

スクナキ　少き
スクナク　少く
スクナニ　（殘）少に
スクヒ　救ひ（名）
スクフ　救ふ
スコシ　少し
スゴス　過す
スコブル　頗る
スコヤカ　健か
スサマジイ　荒まじい
スズシイ　涼しい
スズミ　涼み（名）
スズム　涼む
スナハチ　卽ち
スベテ　總べて
スマス　濟ます

スマス　澄ます
スマヒ　住まひ（名）
スマフ　住まふ
スミヤカニ　速に
セバク（ウ）ス　狹くす
セバマル　狹まる
セバメル　狹める
セマク（ウ）ス　狹くす
セメ　（兵糧）攻（名）
セメル　攻める
ソコナハル　損はる
ソナハツテ　備つて
ソナフ　具ふ
ソナフル　備ふる
ソナヘル　具へる
ソバダツ　側だつ（欹つ）

ソハル　添はる　副はる
ソマル　染まる
ソメ　(書)初　(着)初　(名)
ソモソモ　抑ゝ
ソランズ　諳んず
ソロヒ　(勢)揃　(名)
ゾンジ　(御)存じ　(名)
ゾンズ　存ず
タエダエ　絶え絶え
タクハヘ　貯　(名)
タクハフ　貯ふ
タクマシク(ウ)ス　逞しくす
タクミ　巧　(名)
タクミニ　巧みに
タシカニ　確に
タスケ　助　(名)

タスケニ　助けに
タダ　唯(一人)　只(今)
タタカハス　戰はす　鬪はす
タダシ　但し
タダシク　正しく
タダシク(ウ)ス　正しくす
タダチニ　直に
タタマル　疊まる
タチアガル　立上る
タチドコロニ　立どころに
タチナラブ　立ち並ぶ
タチマチ　忽ち
タチマチニ　忽ちに
タツクル　田つくる　(佃る)
タヅサハル　携はる
タトヘバ　例へば

タノシミ　樂しみ　(名)
タノシム　樂しむ
タノモシイ　頼もしい
タヒラカニ　平かに
タヒラグ　平ぐ
タヒラケシ　平けし
タマハル　賜はる
タマモノ　賜　(名)　(賜物は否)
タメ　爲　(爲めは否)
タヨリ　便り　(名)
タヨル　頼る
チカク(ウ)ス　近くす
チカヅク　近づく
チガヒ　(間)違　(名)
チガヒナイ　違ひない
チガフ　違ふ

チカヨル　近よる
チキニ　直に
チヌル　血ぬる（衂る）
チラス　散らす
ツイデ　次いで
ツイテハ　就いては
ツカサドル　司どる（掌る）
ツカハス　遣はす
ツカヒ　（召）使（名）
ツカヒニ　使に
ツカル　疲る
ツカレ　疲（名）
ツギニ　次に
ツギノ　次の
ツクス　盡くす
ツクリ　（白壁）造（黄金）作（名）

ツクル　造る　作る
ツタハル　傳はる
ツタヘ　（手）傳（名）
ツタヘル　傳へる
ツチカヒ　培ひ（名）
ツヅキ　（町）續き（名）
ツツミ　包（名）
ツツム　包む
ツトム　力む　務む
ツトメテ　力めて　務めて
ツブサニ　具に
ツヒエ　費え（名）
ツヒヤス　費す
ツマビラカニス　詳にす　審にす
ツマム　摘まむ（撮む）
ツムギ　紡（名）

ツムギニ　紡ぎに
ツメタイ　冷たい
ツユケシ　露けし
ツラナル　連なる（聯る）
ツラヌク　貫ぬく（串く）
ツリ　釣（名）
ツリニ　釣りに
ツルス　吊す
ツレダス　釣れ出す
ツレダス　連れ出す
ツレユク　連れ行く
ツヱツク　杖つく
テアラヒバチ　手洗鉢（名）
テヅカラ　手づから
テラス　照らす
トカス　解かす

トカス　融かす
トキメク　時めく
トドメル　止める
トドロカス　轟かす
トホク（ウ）ス　遠くす
トホザカル　遠ざかる
トホザク　遠ざく
トホリ　（表）通｜　（人）通｜　八分
（通｜）（名）
トホリ　（豫定の）通り
トホリニ　（お）通りに
トマス　富ます
トマツテ　止つて　泊つて
トマル　止る　泊る
トメル　止める　泊める
トモナフ　伴なふ

トモニス　共にす　倶にす
トラフ　執らふ（捕ふ）
トリ　（草）取｜（名）
トリコニス　擒にす
トリツギ　取次｜（名）
トリツグ　取次ぐ
ナイガシロニス　蔑にす
ナカス　泣かす　鳴かす
ナカバ　半ば
ナガラク　長らく　永らく
ナガラフ　長らふ　永らふ（存ふ）
ナガシ　（弓）流し｜（名）
ナガス　流す
ナガム　眺む
ナガメ　眺｜（名）
ナガレ　（清き）流｜（名）

ナキ　（もらひ）泣き｜（名）
ナキダス　鳴き出す（泣出す）
ナグサム　慰む
ナグサメ　慰｜（名）
ナゲカハシイ　歎かはしい
ナゲキ　歎｜（名）
ナゲク　歎く
ナサケ　情｜（名）（情け△は否）
ナシウル　爲し得る
ナシトグ　成し遂ぐ
ナツカシイ　懷かしい
ナヅク　名づく
ナナメニ　斜に
ナビカス　靡かす
ナホ　尙　猶
ナホシ　（やり）直し｜（名）

ナホシニ　直しに
ナホリ　（仲）直り（名）
ナホル　直る　治る
ナミヰル　並居る
ナミス　無みす（蔑す）
ナミダグム　涙ぐむ
ナヤマシイ　惱ましい
ナラス　鳴らす
ナラハス　習はす
ナラビニ　並びに
ナラベテ　並べて
ナンスレゾ　何すれぞ（何爲れぞ）
ナンナントス　垂とす（垂んとすは否）
ニエカヘル　煮え返る

ニギハシイ　賑はしい
ニギヤカ　賑やか
ニギリメシ　握飯（名）
ニギル　握る
ニクガル　憎がる
ニクラシイ　憎らしい
ニツカハシイ　似つかはしい
ニナフ　荷なふ（擔ふ）
ニハカニ　俄に
ニホハシイ　匂はしい
ヌカヅク　額づく
ヌキテ　拔手（名）
ヌキンヅ　擢きんづ
ヌケ　（氣）拔け（名）
ネカス　寢かす
ネガハクハ　願はくは

ネガハシイ　願はしい
ネガヒ　願（名）
ネセオク　寢せ置く
ネタマシイ　妬ましい
ネムタイ　眠たい
ネムリ　眠（名）
ネムル　眠る
ネンゴロニ　懇に（懇ろには否）
ノコリ　（居）殘（名）
ノコリノ　殘りの
ノゾマシイ　望ましい
ノゾミ　望（名）
ノゾム　望む
ノゾムラクハ　望むらくは
ノツトル　則とる
ノツトル　乘つ取る

ノドケシ　長閑けし
ノバス　延ばす
ノビアガル　伸上る
ノビチヂミ　伸び縮み
ハガス　剝がす
ハカドル　捗どる
ハカナシ　果なし
バカリ　（十人）許
ハカル　計る
ハゲシク（ウ）ス　激しくす
ハゲマス　勵ます
ハサマル　挾まる
ハジメ　始　初　（名）
ハジメ　初め（僭たらんとして）
ハジメテ　始めて　初めて
ハジメル　始める

ハセウル　馳せ得る
ハセユク　馳行く
ハタシテ　果して
ハタス　果す
ハタラキ　働　（名）
ハタラク　働く
ハヅカシイ　恥づかしい
ハヅル　外る
ハヅル　恥づる
ハヅレ　（村）外れ　（名）
ハテ　果　（名）
ハテル　果てる
ハナシ　話　（名）（話しは否）
ハナシダス　話し出す
ハナス　話す
ハナハダ　甚だ

ハナハダシイ　甚だしい
ハナムケス　餞す
ハナレジマ　離れ島　（名）
ハヤ　（氣）早　（名）
ハヤマル　早まる
ハヤム　早む
ハヤメル　早める
ハル　晴る
ハルカニ　遙かに
ハルケシ　遙けし
ハレ　（日本）晴　晴着　（名）
ヒエ　（底）冷　（名）
ヒエル　冷える
ヒカリ　光　（名）（光りは否）
ヒカル　光る
ヒキカヘス　引返す

ヒクク(ウ)ス　卑くす
ヒサシク(ウ)ス　久しくす
ヒサシク　久しく
ヒソカニ　密かに（私に）
ヒツコム　引込む
ヒツタツ　引立つ
ヒソマル　潜まる
ヒトシク(ウ)ス　等しくす
ヒトヘニ　偏に
ヒトリ　獨（言）（名）
ヒトリデ　獨で
ヒトリユク　獨り行く
ヒラタイ　平たい
ヒルガヘツテ　翻つて
ヒロガル　廣がる
ヒロヒ　（栗）拾（名）

ヒロフ　拾ふ
ヒロマル　廣まる
ヒヤカス　冷かす
ヒヤヤカ　冷やか
フカク(ウ)ス　深くす
フカレテ　吹かれて
フキ　（雪）吹（名）
フキタテル　吹立てる
フク　吹く
フサガル　塞がる
フタタビ　再び
フタツナガラ　二つながら
フトク(ウ)ス　太くす
フトコロニス　懐にす
フリ　（本）降（名）
フリ　（武者）振（名）

フリニ　（小）降りに
フルツテ　奮つて
フルヒ　振るひ
フルヒテ　振るひて
フルフ　振るふ（震ふ）
フルマヒ　振舞
ヘラス　減らす
ホコリ　誇（名）
ホコル　誇る
ホシイママニス　恣にす　擅にす
ホソク(ウ)ス　細くす
ホトンド　殆ど（殆んど△は否）
ホボ　略ょ
ホマレ　譽（名）（譽れ△は否）
ホロボス　滅ぼす
マウシアグ　申し上ぐ

マウシゴ　申子（名）
マウシブン　申分（名）
マウシワケ　申譯（名）
マウケ　設（名）
マサシク　正しく
マジハリ　交（名）
マジハル　交る
マジラフ　交らふ
マスマス　益〻
マタガル　跨がる
マチ　待ち（給へ）
マヅ　先づ
マツタク（ウ）ス　全くす　完くす
マツリ　祭（名）（祭りは否）
マトハス　纒はす
マヌカル　免る

マヌカレズ　免れず
マネキ　（手）招（名）（手招きは否）
マバラニ　疎に
マハリ　周り（一尺）（名）
マヒ　舞（名）（舞ひは否）
マフ　舞ふ
マモリ　守（名）（守りは否）
マモル　守る　護る
マヨヒ　迷（名）
マヰラス　參らす
ミイダス　見出だす
ミエダス　見え出す
ミジカク（ウ）ス　短くす
ミタス　滿たす　充たす
ミダリニ　猥りに

ミナゴロシニス　鏖にす
ミニクイ　見にくい
ミニクイ　醜い
ミノル　實のる
ムカツテ　向かつて
ムカヒアフ　向かひ合ふ
ムカヒテ　向かひて
ムカフ　向かふ（名）
ムカフ　向かふ
ムカヘニ　迎へに
ムキ　向（名）
ムクツケシ　醜けし
ムケ　（仕）向（名）
ムシバム　蝕む（蟲ばむ）
ムシロ　寧ろ
ムスビツク　結び附く

ムチウツ　鞭うつ（撻つ）
ムツマシイ　睦ましい
ムナシク（ウ）ス　空しくす
メアハス　妻はす　女あはす
メグラス　巡らす　運らす
メグリ　（垣）巡（名）（垣巡りは否）
メグル　巡る　運る
メシニ　召に（より）
メヅラシイ　珍しい（珍らしいは否）
メデタイ　目出たい
モシクハ　若しくは
モチ　相）持（名）
モッテ　以て
モットモ　最も

モッパラ　専ら
モトヅク　基づく（基くは否）
モトメニ　需に（應ず）
モトヨリ　素より　固より
モドラス　戻らす
モラス　漏らす　泄らす
モリ　（お）守（名）
ヤウヤウ　漸う
ヤウヤク　漸く
ヤキツク　燒き附く
ヤスク（ウ）ス　安くす
ヤスマル　休まる
ヤスミ　休（名）
ヤスラカニ　安らかに
ヤスラフ　休らふ（息ふ）
ヤスンズ　安んず

ヤドリ　宿り（名）
ヤハラカ　軟か　柔か
ヤハラカデ　軟かで　柔かで
ヤマル　止まる
ヤヤモスレバ　動もすれば
ヤンデ　止んで
ユキ　（奥）行（名）
ユタカニ　豐に
ユヅリワタス　讓り渡す
ユビサス　指さす
ユルガセニス　忽にす
ユルシ　許し　名）
ユルヤカニス　緩やかにす
ヨクス　能くす
ヨクス　善くす
ヨコギル　横ぎる

ヨコタハル　横たはる
ヨコタフ　横たふ
ヨセクル　寄せ來る
ヨセテ　寄手（の大將）
ヨツテ　依つて
ヨバハル　呼ばはる
ヨバフ　呼ばふ
ヨビ　（お）呼び（する）
ヨミ　讀み（名）
ヨロコバシイ　喜ばしい
ヨロコビ　喜（名）（喜びは否）
ヨロコビニ　（お）喜びに
ヨロシク　宜しく
ワガクニ　我が國
ワカス　沸かす
ワカス　湧かす

ワカツ　分つ
ワガハイ　我が輩
ワカヤグ　若やぐ
ワカレ　別れ（名）
ワケ　（手）分（根）分（名）
ワケメ　分け目
ワケル　分ける
ワスル　忘る
ワスレ　（物）忘（名）（物忘れは否）
ワタシ　渡（場）渡（守）（名）
ワタリ　（綱）渡り（名）
ワヅカニ　僅かに
ワヅラハシイ　煩はしい
ワヅラハス　煩はす
ワヅラヒ　煩ひ（名）

ワラヒ　（物）笑（名）（物笑ひは否）
ワラヒニ　（お）笑ひに
ワレ　（地）割れ（名）
ヱガク　畫がく（描く）
ヱマシイ　（微）笑ましい
ヲシイ　惜しい
ヲシム　惜しむ
ヲハリ　終（名）（終りは否）
ヲハンヌ　終んぬ　畢んぬ

以上は明治四十年、文部省國語調査委員會に於て制定したる「送假名法」および現行國定讀本に使用せる送假名の中、比較的まどひやすきもののみをあげたのである。

國語假名遣一覽表

イと發音されるい・ゐ・ひ

〔い〕おい(老) おいしい(美味) おほいに(大) かい(櫂) かうがい(笄) きさい(后) くい(悔) さいたま(埼玉) さいづち(小槌) さいはひ(幸) しいか(詩歌) たいまつ(松明) ついたち(朔日) ついぢ(築地) ついで(序) ついばむ(啄) ひいき(贔屓) ひいづ(秀づ) むいか(六日) むくい(報) やいば(刃)

〔ゐ〕あぢさゐ(紫陽花) あゐ(藍) いぬゐ(乾) うなゐ(髫髮) かたゐ(乞食) かもゐ(鴨居) くもゐ(雲居) くらゐ(位) くれなゐ(紅) くわゐ(慈姑) しきゐ(閾) しばゐ(芝居) たちゐ(起居) とのゐ(宿直) とりゐ(鳥居) なゐ(地震) はしゐ (端居) ひきゐ(率) まとゐ(團欒) まゐる(參) もとゐ(基) ゐ(井) ゐ(堰) ゐ(井) ゐ(猪・亥) ゐげた(井桁) ゐさふらふ(居候) ゐざり(躄) ゐなか(田舍) ゐま(居間) ゐもり(蠑螈) ゐや(禮) ゐる(居)

〔ひ〕右の外、語の中又は下にあるものは、およそ「ひ」と知るべし。但し、音便の「い」を除く。

ウと發音されるう・ふ

〔う〕あきうど(商人)　いもうと(妹)　ううる(植)　ううる(餓)　すうる(据)　おとうと(弟)　かうべ(神戸)　かうむる(蒙)　こうぢ(小路)　こうや(紺屋)　たうげ(峠)　てうづ(手水)　はうき(箒)　ひうが(日向)

〔ふ〕右の外、語の中又は下にあるものは、およそ「ふ」と知るべし。但し、音便の「う」を除く。

エと發音されるえ・ゑ・へ

〔え〕あまえ(甘)　いえ(癒)　おびえ(魘)　おぼえ(覺)　かのえ(庚)　きえ(消)　きこえ(聞)　きのえ(甲)　こえ(起)　こえ(肥)　こごえ(凍)　さえ(冴)　さかえ(榮)　さざえ(榮螺)　しづえ(下枝)　そびえ(聳)　たえ(絕)　つちのえ(戊)　つひえ(費)　つひえ(潰)　なえ(萎)　ながえ(轅)　にえ(煮)　ぬえ(鵺)　はえ(生)　はえ(鮠)　はえ(映)　ひえ(冷)　ひえ(稗)　ひこばえ(蘖)　ひのえ(丙)　ふえ(笛)　ふえ(殖)　ほえ(吠)　みえ(外見)　みづのえ(壬)　もえ(燃)　もえ(萌)　もえぎ(萌黃)

〔ゑ〕いしずゑ(礎)　うゑ(植)　うゑ(餓)　こずゑ(梢)　こゑ(聲)　すゑ(据)　すゑ(末)　すゑ(陶)　つゑ(杖)　つくゑ(机)　ともゑ(巴)　ゆゑ(故)　ゆゑん(所以)　ゑ(繪・畫)　ゑさ(餌)　ゑかう(回向)　ゑくぼ(靨)　ゑぐる(刳)　ゑた(穢多)　ゑふ(醉)　ゑぼし(烏帽子)　ゑむ(笑)　ゑんじゆ(槐)　ゑり(魞)　ゑる(彫)

〔へ〕右の外、語の中又は下にあるものは、およそ「へ」と知るべし。

オと發音される**お・を・ふ・ほ**

〔を〕あを（靑） あを（襖） いさを（功） うを（魚） かつを（鰹） かをり（薫） かをる（薫） さを（竿） しをり（栞） しをる（萎） たをる（手折） つづらをり（九折坂） とを（十） ばせを（芭蕉） みさを（操） みを（水脈） みをつくし（澪標） めをと（夫婦） やをら（徐） わざをぎ（俳優） を（小） を（雄） を（男） を（岑） を（尾） を（緒） を（苧） をか（岡・丘） をかし（可笑） をかす（犯） をがむ（拜） をぎ（荻） をけ（桶） をさ（長） をさなし（幼） をさむ（納・收・修・治） をさをさ をしどり（鴛鴦） をしふ（教） をしむ（惜） をしやう（和尙） をそ（獺 をたけび（雄叫） をち（遠） をぢ（伯・叔・小父） をちど（越度） をつと（夫） をとこ（男） をどす（縅） をととし（一昨年） をととひ（一昨日） をとめ（少女） をどり（踊） をの（斧） をのこ（男） をののく（戰慄） をば（伯・叔・小母） をはり（終） をはる（終） をひ（甥） をみなへし（女郎花） をめく（喚く） をり（節） をり（檻） をる（折） をる（居） をろち（大蛇） ををしい（雄雄） をんな（女）

〔ふ〕あふぎ（扇） あふぐ（仰） あふさか（逢坂） あふひ（葵） あふみ（近江） あふり（煽） あふる（煽） さふらふ（候） たふとし（尊・

貴） たふる（倒）
（この例にはハ行の動詞の「ふ」を除く）

〔お〕 右の外、語の上にあるものは、およそ「お」と知るべし。

〔ほ〕 右の外、語の中又は下にあるものは、およそ「ほ」と知るべし。

ジと發音されるじ・ぢ

〔ぢ〕 あぢ（鰺） あぢ（味） あぢきない（味氣無） あぢさゐ（紫陽花） あぢはひ（味） いそぢ（五十） いぢめ（虐） いぢめる（虐） うぢ（氏） おぢ（怖） おほぢ（大路） かうぢ（麹） かぢ（楫・舵） かぢ（梶・構） かぢ（鍛冶） くぢら（鯨） こうぢ（小路） ことぢ（琴柱） すぢ（筋） ぢ（路・道） ちぢ（千千） ぢぢい（爺） ちぢむ（縮） とぢる（閉） なめくぢ（蛞蝓） なんぢ（汝） ねぢ（鋲） ねぢける（佞） ねぢる（捩） のぢ（野路） はぢ（恥） はぢる（恥） ふぢ（藤） もみぢ（紅葉） みそぢ（三十） むそぢ（六十） やそぢ（八十） よそぢ（四十） わらぢ（草鞋）

〔じ〕 右の外は、およそ「じ」と知るべし。

ズと發音されるず・づ

〔ず〕 あらず（非） あんず（杏） いしずゑ（礎） かず（數） かならず（必） かるはずみ（輕佻） きず（傷） くず（葛） こずゑ（梢） ず（不） ずさ（從者） すず（鈴） すず（錫） すず（數珠） じゆず（數珠） すずき（鱸）

すずし(涼) すずな(菘) すずむ(涼) すずめ(雀) すずり(硯) すずろ(漫) たたずむ(佇) なずらふ(準) ねずみ(鼠) はず(筈・弭) はずみ(機) はずむ みみず(蚯蚓) もず(百舌) ゆず(柚)
(打消は、すべて「ず」)

〔づ〕右の外は、およそ「づ」と知るべし。

ワと發音されるわ・は

〔わ〕あわ(泡) あわただし(惶急) あわつ(周章) あわゆき(沫雪) うわる(植) おひわけ(追分) いひわけ(言譯) いわし(鰯) いわけなし(稚) いわる(弱) かよわし(虚弱) かわく(乾) くつわ(轡) くるわ(廓) くわゐ(慈姑) ことわざ(事業) ことわざ(諺) ことわり(理) ことわる(斷) こわいろ(聲色) こわね(聲音) さわがし(騷) さわぐ(騷) さわやか(爽) さわやぐ(爽) さわらび(早蕨) しわ(皺) しわけ(仕譯) しわざ(仕業) しわし(吝嗇) すわる(坐) たわむ(撓) たわやめ(嬋娟女) のわき(野分) はらわた(腸) ひわ(鶸) よわし(弱) よわる(弱)

〔は〕右の外は、およそ「は」と知るべし。但し語の上に於て、「は」は「わ」と發音されることなし。

長音・拗音

イー　いい(善) いいえ(否) 他は「いひ」と知

るべし。

エー　ゑひ（醉）　他は「**えい**」と知るべし。

オー　あふぎ（扇）　あふぐ（仰）、あふさか（逢坂）　あふさきるさ（會離）　あふち（樗）　あふみ（近江）　おうな（嫗）　おうい（呼び聲）　おふし（啞）　ををし（雄）

右の他は、およそ「**おほ**」と知るべし。

コー　かうがい（笄）　かうし（格子）　かうじ（柑子）　かうぢ（麹）　かうつけ（上野）　かうばし（香）　かうぶり（冠・被）　かうべ（神戸）　かうべ（頭）　かうぼね（河骨）　かうむる（被・蒙）　なかうど（仲人）　わかうど（若人）　おほかふち（大河内）　むかふ（向）　あかほ（赤穗）　こうぢ（小路）　こうや（紺屋）　こふづ（國府津）

右の他は、およそ「**こほ**」と知るべし。

ソー　さうして（而）　うれしさう　さふらふ（候）

トー　たうげ（峠）　たふとし（尊）　おとうと（弟）　とうとう　とを（十）

右の他は、およそ「**とほ**」と知るべし。

ニー　にひ（新）

ノー　のう（呼掛の語）　きのふ（昨日）　そのふ（園生）

ホー　はうき（箒）　はうむる（葬）　ほうご（反古）

右の他は、およそ「ほほ」と知るべし。

モー　まうく（設）　まうけ（設）　まうす（申）　ま
うづ（詣）
がまふ（蒲生）　すまふ（相撲）
まをか（眞岡）
いもうと（妹）　もう濟みました

ユー　ゆふべ（夕・昨夜）

ヨー　やうか（八日）　やうやう（漸）
見よう　起きよう　出かけよう
もよほす（催）

ルー　うるふ（潤）

ロー　まらうど（客）　かげろふ（陽炎・蜉蝣）
くろうと（玄人）　しろうと（素人）

キュー　あきうど（商人）

ギュー　よもぎふ（蓬生）　やぎふ（柳生）

シュー　しうと（舅）　しうとめ（姑）

ジュー　こじうと（小舅）

キョー　けうとし（氣疎）
けふ（今日）

ショー　しませう　せうと（兄）
ああしよう　かうしよう

ジョー　どぢやう（鰌）

チョー　てうづ（手水）
いてふ（鴨脚樹）

ニョー　にようばう（女房）

ヒョー　ひやうし（拍子）

ミョー　めうと（夫婦）

リョー　うれふ（憂ふ）

〔注意〕本表には、動詞・形容詞の「う音便」
および、ハ行の動詞の「ふ」を長音に
發する場合を概ね省いた。

字音假名遣一覽表

イと發音される**い・ゐ**

〔**ゐ**〕位委倭萎痿逶韋偉葦圍幃違緯
爲畏威遺彙胃渭謂蝟尉蔚慰唯
帷惟維洧鮪

〔**ゐき**〕或域棫閾

〔**ゐん**〕員韻隕殞尹院

〔注意〕「す」「つ」「ゆ」「る」の音の下は、すべて「ゐ」の假名と知るべし。水（すゐ）追（つゐ）唯（ゆゐ）類（るゐ）の如し。

〔**い**〕右の外は、およそ「**い**」と知るべし。

エと發音される**え・ゑ**

〔**ゑ**〕回廻迴惠會繪慧穢烏衞

〔**ゑい**〕衞

〔**ゑつ**〕曰越鉞

〔**ゑん**〕圓袁園遠猿轅宛怨苑菀婉蜿
鴛爰援猨湲媛寃

〔**え**〕右の外は、およそ「**え**」を知るべし。

オと發音される**お・を**

〔**を**〕烏嗚塢惡汙汚洿乎呼

〔をく〕屋

〔をち〕越（例、越度（をちど））

〔をつ〕越嘔膃

〔をん〕溫遠園怨苑菀穏

〔お〕右の外は、およそ「お」と知るべし。

オーと發音されるおう・おふ・をう・あう・あふ・わう

〔おう〕應鷹嘔歐毆鷗甌謳（等）

〔おふ〕邑挹悒（等）

〔をう〕翁蓊瓮甕（等）

〔あふ〕凹押狎鴨壓（等）

〔わう〕王汪枉旺尪往皇凰黃橫（等）

〔注意〕天皇（てんのう）親王（しんのう）と書く。但し、皇子（わうじ）王子（わうじ）と書く。

〔あう〕右の外、およそ「あう」と知るべし。例へば、「奥州」「中央」「櫻花」「老鶯」「鸚鵡」の如し。

カとクワ

〔くわ〕戈火瓜化花訛貨華嘩譁禾和科果菓課夥窠渦禍過蝸窩寡

〔くわい〕快怪潰壞懷悔晦誨灰恢詼回徊廻蛔傀塊魁槐會繪膾

〔くわく〕擴畫劃馘霍獲穫攫矍

〔くわつ〕活括刮闊猾滑豁

〔くわん〕卷寛關緩湲完莞浣貫慣串患喚換煥官菅管棺館桓冠還環壎圜寰勸灌觀鑵罐懽欵

〔か〕右の外は、「か」と知るべし。

ガとグワ

〔ぐわ〕瓦臥畫
〔ぐわい〕外
〔ぐわつ〕月
〔ぐわん〕丸元玩頑翫願
〔が〕右の外は、「が」と知るべし。

キューと發音されるきう・きゆう・きふ

〔きゆう〕宮弓穹躬窮
〔きふ〕泣急給翕歙及汲吸級笈岌
〔きう〕右の外は、「きう」と知るべし。たとへば、「九久仇丘休臼朽求舊」の如し。

ギュー

〔ぎう〕すべて「ぎう」の假名。たとへば「牛」の如し。

キョーと發音されるきやう・きよう・けう・けふ

〔きよう〕凶兇匈恟胸共供拱恭鬨蛬龔兢興邛矜
〔けう〕叫敎喬橋嬌驕僑矯梟
〔けふ〕協脅夾俠狹挾峽莢鋏頰篋叶劫怯

〔きやう〕右の外は、およそ「きやう」と知るべし。例へば、「兄京享匡杏狂況強郷卿境鏡競」の如し。

ギョーと發音されるぎやう・ぎよう・げう・げふ

〔ぎよう〕凝喁顒

〔げう〕堯僥澆曉驍翹磽

〔げふ〕業鄴

〔ぎやう〕右の外は、「ぎやう」と知るべし。例へば、「行仰」の如し。

コーと發音されるかう・こう・かふ・こふ・くわう

〔こう〕口扣叩鉤苟釦工功攻紅虹訌貢鴻杠扛項公弘侯候喉猴后垢逅詬孔吼厚亙恆姮寇後興薨勾鈎洪哄鬨控空倥溝構購媾遘

〔かふ〕甲匣岬狎合洽恰閤蛤袷

〔こふ〕劫怯

〔くわう〕光恍晃滉胱觥皇惶徨煌湟篁煌遑廣礦鑛曠黃黌荒

〔かう〕右の外は、「かう」と知るべし。例へば、「江巧肛港講行孝考効香」の如し。

ゴーと發音されるがう・がふ・ごふ

〔がふ〕合

〔ごふ〕業劫

〔がう〕右の外は、「がう」と知るべし。例へば、

「强郷豪號傲」の如し。

ジと發音されるじ・ぢ

〔じ〕字寺侍特時塒蒔自耳事兒二貳次茨爾邇璽示氏玆孳慈滋磁辭似
〔ぢ〕治持峙痔除（掃除）膩怩
〔じき〕食（乞食）
〔ぢき〕直（正直）
〔ぢく〕竺軸舳忸
〔じつ〕日食
〔ぢつ〕昵（昵懇）
〔じん〕人仁神尋盡燼訊迅刃仞甚腎
〔ぢん〕陣塵

ジヤと發音されるじや・ぢや

〔じや〕蛇邪闍麝
〔じやく〕若惹弱搦雀昔惜鵲籍寂石
〔ぢや〕右の外は、およそ「ぢや」と知るべし。

ジユと發音されるじゆ・ぢゆ

〔じゆ〕受授綬需繻儒孺濡就咒竪豎樹從誦入壽
〔じゆく〕孰塾熟粥宿
〔じゆつ〕述術戌恤賉卹
〔じゆん〕惇淳醇鶉純順巡馴旬徇洵殉詢筍閏潤盾循楯隼準凖雋遵
〔ぢゆ〕右の外は、およそ「ぢゆ」と知るべし。

ジョーと發音されるじよ・ぢよ

〔じよ〕如恕絮助鋤序徐叙汝
〔ぢよ〕女除抒
〔じよく〕辱蓐褥
〔ぢよく〕濁匿慝

シューと發音されるしう・しゆう・しふ

〔しゆう〕主宗衆終聚
〔しふ〕拾習慴摺褶集輯揖楫葺執襲
〔しう〕右の外は、およそ「しう」と知るべし。
例へば、「州洲囚收修舟秀秋酋祝
臭袖就周週醜讐驟」の如し。

ジューと發音されるじう・じゆう・じふ・ぢゆう

〔じう〕獸柔揉蹂
〔じゆう〕銃從縱戎絨充
〔じふ〕十汁
〔ぢゆう〕住重中

ショーと發音されるしやう・しよう・せう・せふ

〔しよう〕升昇承勝澄誦稱松訟頌鬆
衝踵鍾腫
〔せう〕小少抄鈔召沼招昭照詔紹笑
燒椒蕭簫嘯瀟焦蕉樵礁醮肖消
硝稍霄哨逍

〔せふ〕妾渉捷睫

〔しやう〕右の外は、およそ「しやう」と知るべし。例へば、「正生上匠庄昌唱相省商祥章象傷賞檣」の如し。

ジョーと發音されるじやう・じよう・ぜう・ぢやう・でう・でふ

〔じよう〕丞蒸極冗縄乘剰仍

〔ぜう〕擾饒繞蕘遶

〔ぢやう〕丈場諚孃

〔でう〕條

〔でふ〕疊帖

〔じやう〕右の外は、およそ「じやう」と知るべし。

ズと發音されるず・づ

〔ず〕受從數壽誦手

〔ずゐ〕隋隨瑞惴蕊

〔づ〕右の外は、およそ「づ」と知るべし。

ソーと發音されるさう・そう・さふ

〔そう〕走宋宗崇綜蹤淙總聰窓曾層僧送奏藪湊嗽漱叢叟

〔さふ〕挿颯

〔さう〕右の外は、およそ「さう」と知るべし。

ゾーと發音されるざう・ぞう・ざふ

〔ぞう〕增贈憎

〔ざふ〕雜
〔ざう〕右の外は、およそ「ざう」と知るべし。

チューと發音されるちゆう・ちう

〔ちゆう〕中仲忠冲沖忡衷蟲柱注註
駐誅蛛株鑄廚蹰偸鍮
〔ちう〕丑肘宙抽胄冑稠

チョーと發音されるちやう・ちよう・てう・てふ

〔ちよう〕重澄徵懲寵
〔てう〕朝嘲潮鳥兆佻挑誂眺銚晁超
凋彫調惆蜩釣弔趙肇
〔てふ〕蝶喋牒諜帖貼

〔ちやう〕上の外は、およそ「ちやう」と知るべし。

トーと發音されるたう・とう・たふ

〔とう〕東凍棟冬投豆逗頭登燈澄鄧
鐙桐透等統藤籐滕騰謄董鬪
〔たふ〕沓踏答塔搭剳納（出納）榻蹋
〔たう〕右の外は、およそ「たう」と知るべし。

ドーと發音されるだう・どう・だふ

〔どう〕同洞銅胴恫動働慟童瞳撞僮
憧
〔だふ〕衲
〔だう〕右の外は、およそ「だう」と知るべし。

ニューと發音されるにう・にゆう・にふ

〔にう〕柔

〔にゆう〕乳

〔にふ〕入

ニョーと發音されるによう・ねう

〔によう〕女

〔ねう〕尿

ノーと發音されるのう・なう・なふ

〔のう〕能農濃膿

〔なう〕腦惱瑙曩囊

〔なふ〕納衲

ヒョーと發音されるひやう・ひよう・へう

〔ひよう〕氷冰馮憑

〔へう〕表俵票剽漂瓢標飄豹

〔ひやう〕右の外は、およそ「ひやう」と知るべし。

ビョーと發音されるびやう・べう

〔べう〕秒眇渺苗描猫廟

〔びやう〕右の外は、「びやう」と知るべし。

ホーと發音されるはう・ほう・はふ・ほふ

〔**ほう**〕奉俸捧朋崩硼鵬封幇峯逢烽蓬縫蜂鋒豊鳳

〔**はふ**〕法（法律・法人）

〔**ほふ**〕法（法會・法師）

〔**はう**〕右の外は、「**はう**」と知るべし。

ボーと發音されるばう・ぼう・ぼふ

〔**ぼう**〕矛袤某謀眸貿剖棒

〔**ばふ**〕乏（缺乏・貧乏）

〔**ばう**〕右の外は、「**ばう**」と知るべし。

ミョーと發音されるみやう・めう

〔**みやう**〕名明命冥

〔**めう**〕妙苗猫貌

モーと發音されるまう・もう

〔**もう**〕蒙朦艨濛

〔**まう**〕右の外は、「**まう**」と知るべし。

ユーと發音されるいう・いふ・ゆう

〔**いふ**〕揖熠邑挹悒

〔**ゆう**〕勇雄融

〔**いう**〕右の外は、「**いう**」と知るべし。

ヨーと發音される**やう・よう・えう・えふ**

〔よう〕 用踊俑容溶熔鎔蓉庸傭雍擁

〔えう〕 要腰幼拗窈杳夭妖殀徭搖謠遙曜燿耀

〔えふ〕 葉

〔やう〕 右の外は、「**やう**」と知るべし。

リューと發音される**りう・りゆう・りふ**

〔りう〕 流琉硫旒柳留溜榴瘤劉

〔りゆう〕 隆龍

〔りふ〕 立（建立）粒笠

リョーと發音される**りやう・りよう・れう・れふ**

〔りよう〕 菱凌陵稜綾崚

〔れう〕 了料聊僚寮遼療

〔れふ〕 獵漁

〔りやう〕 右の外は、およそ「**りやう**」と知るべし。

ローと發音される**らう・ろう・らふ**

〔らう〕 老郎朗廊螂牢浪勞

〔ろう〕 弄瀧籠壟聾朧隴瓏陋漏樓

〔らふ〕 蠟臘臈拉

文法一覽表

	種類	例語
名詞（事物の名をあらはす語）	普通名詞	山 川 天 地 人 手 足 赤 青 春 秋 東 西 舟 車 刀 忠 孝 心 夢 魂 影 マッチ ビール インク 悲しみ 樂しみ 厚さ 高さ 赤み 見せしめ 懲らしめ
	固有名詞	富士山 隅田川 東京 ロンドン 楠木正成 草薙劍 源氏物語 大阪城 明治 日比谷公園 三越呉服店
數詞（數量や順序をあらはす語）	數量數詞	一二百千萬 ひとつ ふたつ ももちよろづ 一個二個 一人二人 一羽二羽 一本二本 一枚二枚 一册二册
	順序數詞	第一第二 一番二番 一つめ二つめ 一合目二合目 一等二等 一着二着 一席二席 一級二級 一號二號

代名詞
（人・事物・場所・方向を指す語）

種類	例語			
	自稱	對稱	他稱	不定稱
人代名詞	わ われ おのれ 私 僕 余 拙者	汝 君 あなた おまへ	かれ あれ あいつ	だれ どなた どいつ
	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物代名詞	こ これ	そ それ	あ あれ	ど どれ
場所代名詞	ここ	そこ	あそこ かしこ	いづこ どこ
方向代名詞	こなた こち こつち こちら	そなた そち そつち そちら	かなた あなた あつち あちら	いづかた いづち どつち どちら

注意一 名詞・數詞・代名詞を體言といふ。體言は語尾の變化することなし。

注意二 代名詞を漢字で書く時には、送假名を要せず。「己れ」「彼れ」「君み」「私し」などはよくない。

注意三 代名詞と助詞とを一字の漢字でかきあらはすはよくない。例へば、「我が國」「此の本」「其の人」の如く書くべきである。そして、實は假名の方がよい。「わが」「この」「その」の如くに書く。

種類	活行	例語
四段活用	カ行	明く 欺く 歩く 行く 抱く 戴く 嘶く 浮く 動く 嘯く 置く 驚く 書く 輝く 乾く 聞く 築く 砕く 咲く 裂く 敷く 退く 好く 透く 塞く 背く 焚く 叩く 着く 突く 續く 貫く 解く 轟く 泣く 歎く 靡く 抜く 除く 吐く 掃く 省く 彈く 引く 響く 開く 閃く 吹く 拭く 捲く 蒔く 招く 磨く 導く 向く 焼く 沸く わななく
	ガ行	仰ぐ 喘ぐ 急ぐ うすらぐ 泳ぐ 嗅ぐ 炊ぐ 漕ぐ 騒ぐ さわやぐ

種類	活行	例語
四段活用	ガ行	殺ぐ 注ぐ そよぐ たじろぐ 繼ぐ 繋ぐ 研ぐ 脱ぐ 剝ぐ 塞ぐ 防ぐ 貢ぐ やはらぐ ゆらぐ
	サ行	明かす 餘す あらはす 活かす 致す 動かす 移す 俯す 促す 潤す 押す 起す 落す おどす おどかす 驚かす おびやかす 思す 思召す 及ぼす 下す 坐す 貸す 隠す かざす 替はす 返す 通はす 枯らす 乾かす 聞食す 萌す 消やす 下す 崩す 暮す 消す 穢す 越す 焦す 志す こぼす 懲らす 殺す 挿す 指す

四段活用

タ行	サ行
打つ　穿つ　勝つ　こぼつ　育つ	さがす　諭す　醒す　晒す　示す　すます　記す　知召す　すかす　過す　唆す　出す　糺す　正す　倒す　試す　漂はす　散らす　遣はす　盡くす　費やす　つぶす　照らす　とざす　轟かす　ともす　爲す　流す　靡かす　直す　惱ます　鳴らす　ならす　馴らす　逃がす　匂はす　濡らす　ねざす　殘す　延ばす　果す　外す　囃す　晴らす　放す　浸す　響かす　臥す　降らす　干す　施す　亡ぼす　増す　迷はす　紛らはす　坐す　廻す　申す　惑はす　亂す　召す　廻らす　戻す　漏らす　もてなす　催す　やつす　宿す　許す　わかす　渡す

四段活用

ハ行	ナ行	タ行
あきなふ　あげつらふ　あざわらふ　扱ふ　あひしらふ　洗ふ　爭ふ　言ふ　いこふ　誘ふ　厭ふ　祝ふ　窺ふ　失ふ　うたふ　從ふ　占なふ　奪ふ　うやまふ　負ふ　行ふ　襲ふ　おほふ　思ふ　補ふ　買ふ　語らふ　叶ふ　通ふ　競ふ　嫌ふ　食ふ　喰ふ　狂ふ　乞ふ　逆らふ　誘ふ　さまよふ　慕ふ　從ふ　しつらふ　吸ふ　救ふ　住まふ　添ふ　そこなふ　揃ふ　給ふ　違ふ　使ふ　償ふ　繕ふ　集ふ　衒ふ　問ふ　調ふ　とぶ	死ぬ○（この一語のみ）文語は、ナ行變格活用になる。	立つ　起つ　斷つ　保つ　放つ　ひとりごつ　待つ　持つ　分つ

四段活用

ハ行

らふ　件なふ　なぞらふ　習ふ
賑ふ　擔ふ　匂ふ　縫ふ　願ふ
勞ふ　拭ふ　宣ふ　のろふ　這ふ
計らふ　拂ふ　拾ふ　振るふ　諂
ふ　舞ふ　賄ふ　紛らふ　まじた
ふ　まとふ　惑ふ　賄ふ　迷ふ　向
かふ　貰ふ　養ふ　休らふ　雇ふ
結ふ　よそふ　寄合ふ　煩ふ　笑ふ
醉ふ

バ行

浮かぶ　帶ぶ　轉ぶ　叫ぶ　忍ぶ
飛ぶ　並ぶ　運ぶ　學ぶ　轉ぶ　結
ぶ　咽ぶ　呼ぶ　喜ぶ

マ行

編む　赤む　赤らむ　憐む　怪しむ
危ぶむ　歩む　青む　忌む　勇む
痛む　いつくしむ　挑む　營む　生
む　産む　績む　埋む　疎む　羨む

四段活用

マ行

嚙む　屈む　圍む　霞む　悲しむ
刻む　組む　汲む　くやむ　苦しむ
黒む　窪む　込む　沈む　萎む　白
む　澄む　濟む　荒む　進む　涼む
染む　そねむ　たくむ　たくらむ
嗜む　たたむ　賴む　樂しむ　撓む
彳む　縮む　積む　摘む　つかむ
愼む　謹む　蓄む　富む　慰む　な
づむ　惱む　憎む　睨む　盜む　妬
む　飲む　望む　はぐくむ　挾む
勵む　ひがむ　潛む　ひるむ　踏む
病む　止む　休む　歪む　緩む　讀
む　淀む　拜む　惜しむ

ラ行

有る　上る　あさる　嘲る　當る
あたたまる　あつまる　あなどる
あぶる　餘る　あやかる　あらたま
る　誤る　煎る　怒る　憤る　至る

四段活用

ラ行

いたはる　僞る　祈る　彩る　賣る　蹲る　織る　贈る　送る　奥まる　起る　怒る　奢る　怠る　劣る　おもねる　狩る　刈る　かかる　屈まる　限る　被る　翔る　陰る　飾る　かしこまる　重なる　語る　固る　代る　歸る　薫る　切る　來る　繰る　絞る　潛る　腐る　下る　くつがへる　配る　加はる　曇る　くすぶる　蹴る○　削る　ことわる　凍る　こもる　去る　溯る　下る　探る　定まる　授かる　悟る　囀る　知る　叱る　茂る　滴る　縛る　絞る　濕る　摺る　すする　辷る　すわる　剃る　反る　そしる　染まる　助かる　祟る　たどる　たよる　溜る　散る　契る　作る　つづまる　募る

四段活用

ラ行

積る　連なる　釣る　照る　取る　滯る　通る　留る　鳴る　成る　名乘る　なぶる　なぐる　直る　訛る　握る　濁る　にぶる　塗る　練る　ねぶる　眠る　乘る　殘る　罵る　登る　張る　計る　始る　走る　はばかる　はびこる　光る　ひたる　ひねる　ひろまる　降る　振る　耽る　塞がる　掘る　誇る　迸る　屠る　まじる　まじはる　守る　參る　實る　貪る　洩る　盛る　もどる　遣る　休まる　宿る　破る　ゆする　讓る　寄る　歸る　割る　分る　渡る　わだかまる　折る　居る○（をる）　踊る　終る

○印、文語では、「有る」「居る」はラ行變格活用、「蹴る」は下一段活用。

上一段活用

行	語例
ア行	射る 鑄る
カ行	飽きる○ 生きる 起きる 着る 盡きる ○印、「飽きる」は、文語では四段活用「飽く」となる。
ガ行	過ぎる
サ行	察しる 熱しる
ザ行	案じる 損じる 通じる 判じる
タ行	落ちる 朽ちる 滿ちる
ダ行	怖ぢる 閉ぢる 捻ぢる 恥ぢる 攀ぢる
ナ行	似る 煮る
ハ行	生ひる 強ひる 用ひる 干る 簸る 放る

上一段活用

行	語例
バ行	浴びる おとなびる 帯びる 媚びる のびる 綻びる 亡びる 詫びる
マ行	うしろみる おもんみる かへりみる かんがみる こころみる 見る
ヤ行	老いる 悔いる 報いる （この三語のみ）
ラ行	下りる 借りる○ 懲りる 足りる○ ○印、「借りる」「足りる」は、文語では四段活用「借る」「足る」となる。
ワ行	居る 率ゐる 用ゐる（「用ひる」の方可）

下一段活用

行	語例
ア行	得る 心得る
カ行	明ける 預ける 活ける 受ける 掛ける 缺ける 碎ける 避ける 授ける 退ける 背ける 助ける

下一段活用

カ行	ガ行	サ行	ザ行	タ行
手向ける 附ける 續ける 解ける 名づける 拔ける 退ける 開ける 更ける 負ける 設ける 向ける 燒ける 避ける 分ける	擧げる 揚げる 捧げる 妨げる たひらげる 告げる 遂げる 投げる 逃げる 剝げる 提げる ひろげる 曲げる やはらげる	合はせる 失せる 仰せる 着せる 似せる 載せる 馳せる 伏せる 任せる 參らせる 見せる 咽せる 瘦せる 寄せる	交ぜる（この一語のみ）	當てる 宛てる あわてる 企てる 捨てる 育てる 立てる 隔てる 滿てる

下一段活用

ダ行	ナ行	ハ行	バ行
出る 奏でる 撫でる 秀でる 詣でる 煠でる	寢る 重ねる 兼ねる 尋ねる 束ねる 列ねる 撥ねる 委ねる	與へる 誂へる 訴へる 抑へる 衰へる 換へる 數へる 叶へる 構へる 考へる 加へる 拵へる 答へる 支へる 添へる 揃へる 堪へる 違へる 貯へる 湛へる 携へる 蓄へる 違へる 仕へる 傳へる 調へる 唱へる 捕へる ながらへる なぞらへる 控へる 經る まじへる 迎へる わきまへる 終へる 敎へる 憂へる	くべる くらべる 調べる 統べる 食べる 並べる 延べる 述べる

下一段活用

マ行

崇める　暖める　改める　諫める　誡める　掠める　からめる　極める　きめる　清める　苦しめる　込める　さめる　定める　占める　閉める　認める　鎮める　沈める　進める　責める　染める　初める　溜める　撓める　たしなめる　たわめる　ちりばめる　勤める　力める　留める　止める　咎める　なめる　慰める　なだめる　はじめる　早める　潛める　ひろめる　深める　ほめる　認める　求める　止める　休める　ゆがめる　治める　修める

ヤ行

甘える　癒える　おびえる　覺える　消える　聞える　越える　肥える　冴える　榮える　聳える　絕える　潰える　萎える　生える　映える

下一段活用

ヤ行

冷える　殖える　吠える　見える　見える　燃える　萌える　悶える

ラ行

呆れる　憧れる　暴れる　溢れる　現れる　荒れる　入れる　浮かれる　生まれる　埋れる　埋もれる　後れる　恐れる　訪れる　溺れる　隱れる　枯れる　切れる　暮れる　崩れる　汚れる　こがれる　こぼれる　しぐれる　知れる　萎れる　勝れる　廢れる　垂れる　ただれる　戯れる　倒れる　連れる　疲れる　つぶれる　慣れる　流れる　濡れる　のがれる　晴れる　腫れる　離れる　觸れる　ふくれる　惚れる　紛れる　塗れる　亂れる　むすぼれる　漏れる　破れる　分れる　別れる　忘れる　割れる　折れる

カ行變格活用

ワ行	植ゑる　飢ゑる　据ゑる （この三語のみ）
カ行	來る（この一語のみ） 「こ　き　くる　くる　くれ　こい」と活用する。

サ行變格活用

サ行	爲る（この一語のみ） 「せ/し　し　する　する　すれ　せよ/しろ」と活用する。 但し、「する」は、名詞・副詞その他の語と結合して、いくらでも熟語動詞をつくる。 〔例〕噂する　物する　高くする　低くする　勉强する　運動する　旅行する　命ずる　アウトする　ノックする　チヤームする

（口語）形容詞（事物の性質や情態をあらはす語）

種類	例語
（第一類）	赤い　淺い　暖い　熱い　厚い　淡い　甘い　危い　靑い　潔い　幼い　薄い　うまい　疎い　うるさい　遲い　多い　重い　堅い　難
（第二類）	新しい　怪しい　荒々しい　勇ましい°　いぶかしい　忌々しい　賤しい　美しい　恨め°しい　うるはしい　嬉しい　おとなしい　同じ

い　痒い　辛い　輕い　きたない　清い　臭い　暗い　黒い　濃い　快い　寒い　悧い
澁い　白い　狭い　高い　偉い　近い　拙い
强い　遠い　無い　長い　苦い　眠い　早い
低い　廣い　深い　古い　圓い　短い　めでたい　安い　易い　緩い　弱い　善い　若い
惡い　幼い

志久活用

い　夥しい　苦しい　險しい　事々しい　寂しい　騒がしい〇　親しい　すさまじい　涼しい　忙しい　逞しい　正しい　樂しい　長々しい　苦々しい　願はしい〇　烈しい　甚だしい〇　久しい　等しい　ひもじい　ふさはしい
欲しい　まぎらはしい　珍しい　優しい　ゆかしい　宜しい　煩はしい〇　をかしい　をこがましい　惜しい　男々しい

注意一　動詞と形容詞とを併せて用言といふ。用言の語尾は變化する。

注意二　文語の形容詞は、久活用は「く、し、き、けれ」と活用し、志久活用は「しく、し、しき、しけれ」と活用する。口語は、それぞれ「く、い、けれ」「しく、しい、しけれ」と活用する。

注意三　形容詞の送假名は、原則としては、久活用は「く、い、けれ」から、志久活用「しく、しい、しけれ」からする。但し、表中〇印のある語の如く、他の品詞から轉じたものは、もとの品詞の送假名の一部分を、そのままうけつぐ。

注意四　随つて、新らしい、珍らしい、樂のしい、嬉れしい、などと書かない方がよい。

（口語）助動詞

（主として動詞に添うてその意義を助く。又他の助動詞に添ふこともあり、稀には名詞・代名詞・助詞に添ふこともある。）

種類	例語
時	昨日雨が降つた。（過去）（たら て た たれ）
	祖父は昨年死んだ。（過去）（だら で だ だれ）
	丁度風が靜まつた。（完了）（たら て た たれ）
	やがて櫻も散らう。（未來）（活用せぬ）
	あれも來年は卒業しよう。（未來）（活用せぬ）
	明日にでも行くことにしよう。（未來）（同）
打消	雨は降らぬ。（ず ぬ ね）
	風も吹かん。（ぬの變化）
	花は散らない。（なく ない なけれ）
	人も來なかつた。（なから なかつ）

種類	例語
	今日は出かけまい。（活用せぬ）
推量	明日は多分雨が降らう。（活用せぬ）
	彼は定めし後悔してゐよう。（活用せぬ）
	多分あの邊にあるらしい。（らしく らしい）
受身	猫が犬に追はれる。（れ れる れれ れよ）
	太郎が父に叱られる。（同上）
	花子が母にほめられる。（られ られる られれ られよ）
可能	一日五十頁は讀まれる。（受身の場合と同じ）
	一日に十里は歩ける。（れる れ が上の動詞と結びついて約まつたもの）
	今日の中に屆けられる。（受身の場合と同じ）

使役	
	書生に手紙を書かかせる。（せ　せる　せれ　せよ）
	子供に手紙を屆けさせる。（させ　させる　させれ　させよ）
	かはい子には旅をさせる。（サ行變格のせにさせるが續き、せさせるが約まつて、させるとなる）
	はい、私が致します。（ませ　まし　ます　まする）
指定	これは僕の本だ。（だら　で　だつ　だ）
	これは私の本です。（でせ　で　でし　です）
	これは我が輩の書物ぢや。（一種の方言）
尊敬	父はよくさう言はれる。（受身の場合と同じ）
	母は今出かけられる。（同上）
	先生は常に讀書される。（讀書せられるの約まつたもの）
希望	ああ早く海へ行きたい。（たく　たい　たけれ）
	不思議に君に逢ひたかつた。（たから　たかつ）

副詞（動詞・形容詞又は他の副詞又は述語・形容句・副詞句に添うて、その意義を限定す）

例語	例語
靜かに語る。（動詞「語る」を限定す）	よくしやべる。（動詞「しやべる」を限定す）

非常に大きい。（形容詞「大きい」を限定す）
ひどく苦しい。（形容詞「苦しい」を限定す）
いと靜かに歩む。（副詞「靜かに」を限定す）
たいそう早く走る。（副詞「早く」を限定す）
決してあせつてはならぬ。（述語「あせつてはならぬ」を限定してゐる）
たつた一日のちがひで……。（形容句「一日の」を限定してゐる）
わづかに十秒の差で敗れた。（副詞句「十秒の差で」を限定してゐる）

接續詞（語句のつなぎに用ひる語）

種類	例語
並列・累加	また　かつ　なほ　および　いはんや　まして　その上　さうして　そして　それに　それから
選擇	または　あるひは　若しくは　それとも

種類	例語
反意	されども　然れども　但し　併し　尤も　ところが　しかしながら　さりながら　けれども　だが　が
原因・理由	然らば　然れば　さらば　されば　故に　隨ひて　因りて　間　それゆゑ　それで　それなら　さうすると　すると　そこで

感動詞（事物に感動して發する語）

種類	例語
文のはじめにつくもの	ああ　あな　あはれ　いざ　いで　すは　や よ　あら　あれ　いいえ　いえ　ええ　おい おお　おや　こら　これ　さあ　さて　そら それ　どりや　どれ　なに　なあに　はい まあ　やあ　やれ　やれやれ
文のをはりにつくもの	あな悲しや。すは一大事よ。吾妻はや。あはれ悲しも。回や賢なるかな。あはれ悲しきかも。つらき別れのなくもがな。花見に行かばや。力めよかし。大變ですよ。どうも困りましたな。ようお出で下さいましたね。そんなことでは困りますぜ。大變なことになりましたぞ。

助詞（體言・用言又はその他の語に添うて下の語句との關係を示す語）

種類	例語
體言に添	の　が　を　に　へ　と　より　から　まで にて　で 兄の帽子　米のなる木　我が國　本を讀む
はる助詞	山に登る　東京へ出る　海と山　子供と遊ぶ 遠方より來る　花より團子　兄から來た手紙 明日まで待て　筆にて記す　ペンで書く

用言に添はる助詞

ば　ので　から　ど　ども　とも　ても　に
を　が　ながら　つつ　で　ないで　ずに
乞はば與へん　乞へば與ふ　乞うたので與へた　乞うたから與へた　乞へど與へず　乞へども與へず　乞ふとも與へじ　いくら乞うても與へない　梅は咲けるに鶯は未だ來鳴かず　梅は咲けるを鶯は未だ來鳴かず　雨は降つたが風はなかつた　歩みながら語る　歩みつつ語る　何事をもなさで日を暮す　何にもしないで日を暮す　何にもせずに日を暮す

種々の語に添はる助詞

は　ば　も　ぞ　なむ　こそ　しや　か
だに　でも　すら　さへ　まで　のみ　ばかり　だけ　な　な……そ
雪は白し　行をば愼む　彼も人なり　我も人なり　花をぞめづる　花をなむめづる　花をこそめづれ　必ずしも然らず　我が思ふ人はありやなしや　あるかなきかの微風　水だにあらばよかりしを　水でもあればよかつたのに　禽獸すら恩を知る　風さへ加はりて　風まで加はつて　骨と皮のみとなる　骨と皮ばかりになる　骨と皮だけになる　泣くな歎くな　な泣きそ

連體詞

近頃、人によつては、左の如き語を「連體詞」と呼んでゐる。必ず下に體言が來るからである。隨つて、いはゆる連體詞は、殆ど形容詞の如き性質をもつてゐる。但し、語尾は活用しない。

あらゆる（人々）　ある（日）　いはゆる（人間）　きたる（十五日）　さる（三日）　さる（人）

句讀法一覽表

總則

一、句讀は文と文との關係、文中の語句相互の關係を明らかにすることを目的とす。

二、前項の目的のために左の五種の符號を使用す。

。　シロマル

、　テン

・　クロマル

「」　カギ

『』　フタヘカギ

三、文勢・語勢其の他の便宜によりては誤解を生せざる限りに於て本法の規定に拘らず符號を省き又は之を加へ施し又は彼是符號を換用することを得。

第一節　シロマル

シロマルは文の終止する場合に施す。

人が雨戸を明けて居る。

旗を持ちませう、私は。

生きて歸る者僅かに三人。

第二節　テン

テンは左の種々の場合に施す。

（一）形式より見れば終止したれども、意義より考ふれば次の文に連續せる文の下。

一、和助が樹の下を出て、まだあまり遠くも行かぬ時のことでありました、日が暗む樣ないなびかりがすると同時に、耳が裂ける樣な、恐しい音がしました。

二、皆さんは蝙蝠を鳥だと思ひましたでせうが、蝙蝠は鳥ではありません、頭もからだも鼠に似て居るけものです。

（注意）左の如きものは形式・意義共に終止したる場合の例なり。

一、和助は樹の下を出て、まだあまり遠くは行きませんでした。その時日が暗む樣ないなびかりがすると

同時に、耳が裂ける樣な、恐しい音がしました。

二、蝙蝠には翔がありますけれども、鳥ではありません。皆さんは知つてゐましたか。

（二）並列せる同趣の文の下、但し最後の文の下は此の限りにあらず。

一、山を越えて行かうか、河に沿うて行かうか。

二、彼は男子の氣概のない者である、丈夫の本領を失つた者である、我が大和民族の面目を毀損した者である。

三、人の短(たん)をいふこと勿れ、己の長(ちやう)をとくこと勿れ。

（三）並列せる同趣の語句（單語を列擧する場合を除く）の間。

一、此の文は平易に、正確に、且面白く作られたり。

二、みなりはわるい、併し身分はよささうな子。

三、規則の整へる、約束の行はる、實に歎賞に堪へたり。

四、兄には鉛筆を、弟には石筆を與へたり。

五、項羽は黃河の北で戰ひ、劉邦は黃河の南で戰つた。

六、父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

七、蕨を採るのは春で、茸を採るのは秋だ。

（四）連體にて終れる語句の下に助詞なきとき、其の下。

一、交通・通信機關の完備せる、人をして國の廣袤の短縮せるにあらざるかを疑はしむ。

二、クルップの職工を率ゐることの巧みなる、|經驗に富み、且權力を有する老練家も尙遠く及ばざる程なりき。

（五）ども・ば・には・て・時・間・處・際・限・外等の如き接續の語に導かれたる長き語句又はすべて副詞の意趣を有する長き語句の下。

一、友だちは頻りに上京を勸めるけれども、|兄はそれに賛成しない。

二、酒と煙草は衞生上に害あれば、|之を禁ずるを可とす。

三、知らせを聞いて巡査の馳せて來た時には、|賊は旣に影を隱してゐた。

四、家の前に小川ありて、|家の後に花園あり。

五、本日通運にて送り出し候間、|御ためし下され度候。

六、コレラ・窒扶斯其の他各種の惡疫流行の際、|特に豫防を怠るべからず。

七、午前七時半迄に乘者する者に限り、|電車賃を半減す。

八、明治二十七年に韓國の騷動の起つたとき、|淸國はことわりなしに兵隊を韓國へ送りました。

（六）主語と客語との間隔甚だしきとき、主語の下。

父は、|太郎の此の頃の樣子がすつかり變つて來たのを、ひどく心配した。

（七）主語等を特に提示せるとき、其の下。

一、梅を植ゑてある靑磁の鉢、|あれは私が父に貰つたのです。

二、高山彥九郎・蒲生君平・林子平、|これを寬政の三奇士といふ。

三、こんもりと茂つて居る森の影、あそこに友だちの家があるのです。

（八）獨立の感歎詞及び呼掛の語の下、並列的に置きたるときは其の前後。

一、ああ、兵吉はこれより如何にして日を過すならんか。

二、おとうさん、あなたはどこへいらつしやいますか。

三、むかふに見える景色は、まあ、綺麗ではございませんか。

四、それでも、にいさん、雨が降つたら、しやうがないではありませんか。

（九）顚倒して置きたる述語の下。

忠なるかな、正成は。

（一〇）他の語句を隔てて掛るべき語句が、直に其の下に來る語に掛るが如く見ゆる處あるとき、其の下。

一、太郎は非常に、活潑な運動を始めたり。

二、今日も少しばかり、面白い話を聞きました。

三、先生この、芋蟲に似た蟲は何といひますか。

四、次郎は、目も見えず、耳も聞えぬ父をいたはつてゐる。

（一一）上下の語句の粘着する處あるとき、其の間。

一、今、日本の國運は旭日の天に冲する勢あり。

二、賴朝、範賴・義經をして平氏を攻めしむ。

三、兵を起して、我が國に、｜てむかひする。

第三節　クロマル

クロマルは列擧せる單語の間に施す。但し、助詞・接續詞にて並列せる場合は此の限りにあらず。

横須賀｜・吳｜・佐世保及び舞鶴は日本の軍港なり。

第四節　カギ

カギは左の種々の場合の右の肩と左の脚とに施す。

一、對話を文中に入るゝとき。

次郎は父の袂を引きて、「おとうさん、今の人はきちがひでせうか。」といひたり。

二、獨語を文中に入るゝとき。

虹は、「日は唯照るだけだから、誰もほめる人がないのだ。自分は此の通り美しいから、人が皆ほめるのだ。」といひました。

三、獨思を文中に入るゝとき。

太郎は嬉しくてたまらず、「ああ、やつぱり起きて書かう。起きて書いても居眠さへせず、勉強する樣に心掛ければよいのだから。」と決心した。

四、語句を引用するとき。

孔子も、「利によりて行へば、怨多し。」といへり。

ロックは、「教育に關する思想」といふ書を著せり。

第五節　フタヘカギ

フタヘカギは、對話・獨語・獨思・引用の中に、更に他の對話・獨語・獨思・引用を入るゝときは右の肩と左の脚とに施す。

父は文吉に、「もしおとうさんがおまへのいふ通りになつて、遊びに行つて選擧をしなかつたら、人は『文吉のおとうさんは村のためを思はない人だ、村中の人の迷惑するのをかまはない人だ。』とわるくいひませう。おとうさんはそんなことをいはれることはきらひです。」といひました。

右は、明治三十九年、文部省に於て、教科書調査委員會の審議を經て、「句讀法案」として發表したものであり、爾來國定教科書の編纂または教科書の檢定等に於て、右の案を標準として用ひて來たものである。隨つて、現在では最も憑據するに足るものの一つである。

尚、西洋の句讀法（punctuation）の符號たる、？　！　——　……　（）の五種について、左に

其の使用法を簡單に示して置く。

一、？ 疑問符は、問の語または疑問の文の下に施す。但し、なるべく避くるを可とす。

1、時次郎「馱目？ 馱目ぢや困る。ね、どうして馱目なんでござんすか。」（長谷川伸氏「沓掛時次郎」）

2、「わからず屋！ 又お雛樣のことだらう？ お父さんに叱られたのを忘れたのか？」（芥川龍之介氏「雛」）

二、！ 感動符は、強き感情をあらはした語または文の下に施す。但し、なるべく避くるを可とす。

1、「あらまア先生！」と言つて、笑つて體を斜に嬌態を呈した。（田山花袋「蒲團」）

2、人の子は枕する時もない。實際さうだ。寢ても不安、起きても不安！ 夢の無い眠を得る人が一人でもあらうか！（石川啄木「病院の窓」）

三、―― ダッシュは、話をしかけて全部いはずに餘韻を示す場合、急に話の續きをかへる場合、または上の語や文の說明を文中に挿入する時などに施す。

1、コーデリヤは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづくと見て、「たとひ我が親でないにしても、此の白い髮や髭を御覽になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものだのに、――まあ、此のお體であのひどい嵐の中を――。」といひながら、よよと泣きくづれた。（尋常小學國語讀本卷十二「リヤ王物語」）

2、仁右衞門がこの農場に這入つた翌朝早く、與十の妻は袷一枚にぼろぼろの袖無を着て、井戸――といつても味噌樽を埋めたのに赤錆の浮いた上層水が四分目ほど溜つてる――の所でアネチヨコといひ慣はされた舶來の雜草の根に出來る薯を洗つてゐると、そこに一人の男がのそりとやつて來た。（有島武

郎「カインの末裔」)。

四、……　テンテンは、會話の相手が無言でゐることを示し、また會話や文の終止せざる下に施して餘韻を示す。

1、「登喜ちやん、御免なさい」

「…………」

「ね、御免なさい」といつて小稲は笑つた。（志賀直哉氏「暗夜行路」）

2、「だけど……」

わたしはいひました。——面白さうに話しつづける主人を押さへて……（久保田万太郎氏「寂しければ」）

五、（　）括弧は、文中に挿入する說明をかこみ、または上の語や文に相當する外國語や自國語などをかこむ。

1、彌三郎（すつかり自信を以て）これこれ嘉平、よいわよいわ。わしが代つて詮議して遣はす。（間。瞑目して後）先づ其の男といふのは、此處に集つた人の中に居る。（顏を見合はす）其の人はもう既に心の中でひどく苦しめられてゐる筈ぢや。（久米正雄氏「地藏敎由來」）

2、抒情詩は個人が衆をはなれておのづから謳ひ出でた內面的な歌（chant intérieur）である。（土居光知氏「文學序說」）

3、先生の生涯は卷頭に掲げられたシエリイの詩の "They learn in suffering what they teach in song."（惱みにさとり唱にさとす）の一句に盡きて居るからだ。（厨川白村「苦悶の象徵」）

常用漢字表

【一】一七丁三上下
丈万(萬)不世丙両(兩)並為(爲)
【丨】中挙(擧)
【丶】丸主
【丿】久之乏乗
【乙】乙九也乞乱(亂)乳
亀(龜)亂
【亅】了事
【二】二五井互
【亠】亡交亦京亭
【人】人今仁介仇他
仕代以令付休任仲
伊件仰伏伐仮(假)何佛
作位住佐低伺伯似
余伴伸体(體)來使例依
供併(倂)侍佳便信保俗
係促侯俊侵侮侠候
借修個倉俵倒倍俸
倫俳倶倂假停健偉
側偏偶備傍傑傳催
債働傷傾僅僞僧像
僚價儀儉億優償偽(僞)
【儿】元兄先光充兇
兆克免児(兒)兎兒党(黨)
【入】入内全兩
【八】八六公共兵其
具典兼
【冂】円(圓)冊再
【冖】冗写(寫)
【冫】冬冷凉准凌凍
【几】凡処(處)

【凵】凶出
【刀】刀刃分切刊列
刑利別初判制到券
刻刷刺前則削剛副
割創剩劇劍劑剌(刻)剤(劑)
【力】力加功劣助努
効(效)勇勅勉動務勘勝
勞勢勤募勳勵勸勧(勸)
労(勞)励(勵)
【勹】包
【匕】化北
【匚】医(醫)區
【十】十千升午半卒

協卑卓南博準(準)
【卜】占
【卩】印危即(卽)卵却卷
卽
【厂】厄厘厚原厥
【ム】去参(參)參
【又】友反及双(雙)取受
叔叙(敍)
【口】口右古可召史
司句台(臺)叫号(號)同名合
吉各向后吏吐君告
否呈吹含吸吟和命
味周呼品哀咽咸唐

員哲商問啓唱唯善
喜單喪喫喉嗣嘉噴
嘱(囑)器嚴囑営(營)
【囗】四囚回因困国(國)
囲(圍)固國圍圓園圖團
図(圖)
【土】土地在均坊坑
坂(阪)垂坪型城埋堂堀
堅執基域培報場堪
堤塀(塀)塗塔塩(鹽)境墓塵
塀増墨墮壁壇壓壞
壤赱(走)
【士】士壯壱(壹)壹壽声(聲)

【夂】麦(麥)
【夊】夏
【夕】夕外多夜夢
【大】大天太夫失央
奉奇奔奏契奢奧奬
奪奮
【女】女奴好如妃妙
妨妥妊(姙)妻姉妹姓始
委姑威婁姦姻姫姪
娘姬娯娠婦婚娼媒
婿嫁嫌嫡孃
【子】子字存孝季孤
孫學学(學)

【宀】安守宅完宏定
官宗宜宛宝(寶)客室宣
家宮容害宴宿寄密
富寒實察寢寫審寛
寶実(實)
【寸】寸寺封射專將
尉尊尋對導寿(壽)
【小】小少尙
【尢】就
【尸】尺尼尽(盡)局尾尿
居屆屈屋展属(屬)層履
屬
【山】山岩岡岸岳峠

島峯峽崎崩崇
【巛】川州巡巣
【工】工左巧巨差
【己】己
【巾】市布帆希帝帥
師席常帳帶帽(帽)幅帽
幕幣帰(歸)帯(帶)
【干】干平年幸幹
【幺】幻幼幾
【广】床序店府底度
座庭庫庶康廉廊廣
廳庁(廳)廐(廐)廃(廢)厤(麗)
【廴】延廷建廻

【廾】 弁(辨辯) 弄 弊
【弋】 式
【弓】 弓 引 弔 弟 弱 強
強(强) 張 彈
【彡】 形 彩 彫 彰 影
【彳】 役 彼 往 征 後 待
律 徒 徐 徑 御 得 從 復
徽 德 徵 徹 径(徑) 徒(徒) 従(從)
【心】 心 必 志 忘 忍 忌
忙 忠 快 念 思 急 性 怪
怒 怨 怠 怯 恩 息 恭 恐
恥 恨 患 悔 悟 悖 惡 情
悲 惠 惑 惜 悼 惟 愛 愚

意 感 想 愁 惰 愉 惱 慈
愼 態 慶 憂 慰 慮 慣 慾
慘 慢 慕 慨 憲 憐 憤 憚
應 懇 憶 憾 懲 懷 懸 戀
恋(戀) 惨(慘) 悩(惱)
【戈】 成 我 戒 戰 戯(戲) 戲
戴
【戶】 戶 所 房 戾 扇
【手】 手 才 打 扣(控) 投 折
承 扱 技 批 扶 抗 抑 択(擇)
拜 拙 招 拂 押 拔 抱 披
抵 拍 拒 拘 拓 担(擔) 抽 拾
持 指 拳 括 振 捕 授 掛

採 推 接 探 控 捨 排 掌
掃 捧 提 換 掲 握 援 揚
揮 插 描 損 携 搜 搖 摂(攝)
摘 摩 撫 操 撃 擔 據 擇
擬 擴 攝 拠(據)
【支】 支
【攴】 收 改 攻 放 政 故
教 敗 救 敍 斂 散 敢 敬
數 敵 敷 整 数(數)
【文】 文 斉(齊) 斎(齋)
【斗】 斗 料 斜
【斤】 斤 斥 斬 断(斷) 斯 新
斷

【方】方施旅族旋旗
【旡】既
【日】日旦旧(舊)早旬旭
旨明昔昇易昌春昨
是星映昭時晝晩晴
智景普晶暗暖暑暇
暴暮暦曇曜
【曰】曲更書曹最曾
替會
【月】月有服朋朕望
朗朝期
【木】木本末未札朱
机朽来(來)村杉材束条(條)

東松林板枝果杯枕
枚染柱柳柔某柄査
架枢校根株案桃桐
桑格栗栽梅條械梨
栄(榮)森植棄棒棚棟棺
極業楠榮構様樂模
樓概標樞横橋機樹
檢橄櫻欄權楽(樂)楼(樓)様(樣)
権(權)
【欠】欠(缺)次欲欺款歌
歐歎歡勧(勸)
【止】止正此歩武歯(齒)
歳歴歸齢(齡)

【歹】死殊殉殘殖残(殘)
【殳】段殺殿毀
【毋】母毎毒
【比】比
【毛】毛
【氏】氏民
【气】氣
【水】水永氷求汁池
江汚汗決汽沈没沙
汰沖沢(澤)法河治油波
注泉泰沼泥沿泊況
泣沸泳洋活津洗派
洪海流消浮浦浪浴

渉浸清深浅混添淡
浄液涙淵淫淑渡減
温湯港湖測渇湾(灣)湧
源滋滅滑溺溢溶満
演漁漢準滞漸漫漆
漏漂滴漠潮潛潔潜(潛)
澤激濃濁濱濟濕瀧
灣浅(淺)済(濟)渕(淵)湿(濕)滞(滯)滝(瀧)満(滿)
潅(灌)

【火】火灰災炎炊炉(爐)
炭点(點)烈無然照煩煮
煉煙熱熟焼燈燃営
爆爐

【爪】爪争為爵
【父】父
【爻】爾
【片】片版牌
【牙】牙
【牛】牛物牧牲特犠
犠(犧)
【犬】犬犯狂状狩狭
猛猫猶献(獻)獄獨獲獸
獵獻独(獨)猟(獵)
【玄】玄率
【玉】玉王玩珍珠班
理現球琴環璽

【瓦】瓦瓶(甁)甁
【甘】甘甚甞(嘗)
【生】生産甥
【用】用
【田】田甲申由町男
画(畫)畑界畏留畜畝異
略番畫當疊畄(留)畳(疊)
【疋】疋疎疑
【疒】疫病疾疲症痛
痘痢療癖
【癶】發登発(發)
【白】白百的皇皆
【皮】皮

【皿】皿盆益盛盗盟
盡監盤
【目】目直盲相省看
眉眞眠眼着督睡
【矢】矢知短
【石】石砂研(硏)破砲研
硯硬碑碁碎磁確磨
礎
【示】示礼(禮)社祈神祝
祖祕祭票禁福禍禦
禮
【禾】私秀秋科秒租
秩移税程稚種稱穀

稻稿積穗穩称(稱)
【穴】穴究空突窃(竊)窓(窗)
窒窗窮竊
【立】立竜(龍)章童端競
【竹】竹竿笑第符笛
筆答等筋策筒算管
節箱範築篤簡簿籍
【米】米粉粗粘粒精
粹糖糞
【糸】糸(絲)系約紅紀紙
納級素純紛紋索紡
細終組紺累紹紳絲
結給絕紫統絡經絹

継(繼)綿綠綴網綱維緊
綻総(總)線縁編練締緒
緩縣縛總繁縱縫縮
績織繕繪繰繭繼續
緯経(經)続(續)縦(縱)
【缶】缺
【网】置罪罰署罷罵
羅
【羊】羊美義群
【羽】羽翁習翌翼
【老】老考者
【而】耐
【耒】耕

【耳】耳聖聞聲聯職
聽聴(聽)
【聿】粛肇
【肉】肉肝肖育肥肩
股背胃肺胎胞胆(膽)能
胸脈脊胴脅脱脚腐
腕腹脳腰腸膝膚膜
膳臆膺臓
【臣】臣臥臨
【自】自臭
【至】至致臺
【臼】與興擧舊
【舌】舌舍舘(館)

【舛】舞
【舟】舟航般船舶舵
艦
【艮】良
【色】色
【艸】花芳芝芽若英
苦茂苗苑茎(莖)草茶荒
荷莊菊華栄菓菌萬
落葉葬著蒸蓄蒙蔓
薄藏藥藤藝薬(藥)
【虍】虎虐處虚(虛)虜號
【虫】虫(蟲)蚊蚕(蠶)蛇蛙蛮(蠻)
蜂蜜融蟲蠶蠻

【血】血衆
【行】行術街衝衛衡
【衣】衣表衰被袋袖
裁裂補裏裝裕製裸
褒複襲
【西】西要覆
【見】見規視親覺覽
觀覚(覺)観(觀)
【角】角解觧(解)觸触(觸)
【言】言計訂記訓討
託許設訪訟訳(譯)評詔
訴診詠詞証(證)詐試話
詩詳詰誇語說誠認

誤誘誕誓誌読(讀)論請
調談課諸諜諾諭謁
講謝謠謹謬證識譜
議警譽譯護讀變讓
誉(譽)

【谷】谷

【豆】豆豊(豐)豐

【豕】豚象豪豫

【貝】貝貞負財貨貫
貧責販貳買貴貸費
貯賀貿資賃賊賄賓
賣賞質賢賛(贊)賤賜賦
賴購贈贊賎(賤)

【赤】赤

【走】走赴起越超趣

【足】足距路跡踊躍

【身】身

【車】車軍軌軒軟軸
載較輕輪輩輸輯輿
轉軽(輕)

【辛】辛辞(辭)辨辭辯

【辰】辱農

【辵】込辺(邊)近返迎述
迫迭追送退逆迷逃
通連造速途透逐逓(遞)
進逸週道遊過運達
違遂遇遠違遞遙適
遭選遺遲遷遵還避
邊遅(遲)

【邑】邦邪邸郊郡郎
部郵都郷

【酉】酒配酌酢酬酸
酷酔醜醫

【釆】釈(釋)釋

【里】里重野量

【金】金針釜釣鈍鉛
鈴鉢鉄(鐵)銀銅銃銘鋭
鋒銭錄錯鋼鍋鎮銷
鏡鐘鐵鑑鑄鑛鋳(鑄)銭(錢)

【長】長
【門】門閉開間閑閣
関(關)閲闘(鬭)闢
【阜】阪防附降限院
除陣陛陸陰陳陶陪
陥陵陽隊隆階隔際
障隙隣随険隠隨(隨)
【隹】隻雀雄集雅雇
雌雑雙難離
【雨】雨雪雲電雷零
需震霜霧露霊(靈)霊
【青】青静
【非】非

【面】面
【革】革靴
【音】音響
【頁】頂順項預頓頑
領頭頻顔題額願類
顚顧顯顕(顯)
【風】風
【飛】飛飜
【食】食飢飯飲飾養
餅(餠)餘餓餐館餅
【首】首
【香】香
【馬】馬馳駄駁駅(驛)駐

騎騷騰驅驗驛驚
【骨】骨體髓髄(髓)
【高】高
【髟】髪
【鬥】鬪
【鬼】鬼魂魔
【魚】魚鮮鯉鯛
【鳥】鳥鳩鳴鶏鶴
【鹵】鹽
【鹿】鹿麗
【麦】麦
【麻】麻
【黄】黄

【黑】　黑默點黨
【鼓】　鼓
【鼻】　鼻
【齊】　齋
【齒】　齒齡
【龍】　龍
【龜】　龜

注意一　右の常用漢字表は、昭和六年に修正せられたものである。即ち、大正十二年五月に先づ一千九百六十三字を定め、昭和六年五月に、その中から百四十七字を削り、新に四十五字を加へた。よつて一千八百六十一字となつた。

注意二　常用漢字表の規定書は左の如くである。

(1)　本表に無い漢字は假名で書く。

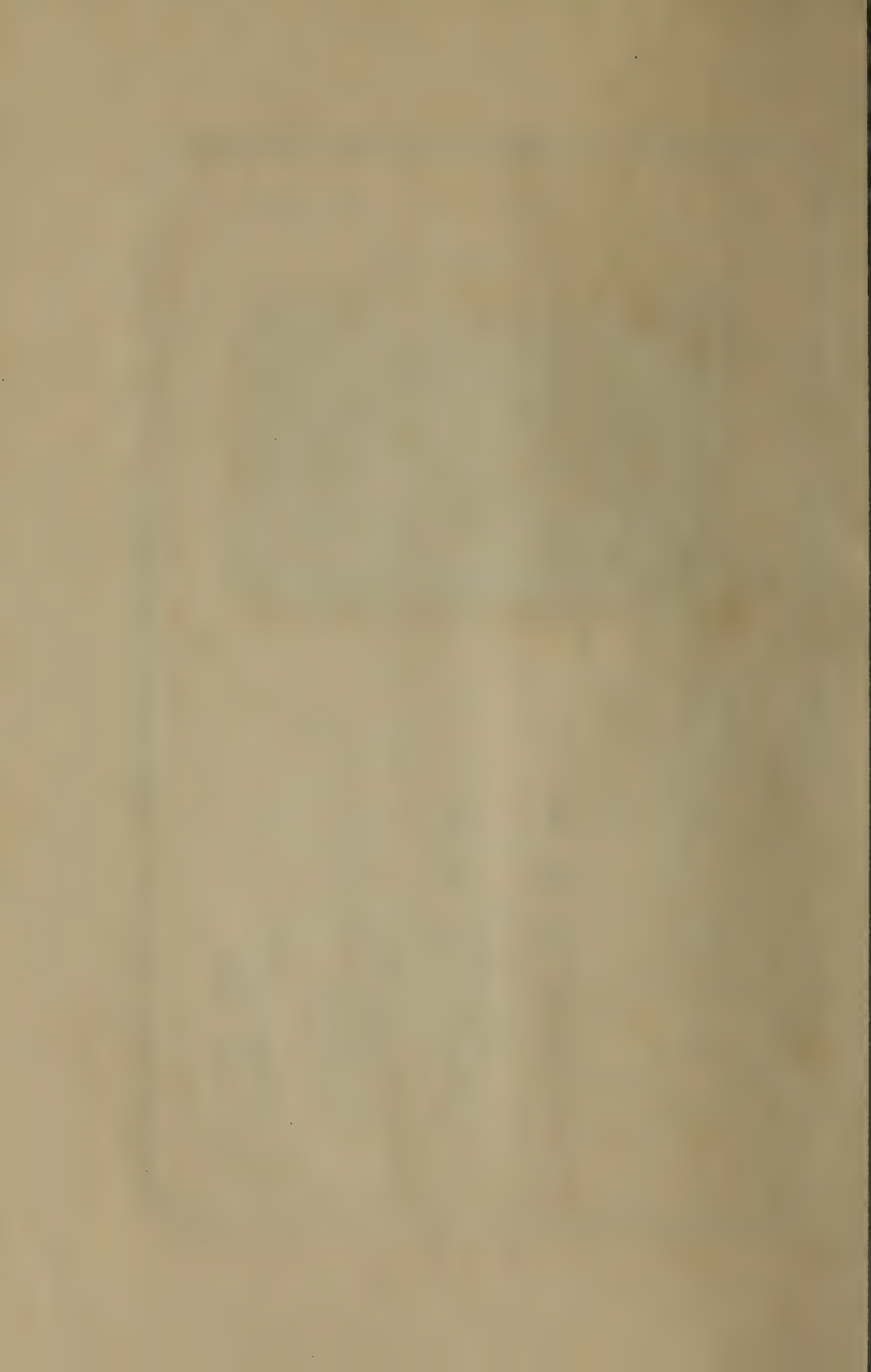
(2)　固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない。たゞし、外國(支那を除く)の人名・地名は假名書とすること。

(3)　代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書く。

(4)　外來語は假名で書く。

注意三　表中の略字には、右側に、その本字を示して置いた。略字は常用漢字として奬勵するところである。

注意四　本文の中でも述べた如く、我々が文章を書く時、一一常用漢字以外の文字をつかはないやうにするといふやうなことは、極めて窮屈なことであるから、その制定の精神をとつて、出來る限りやさしい漢字または略字をつかふやうに心がけたいものである。

注意五　たとひ常用漢字表にある文字でも、「一寸」と書いて、「ちよつと」と讀ませるとか、「秋」と書いて「とき」と讀ませるのなどは、餘り感心しない。外來語は勿論假名で書くがよいが、國語をもなるべく假名で書くやうにしたい。

現代文章概論

昭和十年七月一日印刷
十年七月五日初刷三千部發行
十年八月一日第二刷五百部發行

定價一圓八十錢

著者 丸山林平

刊行者 長谷川巳之吉
東京市麹町區三番町一

刊行所 第一書房
東京市麹町區三番町一
電話九段三三四四

東京市神田區三崎町二ノ二一
印刷者 堀內文治郎
製本者 橋本久吉

ディルタイ　徳永郁介譯　**近世美學史**　菊判一二六頁　定價一圓

ディルタイ　服部正己譯　**體驗と文學**　四六判六〇〇頁　定價一圓八十錢

ベルグソン　小林太市郎譯　**精神力**　新菊判二五五頁　定價一圓五十錢

ポオル・ヴァレリイ　高橋廣江譯　**現代の考察**　四六判二三四頁　定價二圓

アロイス・ミューラア　寺田彌吉譯　**最新哲學概論**　菊判二八〇頁　定價二圓

ヘルマン・コーヘン　村上寛逸譯　**純粹認識の論理學**　菊判八八〇頁　定價三圓五十錢

ヘルマン・コーヘン　村上寛逸譯　**純粹意志の倫理學**　菊判九二〇頁　定價三圓八十錢

ヴィンデルバント　井上忻治譯　**一般哲學史**　第一卷　菊判三六三頁　定價二圓五十錢

ヴィンデルバント　井上忻治譯　**一般哲學史**　第二卷　菊判四七〇頁　定價二圓五十錢

ヴィンデルバント　井上忻治譯　**一般哲學史**　第三卷　菊判四六〇頁　定價二圓五十錢

ヴィンデルバント　井上忻治譯　**一般哲學史**　第四卷　菊判四七〇頁　定價二圓五十錢

伊藤吉之助・飯田忠純共譯　テオバルト・チーグレル　**現代獨逸の精神的社會的潮流**　四六倍判九三〇頁　定價七圓五十錢

田中萃一郎・川合貞一共譯　**ヘルデル歴史哲學**　四六倍判一二〇〇頁　定價七圓五十錢

シュライエルマヘル　陶山務譯　**獨り想ふ**　四六判二五二頁　特製二圓　普及版一圓

ヘルデルリーン　陶山務譯　**思想するヒュペリオン**　四六判四〇八頁　定價一圓八十錢

プラトン　岡田正三譯　**メノン篇**　小型一八〇頁　定價一圓五十錢

プラトン　岡田正三譯　**カルミデス篇**　小型一九四頁　定價一圓五十錢

プラトン　岡田正三譯　**ゴルギアス篇**　小型三二〇頁　定價一圓五十錢

プラトン　岡田正三譯　**饗宴篇**　小型二一四頁　定價一圓五十錢

プラトン　岡田正三譯　**パイドン篇**　小型二三〇頁　定價五十錢

岡田正三譯　**詩經**　國風篇　菊判三二六頁　定價二圓五十錢

岡田正三著　**論語講義**　四六判三三六頁　定價一圓五十錢